

青森県埋蔵文化財調査報告書 第152集

朝日山遺跡Ⅱ

—東北電力株式会社新青森変電所新設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—

第1分冊 本文編

平成4年度

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書 第152集

朝日山遺跡Ⅱ

—東北電力株式会社新青森変電所新設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—

第1分冊 本文編

平成4年度

青森県教育委員会

序

青森平野の周辺には、多くの埋蔵文化財包蔵地が周知されて
おります。

本報告書は、平成2、3、4年度に実施した東北電力株式会
社新青森変電所新設予定地内に係る青森市朝日山遺跡発掘調査
の結果をまとめたものであります。

本遺跡の発掘調査は、未だ継続中ではありますが縄文時代、弥
生時代、平安時代、室町時代の一大複合遺跡であることが明ら
かになりました。特に平安時代の集落については、注目される
ものがあります。

本書が今後、埋蔵文化財の保護と研究、郷土史の解明などに
幾分なりと活用されるところがあれば幸いに思います。

ここに、種々御指導、御協力をいただいた調査指導員をはじ
め、関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成5年3月

青森県教育委員会

教育長 石川正勝

例 言

- 1 本報告書は、平成2・3・4年度に実施した新青森変電所の新設事業予定地内に所在する「朝日山遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査を実施した「朝日山遺跡」は、当初、県教育委員会が昭和53年度に刊行した『青森県遺跡地名表』に、遺跡番号01165番として登録されている周知の遺跡であったが、範囲確認調査などを実施した結果、平成4年3月に県教育委員会が編集・発行した『青森県遺跡地図』には朝日山(1)遺跡(遺跡番号01165)、朝日山(2)遺跡(同01197)、朝日山(3)遺跡(同01198)として再度あるいは新規に登録された。したがって「朝日山遺跡」は、これら3遺跡の総称である。
- 3 本書は、平成4年度調査分を一部含め、朝日山(1)遺跡の平安時代を中心とした遺構編として刊行し、次年度以降に、遺物編、朝日山(2)遺跡編を刊行する予定である。
- 4 本書の執筆者氏名は、依頼原稿については文頭に、その他については文末に記した。
- 5 本書に掲載してある図版の縮尺は、できるだけ統一を図り、スケールを各図版ごとに表示している。
- 6 本文中及び表において使用した略称・スクリーントーン等の表示は次のとおりである。
住居跡・住・H-堅穴住居跡 土-土壌 M-溝 建物跡-掘立柱建物跡
また、遺構番号は、第○号の「第」と「号」を省略した場合もある。
スクリーントーンの表示は、次のとおりである。



- 7 遺構の規模に関する計測値は、各遺構の妥当と考えられる部位を計るようにし、重複のため計測ができない場合は、残存値を記載した。また、堅穴住居跡の面積は、計測可能なものに限って、プランメーターを使用して算出した。遺構の計測値の単位は、「cm」とした。
- 8 遺構の覆土のほか、色調に関する表記は、『新版 標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄：1987)に基づいている。
- 9 遺構の分析については、次の方に依頼した。(敬称略)

掘立柱建物の建築学的分析

八戸工業大学教授

高島 成侑

また、試料（出土遺物）の鑑定及び同定並びに分析は、次の方々に依頼した。

（順不同、敬称略）

火山灰蛍光X線分析	奈良教育大学教授	三辻 利一
須恵器の胎土分析による産地同定	奈良教育大学教授	三辻 利一
炭化材の樹種同定	元奈良教育大学教授	嶋倉巳三郎
鉄器の金属学的解析	岩手県博物館専門学芸員	赤沼 英男
石 質 鑑 定	県立八戸高等学校教諭	松山 力
	県立板柳高等学校教諭	山口 義伸

これらの結果については、次年度刊行の遺物編に掲載する。

10 調査並びに報告書作成にあたり、次の機関・諸氏にご指導をいただいた。

（敬称略・順不同）

林 謙作・小林 達雄・須藤 隆・設楽 博巳・千葉 孝弥・長島 栄一・千田 和文・
田村 俊之・岡村 道雄・高橋 与衛門

目 次

(第1分冊・本文編)

序

例 言

目 次

第I章 調査に至る経過と調査要項

第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査要項	2

第II章 調査方法と調査の経過

第1節 調査方法	6
第2節 調査の経過	7

第III章 遺跡の環境

第1節 遺跡周辺の地形	11
第2節 遺跡周辺の地質	13
第3節 遺跡の歴史的環境	18

第IV章 検出遺構

第1節 竪穴住居跡	20
第2節 掘立柱建物跡	133
第3節 土壙	152
第4節 溝	375
第5節 鍛冶遺構	416
第6節 製鉄炉	417
第7節 井戸跡	418

(第2分冊・図版編)

1 竪穴住居跡	421
2 掘立柱建物跡	585
3 土壌	603
4 溝	860
5 鍛冶遺構	890
6 製鉄炉	892
7 井戸跡	894
写真図版	895

- 付図－1 竪穴住居跡・溝
 －2 土壌・掘立柱建物跡
 －3 縄文時代の土壌

第Ⅰ章 調査に至る経過と調査要項

第1節 調査に至る経過

昭和44年に東北電力株式会社の青森中央制御（変電）所建設工事の際に、青森市教育委員会が調査を行い、土師器、須恵器が出土した（県埋文報第49集：1979）ことがある。

東北電力株式会社では、津軽地方の電力需要の増加に対応するため、青森中央変電所の南側に新青森変電所の新設を計画した。そのため昭和53年4月25日、県教育委員会に対して、埋蔵文化財の分布調査を依頼し、昭和53年9月下旬、56,400㎡の建設予定地を調査したところ、そのうちの42,000㎡が平安時代の遺跡であることを確認した。この遺跡は、小字名をとって朝日山遺跡と命名し、東北電力株式会社青森支店長に埋蔵文化財包蔵地（遺跡）である旨の通知を出した。

東北電力株式会社では、搬入道路部分1,000㎡だけの発掘調査を昭和57年5月14日に依頼してきた。

県教育委員会文化課では、昭和57年8月23日から10月2日まで発掘調査を実施した。調査中に道路造成計画の変更から調査面積は1,000㎡から720㎡に変更されたが、狭い面積の割に、平安時代の住居跡17軒、土壇3基、溝14条などが重複して検出された。

この、第1次調査の成果は、昭和59年3月末に県埋蔵文化財調査報告書の第87集として刊行された。

平成元年10月9日に平成2年度発掘予定地の現地踏査が、東北電力株式会社、教育庁文化課、県埋蔵文化財調査センターの関係者が参加して行われ、調査期間、調査面積、排土地、プレハブ用地、費用、報告書刊行等について協議された。

平成2年度の発掘調査は、搬入路新設に伴う第2次調査で、調査予定地は、第1次調査の南側に隣接している。当初、平成2年で調査を終了する見込みであったが、予想以上に遺構数が多く、重複の度合いが著しいため、遺構の新旧関係の把握も難しく、調査期間を延長しても年度内の調査完了が困難となり、平成3年度も発掘調査を継続することになった。

平成3年度は、前年度の残りを発掘調査する予定であった。しかし、変電所本体工事予定範囲内の立木伐採後に竪穴住居跡とみられる凹地や遺物の散布が認められた。関係機関が協議した結果、遺跡の範囲確認のため、調査期間を延長して試掘調査を併行させることとなった。

試掘調査の結果、本体工事予定範囲のほぼ全体に遺構、遺物の分布が確認され、今後も継続

して発掘調査が行われることになった。そして、調査の総対象面積も110,000㎡と拡大し、遺跡も広大で、地形的にも分割が妥当と思われることから、教育庁文化課では遺跡名を改称し、3分割する方法（朝日山(1)・(2)・(3)）を採用することになった。

（北林八洲晴）

第2節 調査要項

平成2年度

1 調査目的

東北電力株式会社新青森変電所新設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する朝日山遺跡の発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資する。

2 調査期間

平成2年7月2日から同年11月16日まで（当初予定 平成2年7月2日から同年10月31日まで）

3 遺跡名及び所在地

朝日山遺跡 青森市大字高田字朝日山422-2・3、423-1・2

4 調査面積

4,200平方メートル

5 調査委託者

東北電力株式会社青森支店

6 調査受託者

青森県教育委員会

7 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査協力機関

青森市教育委員会、東青教育事務所

9 調査参加者

調査指導員	村越 潔	弘前大学教授（考古学）
調査協力員	花田 陽悟	青森市教育委員会教育長
調査員	高島 成侑	八戸工業大学教授（建築史）
	山口 義伸	青森県立板柳高等学校教諭（地質学）
	遠藤 正夫	青森市教育委員会社会教育課主幹（現、課長補佐）（考古学）

葛西 励 青森山田高等学校主事教諭 (考古学)

調査担当者

青森県埋蔵文化財調査センター

調査第二課 課長 北林八洲晴 (現、総括主幹、調査第一課長)

総括主査 成田 滋彦 (現、主幹)

主査 白鳥 文雄

主事 成田 悟

主事 中嶋 友文

調査補助員 木村 功、蝦名 芳純、坪谷 光明、奥崎 晋、神山 温子、福士 敦子、後藤 優子、佐藤 由紀子

平成3年度

1 調査目的

東力電力株式会社新青森変電所事業の実施に先立ち、当該地区に所在する朝日山遺跡の発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財の活用にあ資する。

2 調査期間

平成3年4月8日から同年11月15日まで (当初予定 平成3年4月8日から同年7月31日まで)

3 遺跡名及び所在地

朝日山遺跡 青森市大字高田字朝日山422-2・3ほか

4 調査面積

総対象面積 110,000平方メートル

発掘調査面積 5,400平方メートル (平成3年度)

試掘調査面積 6,000平方メートル

当初予定面積 6,200平方メートル

5 調査委託者

東北電力株式会社青森支店

6 調査受託者

青森県教育委員会

7 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査協力機関

青森市教育委員会、東青教育事務所

9 調査参加者

調査指導員 村越 潔 弘前大学教授（考古学）
調査協力員 花田 陽悟 青森市教育委員会教育長
調査員 高島 成侑 八戸工業大学教授（建築史）
山口 義伸 青森県立板柳高等学校教諭（地質学）
遠藤 正夫 青森市教育委員会社会教育課主幹（現、課長補佐）（考古学）
葛西 励 青森山田高等学校主事教諭（考古学）

調査担当者

青森県埋蔵文化財調査センター

調査第一課 総括主幹

課長 北林八洲晴

主査 白鳥 文雄

〃 岡田 康博

主事 下山 信昭

〃 羽柴 直人（現、(財)岩手県文化振興事業団、埋蔵文化財センター文化専門調査員）

〃 木村 高

調査補助員 福士 敦子、奥崎 晋、北風 州康、相馬 和徳、神山 温子、後藤 優子、成田 和世

平成4年度

1 調査目的

東力電力株式会社新青森変電所事業の実施に先立ち、当該地区に所在する朝日山遺跡の発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財の活用にあ資する。

2 調査期間

平成4年4月13日から同年11月13日まで（当初予定 平成4年4月13日から同年11月27日まで）

3 遺跡名及び所在地

朝日山遺跡 青森市大字高田字朝日山422-2・3ほか

4 調査面積

総対象面積 110,000平方メートル

調査対象面積 20,000平方メートル（平成3年度）

試掘調査面積 28,200平方メートル（粗掘り含む）

5 調査委託者

東北電力株式会社青森支店

6 調査受託者

青森県教育委員会

7 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査協力機関

青森市教育委員会、東青教育事務所

9 調査参加者

調査指導員 村越 潔 弘前大学教授（考古学）

調査協力員 花田 陽悟 青森市教育委員会教育長

調査員 高島 成侑 八戸工業大学教授（建築史）

山口 義伸 青森県立板柳高等学校教諭（地質学）

遠藤 正夫 青森市教育委員会社会教育課主幹（現、課長補佐）（考古学）

葛西 励 青森山田高等学校主事教諭（考古学）

赤沼 英男 岩手県立博物館専門学芸員（分析化学）

調査担当者

青森県埋蔵文化財調査センター

調査第一課 総括主幹

課長 北林八洲晴

主査 白鳥 文雄

主事 中嶋 友文

主事 成田 悟

主事 小舘 孝浩

調査補助員 奥崎 晋、高橋 昌也、小山 浩平、新岡 聖浩、相馬 優子、成田
和世、戸川 雅子、斉藤 昭子、鹿内ふさ子

第Ⅱ章 調査方法と調査の経過

第1節 調査方法

(調査区の設定)

調査区の基準軸線は、当初、昭和57年度の軸線を延長しようとしたが、当時の杭等が残っていなかったことから、新規に設定した。軸線は東北電力株式会社新変電所用地の工事用道路部分の南東端境界杭と、この線上の近接した境界杭を結んだ線を延長して基準軸線とした。

この、軸線に沿って4 m四方のグリッドを設定した。グリッドは北方向にアルファベットの大文字を、西方向に算用数字を付して、この組合せにより南東隅の杭の番号で呼称した。軸線の基準とした境界杭はF-8である。平成3年度にはいり、遺跡の範囲が南方に広がったことから、当初のAラインより南側は、アルファベット2文字で表示することとした。以下、南方向へB-A Z Z-Z Y~Z A-Y Z~と表記した。

この軸線は、以降の継続調査でも基準軸線として延長し、使用している。

軸線の南北軸は、磁北から6.7度東へ偏っている。

(粗掘り及び試掘の方法)

平坦部は、20 m間隔に畦を残し標準土層を確認しながら調査を進めた。丘陵部は、立ち木伐採時に捨てられた枝や木根等の制約から、まず、これらのまばらな部分を手掘りで粗掘りし、遺物の出土状態を確認した上で、重機（バックホウ）によって上物の処理をした。また、表土の上面を同様に剥ぎ取り、全体の粗掘り及び試掘を行った。

(遺構の調査方法)

遺構は、各種類ごとに、確認順に番号を付した。精査中に、遺構と断定できないものについては、欠番としたものもある。

精査においては堆積土の状態を観察するために、セクション・ベルトを適宜設けた。また、規模の大小によって、4分法、2分法、その他を用いた。

遺構の実測の縮尺は、20分の1を基本とした。また一部、規模の大小によって縮尺を変えたものもある。

遺構内の堆積土は、算用数字を付して呼称した。

記録保存のため、モノクロームフィルム及びリバーサルフィルムを使用して、適宜、写真撮影を行った。

(遺物の取り上げ方法)

遺構内からの出土遺物は、遺構ごとに出土地点及び層位・標高を記録して取り上げた。

遺構外からの出土遺物は、グリッドごとに層位・標高を記録して取り上げた。一部散発的に出土したものについてはグリッド・層位だけを記録して取り上げたものもある。

遺物の取り上げに際しては、種類ごとに色分けしたカードを使用した。

(土器－白カード・石器－青カード・その他－赤カード)

カードにはそれぞれ、遺構名・出土グリッド・層位・取り上げ日時を明記した。

(白鳥 文雄)

第2節 調査の経過

平成2年7月2日、遺跡内へ調査資材を搬入し、調査を開始した。

調査は、2チーム編成で行い、前半は白鳥チームが単独で、9月からは成田チームが合流する予定で進められた。

調査は、調査区の草刈りから始め、併行してグリッドの設定を行った。調査の基準となる軸線は当初、昭和57年度の軸線を延長しようとしたが、当時の杭等が残っていないことから、東北電力株式会社の用地の境界杭を基準として新規に設定することにした。

粗掘りは、グリッドに沿って4mごとにトレンチを設け、表土の厚さ及び遺構・遺物の密集度を確認することを前提に行った。

7月27日には、高田公民館において、関係者が集まり調査打合せ会議を行った。

8月にはいり調査区全体の様子が把握できるようになった。この時点で調査区に続く低位段丘面上に遺物の散布が認められたため、1m四方の小トレンチを数箇所設けた。この結果、平安時代のものと考えられる遺構の一部を確認した。

また、調査区全体では、当初の予想をはるかに越えた遺構の密集が認められ、調査予定期間内での終了が困難となった。このため、9月から他チームから何人かずつの応援を得ることになった。

9月にはいり、成田チームが合流したが、調査の経過に伴って、遺構の重複が著しいことが明らかになり、当センターをあげての本格的な応援体制を組むことになった。

全面的な応援にもかかわらず、予定期間内での調査終了は難しい状態となったため、県教育庁文化課を通し原因者との協議を重ねた。この結果、調査期間を11月16日まで延長することとし、また、平成3年度に未調査範囲の調査を行うことが決定された。

11月にはいり、当センター職員のほぼ全員の応援を得て調査を行い、11月16日、平成2年度の調査を終了した。

平成3年度にはいり、4月8日から調査を再開した。調査範囲は、平成2年度の残り部分と2年度に確認した丘陵部の一部が加わった。調査は、2チームを主体として行ったが、4月中旬から同月末までは、担当者のほかに、センターから十数名の応援を得て調査を実施した。

冬期間には、東北電力株式会社の用地全域の立木の伐採が行われており、丘陵地の全体像が把握できるようになっていた。

この山林伐採に伴う木材搬出用の仮設道路から、遺物の散布が確認され、また数基の落ち込みも確認された。このことから手掘りの試掘に調査方法を切り替え、平安時代の竪穴住居跡など、遺構の存在も確認された。このため、丘陵地全体に遺跡の範囲が広がることが示唆された。

4月20日には、高田公民館において関係者が参集し調査打合せ会議が行われ、この席上で、原因者から工事の工程に伴い、引渡ししが急がれる範囲の提示がなされ、この部分の調査を最優先させることとなった。また、遺跡範囲の拡大に伴う今後の計画について、見直しを行う事などを申し合わせた。

5月にはいり、低位丘陵部の表土剥ぎを行い、試掘先行で遺構数の把握に努めた。この結果当初の予想に反し、低位段丘面から遺構が連続していることが分かり、調査期間の延長について教育庁文化課を通じ協議することとなった。同月下旬に、新変電所建設用地の全体について遺跡範囲の確認を優先することが協議され、試掘調査を行うこととなった。このため、6月にはいり、4月当初に確認された落ち込み及び主要な平場を手掘りによって試掘調査し、また、表面採集を行った結果、新たに遺物の散布及び遺構らしい落ち込みを確認した。この結果をもとに、南東側丘陵部及び、沢を隔てた西側丘陵の斜面にも試掘を行うこととなった。立木伐採後の下枝等が用地全域を覆っていたため、同月中旬に重機を導入して残材処理と表土剥ぎを行い、試掘トレンチを設定して調査を行った。この試掘により、遺跡範囲がほぼ新変電所建設用地の全域に広がる可能性が高くなり、この旨を、東北電力株式会社及び教育庁文化課に伝えた。また、低位段丘部の調査終了及び引渡しを7月10日とすることとなった。

7月にはいり、調査期間を11月15日まで延長することが決定し、当初の調査予定範囲を変更し、試掘調査によって、より正確な遺跡範囲及び調査の必要範囲の確定が原因者から要請があった。また、精査作業はこれと併行して行うこととなった。調査対象範囲は実質の工事対象部分の約75,000平方メートルとした。用地全体の遺跡範囲確認調査は7月下旬から9月上旬まで行い、試掘の範囲の増加に伴い10月には、対象面積を新変更所建設用地全域の11万平方メートルに変更した。

9月下旬、試掘結果から立木の未伐採部分を除いて、遺跡の範囲と最小限の調査必要範囲を

まとめ、教育庁文化課を通し原因者に提示した。

10月初旬、東北電力株式会社及び教育庁文化課との協議の結果、東北電力株式会社から、調査の必要範囲を最終的には全面調査することを前提として、平成5年6月中に調査を完了して欲しい旨の具体的な範囲（約3万平方メートル）が提示された。

これに基づき、次年度の調査を迅速かつ省力化するため、該当する丘陵部の表土剥ぎを重機を使用して行うこととした。

遺構精査は、これらの試掘及び表土剥ぎと併行して実施し、試掘で確認された範囲中、工事優先部分（朝日山（2）遺跡）の調査を併せて行った。

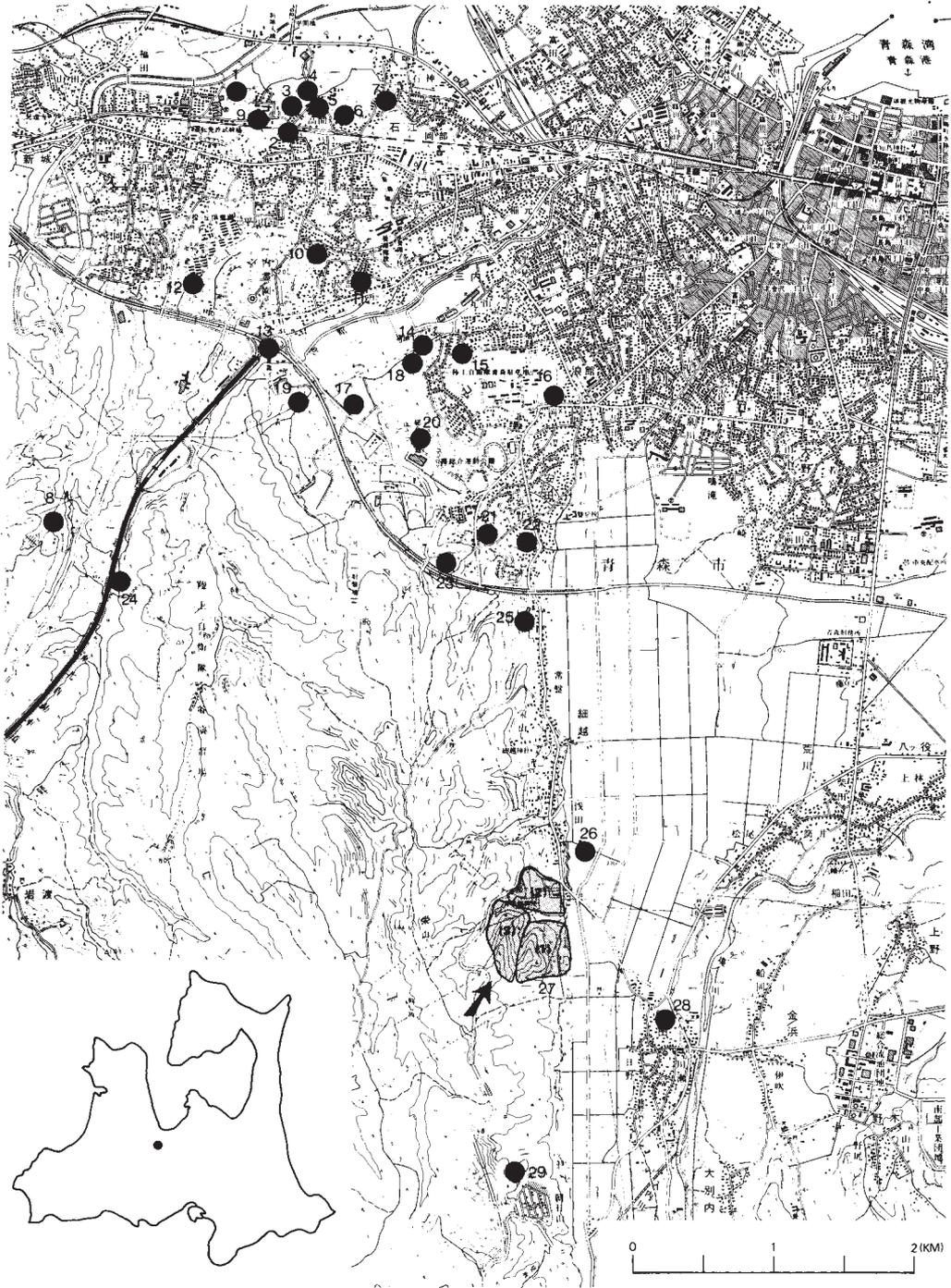
11月にはいり、一部当センター職員の応援を得て、同月15日、平成3年度の調査を終了した。

平成4年度は、4月13日から調査を開始した。当初は、3年度に連続する平安時代の遺構を精査し、6月初旬から丘陵部の調査に移行した。丘陵部は当初、当該時代の遺構が散発的に存在すると考えられたが、調査の進展に伴い、丘陵全体から縄文時代の土壌群が検出されはじめた。

調査は、調査区域全域にある伐採後の根の処理に手間取ったが、一部重機による排土や表土剥ぎを併用したところ、当初に予定した範囲の調査は、円滑に消化されていった。また、遺構の精査と併行して、平成5年度調査予定地内の排土及び抜根と遺構確認を一部行った。

11月にはいり、これまで、遺構確認の困難であった丘陵南端部に存在する土壌の精査が調査期間内での終了が困難になったため、調査期間を2週間延長し、11月27日、無事平成4年度の調査を終了した。

（白鳥 文雄）



(本図は建設省国土地理院発行の
25,000分の1地形図を使用した。)

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第Ⅲ章 遺跡の環境

第1節 遺跡周辺の地形及び地質について

青森県立板柳高等学校教諭 山口 義 伸

1. 地形について

陸奥湾は西側が津軽半島に、東及び北側が下北半島に囲まれている。その陸奥湾南岸に舌状に張り出した夏泊半島を境にして東西両側の湾奥部が各々青森湾、野辺地湾と呼ばれている。

青森平野は、北側が青森湾に面し、西側が南北性の直線的な急崖でもって丘陵地に接している。この北側及び西側を2辺とし、また南西方の小館から横内を通り東方の幸畑を結ぶ線を斜辺とするほぼ直角三角形に囲まれた範囲に位置する沖積平野である。

西側の丘陵地は、南から都谷森山(351m)・坊主畑山(220m)・高陣馬山(208m)・天狗平山(173m)・高頭森山(233m)・栄山(144m)・鳥屋森(182m)・鷹森山(162m)・女蛇山(154m)などが連なり、約10kmの東西幅でもって北方へ張り出している。新城川、沖館川などの深い侵食谷の発達により開析度が大きいものの、頂部付近には多少ではあるがまだ平坦面が残っていて全体的には北方への緩傾斜面となっている。丘陵地北端にあたる新城付近では標高約50mまで高度を下けている。なお、本遺跡の南西方にあたる、この丘陵地の高陣馬山東方の標高約200m付近には青森空港が位置している。本丘陵地の北側には、およそ新城川を境として梵珠山地が位置している。

南側の火山性の台地は八甲田山北麓に連続していて、いわゆる「田代平熔結凝灰岩」と呼ばれる火砕流堆積物から成り立っている。この台地は約5/100と西方の丘陵地よりはやや急勾配ではあるが北西方に緩傾斜し、市街地南方の、斜辺にあたる小館－横内－幸畑を結ぶ線付近でこの火砕流堆積物が平野下に埋没しているといわれている(中川1972)。この台地を侵食する主な河川として、入内川・荒川・合子沢川・横内川・駒込川などがあり、このうち荒川が合子沢川及び横内川と青森平野内で合流して堤川となって青森湾に注いでいる。また、入内川は西部丘陵地の東縁部をほぼ南北に直線的に流れる構造谷であって、およそ西部丘陵地と南部の火山性台地との境としている。なお、現状では河川改修により遺跡南方の高田集落付近で堤川と合流する形となっている。これらの河川はいずれも八甲田連峰に源を發し、深いV字谷をなして北北西流して青森平野に達している。

平野部周辺に発達している段丘地形をみると、上位から、豆ノ坂段丘（標高30～50m）、浪館段丘（標高15～20m）、そして諸河川沿岸にみられる低位段丘（標高約10m）のおよそ3段である。しかし、中位の浪館段丘の発達がやや良好なものの、他の段丘はきわめて小規模かつ断片的な分布を示すのみである（中川1972）。全体的に各段丘の構成層及び段丘相互の関係を知る露頭が少なく、詳細については不明な点が多い。主に西部丘陵地の北縁部にあたる浪館―三内―石江付近及び丘陵地東縁部に中位段丘としての浪館段丘が顕著に分布していて、また南側の火山性台地の北縁にあたる小館―横内―幸畑付近にも断片的ではあるが分布している。高位段丘としての豆ノ坂段丘は西部丘陵地の北縁部にあたる三内霊園・県総合運動公園付近にわずかに分布している（水野・堀田1982）が、西部丘陵地の東縁部においては露頭が少なく、細越字栄山西方約700mの標高約70m付近においてその分布を確認したのみである。図1の地形分類においては省略した。

平野部は、市街地南方の安田―笹崎線を境として、北の陸奥湾側は標高約6m以下の三角州性の低地及び海岸線の小浜付近に認められる砂州と堤間湿地であり、南方の火山性の台地側は扇状地性の地形を成している。なお、堤川（荒川）沿いには自然堤防が発達していて、高田・荒川・金浜などの集落が古くからこの微高地に立地している（図1）。

青森環状野内線は、市街地を通過して、西部丘陵地の東縁部に分布する中位段丘相当面上に立地する安田、栄山、浅田の各集落を通過して南下してきたあと、沖積平野に立地する高田集落に向かって左折している。朝日山遺跡は、県道が高田集落に向かって左折する直前の、前方（南方）の同段丘面上に構築されている東北電力青森制御所の南側に位置している。

本遺跡の調査区域は西部丘陵地の東縁部、特に栄山（標高144m）の東方約1km地点の中位段丘相当面（標高30～40m）及び西接する小丘地（標高70～80m）上に位置している。遺跡周辺に分布する中位段丘相当面は浪館―三内―石江付近に分布する同段丘面よりも約10mも標高が高く、東西幅が100～200mと小規模であって東方に向かってやや急傾斜している。ただ、青森空港へ通じる朝日山集落付近より南方では本段丘面は分布していないようである。また、西部丘陵地の東縁部に認められる侵食谷はすべて東流していて、河床勾配が急で距離がきわめて短い。谷底が深くV字状の形状を成している。朝日山集落付近より南方では丘陵地と沖積平野の間には比高150m以上の急崖が認められるが、本遺跡付近より北方では50m以下の急崖でもって段丘面と接している。

遺跡北端には小谷があって、丘陵地において北流したのちに東流している。この小谷の侵食作用により栄山を擁する丘陵地から分離した2つの小丘地（標高70～100m及び標高70～80m）が認められる。

中位段丘相当面上に構築された平安時代の竪穴住居跡の検出状況を見ると、耕作による削

平及び攪乱もあるが、その東壁側が確認できなかつたり周溝底部のみの存在であつたりという状況であつた。このことから段丘面の東方への傾斜がいかに大きかつたかが理解できる。なお、この段丘面は東方に展開する堤川（荒川）の野沢付近を扇頂部とする扇状地とは比高3～5mの急崖でもって接している。

また、中位段丘に西接する標高70～80mの小丘地も本遺跡の調査区域に該当し、段丘面とは比高約30mの急崖が認められる。この小丘地から東方の段丘面に向かって小規模に張り出している痩せ尾根には縄文時代後期～晩期を中心とした土壙群が検出され、また小丘地の稜線部には主に平安時代の竪穴住居跡が検出された（図A）。

2. 地質について

青森平野を取り組む西部丘陵地及び南部の火山性台地はいずれも新期火山噴出物から成り立ち、平野部は扇状地及び三角州堆積物等から成り立っている。

西部丘陵地は、新城～鶴ヶ坂付近を模式地とする鶴ヶ坂層及び岡町層を基盤としている。

鶴ヶ坂層は塊状無層理の暗灰色浮石質凝灰岩（石英安山岩質）で、熔結度がきわめて低い。層厚20m以上で、模式地では100mを越えるものと思われる。浮石粒（5～10cm、最大15cm以上）および石質岩片をかなり多量に含んでいるのが特徴的である。ただ、鶴ヶ坂においては浮石の風化が進み粘土質となっている。重鉱物組成では、多い順に、磁鉄鉱＞紫蘇輝石＞普通輝石となっていて、角閃石を確認することができなかった。

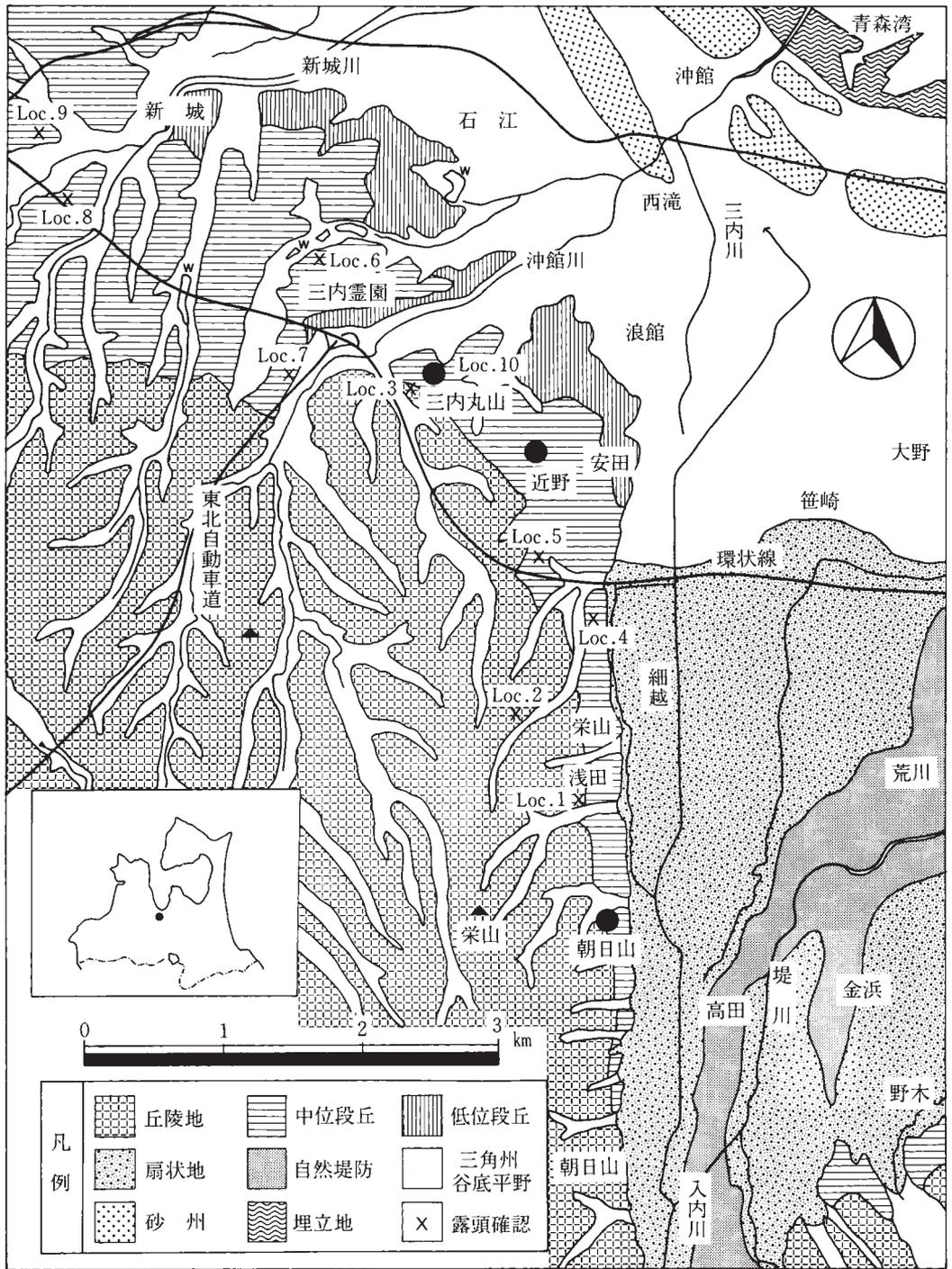
岡町層は鶴ヶ坂層を不整合に覆い、層厚約20m以上である。凝灰質砂を主とし、礫・粘土・シルトを伴う。多くは薄成層をなし、一部に斜交層理を示しているところもある。

八甲田山北麓に連続する南部の火山性台地は、上述のように、北八甲田の田代平カルデラの形成に関係する田代平熔結凝灰岩の流出によって形成されたものである。また、この凝灰岩の弱熔結～非熔結部が西部丘陵地の基盤岩をも覆い、厚く堆積している。

ところで、鶴ヶ坂層及び田代平熔結凝灰岩について、村岡・長谷1990は各々八甲田第1期及び第2期火砕流堆積物と命名し、いずれもその噴出源を八甲田カルデラに求めている。そして、鶴ヶ坂層の噴出年代をK-Ar年代等によりおよそ65万年前、田代平熔結凝灰岩をおよそ40万年前と推定している。

段丘構成層をみると、高位の豆ノ坂段丘は田代平熔結凝灰岩を不整合に覆い、下部に安山岩の円礫（径5～30cm）を主とした礫層（厚さ約5m）、上部に三内火山灰層（赤褐色粘土質火山灰を基本とし、基底部及び中位に黄色浮石層をもつ）をのせている。まだ不明な点が多く、段丘構成層及び分布範囲等の詳細な調査が必要である。

沖館段丘は、その構成層により2～3段に細分化されるものと考えられる。丘陵地縁辺の三内～近野～栄山付近にかけては三内火山灰層上半部直下に浮石質粘土及び同質砂の堆積を



第2図 遺跡周辺の地形分類

主な構成層とする段丘面が分布し、三内丸山遺跡～安田及び本遺跡付近では斜交層理の発達した浮石質砂（あるいは粘土）の上に降下火山灰相の八戸火山灰層（中川1972）が堆積する段丘面が分布している。今後、上位段丘と同様に詳細な調査が必要である。

本遺跡周辺では田代平熔結凝灰岩を不整合に覆って、下位から砂礫層・泥炭層・浮石質粗粒砂層・砂質粘土層が堆積し、その厚さは約3～4 mである（図2）。

次に、調査区域内の土層の概要について述べたい。段丘面と小丘地とでは土層の堆積状態が異なるので、区別して記述することにする。

小丘地においては、基盤をなす田代平熔結凝灰岩の非熔結部にあたる暗灰褐色～暗灰色の粗粒砂質凝灰岩が露出していて割れ目に酸化の染みが認められる。白色浮石（径1～5 cm）を含み、非常に緻密である。基盤岩の上には段丘礫層がなく、段丘面に堆積する降下火山灰相の黄褐色浮石質火山灰が直接覆っている。

I層 黒褐色土層（厚さ約10cm）

表土。粘性・湿性に欠け、ソフトな感じである。

II層 暗褐色土層（厚さ10～50cm）

粗粒砂及び浮石粒が混じるローム質土である。粘性・湿性があるものの、全体的にしまりに欠け格子状の割れが目立ちソフトな感じを受ける。検出された遺構の確認面である。

III層 黄褐色浮石質火山灰層（厚さ0～20cm）

中川1972の降下火山灰相の八戸火山灰層に相当する。やや粗粒の火山砂質で非常に緻密である。小丘地の頂部付近にて確認できるが、斜面においては崩落等によって局所的な堆積を示すのみである。直下に暗茶褐色ロームのクラック帯を伴う。

IV層 浮石質砂層（厚さ20～200cm以上）

基盤の粗粒砂質凝灰岩層の風化再堆積層であって、特に斜面で厚く堆積している。赤褐色を呈する酸化層が横縞模様をなし斜面下方へと傾斜している。斜面下方ほど厚く堆積している。頂部付近は緑灰色を呈し、約20cmと薄いのが、斜面下方に向かうにつれて灰白色の浮石質中～粗粒砂に層相変化して浮石粒（径1～5 cm）の混入が目立っている。

V層 基盤岩

暗灰褐色～暗灰色の粗粒砂質凝灰岩で、浮石粒の混入が目立つ。塊状無層理で、ほぼ均一な層相を示していて、田代平熔結凝灰岩の非熔結部にあたる。小丘地北端の緩斜面にあたるK～O-40～45グリッド付近ではガラス質凝灰岩になっていて、やや縞模様が認められる。

次に、中位段丘相当面に堆積する土層について述べたい。小丘地での層区分とは必ずしも一致しない。なお、検出遺構の覆土中に降下火山相の細粒火山灰が堆積しているのを確認できた。おそらくは苫小牧火山灰（B-T m）及び十和田 a 降下火山灰（T o - a）と思われる。

I 層 黒褐色土層（厚さ20～80cm）

耕作土。全体的に耕作により削平及び攪乱を受けている。このために下位層の粒子状の混入量が多く、また出土遺物も縄文時代～平安時代と幅が広い。M～O-20ラインにおいては、混入物及び土相の特徴から I a～I e 層の5層に細分された。

II 層 黒色土層（厚さ10～20cm）

粘性・湿性があり、腐植質である。ローム粒の混入が目立つ。I層が耕作土ということもあるが、本層上面にて平安時代の遺構を確認することができた。特に、遺構の確認にあたっては本層中に堆積すると考えられる降下火山灰（B-T m と思われる）の堆積が鍵となっているようだ。ちなみに、朝日山（県埋文報87集）においてもこの事実が報告されている。

III 層 暗褐色土層（20cm）

ローム層への漸移層で、遺物は出土していない。粘性・湿性がありしまっている。やや砂質で、小礫サイズの円礫（安山岩礫など）を含むことが多い。

IV 層 黄褐色浮石質火山灰層（20～30cm）

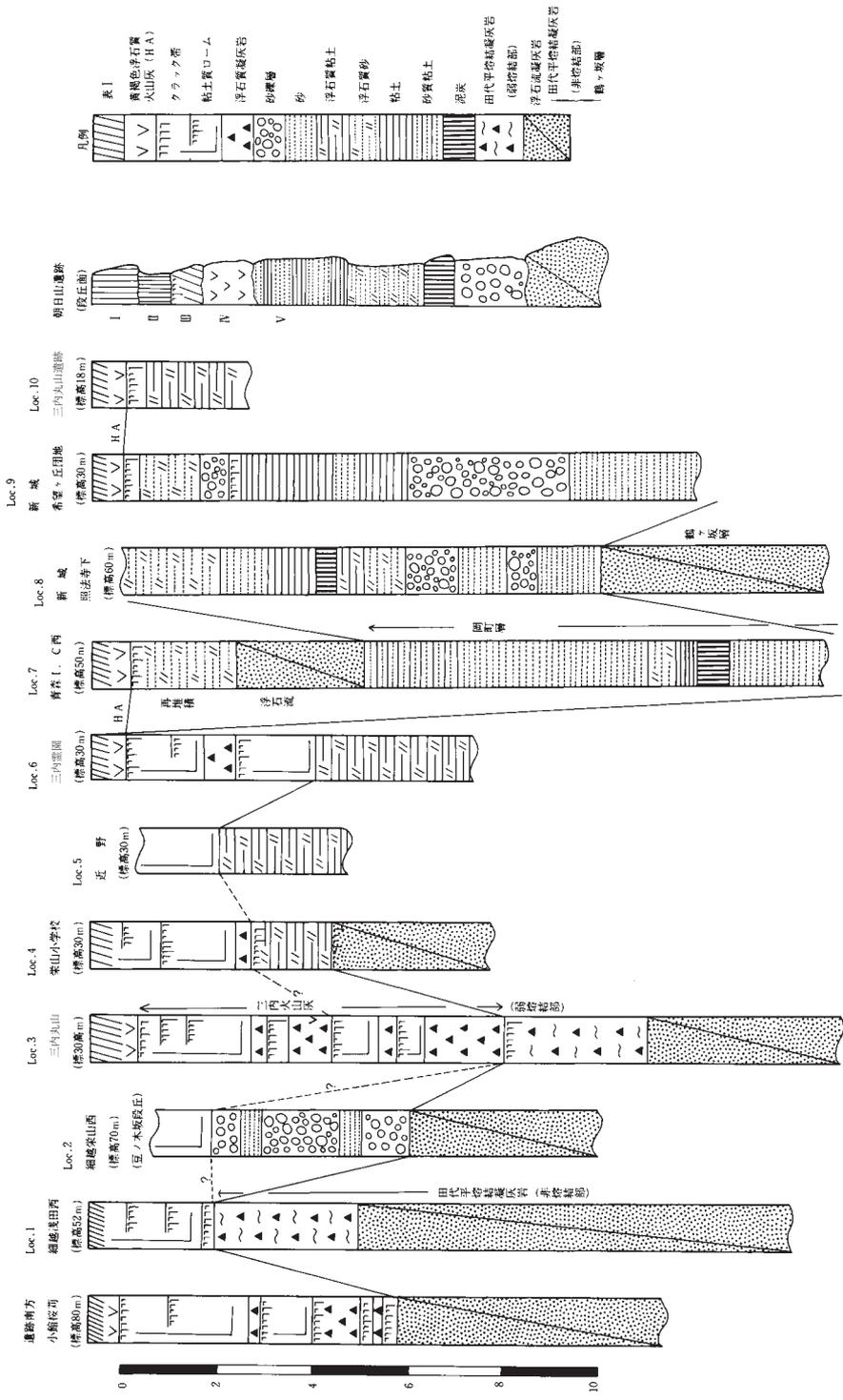
小丘地でのIII層に同じ。耕作によりII～IV層あるいはV層まで攪乱され欠如していることが多い。

V 層 浮石質粘土層（100cm以上）

段丘構成層で、やや砂質に富む部分との互層になっている。全体的に薄成層を成しているが、乱堆積の状態が認められる。最上部にはクラック帯が認められる。粘土層の下位には浮石質砂層（1～1.5m）・泥炭層（0.5～1m）・砂礫層（約1m）が堆積していて、田代平熔結凝灰岩を不整合に覆っている。

引用・参考文献

- 東北地方第四紀研究グループ 1969 東北地方における第四紀海水準変化 日本の第四系 地学団体研究会専報15号
- 中川久夫 1972 青森県の第四系 青森県の地質 青森県
- 青森県教育委員会 1974 近野遺跡発掘調査報告書（II） 県埋文報告書第22集
- 青森県教育委員会 1978 近野遺跡 県埋文報告書第47集
- 岩井武彦・大久保貢・沢田庄一郎 1982 5万分の1表層地質図「青森西部」及び同説明書 土地分類基本調査「青森西部」 青森県



第3図 遺跡及び遺跡周辺の基本層序の様式柱状図

水野 裕・堀田報誠 1982 5万分の1表層地質図「青森西部」及び同説明書 土地分類基本調査「青森西部」 青森県
青森県教育委員会 1983 朝日山 県埋文報告書第87集
松山 力・大池昭二 1986 十和田火山噴出物と火山活動 十和田科学博物館No 4
村岡洋文・長谷紘和 1990 黒石地域の地質 地域地質研究報告（5万分の1地質図幅） 地質調査所

第3節 遺跡の歴史的環境

朝日山遺跡は青森平野の西方の段丘面及び後方にのびる丘陵地に位置している。段丘及び丘陵地帯は、青森平野を弧状に囲んでおり、この連続する台地上には、本遺跡のみならず多くの遺跡の存在が確認されている。また、段丘下位の現水田面下にも、一部の遺跡の存在が確認されている。

本遺跡周辺の遺跡は、第1図のとおりであるが、No26の細越遺跡は、発掘調査を行なった遺跡としては、もっとも近接した遺跡である。また、2 km北に位置する細越館遺跡（No25）からは、青森県内では最も古い土師器が出土している。

本遺跡周辺での調査報告では、明治24年7月刊行の東京人類学会雑誌に、角田猛彦氏によって、細越地区を中心とした数箇所での発掘事例と出土遺物の紹介がなされている。

昭和44年の夏には、朝日山遺跡の一部（現東北電力株式会社青森変電所地内）を青森市教育委員会が中心となって発掘調査を行なっているが、この調査での報告書は刊行されていない。

昭和52年度には、青森県教育委員会によって前述の細越遺跡が調査され、縄文時代晩期及び平安時代を中心とした遺跡であることが確認されている。

昭和57年度には、今回の調査区に接する北側部分（720㎡）の発掘調査が行われている。調査範囲が狭い割に、竪穴住居跡等が重複して検出されている。

（白鳥 文雄）

周辺の遺跡一覧表 (青森市)

番号	遺跡名	遺跡番号	所在地	種別	時期	年代	備考
1	新城平岡(3)	01062	新城字平岡	散布地	弥生・平安		旧西高校遺跡
2	高間(1)	01070	石江字高間	散布地	縄文(前)		
3	高間(2)	01071	石江字高間	散布地	縄文(前・後)		
4	高間(3)	01072	石江字高間	散布地	縄文(後)・平安		
5	高間(4)	01073	石江字高間	散布地	縄文(前・後)		
6	高間(6)	01075	石江字高間	散布地	縄文縄文・平安		
7	岡部	01076	石江字岡部	散布地	縄文		
8	新城平岡(1)	01067	新城字平岡	散布地	縄文(前・中)		
9	新城平岡(2)	01069	新城字平岡	散布地	縄文(後)・平安		
10	石江	01056	石江字平山	散布地	縄文(前)		
11	江渡	01163	石江字江渡	散布地	縄文		
12	三内霊園	01018	三内字平山	散布地	縄文(前・中)		「三内霊園遺跡調査概報」市(昭37)注1
13	三内沢部(1)	01064	三内字沢部	集落跡	縄文(前・中・後)・平安		「三内沢部遺跡発掘調査報告書」県41集(昭53)注2
14	小三内	01017	三内字丸山	集落跡	縄文(前・中・後)・平安		「日本考古学年報」6, 8, 9, 11, 「県遺跡地図」(平4)
15	浪館(1)	01011	三内字丸山	散布地	縄文(前)		「青森市の原始時代研究録」1(昭43)注3
16	浪館(2)	01012	浪館字平岡	散布地	縄文(中・晩)		「青森市の原始時代研究録」1(昭43)
17	三内丸山(1)	01020	三内字丸山	集落跡	縄文(前・中・後)・平安		「近野遺跡(Ⅲ)・三内丸山(Ⅱ)遺跡発掘調査報告書」県33集(昭52)
18	三内丸山(2)	01021	安田字近野	散布地	縄文(前・中・後)		「三内丸山遺跡調査概報」市(昭45)・「三内丸山遺跡発掘調査報告書」市(昭63)
19	三内	01019	三内字丸山	館跡・集落跡	旧石器・縄文(早・晩)・平安		「青森市三内遺跡発掘調査報告書」県37集(昭53)・「青森県の中世城館」(昭58)
20	近野	01065	安田字近野	集落跡	縄文(前～晩)・平安		「近野遺跡発掘調査報告書」(Ⅰ)～(Ⅳ)県12・22・33・47集(昭49・50・52・54)
21	安田水天宮	01014	安田字近野	散布地	縄文(前・中・後)		「青大史学」(昭57)
22	安田(1)	01015	安田字近野	散布地	縄文(前)		「青森市の原始時代研究録」1(昭43)
23	安田(2)	01016	細越字栄山	散布地	不明		
24	熊沢	01055	岩渡字熊沢	散布地	縄文(早～晩)		「熊沢遺跡発掘調査報告書」県38集(昭53)
25	細越館	01066	細越字栄山	城館	古墳(5世紀)・平安		「青森市の原始時代研究録」1(昭43)・「北海道考古学」7(昭46)
26	細越	01013	細越字種元	散布地	縄文(晩)・平安		「細越遺跡発掘調査報告書」県49集(昭59)
27	朝日山	01165	高田字朝日山	集落跡	縄文・平安・中世		「朝日山遺跡」県87集(昭59)
28	高田城	01170	高田字朝日山	城館	中世		「青森県の中世館」(昭58)
29	高田蝦夷館	01171	高田字朝日山	城館	中世		「青森県の中世館」(昭58)

注 1 青森市教育委員会発行の埋蔵文化財調査報告書は市と略記。
 2 青森市教育委員会発行の埋蔵文化財調査報告書は県○集と略記した。
 3 「青森市の原始時代研究録」1 北林八洲晴 外ヶ浜郷土研究会

第Ⅳ章 検出遺構

朝日山遺跡は、調査前は畑地として耕作されており、平成2～3年度の調査区域（段丘面）は、著しく削平が行なわれていた。また、丘陵地にかかる部分には高さ3メートル程の土盛がなされていた。このため遺構は、上部がほとんど確認できないものが多く、また、遺構間の重複も著しく、全体形を把握できない遺構も多数あった。

第1節 竪穴住居跡

竪穴住居跡は、低位段丘面から丘陵地の頂上まで構築されている。特に、段丘面は著しい重複及び削平が認められ、丘陵の斜面では急傾斜地のため、斜面下側が確認できないものが多数存在する。

確認した住居跡は、ほとんどが平安時代のものであるが、第301号竪穴住居跡は、縄文時代中期末のものである。この住居跡については、本節の最後に記載している。

第3号竪穴住居跡 （第4図）

[位置] N・O-21・22グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複のため全体のプランは不明であったが、住居の南東部分及び貼床の一部から確認した。昭和57年度に調査した残り部分である。

[重複] 第87号土壙、第2号溝・第3号溝と重複する。本住居跡は第87号土壙より新しく、第2号溝及び第3号溝よりは古い。

[平面形・規模] 東壁は494cmである。全体の平面形は方形を呈するものと思われる。主軸方位は概ねN-57°-Wである。

[堆積土] 16層に分層できた。暗褐色土・黒色土を基調とする。全体的にロームブロックが混入している。

[壁] 重複及び削平のため、東壁・南壁・西壁の一部のみが残存している。壁高は東壁で5～15cm、南壁で10～20cm、西壁で40cmである。

[床面] 第Ⅳ層を掘り込んでいる。

[周溝] 東壁・南壁・西壁において一部を確認した。幅は14～30cmである。なお、カマド部

分には周溝は巡っていない。

[柱穴・ピット] 床面及び壁際から4個の穴が検出された。いずれも本住居に伴うものかどうかは判らない。

[カマド] 東壁南寄りに構築されている。袖は粘土をつき固めて構築し、芯材は使用されていない。燃烧部火床面は袖部のほぼ中央部分にあり下部は窪んでいる。直径は約40cmである。火床面の奥には伏せられた土師器と半月状の扁平な礫が支脚として設置されていた。煙道下部は地山を掘り残して構築している。煙出し孔は検出できなかった。

[出土遺物] 覆土中より、土師器・須恵器片が出土した。

[その他] 出土した遺物から本住居は平安時代のもと考えられる。

(長瀬 昇)

第3号竪穴住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	32×29	31	円形	3	38×32	17	楕円形
2	48×41	33	楕円形	4	30×27	28	円形

第5号竪穴住居跡 (第6図)

[位置] O-24・25グリッドに位置する。

[確認状況] 調査区域の北端にカマドの上面と落ち込みを確認した。昭和57年度に調査した残り部分である。

[重複] 第6号竪穴住居跡と重複しており、本住居跡が古い。

[平面形・規模] 確認した南壁は220cmである。前回調査した部分と合体すると、方形になると思われる。面積は3.9㎡である。主軸方位はN-12°-Eである。

[堆積土] 暗褐色を主体としている。

[壁] 南壁は緩やかに立ち上がる。壁高は10~12cm程である。

[床面] 平坦で堅緻な造りである。

[周溝] 認められない。

[柱穴・ピット] カマドの袖の下からピットを1個確認した。

[カマド] 南壁東寄りに構築されている。残存状態はこの遺跡としては、良好であるが、煙道部より上部は削平されて残存していない。燃烧部火床面は、明確でなく、焼土粒の散らばる範囲は、直径25cmである。袖は床面に粘土をつき固めて構築しており芯材は使用されていない。煙道下部は、地山を掘り残して構築している。煙出し孔は検出できなかった。

[出土遺物] 覆土中より土師器坏の破片が出土した。

(三浦 孝仁)

第6号竪穴住居跡 (第6図)

[位置] O-25グリッドに位置する。

[確認状況] 調査区域の北端に落ち込みを確認した。昭和57年度に調査した残り部分である、

[重複] 第5号竪穴住居跡と重複しており、本住居跡が新しい。

[平面形・規模] 確認した南壁は350cmである。前回調査した平面形から、方形になると思われる。面積は12.5㎡である。

[堆積土] 晴褐色を主体としている。

[壁] 南壁は垂直に立ち上がる。壁高は40～45cm程である。

[床面] 平坦で堅緻な造りである。

[周溝] 認められない。

[柱穴・ピット] 深さ13cmのピットを1個確認した。

[カマド] 昭和57年度の調査で東壁北寄りに確認されている。

[出土遺物] この住居跡の床面から、昭和57年度の調査で刀の鐔が出土している。

(三浦 孝仁)

第16号竪穴住居跡 (第7図)

[位置] O-27グリッドに位置する。

[確認状況] 暗褐色土の落ち込みから確認したが、東側は削平されていた。

[重複] 第80号溝を破壊して構築されている。また昭和57年度の調査では、北側が第8号住居跡に破壊されていることが確認されている。

[平面形・規模] 南壁338cm、西壁(334cm)の隅丸方形である(東壁、北壁は第8号住居跡に破壊されて、計測不能)。

[堆積土] 4層に区分できた。堆積土の大半は浮石粒を多量に含んだ褐色土であり、人為堆積と考えられる。第4層は黄褐色土の貼り床である。

[壁] 第Ⅲ・Ⅳ層を壁面とし、壁高は南壁で、20cm前後である。壁は急に立ち上がる。

[床面] 第Ⅳ層を床面とし、ほぼ平坦で堅緻である。カマドの東側付近では、黄褐色土の貼り床が施されている。

[周溝] 壁直下に幅16～40cm、深さ10～20cmの壁溝を検出した。昭和57年度の調査でも検出されており、それによるとカマドを除いて一周するものと思われる。

[柱穴・ピット] 昭和57年度の調査では北西隅に1個検出されている(P₁)。今回の調査では南東隅に1個検出した(P₂)。ともに周溝内に検出された。P₁は3cm、P₂は26cmの深さである。主柱穴と考えられる。

[カマド] 東壁の南寄りに構築されている。片袖を確認できたのみで、カマドの遺存状況はよくない。前庭部はいくぶん窪み、白色粘土により貼り床が施されている。燃烧部火床面は地山を掘り窪めて構築している。焼土範囲は17m×30cmの楕円形で、片方の袖しか検出できなかったが、ほぼ中央に位置するものと思われる。袖は床面上に粘土をつき固めて構築しており、芯材は使用されていない。煙道部下部は地山を掘り残した半地下式のものと考えられるが、明瞭に確認できなかった。

[出土遺物] 昭和57年度の調査では、鉄器が出土している。覆土中より土師器・須恵器が出土している。

[その他] 本住居跡は北側を昭和57年度に調査されているが、今回の調査でその全容を知ることができた。住居の営まれた年代は、出土土器から10世紀前半のものと思われる。

(畠山 昇)

第19号竪穴住居跡 (第8図)

[位置] F-8・9グリッドに位置する。

[確認状況] 東側の一部が調査区外にある。また削平及び重複のため全体像は把握できない。

[重複] 第5号土壇と重複し、本住居跡が古い。第27号土壇・第20号住居跡と部分的に接している。また、室町時代の第1号掘立柱建物跡の柱穴数本により、床面が攪乱を受けている。

[平面形・規模] 北壁は概ね確認できるが、東・西壁は一部分不明である。南壁は調査区外にあると思われる、不明である。北壁(360cm)・東壁(70cm)・西壁(310cm)で、方形または南北にやや長い長方形を呈すると考えられる。主軸方位はN-68°-Wである。

[堆積土] 暗褐色土を基調としており、ローム粒、炭化物粒を混入する。部分的に後世の攪乱を受けている。全体に軟質である。

[壁] 第Ⅲ・Ⅳ層を壁としている。立ち上がりは、ほぼ垂直である。壁高は床面までは5cm程であるが、壁下の周溝の底までは5~10cmである。

[床面] 中央部に貼り床状のやや硬い面があるが、明瞭に貼っているかどうかは不明である。

[周溝] 北壁及び西壁下に床面より低い部分が連続して確認されたが、周溝としては不明瞭である。掘り方の可能性も考えられる。

[柱穴・ピット] 確認できなかった。

[カマド] 東壁北寄りに、第5号土壇と重複して焼土の広がりを確認した。火床部の残存部と考えられる。焼土範囲は30×20cm程の不整楕円形で、床面上に5cm程盛り上がり検出された。地山を5cm程掘り込んで構築している。火床部より上部の施設は削平のため存在しない。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第20号竪穴住居跡 (第9図)

[位置] G・H-8・9グリッドに位置する。

[確認状況] 上部は削平されていたが、残存状況は他の遺構に比べて良好で、暗褐色土の方形のプランとして確認できた。

[重複] 第19・21～24・68・69号竪穴住居跡・第6・7号土壇・第1号掘立柱建物跡・第21号溝と重複している。本住居跡は第6・7号土壇・第1号掘立柱建物跡よりも古く、他の住居跡よりも最も新しい。

[平面形・規模] 東壁(510cm)、南壁(520cm)、西壁(534cm)、北壁(512cm)の方形をなす。面積は22.9㎡である。

[堆積土] 14層に分層できた。暗褐色土を基調としており、ローム・炭化物粒が混入する。第4層中に苦小牧火山灰が混入している。自然堆積と考えられる。

[壁] 重複のため東壁の残存状態は不良で、壁高は15cmほどしかない。重複や削平の攪乱を受けていない南壁は約40cmの壁高をもつが、他の2辺は30cm前後である。壁面は第IV層で壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。

[床面] 第IV層を掘り込み、5～10cmの厚さにローム及び暗褐色土を貼り、床としている。全体にしまりが強い。またカマド付近の貼り床は、厚さ1～3cmの炭化物の上に薄く施されており、東南隅では、一部酸化したように見える個所がある。

[周溝] カマド付近を除いてほぼ一周する。但し東壁沿いは、第21号溝の攪乱によって確認が難しい。深さは、概ね5～15cmである。

[柱穴・ピット] 床面及び周溝中から検出した小ピットは16個で、周溝中のNo. 1～4が主柱穴と考えられる。No. 5～7は東、南、北辺の周溝から内側、それぞれの辺のほぼ中央にあり、周囲の貼り床よりは薄めのかたい土を被っていた。形状は長辺10～15cm、短辺5～10cmの長方形で、深さは約20cmほどである。西辺中央にも同様のピットが確認されたが、当住居跡よりも古いと思われるNo. 16の覆土中に構築されており、明瞭に検出できなかった。用途は不明である。

[カマド] 東壁南寄りに構築されている。残存状態はほぼ良好だが、煙道部より上部は削平のため残存していない。燃焼部火床面は両袖のほぼ中央手前にあり、3面が確認された。地山を掘りくぼめ、黄褐色ロームでつき固めて構築している。焼土範囲は、直径約30cmが2面、それに満たないものが1面で、厚さはそれぞれ約5cmである。全体にしまりが強く、上面は硬質である。袖は、床面上に粘土をつき固めて構築してあり、芯材は使用されていない。煙道下部は地山を掘り残してあるが、煙出し孔は検出できなかった。また支脚は確認できなかった。

[その他の施設] カマド近辺を除く床面を切るように掘られた溝が検出された。幅約15cm、

深さはほぼ均等に10cmほどである。貼り床と同質と思われるかたい土で埋められていた。住居の北東隅に向かって緩やかに傾斜しており、水捌けのことを考慮した施設かとも思われるが、用途に関しては不明である。また、本住居跡に伴うかも不明である。南西隅の貼り床下からは、これも用途不明のピットが検出された。規模は90×75cm、ほぼ円形をなすが、壁の立ち上がりは浅く、掘り方またはくぼみ状の形状である。他の3方向と違い、この一角は貼り床下の掘り方が乱雑だったため、この落ち込みも断面の観察をせずに掘り上げてしまった。覆土が砂質だったことは確認できているが、その記録はない。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器が出土した。また、カマド袖の横から石製垂飾品が1点出土している。

(神山 温子)

第20号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	20×18	31.9	円形	9	23×24	21.4	隅丸方形
2	30×26	30.6	〃	10	20×22	10.9	〃
3	26×23	38.0	〃	11	22×24	17.6	〃
4	23×25	32.8	〃	12	34×40	29.5	円形
5	16×12	21.7	方形	13	33×32	12.4	〃
6	(20×7)	11.2	〃	14	25×24	12.6	〃
7	16×9	18.0	〃	15	30×28	25.5	〃
8	33×32	17.1	円形	16	24×30	27.1	〃

第21号竪穴住居跡 (第11図)

〔位置〕 H・I-9グリッドに位置する。

〔確認状況〕 第IV層上面に暗褐色土とロームの混合土の広がりとして確認した。重複及び削平のため全体形は不明である。

〔重複〕 第20・22・23・67号竪穴住居跡と重複している。本住居跡は第67号住居跡より新しく、第20号住居跡より古い。第22・23住居跡とは、確認時の状況では、本住居跡が古いものと考えられるが、削平のため断定し得ない。

〔平面形・規模〕 削平及び重複のため形状は不明である。床と考えられる残存部分は約280×240cmである。

〔堆積土〕 貼り床と考えられる暗褐色とロームの混合土が確認できただけである。また、上部が削平されているため、全体の堆積土は確認できなかった。

〔壁〕 西壁の一部が確認できた。壁高は8～5cmであり、第IV層を壁としている。

〔床面〕 暗褐色とロームの混合土を貼り、床面としている。厚さは5cm程であり、やや軟質である。貼り床面は第67号住居跡上に一部広がっている。

〔周溝〕 確認できなかった。

[柱穴・ピット] 本住居跡内に8個の柱穴が確認できたが、No. 1・2が本住居跡に伴うものと考えられる。

[カマド] 残存していない。

[出土遺物] 床面上及び貼り床の混合土中から土師器及び須恵器片が出土している。

(白鳥 文雄)

第21号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	20×14	15	長方形	2	29×20	17	楕円形

第22号竪穴住居跡 (第12図)

[位置] G・H-9・10グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複のため、西側部分を確認できただけである。

[重複] 第20・21・23号竪穴住居跡と重複している。本住居跡は、第20・23号住居跡より古い。第21号住居跡との新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 東側部分が第20号住居跡に切られているため残存しないが、方形を呈するものと考えられる。残存する部分は、南壁(230cm)、西壁320cm、北壁(200cm)である。

[堆積土] 1層だけ確認できた。暗褐色土中にローム粒が混入している。また焼土粒が混入している。第23号住居跡は本層上面を床面としており、本層は第23号住居跡の貼り床部分の可能性も考えられる。本層中より多量の炭化材が出土している。

[壁] 重複のため残存部分はほとんど確認できなかった。

[床面] 第IV層を床面としており、貼り床等は確認できなかった。

[周溝] 残存する壁下で確認できた。幅は40～10cmで概ね20cm程である。深さは北壁側が約7～10cm、南壁側が約20cm程である。

[柱穴・ピット] 本住居跡に伴う柱穴は確認できなかった。No 1内から土師器の甕が出土した。

[カマド] 残存しない。

[出土遺物] 確認面及び床面上から土師器の破片が出土している。また、ピット1から土師器の小型甕が完形品で出土した。

(白鳥 文雄)

第23号竪穴住居跡 (第13図)

[位置] G・H-9・10グリッドに位置する。

[確認状況] 暗褐色土の広がりとして確認したが、削平及び重複のため全体は不明である。

[重複] 第20・21・22・68号住居跡と重複しており、第22・68号住居跡より新しく、第20号住居跡より古い。第21号住居跡との新旧関係は、不明瞭であるが、本住居跡が新しい可能性が高い。

[平面形・規模] 重複により全体像を把握できないが、方形を呈するものと考えられる。南壁（240cm）、西壁（480cm）、北壁（380cm）である。

[堆積土] 2層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム及び焼土粒・炭化物粒を混入する。第22号住居跡の堆積土も本住居跡の貼り床の可能性も考えられる。

[壁] 削平のため残存しない。東壁は第20号住居跡により切られており、南壁は地山の若干の高低差によって確認した。

[床面] 中央部は第22号住居跡の覆土を床面としているが、他の部分は第Ⅳ層を床としている。貼り床の痕跡は明瞭に確認できなかった。

[周溝] 西壁下・北壁下で確認できた。幅は約30cmで、深さは5～10cmである。

[柱穴・ピット] 本住居跡に伴う柱穴は、周溝中に存在するNo. 1～4の4個と考えられる。周溝に沿って確認した大型の柱穴は第1号掘立柱建物跡のものである。

[カマド] 残存しない。

[出土遺物] 床面及び確認面から、土師器・須恵器の破片が出土している。

(白鳥 文雄)

第24号竪穴住居跡 (第14図)

[位置] F～I-7・8グリッドに位置する。

[確認状況] 第Ⅲ・Ⅳ層で暗褐色土の広がりとして確認した。東側半分は調査区外に存在する。覆土上部は、耕作のため攪乱を受けている。

[重複] 第20号住居跡、第27・81・71号土壇、第16・21・27号溝、第1号掘立柱建物跡と重複している。本住居跡は、第27号土壇・第27号溝よりも新しく、他の遺構より古い。

[平面形・規模] 西壁及び南・北壁の各々半分づつが残存する。西壁870cm、北壁の残存長（500cm）、南壁の残存長（480cm）で、大型の方形を呈しているものと考えられる。

[堆積土] 南北セクションで16層に分層できた。黒褐色土及び暗褐色土を基調としており、ローム粒の混入が認められる。全体に軟質である。底面直上の第2層中に十和田a降下火山灰と推定される火山灰が、ブロック状に少量混入している。

[壁] 削平のため残存状態は不良である。第Ⅲ・Ⅳ層を壁面としており、ほぼ垂直に立ち上がる。壁高は、20～40cmである。

[床面] 第Ⅳ層を床面としているが、全体にごく薄く貼り床を施している。

[周溝] 北西隅で不明瞭になる。また、第20号住居跡との重複部分で未確認である。周溝の幅は10～30cmで、深さは10～25cmである。

[柱穴・ピット] 南西隅の周溝中及び西壁中央各々1個ずつ検出した。主柱穴と考えられるものはこの2個だけであり、他のピットは本住居跡に付属したものは不明である。

[カマド] 確認できなかった。調査区外に存在するものと考えられる。

[その他の施設] 床面精査時に馬蹄形の溝（第27号溝）が検出された。床面下に存在するが本住居跡に伴うかどうかは不明である。

[出土遺物] 土師器及び須恵器が出土している。

(白鳥 文雄)

第25号竪穴住居跡 (第15図)

[位置] G・H-13・14グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複のため残存状態は非常に悪く、床面の一部だけを確認した。

[重複] 第26・27号竪穴住居跡及び第51号溝と重複している。確認時の状況からは本住居跡が最も古い。

[平面形・規模] 重複のため平面形は不明である。

[堆積土] 南側部分に残存しており、3層に分層できた。褐色土を基調としており、ローム粒・炭化物粒・焼土粒が混入する。また堆積土中に苦小牧火山灰が280×100cmの範囲で確認された。

[壁] 南側部分に一部残存する。立ち上がりは不明瞭である。

[床面] 一部に貼り床を確認できたが、他の部分は第IV層を床面としている。残存する床面は300×90cmである。

[周溝] 確認できなかった。

[柱穴・ピット] 南側に、径28cm、深さ15cm程の柱穴が1個確認できたが、本住居跡に伴うものは不明である。

[カマド] 残存しない。

[出土遺物] 土師器片等が少量出土したが、本住居跡に伴うかどうかは不明である。

(白鳥 文雄)

第26号竪穴住居跡 (第15図)

[位置] G・H-13グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複のため、床面の一部と西側の壁の一部を確認しただけである。

[重複] 第25・27・52号住居跡、第22号土壙、第51号溝と重複している。本住居跡は第27号住居跡・第22号土壙より古く、他の遺構より新しい。また東側部分を第26号溝により切られている。

[平面形・規模] 重複により平面形は不明である。残存部分では西壁(200cm)、北壁(270cm)である。

[壁] 西壁の残存部分で、壁高5～7cm程であり、北壁は若干の高低差を確認できただけである。

[床面] 第IV層を床面としており、部分的に褐色土とロームの混合土が確認された。貼り床の残存部分と考えられる。

[周溝] 確認できなかった。

[柱穴・ピット] 確認できなかった。

[カマド] 残存しない。

[その他の施設] 西側部分で焼土が確認された。焼土は60×50cm程の範囲で、厚さは約5cm程である。床面上より浮いていることから、本住居跡に伴うかどうかは不明である。

[出土遺物] 土師器、須恵器片及び鉄滓が出土している。

(白鳥 文雄)

第27号竪穴住居跡 (第16図)

[位置] H-13・14グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複により、残存状態は不良で、貼り床面と考えられる部分を確認しただけである。

[重複] 第26・52号住居跡・第23号土壙・第51号溝と重複しており、本住居跡が最も新しい。

[平面形・規模] 確認できた貼り床範囲は215×170cmの不整形である。

[堆積土] 暗褐色土とロームの混合土で、厚さ約5cmである。

[壁] 確認できなかった。

[床面] 堆積土の項で述べた混合土を貼り床面としており、全体にしまっている。

[周溝] 確認できなかった。

[柱穴・ピット] 確認できなかった。

[カマド] 残存しない。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第28号竪穴住居跡 (第17図)

[位置] L・M-17・18グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び耕作のため、周溝と床面の一部を確認できただけである。

[重複] 第29・51号住居跡、第18号溝と重複している。本住居跡は、第51号住居跡より新しく、第18号溝より古い。第29号住居跡との新旧は判定し得ない。

[平面形・規模] 平面形は、方形を呈する。壁がほとんど残存しないことから全て推定値であるが、東西(約560cm)、南北(約540cm)である。主軸方位は、概ねN-52°-Wである。

[堆積土] 2層に分層できた。ともに黒褐色土で、ローム粒が混入している。全体にしまりが認められない。

[壁] 削平のためほとんど残存していない。南壁及び西壁の一部を確認できただけである。壁高は5cm程で、垂直に立ち上がる。

[床面] 第IV層を床面としている。貼り床は南東隅近くで小規模な範囲を確認したが、全体的には確認できなかった。ほとんど削平されているものと考えられる。

[周溝] 不連続であるが、南壁下のはほぼ全てと、西及び北壁下に一部分確認できた。幅は概ね15cm程であり、深さは3～15cmである。

[柱穴・ピット] 24個の柱穴を検出した。No. 1～5は伴うかどうかは不明である。ピットNo. 2・3は焼土下より検出されたことから、本住居跡より古いものと考えられる。住居跡の全体がほぼ床面直上まで削平されていたことから、各柱穴との同時性及び新旧関係が把握できないが、周溝内及びこれに沿って位置する19個は、本住居跡の主柱穴または支柱穴の可能性が高い。東西または南北の柱穴で対応しないものは改築等による可能性も考えられる。

[カマド] 東壁中央、やや南寄りに焼土が3箇所確認された。上部施設は残存しないが、カマド火床部の可能性が高い。

[その他] 重複する第29号住居跡とは床面に段差が認められることから、別の住居跡として把えたが、住居跡の軸線がほぼ同一であることから本住居跡の覆土上部に貼り床を施し、増築した可能性も考えられる。

[出土遺物] 土師器片が少量出土している。

(白鳥 文雄)

第29号住居跡 (第17図)

[位置] L・M-17・18グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び耕作のため、南壁の一部を柱穴を確認しただけである。

[重複] 第28・51号住居跡、第28号土壌・第18号溝と重複している。本住居跡は第51号住居

跡よりも新しく、第18号溝、第28号土壇よりも古い。第28号住居跡との新旧は断定できない。

[平面形・規模] 平面形は、方形または長方形を呈するものと考えられる。壁長は不明である。主軸方位は、第28号住居跡と同様に、ほぼN-50°-Wと考えられる。

[堆積土] 2層に分層できたが、ごく限られた部分に堆積していたため、住居跡全体の覆土を把握するには至らなかった。暗褐色土を基調としており、全体にローム粒を混入している。

[壁] 残存部分は南西隅の一部分だけである。残存部の壁高は5～10cm程である。

[床面] 第IV層を床面としているが、残存部分は南側のごく一部分だけである。貼り床は確認できなかった。

[周溝] 検出できなかった。

[柱穴・ピット] 4個の柱穴を検出した。No. 2・3が主柱穴と考えられる。

[カマド] 残存しない。

[その他] 第28号住居跡の増築部分の可能性も考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第30号竪穴住居跡 (第18図)

[位置] I・J-30グリッドに位置する。

[確認状況] 削平されているため、貼り床だけの状況で確認された。

[重複] 重複は、認められない。

[平面形・規模] 西壁(238cm)の一部が残存しているだけで、全体の平面形は不明である。確認できた貼り床範囲は、280cm×120cmである。

[堆積土] 7層に分層された。黒褐色土を基調としており、ローム・炭化物・焼土粒が混入している。

[壁] 西壁の一部だけが残存している。壁高は西壁が18～22cmである。第IV層を壁面としており、壁の立上がりは、やや緩やかである。

[床面] 第IV層を掘り込み、ローム及び暗褐色の混合土を5～10cmの厚さに固めて、貼り床としている。

[周溝] 認められない。

[柱穴・ピット] 床面から検出した小ピットは、6個で、No. 3とNo. 6が柱穴と考えられる。

[カマド] 残存してない。

[その他の施設] 認められない。

[出土遺物] 覆土中より土師器片が出土している。

(中嶋 友文)

第30号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	21×15	22.5	円形	4	21×18	14.0	円形
2	19×4	3.0	ク	5	20×17	7.5	ク
3	27×21	40.5	楕円形	6	20×17	36.0	ク

第32号竪穴住居跡 (第19図)

[位置] J-34グリッドに位置する。

[重複] 第33号住居跡と重複している。本住居跡が第33号住居跡より新しい。

[平面形・規模] 東壁(278cm)、南壁212cm、西壁251cm、北壁(170cm)の長方形である。主軸方位はN-10°-Eである。

[堆積土] 4層に分層できた。第2・4層中に焼土ブロック・焼土粒を含んでおり焼失住居の可能性も考えられる。

[壁] 南・西壁だけが残存している。壁高は南壁6cm、西壁7cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

[床面] 住居跡の西側からカマドにかけてロームを貼り、床としており、全体にしまりが強い。

[周溝] 検出されなかった。

[柱穴・ピット] 検出されなかった。

[カマド] 東壁南隅寄りに構築されている。遺存状態は不良で、煙道部は残存していない。燃焼部火床面は、両袖中央部に位置する。袖は、灰白色粘土をつき固めて構築しており、芯材は使用していない。

[その他の施設] 検出されなかった。

[出土遺物] 土師器及び須恵器片が出土している。

(成田 滋彦)

第33号竪穴住居跡 (第20・21図)

[位置] H・I・J-32~35グリッドに位置する。

[重複] 第32・39・41・45号住居跡、第30~32号溝と重複している。本住居跡は第32号住居跡・第30~32号溝より古く、第31・41・45号住居跡より新しい。

[平面形・規模] 東壁(756cm)、南壁836cm、西壁810cm、北壁(840cm)の方形を呈する。

面積は(約63.2m²)である。主軸方位はN-O°-Eである。

[堆積土] 7層に分層できた。第6・7層は住居跡の埋土である。第1・2層中に炭化材と焼土を含み、焼失住居の可能性も考えられる。

[壁] 壁高は、東壁は不明、西壁27cm、南壁19cm、北壁21cmである。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。

[床面] 3～5cmの厚さに、ローム及び暗褐色土の混合土を貼り床にしている。貼り床は、カマド付近を除いて、ほぼ全面に施され、全体にしまりが強い。

[周溝] カマド部分及び北側を除いて一周する。周溝の幅は12～40cmである。

[柱穴・ピット] 床面から検出した小ピットは11個で、No1・2・5が主柱穴と考えられる。

[カマド] 東壁寄りに構築されている。遺存状態は不良で、煙道部及び袖部は削平のため残存していない。焼土範囲は65cmで、全体にしまりはなく軟質である。

[その他の施設] 本住居跡の外側に弧状の溝が検出されており、本住居跡に伴う外周溝とみられる。溝は、東側を開口し幅90～110cm、深さ30～40cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。

[出土遺物] 覆土及び床面から土師器及び須恵器が出土している。

(成田 滋彦)

第33号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	51×46	17	円形	7	21×17	19	楕円形
2	84×77	37	円形	8	21×16	23	楕円形
3	29×28	13	円形	9	24×23	13	円形
4	68×66	10	円形	10	90×89	24	不整形円形
5	32×28	15	楕円形	11	28×26	13	円形
6	36×33	9	円形				

第34号竪穴住居跡 (第18図)

[位置] J・K-29・30グリッドに位置する。

[確認状況] 削平されているため、ほとんど貼り床だけの状況で確認された。

[重複] 第38号土壌と重複し、本住居跡が古い。

[平面形・規模] 南壁と西壁の一部だけが残存しており、全体の平面形は不明である。面積及び主軸方位も推定できない。

[堆積土] 7層に分層された。黒褐色土を基調としており、炭化物粒・焼土粒を含んでいる。

[壁] 南壁と西壁の一部だけが残存している。壁高は6～28cmである。第IV層を壁面としている。

[床面] 第Ⅳ層を掘り込み、ローム及び暗褐色土の混合土で貼り床を形成している。

[周溝] 認められない。

[柱穴・ピット] 床面から検出した小ピットは、8個で、周溝中のNo. 1～4が柱穴と考えられる。

[カマド] 残存していない。

[その他の施設] 認められない。

[出土遺物] 土師器及び須恵器が出土している。

(中嶋 友文)

第34号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	28×18	11	楕円形	5	28×25	16	楕円形
2	25×24	18	円形	6	25×22	24	円形
3	24×23	21	ク	7	28×20	4	楕円形
4	55×32	20	不整形	8	21×23	6	円形

第35号竪穴住居跡 (第22・23図)

[位置] L・M-34・35グリッドに位置する。

[重複] 第42号土壙と重複している。本住居跡が第42号土壙より古い。

[平面形・規模] 東壁420cm、南壁320cm、西壁506cm、北壁318cmの長方形を呈する。面積は約30㎡である。主軸方位はN-90°-Eである。

[堆積土] 7層に分層できた。第6・7層は住居跡の掘り方の埋土であり、断面観察等から自然堆積土と考えられる。

[壁] 壁高は、東壁15cm、南壁32cm、西壁42cm、北壁23cmである。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。

[床面] 約5cmの厚さで、ロームを用いて貼り床としている。貼り床は、ほぼ全面に施されている。

[周溝] 南・西側部分に周溝がみられ一周していない。周溝の幅は11cmであり、深さは9cmで浅い。

[柱穴・ピット] 床面及び周溝中から検出した小ピットは24個である。No. 5・15が主柱穴でNo. 3・4・6～14・16・17が支柱穴と思われる。

[カマド] 東壁南寄りに構築されている。半地下式煙道部をもつカマドである。焼土範囲は、長径約40cmで、全体にしまりはなく、軟質である。袖は、粘土をつき固めて構築しており、芯材は使用されていない。袖の中央部に扁平な礫があり、支脚として使用されたとも考えられる。

[その他の施設] 本住居跡の外側に弧状の溝が検出されており、本住居跡に伴う外周溝とみ

られる。溝は東側を開口し、幅60～80cmである。溝の北側は第48号土壙に切られ残存していない。壁は垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

[出土遺物] 土師器及び須恵器が出土している。

(成田 滋彦)

第36号竪穴住居跡 (第24図)

[位置] K・L-29・30グリッドに位置する。

[確認状況] 削平されているため、ほぼ床面だけが確認された。

[重複] 第35号溝と重複し、本住居跡のほうが古い。

[平面形・規模] 東壁(388cm)、南壁(310cm)、西壁(418cm)、北壁(400cm)のやや北側が広い形をしている。主軸方位はN-21°-Eである。

[堆積土] 削平されているため確認できなかった。

[壁] 削平されているため残存していない。

[床面] 第IV層を掘り込み、ローム及び暗褐色土の混合土を2～5cmの厚さに貼り、床面としている。

[周溝] 一部を除いてほぼ一周すると思われる。周溝の幅は、10～18cmとほぼ一様で、深さは、10～28cmである。

[柱穴・ピット] 床面から検出した小ピットは、11個であるが、柱穴かどうかは不明である。

[カマド] 残存していない。

[その他の施設] 認められない。

[出土遺物] 覆土中より土師器・須恵器片が出土している。

(中嶋 友文)

第36号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	35×33	27	円形	7	33×27	10	円形
2	47×24	20	楕円形	8	35×32	12	〃
3	38×34	11	円形	9	21×19	7	〃
4	43×40	17	〃	10	13×9	3	〃
5	36×31	10	〃	11	40×30	29	不整形
6	32×30	6	〃				

第37号竪穴住居跡 (第25図)

[位置] K・L-29・30グリッドに位置する。

[確認状況] 削平のため、残存状態は不良で、ほぼ床面と周溝だけが確認された。

[重複] 第87号住居跡と重複している。本住居跡は第87号住居跡より新しい。

[平面形・規模] 東壁(502cm)、南壁(524cm)、西壁510cm)、北壁(512cm)の方形を呈する。面積は(約23.7㎡)である。主軸方位はN-25°-Eである。

[堆積土] 削平されているため残存していない。

[壁] 削平されているため残存していない。

[床面] 第IV層を掘り込み、5~10cmの厚さに、ローム及び暗褐色土の混合土を貼り床としている。貼り床は、ほぼ全面に施され、ややしまりが弱い。

[周溝] ほぼ一周する。周溝の幅は、14~20cm、深さは、5~20cmである。

[柱穴・ピット] 床面及び周溝中から検出した小ピットは、15個で、床面のNo. 1~4が柱穴と考えられる。周溝中のNo. 5~8が支柱穴の可能性もある。

[カマド] 残存しない。

[その他の施設] 本住居跡の外側に弧状の溝(第48・49・64号溝)が、検出されており、本住居跡に伴う外周溝と考えられる。溝は、幅60~140cm、深さ8~30cmであるが溝の北側は、残存していない。溝の壁は、上方にやや開いて構築されており、底面は、やや起伏が多い。

[出土遺物] 土師器片が出土している。

(中嶋 友文)

第37号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	44×36	14	円形	9	15×14	9	円形
2	50×48	30	〃	10	32×28	27	〃
3	50×48	18	〃	11	31×31	10	〃
4	45×40	24	〃	12	40×40	27	〃
5	23×18	23	〃	13	23×21	17	〃
6	26×22	28	〃	14	43×40	24	〃
7	34×26	37	〃	15	35×33	22	〃
8	15×15	40	〃				

第38号竪穴住居跡 (第26図)

[位置] J・K-30・31グリッドに位置する。

[確認状況] 削平と重複のため、ほぼ床面だけが確認された。

[重複] 第80号竪穴住居跡と重複し、本住居跡が新しい。

[平面形・規模] 西壁(360cm)だけが残存しており、全体の平面形は不明である。

[堆積土] 8層に分層された。暗褐色土を基調としており、ローム・炭化物粒が混入している。自然堆積と考えられる。

[壁] 削平のため、西壁と南壁の一部だけが残存している。壁高は西壁で、11~19cmである。

第80号竪穴住居跡の覆土を壁面としており、壁の立ち上がりは、やや緩やかである。

[床面] 第Ⅳ層を掘込み、2～5cmの厚さに、ローム及び暗褐色土の混合土を貼り、床としている。

[周溝] 東側を除いて確認した。周溝の幅は、13～28cmとほぼ一様である。深さは、3～11cmである。

[柱穴・ピット] 床面から検出した小ピットは、8個で、柱穴かどうかは不明である。

[カマド] 南壁に構築されている。遺存状態は不良で、煙道部及び袖の一部は削平され残存していない。火床面は、検出されなかった。袖は、床面上に粘土を固めて構築しており、芯材は使用されていない。

[その他の施設] 本住居跡の外側に第38号溝が検出されており、本住居跡に伴う外周溝と考えられる。溝は、幅70～110cm、溝の南側だけが残っており、他の部分は、残存していない。溝の壁は、上方にやや開いて構築されており、底面は、平坦である。

[出土遺物] 覆土及び床面から土師器・須恵器・鉄製品が出土している。

(中嶋 友文)

第38号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	35.0×20.0	10.0	円形	5	17.0×10.0	2.0	楕円形
2	43.0×23.0	7.0	不整形	6	19.0×16.0	10.0	円形
3	15.0×15.0	8.0	円形	7	32.0×24.0	7.0	楕円形
4	25.0×22.0	5.0	ク	8	28.0×28.0	11.0	円形

第39号竪穴住居跡 (第27図)

[位置] I-35グリッドに位置する。

[重複] 第33・40号住居跡と重複している。本住居跡は第33・45号住居跡より古く、第40号住居跡より新しい。

[平面形・規模] 東壁は不明であるが、南壁(258cm)・西壁275cm・北壁(178cm)で、方形を呈するものと思われる。

[堆積土] 3層に分層できた。第2層中に多量の焼土ブロックを含んでいる。

[壁] 壁高は、南壁5cm・西壁16cm・北壁6cmである。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。

[床面] 貼り床はみられず、ほぼ平坦である。

[周溝] 南・西側の一部で検出し、全周していない。周溝の幅は14cm・深さ17cmである。

[柱穴・ピット] ピットは3個検出された。壁のコーナー部に位置するNo1・2が主柱穴と思われる。

[カマド] 検出しなかった。

[その他の施設] 検出しなかった。

(成田 滋彦)

第39号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	30×28	48	円形	3	44×36	19	円形
2	34×33	19	円形				

第40号竪穴住居跡 (第27図)

[位置] H・I-35グリッドに位置する。

[重複] 第33・39・41・45号住居跡と重複している。本住居跡は第33・39・45号住居跡より古く、第41号住居跡より新しい。

[平面形・規模] 残存部から推定すると平面形は不整形を呈する。東壁(320cm)、南壁(218cm)、西壁は不明、北壁(182cm)である。

[堆積土] 分層はできなかった。黒褐色土を基調としている。

[壁] 壁高は、東壁27cm、南壁4cm、北壁3cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

[床面] 貼り床はみられず、ほぼ平坦である。

[周溝] 検出しなかった。

[柱穴・ピット] 検出しなかった。

[カマド] 検出しなかった。

[その他の施設] 検出しなかった。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 滋彦)

第41号竪穴住居跡 (第27図)

[位置] H-35グリッドに位置する。

[重複] 第33・35号住居跡と重複している。本住居跡は、第33・35号住居跡より古い。

[平面形・規模] 西壁(228cm)、南壁(200cm)、西・北壁は不明で、残存部から推定すると方形を呈すると思われる。

[堆積土] 2層に分層できた。黒褐色土を基調としており、焼土が混入している。

[壁] 壁高は西壁14cm、南壁16cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。

[床面] 貼り床はみられず、ほぼ平坦である。

[周溝] 検出されなかった。

[柱穴・ピット] 東・南隅にピットを1個検出した。主柱穴かどうか判断できなかった。

[カマド] 検出されなかった。

[その他の施設] 検出されなかった。

[出土遺物] 土師器片が出土している。

(成田 滋彦)

第41号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	36×34	27	円形				

第42号竪穴住居跡 (第28図)

[位置] F・G-34グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複のため、住居跡の一部だけを確認した。

[重複] 第30・31・42号溝と重複しており、本住居跡は第30・31溝より古く、第42号溝との新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 東壁(285cm)、北壁(112cm)で残存部から推定すると方形である。

[堆積土] 2層に分層できた。暗褐色土を基調としており、ロームが混入する。

[壁] 削平及び重複のため、東壁と南壁の一部だけが残存している。壁高は東壁19cm、南壁10cmである。壁の立ち上がりは傾斜している。

[柱穴・ピット] 検出したピットは2個で、支柱穴かどうか判断できなかった。

[カマド] 検出されなかった。

[その他の施設] 検出されなかった。

[出土遺物] 覆土上面から土師器片が出土している。

(成田 滋彦)

第42号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	44×42	25	円形	2	38×36	45	円形

第43号竪穴住居跡 (第29図)

[位置] H・I-29・30グリッドに位置する。

[確認状況] 重複と削平のため西壁の一部と本住居に伴うと思われる柱穴から確認された。

[重複] 第119・120・126号溝と重複している。本住居跡はこれらの溝より古い。

[平面形・規模] 西壁の残存部は(230cm)で平面形は方形を呈すると思われる。

[堆積土] 1層で、火山灰の混入はみられない。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

[壁] 西壁の壁高は、約12cmで壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

[床面] 厚さ10cmほどの貼り床の残存が部分的にみられる。

[周溝] なし。

[柱穴・ピット] 床面から検出したピットは12個で、これらが柱穴と考えられる。

[カマド] 残存していない。

[出土遺物] 須恵器片が出土している。

(羽柴 直人)

第43号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	24×18	7	楕円形	7	22×14	10	楕円形
2	43×35	21	〃	8	33×31	11	円形
3	24×19	7	〃	9	13×9	10	〃
4	31×24	39	〃	10	22×17	11	楕円形
5	52×37	18	不整形	11	20×16	8	〃
6	25×20	13	円形	12	31×19	12	不整形

第45号竪穴住居跡 (第27図)

[位置] I-35グリッドに位置する。

[重複] 第33・39号住居跡と重複し、本住居跡は第33号住居跡より新しく、第39号住居跡より新しい。

[平面形・規模] 南壁(30cm)、西壁150cm、北壁(18cm)で、残存部から推定すると方形を呈すると思われる。

[堆積土] 分層できなかった。褐色土を基調にしている。

[壁] 壁高は、南壁7cm、西壁8cm、北壁5cmである。壁の立ち上がりは、緩やかに傾斜している。

[床面] 貼り床はみられず、ほぼ平坦である。

[周溝] 検出されなかった。

[柱穴・ピット] 検出されなかった。

[カマド] 検出されなかった。

[その他の施設] 検出されなかった。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 滋彦)

第46号竪穴住居跡 (第30図)

[位置] L-30グリッドに位置する。

[確認状況] 削平されているため、貼り床だけが確認された。

[重複] 第36号住居跡、第72号溝と重複している。本住居跡は第36号住居跡、第72号溝より古い。

[平面形・規模] 重複及び削平されているため平面形は不明である。確認できた貼り床の範囲は、280cm×130cmである。

[堆積土] 削平されているため残存していない。

[壁] 削平のため残存していない。

[床面] 第Ⅳ層を掘り込み、5～8cmの厚さに、ローム及び暗褐色土の混合土を貼り、床としている。貼り床は、全体にしまりが弱い。

[周溝] 認められない。

[柱穴・ピット] 確認できなかった。

[カマド] 東側にカマドと考えられる焼土を確認した。残存状態は不良で、煙道部及び袖は削平のため残存していない。焼土の範囲は、直径約40cmで、厚さは、中央部が約5cmである。全体に締まりはなく、軟質である。袖は、一部残っているが芯材は使用されていない。

[その他の施設] 検出しなかった。

[出土遺物] 土師器・須恵器片が出土している。

(中嶋 友文)

第47号竪穴住居跡 (第30・31図)

[位置] M・N-28・29グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複のため、残存状態は不良で、ほぼ床面だけが確認された。

[重複] 第30号土壇、第37・45・74号溝と、重複する。本住居跡は第45・74号溝より新しく、第30号土壇、第37号溝より古い。

[平面形・規模] 東壁(492cm)、南壁(484cm)、西壁(468cm)、北壁(480cm)の方形である。面積は(18.8m²)である。主軸方位はN-70°-Wである。

[堆積土] 4層に分層された。黒褐色土を基調としており、ローム・炭化物粒が混入する。自然堆積と考えられる。

[壁] 削平のため、わずかに壁が残存している。壁高は5～10cmである。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。

[床面] 第Ⅳ層を掘り込み、5～10cmの厚さで、2cm程度の礫を含んだローム及び暗褐色土

の混合土を貼り床としている。貼り床は、ほぼ全面に施され、全体にしまりが強い。

[周溝] カマド部分を除いて一周する。周溝の幅は、12～22cmで、深さは6～19cmである。

[柱穴・ピット] 床面及び周溝中から検出した小ピットは、9個で、No. 5～8が柱穴と考えられる。周溝中のNo. 1～4も支柱穴と思われる。

[カマド] 東壁南寄りに構築されている。残存状態は不良で、煙道部より上部は削平のため残存していない。袖部がわずかに残存しているにすぎない。袖は、床面上に粘土を固めて構築しており、芯材は使用していない。全体に締まりはなく、軟質である。

[その他の施設] 検出しなかった。

[出土遺物] 覆土中より土師器・須恵器片が出土している。

(中嶋 友文)

第47号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	35×15	14	円形	6	22×20	7	円形
2	32×22	15	〃	7	30×27	29	〃
3	20×16	16	〃	8	32×21	33	楕円形
4	20×18	17	〃	9	90×77	15	不整形
5	30×25	30	〃				

第48号竪穴住居跡 (第33図)

[位置] M・N-33グリッドに位置する。

[重複] 第49・78・86号住居跡と重複している。本住居跡は、第78・86号住居跡より新しく、第49号住居跡との新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 南壁(180cm)、西壁(176cm)で、残存部から推定すると方形を呈すると思われる。主軸方位はN-10°-Wである。

[堆積土] 確認できなかった。

[壁] 削平されてしまったため不明である。

[床面] カマド周辺を除いた南側にロームをもちいた貼り床がみられる。床面はカマド周辺が一段低く構築されている。

[周溝] 検出されなかった。

[柱穴・ピット] 検出されなかった。

[カマド] 西壁南寄りに構築されている。上部及び袖部が削平された遺存状態の不良な半地下式のカマドである。燐焼部火床面は、両袖中の中央部から東に偏った位置にある。焼土範囲は、長径80cmで全体に締まりなく軟質である。袖は粘土をつき固めて構築しており、芯材は使用されていない。

[その他の施設] 検出されなかった。

[出土遺物] 土師器片が出土している。

(成田 滋彦)

第49号竪穴住居跡 (第32図)

[位置] N・O-33・34グリッドに位置する。

[重複] 第48・78号住居跡と重複しており、本住居跡は第48・78号住居跡より新しい。

[平面形・規模] 南壁(259cm)、西壁(337cm)で、残存部から推定すると方形を呈すると思われる。

[堆積土] 2層に分層できた。堆積土中に焼土・炭化材を含む。

[壁] 削平のため南壁と西壁の一部だけが残存している。壁高は南壁20cm、西壁17cmである。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。

[床面] 貼り床はみられず、ほぼ平坦である。

[周溝] 検出されなかった。

[柱穴・ピット] 検出されなかった。

[カマド] 南壁西寄りに構築された半地下式煙道部をそなえたカマドである。燃焼部火床面は、両袖中央からやや北側に偏った位置にあり、地山を掘りくぼめている。袖は床面上に粘土をつき固めて構築しており、芯材は使用されていない。

[その他の施設] 検出されなかった。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 滋彦)

第51号住居跡 (第34図)

[位置] L・M-17・18グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び耕作のため、周溝及び掘り方の一部だけを確認した。

[重複] 第28・29号住居跡・第18号住居跡と重複している。本住居跡がもっとも古い。

[平面形・規模] 確認できた部分は長軸320cm、短軸240cmで長方形を呈する。

[堆積土] 削平のため、検出できなかった。

[壁] 削平のため存在しない。

[床面] 削平のため存在しない。

[周溝] 4面に不連続であるが確認できた。幅は概ね10~15cmで、深さは5cm程である。

[柱穴・ピット] 12個のピットを検出したが、周辺に小ピットが多く検出されていることも

あり、本住居跡には、No. 1・2・3・4の柱穴が伴う可能性が高い。

[カマド] 残存しない。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 第28・29号住居跡と軸線が同じことから住居跡として調査したが、形状・規模から土壙（竪穴式の倉庫跡）の可能性も考えられる。

（白鳥 文雄）

第52号竪穴住居跡 （第35図）

[位置] H-14グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複のため、床面の一部だけを確認した。

[重複] 第24号住居跡・第23号土壙・第23・51号溝他与重複している。残存部分が少ないことから新旧関係は明瞭に把握できなかったが、本住居跡は第51号溝より新しく、第27号住居跡・第23号土壙より古い。第23号溝との新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 確認できた貼り床範囲は220×140cm程である。

[堆積土] 本住居跡に伴う堆積土と断定できるものは確認できなかった。

[壁] 確認できなかった。

[床面] 暗褐色土とローム主体の混合土を貼り床としており、厚さは5cm程である。全体にかたくしまっている。

[周溝] 確認できなかった。

[柱穴・ピット] 確認できなかった。

[カマド] 残存しない。

[出土遺物] 確認面上で、数片の土師器片が出土したが、本住居跡に伴うかは不明である。

（白鳥 文雄）

第53号竪穴住居跡 （第36図）

[位置] I・J-16・17グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複のため、残存状態は不良であるが、西壁などから確認した。

[重複] 第54・55号住居跡や第70号土壙、第56号溝と重複している。本住居跡は、第70号土壙より古いですが、その他の遺構よりは新しい。

[平面形・規模] 東壁（443cm）、南壁（380cm）、西壁（408cm）、北壁（403cm）で方形を呈する。主軸方位はN-24°-Wである。

[堆積土] 3層に分層できた。暗褐色土を基調としており、炭化物粒が混入する。自然堆積

と考えられる。

[壁] 壁は削平により残存状態は不良で、総ての壁は検出できなかった。壁高は、東壁 7 cm、西壁 7 cm、南壁 7 cm、北壁 4 cmである。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直であるが、柔らかく軟弱である。

[床面] 床面は暗褐色土の混合土を貼り、床としている。貼り床は、ほぼ全面に施され、全体にしまりが弱い。

[周溝] 検出できなかった。

[柱穴・ピット] 床面から検出した小ピットは15個で、床面下から検出したピットは3個で合計18個検出した。ピットNo. 1・5・7は壁の隅に位置しており、主柱穴の可能性も考えられる。

[カマド] 東壁南寄りに構築されていたと思われるが確認できなかった。

[その他の施設] 認められなかった。

[出土遺物] 覆土中より土師器片が出土している。

(成田 悟)

第53号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	14×12	13	楕円形	10	16×15	11	円形
2	26×18	17	楕円形	11	20×14	16	不正楕円形
3	17×15	11	円形	12	22×16	9	楕円形
4	22×14	11	楕円形	13	35×26	22	楕円形
5	24×20	29	円形	14	20×18	24	円形
6	12×10	11	円形	15	22×17	14	楕円形
7	24×21	33	円形	16	35×25	30	楕円形
8	24×23	20	円形	17	32×30	35	円形
9	21×20	16	円形	18	24×23	20	円形

第54号竪穴住居跡 (第37・38図)

[位置] H～J-16・17グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複のため、残存状態は不良であるが、周溝及び柱穴などから確認した。

[重複] 第53・55号住居跡、第70号土壙、第54・56号溝と重複している。第53号住居跡、第70号土壙よりは古いが、その他の遺構よりは新しい。

[平面形・規模] 東壁(675cm)、南壁(660cm)、西壁(648cm)、北壁(618cm)で方形を呈する。主軸方位はN-19°-Wである。本住居跡の面積は(約40.3m²)である。

[堆積土] 4層に分層できた。暗褐色土を基調としており、ローム・炭化物粒が混入する。自然堆積と考えられる。

[壁] 壁は削平のため、南壁と西壁の一部しか検出できなかった。壁高は、南壁 5 cm、西壁 8 cmである。第Ⅲ・Ⅳ層を壁面としており、壁の立ち上がりは、ほぼ垂直で西壁は堅緻であるが、南壁は柔らかく軟弱である。

[床面] 床面は黄褐色土の混合土を貼り、床としている。貼り床は、ほぼ全面に施され、全体にしまりが弱い。

[周溝] 本住居跡の西側と南側の一部から検出できた。規模は幅11～21cmで、深さは13～22cmである。

[柱穴・ピット] 床面から検出した小ピットは36個であり、床面下から検出した小ピットは4個で合計40個検出した。住居跡の床面に位置するNo.27～47は規模や配置などから、支柱穴と考えられ、周溝中や東側住居跡範囲内に位置する、No.1～23は支柱穴をなしていたと考えられる。

[カマド] 本住居跡の東側南寄りから焼土が検出された。位置的にカマド燃焼部火床面と考えられる。上部が削平されているため、煙道部及び煙出孔は確認できなかった。焼土範囲は46×31cmで、厚さは、中央部で約5cmである。

[その他の施設] 本住居跡の南側から3個のピットが検出されたが、本住居跡には伴わないと考えられる。

[出土遺物] 覆土中より土師器片が出土している。

(成田 悟)

第54号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	30×30	30	円形	21	41×34	43	橢円形
2	34×23	40	橢円形	22	27×21	33	橢円形
3	29×23	30	橢円形	23	27×22	42	橢円形
4	23×22	44	円形	24	24×21	46	円形
5	30×20	17	橢円形	25	24×21	49	円形
6	25×20	28	橢円形	26	30×27	48	円形
7	32×20	34	橢円形	27	23×22	23	円形
8	24×20	29	橢円形	28	22×20	14	円形
9	27×25		円形	29	25×22		橢円形
10	29×25		円形	30	39×30		橢円形
11	22×20	33	円形	31	27×24		円形
12	22×20	26	円形	32	40×27		橢円形
13	26×26	30	円形	33	35×29	24	橢円形
14	33×28	26	橢円形	34	18×15	15	橢円形
15	40×30		橢円形	35	21×20	25	円形
16	27×24		橢円形	36	35×33	35	円形
17	22×20	15	円形	37	24×20	15	橢円形
18	40×35	30	円形	38	24×20	20	橢円形
19	25×21		円形	39	23×16	22	不整橢円形
20	20×18	14	円形	40	29×27	16	円形

第55号竪穴住居跡 (第39図)

[位置] I・J-15・16グリッドに位置する。

[確認状況] 削平と重複のため、残存状態は不良であるが、南壁の一部などから確認した。

[重複] 第53・54号住居跡、第51号土壌、第54号溝と重複している。第53・54号住居跡よりは古い、その他の遺構よりは新しい。

[平面形・規模] 東壁(280cm)、南壁(360cm)、西壁(270cm)、北壁(358cm)で方形を呈する。主軸方位はN-27°-Wである。

[堆積土] 4層に分層できた。褐色土を基調としており、ローム・炭化物粒が混入する。自然堆積と考えられる。

[壁] 壁は削平により、東壁と西壁の一部しか検出できなかった。壁高は、東壁5cm、南壁8cm、北壁4cmである。壁の立ち上がりは、緩やかで柔かく軟弱である。

[床面] 床面は暗褐色土の混合土を貼り、床としている。貼り床は、ほぼ全面に施され、全体にしまりが弱い。

[周溝] 検出できなかった。

[柱穴・ピット] 床面から検出した小ピットは7個である。No. 1・6・7は壁の隅に位置しており、支柱穴をなしていた可能性も考えられる。

[カマド] 東壁南寄りに構築されている。上部が削平されていたため、燃烧部火床面だけが検出され、煙道部及び煙出孔は確認できなかった。焼土範囲は85×73cmで、厚さは、中央部で約11cmである。火床面の南側は第54号住居跡の柱穴と重複している。

[その他の施設] 認められなかった。

[出土遺物] 土師器が出土している。

(成田 悟)

第55号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	21×21	19	円形	13	13×12	17	円形
2	39×39	10	方形	14	15×15	6	円形
3	14×8	23	楕円形	15	37×32	7	方形
4	12×7	9	楕円形	16	24×17	29	楕円形
5	20×18	36	円形	17	15×10		楕円形
6	16×15	16	円形	18	33×32	19	楕円形
7	11×10	22	円形	19	23×22	21	円形
8	15×14	21	円形	20	20×15	7	円形
9	26×26	22	円形	21	17×16	8	円形
10	12×12	17	円形	22	20×20	5	円形
11	7×6	6	円形	23	20×14	21	楕円形
12	12×10	9	円形	24	23×22	19	円形

第55号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	54×38	36	不整楕円形	5	27×21	18	楕円形
2	22×20	20	円形	6	36×26	37	楕円形
3	23×20	14	円形	7	48×30	48	楕円形
4	25×24	20	円形				

第57号竪穴住居跡 (第40図)

[位置] H～I-12～14グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複のため、貼り床の範囲を確認しただけである。

[重複] 第26・52・58・121・123号住居跡、第18a～c・19・23号土壙、第20・26号溝と重複しており、貼り床の残存状態から本住居跡が最も古い可能性が高い。

[平面形・規模] 形状は重複のため不明である。残存部分は、東西約580cm・南北500cmで、中央部で南北間約240cm程である。

[堆積土] 本住居跡の堆積土と断定できるものは確認できなかった。

[壁] 確認できなかった。

[床面] ローム主体の混合土で貼り床を構成している。厚さは1～10cm程である。やや軟質である。

[周溝] 確認できなかった。

[柱穴・ピット] 床面上で多数のピットを検出したが、本住居跡に伴うものと断定できるものはない。

[カマド] 残存しない。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第58号竪穴住居跡 (第41図)

[位置] H・I-14・15グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複のため、一部を確認しただけである。

[重複] 第57・121号住居跡、第23号土壙、第23・52・55・57号溝と重複している。本住居跡は、第121号住居跡・第23号土壙・第57・52号溝より古く、第23・55号溝より新しい。第57号住居跡との新旧関係は不明瞭であるが、本住居跡が新しいと考えられる。

[平面形・規模] 削平及び重複のため、平面形は不明である。残存部の規模は東西で約470cm、南北で約300cmである。

[堆積土] 残存する堆積土は、3層に分層できた。黒褐色土を基調としており、ローム粒を

混入する。1層には炭化物を少量含む。3層は貼床と考えられる。

[壁] 南壁及び西壁の一部を確認できただけである。壁高は約10cmである。

[床面] ローム主体の混合土を貼り、床としている。厚さは5cm程である。削平のため部分的に確認できただけである。

[周溝] 確認できなかった。

[柱穴・ピット] 本住居跡に伴う柱穴は確認できなかった。

[カマド] 残存しない。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 本住居跡を切って構築している第57号溝中から苦小牧火山灰が検出したことから、本住居跡はこの火山灰の降下時期より古い時期と考えられる。

(白鳥 文雄)

第61号竪穴住居跡 (第42図)

[位置] M・N-19グリッドに位置する。

[確認状況] 遺構確認作業時に、焼土・炭化物及び土器片の散布する範囲として確認した。当初は、第8号焼土として調査した。大部分が抜根による攪乱と削平を受けており、ごく一部分だけ残存している。

[重複] 第96号溝と部分的に接しているが、新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 確認できた部分は、長軸約300cm、短軸135cmである。平面形は不明である。

[堆積土] 7層に分層できた。黒褐色土を基調としており、ローム粒を混入する。ほとんどがブロック状に堆積している。確認面上で、苦小牧火山灰と推定される火山灰がブロック状に堆積している。

[壁] 残存しない。

[床面] 第6層を掘り方の埋め土として、その上面を床面としている。

[周溝] 残存しない。

[柱穴・ピット] 確認できなかった。

[カマド] 残存しない。

[出土遺物] 土師器甕、坏の破片が出土している。

[その他] 残存状態が非常に悪いため、住居跡としては不明瞭である。調査担当者が、焼土部分の精査中に、住居跡の床面の一部と推定したことから、住居跡として取り扱った。

(白鳥 文雄)

第62号竪穴住居跡 (第43図)

[位置] K・L-27グリッドに位置する。

[確認状況] 地山まで粗掘したところ、床面の一部と周溝を確認した。

[重複] 第2、3、11号掘立柱建物跡と重複しており、本住居跡が古い。

[平面形・規模] 基本的に東壁400cm、南壁350cm、西壁390cm、北壁360cmの方形である。南側に張り出し部をもつ。面積は13.3m²である。主軸の方位はN-70°-Wである。

[増築] 張り出し部と方形のプランの境に、周溝らしきものを確認した。張り出し部は増築によって造られたものと思われる。

[堆積土] 掘り方を含め5層に分層できた。黒褐色土を基調としており、炭化粒を含む。自然堆積の様相を呈する。

[壁] ほとんど確認できなかった。壁高は南壁で15cmである。壁の立ち上がりは緩やかである。

[床面] ほぼ平坦である。貼り床は、ほぼ全面に施されている。堅緻な造りである。

[周溝] カマド部分を除いて、一周する。幅は10cm～25cmである。深さは概ね10cm～20cmである。

[柱穴・ピット] 周溝の四隅のピットが支柱穴と思われる。

[カマド] 東壁南寄りに構築されている。残存状態はこの遺跡としては、良好であるが、煙道部より上部は削平のため残存していない。燃烧部火床面は、明確で、焼土範囲は、直径90cmで深さは4cm程である。全体的に極めて堅緻である。袖は床面に粘土をつき固めて構築しており芯材は使用していない。煙道下部は、地山を掘り残して構築している。煙出し孔は、検出できなかった。中央部に支脚の機能を有すると思われる焼けた粘土の盛り上がりを確認された。

[その他の施設] 南側に南壁185cm、西壁80cm、東壁95cmの長方形の張り出し部をもつ。床面は堅緻な作りである。

[出土遺物] 床面上より須恵器が出土している。

(三浦 孝仁)

第63号竪穴住居跡 (第44図)

[位置] L・25・26グリッドに位置する。

[確認状況] 地山まで粗掘したところ、床面の一部と周溝を確認した。

[重複] 第6号掘立柱建物跡と重複しており、本住居跡が古い。

[平面形・規模] 東壁(295cm)、南壁(365cm)、西壁(310cm)、北壁(330cm)の方形である。主軸の方位はN-23°-Eである。

[堆積土] 掘り方を2層に分層した。

[壁] 残存しない。

[床面] ほぼ平坦である。貼床は、住居の中央部に施されている。堅緻な造りである。

[周溝] 北側に一部確認した。幅は10～18cmである。深さは概ね15cm程である。

[柱穴・ピット] 住居の四隅のピットが主柱穴と思われる。

[カマド] 南壁西寄りに構築されている。残存状態は、この遺跡のものとしては、良好であるが、煙道部より上部は削平のため残存していない。燃焼部火床面は、明確ではなく、焼土粒の範囲を確認したのみである。袖は、床面に粘土をつき固めて構築しており芯材は使用されていない。煙道下部は、地山を掘り残して構築している。煙出し孔は、検出できなかった。土師器がまとまって出土した。

[その他の施設] 本住居跡の外側に弧状の溝（第59号溝）が、検出されており、本住居跡に伴う外周溝と考えられる。溝は幅50～70cm、深さ30～50cmである。この溝は第64号住居跡より新しく、第63号土壙より古い。溝の壁は、上方にやや開いて構築されており、底面は若干の起伏が認められる。

[出土遺物] 床面上より土師器及び須恵器が出土している。

(三浦 孝仁)

第64号竪穴住居跡 (第45図)

[位置] M・N-25・26グリッドに位置する。

[確認状況] 地山まで粗掘したところ、カマドの上部と床面の一部を確認した。

[重複] 第65号竪穴住居跡、第7号掘立柱建物跡、第80号、59号溝と重複しており、本住居跡が古い。

[平面形・規模] 残存部から推定すると東壁（500cm）、南壁（370cm）、西壁（500cm）、北壁（360cm）の長方形である。主軸の方位はN-76°-Wである。

[堆積土] 掘り方を確認したのみである。褐色土を基調としている。

[壁] ほとんど残存していない。

[床面] ほぼ平坦である。貼り床は、住居の中央部に施されている。堅緻な造りである。

[周溝] 認められない。

[柱穴・ピット] 床面から検出したピットは、15～20個である。重複のため主柱穴は明確ではないが、P₁～P₄が考えられる。

[カマド] 東壁南寄りに構築されている。残存状態は、この遺跡のものとしては、良好であるが、煙道部より上部は削平のため残存していない。燃焼部火床面は、明確で堅緻である。袖

は床面に粘土をつき固めて構築しており芯材は使用されていない。煙道下部は、地山を掘り残して構築している。煙出し孔は、検出できなかった。中央に支脚の機能を有すると思われる焼けた粘土の盛り上がり確認された。

[出土遺物] 覆土及び床面から土師器及び須恵器が出土している。

(三浦 孝仁)

第65号竪穴住居跡 (第45・46図)

[位置] N-25・26グリッドに位置する。

[確認状況] 第64号竪穴住居跡を精査中にカマドの上面と方形の落ち込みを確認した。

[重複] 本住居跡は、第64号竪穴住居跡より新しく、第80号溝より古い。

[平面形・規模] 東壁(355cm)、南壁355cm、西壁370cm、北壁340cmの方形である。面積は(10.9m²)である。主軸の方位はN-78°-Wである。

[堆積土] 5層に分層できた。黒褐色土を基調としている。炭化粒、焼土粒を含む。自然堆積の様相を呈する。

[壁] 壁は緩やかに立ち上がる。壁高は、各壁とも10cm程である。

[床面] ほほ平坦である。貼り床は、住居のほほ全面に施されている。堅緻な造りである。

[周溝] 北壁と西壁の一部で確認した。幅10~15cmである。深さは5cm程である。

[柱穴・ピット] 住居の四隅にある。No11~14が主柱穴の可能性が高い。

[カマド] 東壁南寄りに構築されている。遺存状態は、この遺跡のものとしては、良好であるが、煙道部より上部は削平のため残存していない。燃烧部火床面は、明確で堅緻である。袖は床面に粘土をつき固めて構築しており芯材は使用されていない。煙道下部は、地山を掘り残して構築している。煙出し孔は、検出できなかった。

[その他の施設] 掘り方を精査中、南壁に壁のような段差を確認した。床面等は確認できなかったが、この住居は改築された可能性がある。

[出土遺物] 覆土及び床面より土師器及び須恵器が出土している。

(三浦 孝仁)

第66号竪穴住居跡 (第47図)

[位置] F-12・13グリッドに位置する。

[確認状況] 第26・28号溝の調査中に堆積土にある焼土として確認した。調査の失敗により住居跡本体は確認できなかった。また、後世の柱穴が焼土の一部を切っている。

[重複] 第26・28号溝と重複しており、本住居跡が新しい。

[平面形・規模] 平面形・規模は不明である。カマド火床面の標高よりも、第26号溝の西側部分が約30cm程高いことから、本住居跡は溝の内部におさまる規模と推定され、一辺約200cm程であったと考えられる。

[堆積土] カマド内部の焼土を確認できただけである。

[壁] 確認できなかった。

[床面] 確認できなかった。

[周溝] 確認できなかった。

[柱穴・ピット] 確認できなかった。

[カマド] 東壁に構築されており、カマド本体は粘土を主体として構築している。火床部は45×35cmでやや堅くしまっている。煙道部は天井部を欠失していたが緩やかな斜面を構成している。煙出し部は削平により不明である。

[出土遺物] 火床部及び煙道部下位から、土師器甕の破片が10数片出土している。

[その他] 住居跡と伴うカマドとして確認したが、遺構の推定される規模等の状況から、単独の存在または施設の可能性も考えられる。

(白鳥 文雄)

第67号竪穴住居跡 (第48図)

[位置] H・I-8・9グリッドに位置する。

[重複] 第21・24・100号住居跡、第86号土壇、第143号溝等と重複している。本住居跡は2軒の住居跡より古く、溝よりも新しい。86号土壇との新旧関係は不明である。また、第127号住居跡と一部接している。

[平面形・規模] 平面形はほぼ方形を呈している。南壁が残存しているが、他の壁は部分的に確認できただけである。東壁(310cm)、南壁(470cm)、西壁(440cm)、北壁(300cm)である。

[堆積土] 6層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒を混入する。また、全体に焼土粒及び炭火物を含んでおり、第4層中には焼土及び炭火物が多量に混入している。

[壁] 第IV層を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がる。

[床面] 地山上に若干のロームを貼っているが、明瞭な貼り床は確認できなかった。全体に軟質である。

[周溝] 南壁下及び東壁と西壁の下部で一部を確認した。幅は15cm～25cmで、概ね20cm程である。深さは10cm～20cmである。カマドと思われる焼土下にも存在する。

[柱穴・ピット] 本住居跡内で14個のピット及び柱穴を確認したが、本住居跡に伴うと考えられるものは5個のピットで、他は後世のものと考えられる。ピット1・4が主柱穴と考えら

れる。ピット6は本住居跡に伴うかどうかは不明であるが、緩やかなスロープを呈している。

[カマド] 内部施設は確認できなかったが、東壁の南寄りに周溝上から外部へ延びる焼土が確認された。カマド煙道部の一部と考えられるが断定はできない。焼土の厚さは3～5cm程である。

[出土遺物] 土師器・須恵器・鉄製斧・鉄滓などが出土した。

[その他] 床面下から弧状の溝が2条平行して確認されたが、本住居跡に伴うかどうかは不明である。床面下からの深さは2～5cm程である。

(白鳥 文雄)

第68号竪穴住居跡 (第49図)

[位置] G・H-10・11グリッドに位置する。

[確認状況] 暗褐色土の広がりとして確認したが、重複及び削平のため、西壁の一部を確認しただけである。

[重複] 第22・23号住居跡と重複している。第23号住居跡より古いが、第22号住居跡との新旧関係は不明である。また、第1号掘立柱建物跡の一部により攪乱を受けている。

[平面形・規模] 西壁の残存部分は、約6mと推定される。平面形は不明である。

[堆積土] 確認時に暗褐色土を部分的に確認できただけである。

[壁] 西壁の一部を確認した。壁高は5cm程である。

[床面] 西壁の下で、部分的に確認できたが、貼り床等は不明である。

[周溝] 確認できなかった。

[柱穴・ピット] 確認できなかった。

[カマド] 残存しない。

[出土遺物] 確認面上で、土師器の破片が出土したが、本住居跡に伴うかどうかは不明である。

(白鳥 文雄)

第69号竪穴住居跡 (第50図)

[位置] F・G-9・10グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複のため、床面の一部だけを確認した。

[重複] 第20・68号竪穴住居跡と重複しており、本住居跡は第20号住居跡より古い。第68号住居跡との新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 削平及び重複のため平面形は不明である。貼り床及び周囲より固く締まっ

ている部分は約360×320cmである。

[堆積土] 削平のため確認できなかった。

[壁] 確認できなかった。

[床面] 地山上に暗褐色土とロームの混合土が若干確認できたが、貼り床の範囲としては、不明瞭であった。

[周溝] 確認できなかった。

[柱穴・ピット] 2個の柱穴を確認したが、本住居跡に伴うものかは不明である。

[カマド] 残存しない。

[出土遺物] 確認面上で土師器片が数片出土した。

(白鳥 文雄)

第70号竪穴住居跡 (第51図)

[位置] J・K-10・11グリッドに位置する。

[確認状況] 削平のため北壁が確認できなかった。

[重複] 第17号溝と重複しており、本住居跡が新しい。

[平面形・規模] 南壁が残存するが、他の三方の壁は全体を確認できなかった。南壁290cmで西壁の残存長(210cm)、東壁(220cm)である。方形を呈していたものと考えられる。

[堆積土] 5層に分層できた。褐色土を基調としており、ローム粒の混入が認められる。

[壁] 削平のため残存状態は不良である。Ⅳ層を壁面としており、ほぼ垂直に立ち上がる。壁高は、10～15cmである。

[床面] 壁寄りには第Ⅳ層を床としているが、住居跡の西側部分は、軟質の堆積土が存在し、床面は不明瞭である。

[周溝] 南壁下及び東西壁下で部分的に確認できた。カマド下部には存在しない。周溝の幅は10～15cmで、深さは5～10cmと浅い。

[柱穴・ピット] 南東・南西隅の周溝中から各1個ずつ検出した。主柱穴と考えられる。

[カマド] 東壁南寄りに構築されている。袖の上部及び煙道部・煙出し孔は削平のため残存していない。燃烧部は地山を若干掘り窪めて構築している。中央部にはスサ入りの粘土を薄く貼った痕跡が認められた。焼土は、両袖間の全体に広がっており、中央部の厚さは6cmである。袖は床面上に粘土をつき固めて構築しており、芯材は使用していない。南側の袖は外側に開いている。

[出土遺物] 土師器が出土している。

(白鳥 文雄)

第71号竪穴住居跡 (第52図)

[位置] M-22グリッドに位置する。

[確認状況] 削平のため、カマドと貼床の一部を確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 不明。

[堆積土] 残存しない。

[壁] 残存しない。

[床面] 貼床の一部が、15cm×15cmの範囲で残存していた。

[周溝] 残存しない。

[柱穴・ピット] 残存しない。

[カマド] 火焼面と袖部の一部が残存していた。規模は、東西70cm×南北80cmで、火焼面の範囲は35cm×50cmである。煙道部は残存しない。

[出土遺物] 土師器及び須恵器が出土している。

(岡田 康博)

第72号竪穴住居跡 (第52図)

[位置] M-22グリッドに位置する。

[確認状況] 削平のため、カマドの一部を確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 不明。

[堆積土] 残存しない。

[壁] 残存しない。

[床面] 残存しない。

[周溝] 残存しない。

[柱穴・ピット] 残存しない。

[カマド] 北側の袖部と南側の袖部の一部のみが残存していた。規模は、60cm×80cmで、火焼面の残存範囲は10cm×10cmである。煙道部は残存しない。

[出土遺物] 出土しなかった。

(岡田 康博)

第73号竪穴住居跡 (第52図)

[位置] M-21グリッドに位置する。

[確認状況] 削平のため、カマドのみを確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 不明。

[堆積土] 残存しない。

[壁] 残存しない。

[床面] 残存しない。

[周溝] 残存しない。

[柱穴・ピット] 残存しない。

[カマド] 北側の袖部は一部しか残存しない。規模は90cm×120cmで、火焼面の範囲は40cm×40cmである。煙道部は半地下式である。

[出土遺物] 土師器及び須恵器が出土した。

(岡田 康博)

第74号竪穴住居跡 (第52図)

[位置] M-21グリッドに位置する。

[確認状況] 削平のため、カマドの火焼面のみを確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 不明。

[堆積土] 残存しない。

[壁] 残存しない。

[床面] 残存しない。

[周溝] 残存しない。

[柱穴・ピット] 残存しない。

[カマド] 火焼面のみ残存し、規模は40cm×40cmである。

[出土遺物] 出土しなかった。

(岡田 康博)

第76号竪穴住居跡 (第53図)

[位置] O-36グリッドに位置する。

[重複] 第50・61号溝と重複しており、本住居跡は第50号溝より古く、第61号溝より新しい。また、北側部分は昭和57年度の調査終了地区である。

[平面形・規模] 南壁(138cm)や西壁(204cm)で、残存部から推定すると方形を呈すると

思われる。

[壁] 南・西壁だけが残存している。壁高は南壁25cm、西壁24cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

[床面] 貼り床はみられず、ほぼ平坦である。

[周溝] 検出されなかった。

[柱穴・ピット] 検出したピットは2個で、支柱穴かどうか判断できなかった。

[カマド] 南壁寄りに構築されている。東側を第50号溝に上部を削平されており、残存状態は不良である。袖はロームをつき固めて構築しており、芯材は使用されていない。煙道部は不明である。

[その他の施設] 住居跡の北側で、長軸(44cm)・短軸(42cm)、深さ9cmの浅い不整形のピットを検出した。用途に関しては不明である。

[出土遺物] 土師器片が出土している。

(成田 滋彦)

第76号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	16×11	13	楕円形	2	18×17	11	楕円形

第78号竪穴住居跡 (第54・55図)

[位置] N・O-33・35グリッドに位置し、増改築されている住居跡である。増改築前を第78号住居跡(古)とし、増改築したものを第78号住居跡(新)として記載する。

[重複] 第48・49・76・86・88号住居跡と重複している。本住居跡は第79・86・88号住居跡より新しく、第48・49号住居跡より古い。

[平面形・規模] 第78号住居跡(古)は、東壁582cm、南壁647cm、西壁632cmで、第78号住居跡(新)は、東壁(554cm)、南壁(654cm)、西壁(587cm)であり、古・新ともに方形を呈すると思われる。主軸方位は、N-85°-Eである。

[堆積土] 4層に分層できた。自然堆積と思われる。

[壁] 第78号住居跡(古)の壁が、東壁14cm、南壁70cm、西壁90cmで、第78号住居跡(新)は、東壁7cm、南壁6cm、西壁5cmである。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。

[床面] 第78号住居跡(古)の床面は、貼り床面がみられず、ほぼ平坦である。第78号住居跡(新)の床面は、住居跡のほぼ全面に貼り床がみられる。

[周溝] 第78号住居跡(古)では、幅25cm・深さ40cmで一周する。第78号住居跡(新)からは、検出されなかった。

[柱穴・ピット] 第78号住居跡（古）から床面及び周溝中から検出した小ピットは11個で、No. 2・6・11が主柱穴と考えられる。第78号住居跡（新）からは検出されなかった。

[カマド] 第78号住居跡（古・新）ともに東壁南寄りに構築され、半地下式煙道部をもつカマドである。第78号住居跡（古）のカマドの上部に新しく作りかえている。燃焼部火床面は、両袖中央から西側に偏った位置にある。袖は、粘土をつき固めて構築されており、芯材は使用されていない。

[その他の施設] 本住居跡の外側にC字形の溝（第50号溝）が、検出されており、本住居跡に伴う外周溝と考えられる。溝は幅60cm・深さ25cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、底面は起伏が認められ、ほぼ平坦である。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

(成田 滋彦)

第78号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	35×31	19	円形	7	38×37	37	楕円形
2	68×66	45	円形	8	20×15	11	楕円形
3	22×15	13	楕円形	9	22×20	39	円須
4	24×23	15	円形	10	64×44	23	楕円形
5	37×28	14	楕円形	11	72×(70)	52	円形
6	83×67	42	楕円形				

第79号竪穴住居跡 (第56図)

[位置] N・O-34・35グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複のため、残存状態は不良で、床面と周溝だけから確認された。

[重複] 第78・88号住居跡と重複している。本住居跡は第88号住居跡より新しく、第78号住居跡より古い。

[平面形・規模] 東壁（382cm）、南壁（440cm）、西壁（431cm）北壁（444cm）の方形を呈する。

[壁] 検出されなかった。

[床面] ローム及び暗褐色土の混合土を貼り、床としている。

[周溝] 幅20cm、深さ18cmでほぼ一周する。

[柱穴・ピット] 床面及び周溝中から検出した小ピットは5個である。

[カマド] 東壁南寄りに焼土の分布があり、カマドの燃焼部と考えられる。

[その他の施設] 検出されなかった。

[出土遺物] 土師器片が出土している。

第79号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	26×20		楕円形	4	18×16		円形
2	41×39		方形	5	14×13		円形
3	42×35		方形				

第80号竪穴住居跡 (第26図)

[位置] J・K-31グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複のため、残存状態は不良で、南東の隅だけが確認された。

[重複] 第38号住居跡と重複している。本住居跡が、第38号住居跡より古い。

[平面形・規模] 平面形は不明である。面積及び主軸方位も推定できない。

[堆積土] 2層に分層できた。暗褐色土を基調としており、ローム・炭化物粒が混入する。

[壁] 重複のため、西壁と南壁の一部だけが残存している。壁高は、西壁で20～30cmである。

第IV層を壁面としており、壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。

[床面] ローム及び暗褐色土の混合土を貼り、床としている。全体にしまりが強い。

[周溝] 検出されなかった。

[柱穴・ピット] 床面から検出した小ピットは、6個でNo. 1が柱穴と考えられる。

[カマド] 検出されなかった。

[その他の施設] 認められない。

[出土遺物] 土師器片が出土している。

(中嶋 友文)

第80号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	34.0×26.0	23.0	楕円形	4	28.0×23.0	16.0	不整形
2	28.0×26.0	12.0	円形	5	29.0×20.0	13.0	楕円形
3	22.0×20.0	18.0	ク	6	20.0×18.0	5.0	円形

第82号竪穴住居跡 (第57図)

[位置] M-23・24グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複のため、床面と焼土粒の範囲から確認した。

[重複] 第80・94号土壌より古い。第84・92～94号竪穴住居跡、第60号溝より新しい。

[平面形・規模] 確認できた貼り床の範囲は、300×270cmである。

[堆積土] 確認できなかった。

[壁] 確認できなかった。

[床面] ローム主体の混合土を貼り床としている。

[周溝] 確認できなかった。

[柱穴・ピット] 確認できなかった。

[カマド] 貼床範囲の北側東寄りに焼土粒が密集した部分を確認した。カマドが存在した可能性が高い。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

(三浦 孝仁)

第83号竪穴住居跡 (第58図)

[位置] M-24グリッドに位置する。

[確認状況] 第1号溝を精査中に、周溝と掘り方の一部を確認した。

[重複] 第1号溝と重複しており、本住居跡が古い。

[平面形・規模] 確認できた西壁は380cmである。方形のプランであろう。

[堆積土] 確認できなかった。

[壁] 確認した掘り方の西壁は緩やかに立ち上がる。

[床面] 確認できない。

[周溝] 北壁と南壁で確認した。幅10～15cmである。

[柱穴・ピット] 6個のピットを確認した。P₁・P₂が主柱穴の一部であろう。

[カマド] 残存しない。

[出土遺物] 出土しなかった。

(三浦 孝仁)

第84号竪穴住居跡 (第59図)

[位置] N・M-23・24グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複のため、床面と焼土粒の範囲から確認した。

[重複] 第85・92～94号竪穴住居跡、第60号溝より新しい。第1号溝、第80、94号土壇、第82号竪穴住居跡より古い。

[平面形・規模] 確認できた貼り床の範囲は、465×270cmである。

[堆積土] 確認できなかった。

[壁] 確認できなかった。

[床面] ローム主体の混合土を貼り床としている。

[周溝] 確認できなかった。

[柱穴・ピット] 確認できなかった。

[カマド] 貼床範囲の東側南寄りに焼土粒が密集した部分を確認した。カマドの可能性が高い。

[出土遺物] 土師器・須恵器片が出土した。

(三浦 孝仁)

第85号竪穴住居跡 (第60図)

[位置] M・N-23・24グリッドに位置する。

[確認状況] 第94号竪穴住居跡を精査中に貼り床と周溝を確認した。

[重複] 第91号溝より新しく、第84・94号竪穴住居跡、第94号土壇、第1号溝より古い。

[平面形・規模] 削平及び重複のため明確でないが、方形と思われる。規模は東壁で(400cm)である。

[堆積土] 暗褐色土を基調としており、炭化物粒を含む。

[壁] 削平及び重複のため、ほとんど確認できない。

[床面] ローム及び暗褐色土の混合土を貼り床としている。貼り床はほぼ全面に施され、堅緻な造りである。

[周溝] 北壁と東壁で確認した。幅は15～20cmである。深さは10～20cmである。また南側に長さ160cmの周溝を一条確認した。

[柱穴・ピット] 床面および周溝内から、19個のピットを確認した。重複により、本住居跡の主柱穴の配置は不明である。

[カマド] 確認できなかった。

[出土遺物] 土師器片が出土した。

(三浦 孝仁)

第86号竪穴住居跡 (第61図)

[位置] M・N-33グリッドに位置する。

[確認状況] 第48号住居跡を精査中に確認した。

[重複] 第48・78号住居跡・第31号溝と重複しており、本住居跡は、重複している全ての遺構より古い。

[平面形・規模] 南壁(234cm)、北壁(206cm)で、残存部から推定すると方形を呈すると思われる。主軸方位はN-5°-Eである。

[堆積土] 2層に分層できた。褐色土を基調としており、ローム粒が混入している。人為堆積と思われる。

[壁] 重複のため南壁と北壁の一部だけが残存している。壁高は南壁で50cm、北壁29cmである。壁は、緩やかに立ち上がる。

[床面] 貼り床はみられず、ほぼ平坦である。

[周溝] 検出されなかった。

[柱穴・ピット] 検出されなかった。

[カマド] 北壁に構築されている。燃烧部火床面は、袖から南側の位置にある。袖は、粘土をつき固めて構築しており、芯材は使用されていない。煙道は、幅22cmで地山を掘り残して構築している。

[その他の施設] 検出されなかった。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 滋彦)

第87号竪穴住居跡 (第62図)

[位置] K・L-29・30グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複のため、残存状態は不良で、床面と周溝だけが確認された。

[重複] 第37号住居跡、第35号溝と重複している。本住居跡が第37号住居跡、第35号溝より古い。

[平面形・規模] 南壁(360cm)と東壁・西壁の一部が確認できたが、平面形は、不明である。面積及び主軸方位は推定できない。

[堆積土] 削平されているため残存していない。

[壁] 削平及び重複のため、西壁と南壁の一部だけが残存している。壁高は西壁で、15~20cmである。第IV層を壁面としており、壁の立ちあがりは、ほぼ垂直である。

[床面] ローム及び暗褐色土の混合土を貼り、床とし、全体にしまりが弱い。

[周溝] ほぼ一周すると思われる。残存する周溝の幅は、14~25cm、深さは8~19cmである。

[柱穴・ピット] 床面及び周溝中から検出した小ピットは、17個で、No. 4・7・10・17は柱穴と考えられる。周溝中のNo. 1・2も支柱穴と思われる。

[カマド] 検出されなかった。

[その他の施設] 認められなかった。

[出土遺物] 土師器片が出土している。

(中嶋 友文)

第87号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	45×35	25	楕円形	10	25×23	9	円形
2	35×18	10	〃	11	40×40	16	〃
3	40×35	30	円形	12	50×43	27	不整形
4	61×52	34	〃	13	30×28	29	円形
5	38×37	11	〃	14	22×20	11	〃
6	48×47	15	〃	15	25×24	15	〃
7	70×52	33	楕円形	16	20×19	7	〃
8	55×25	30	不整形	17	39×28	31	楕円形
9	25×25	18	円形				

第88号竪穴住居跡 (第63図)

[位置] M・N-34・35グリッドに位置する。

[重複] 第78・79号住居跡と重複している。本住居跡は、これらの住居跡より古い。また、北側部分に増築がみられる。

[平面形・規模] 増築前は、東壁(472cm)、南壁(500cm)、北壁(516cm)で、増築後は東壁(552cm)、南壁(470cm)、西壁(573cm)、北壁(516cm)である。

[堆積土] 3層に分層できた。

[壁] 削平及び重複のため、確認できなかった。

[床面] 貼り床はみられず、ほぼ平坦である。

[周構] 増築前の周溝は、幅21cm、深さ20cmで一周する。増築後の周溝は幅25cm、深さ20cmである。

[柱穴・ピット] 床面及び周溝中から4個のピットを検出した。主柱穴かどうか判断できなかった。

[カマド] 検出されなかった。

[出土遺物] 土師器・須恵器片が出土している。

(成田滋彦)

第88号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	23×22	24	円形	3	27×14	9	楕円形
2	26×17	27	方形	4	19×18	15	円形

第89号竪穴住居跡 (第64図)

[位置] J・K-19・20グリッドに位置する。

[確認状況] 削平のため、残存状態は不良である。主に西側のみ残存している。

[重複] 第90号竪穴住居跡と重複し、本住居跡が新しい。

[平面形・規模] 東壁 (295cm)、南壁 (295cm)、西壁 (310cm)、北壁 (300cm) の方形を呈する。面積は (約8.4m²) であり、主軸方位はN-75°-Wである。

[堆積土] 主に西側部分で検出した。6層に分層できた。暗褐色土を基調としており、ロームを多量に混入する。全体に炭化物を混入し、しまりは少ない。6層は不明瞭であるが、掘り方の埋め土と考えられ、この上面を床としている。6層は第90号住居跡の埋め土の可能性も考えられる。

[壁] 削平のため、ほぼ住居跡の西側半分のみで確認した。第IV層及び第90号住居跡の覆土を壁としており、垂直に立ち上がる。

[床面] 第IV層を掘り込んでおり、10~20cmの厚さで掘り方を埋め戻し、この上面を床面としている。第5層は貼り床の埋め土と考えられる。貼り床面は西側に残存する。

[周溝] 南・西壁下の全面及び北壁の西側に残存する。幅は5~15cm程で、深さは概ね15cmである。

[柱穴・ピット] 本住居跡範囲内には9個のピットを確認したが、柱穴と断定できるものはない。ピット7は貼り床下からの検出である。

[カマド] 削平のため、内部の施設が痕跡程度に残存するだけである。東壁の南の隅に構築されている。両袖及び火床部が、それぞれ厚さ5cm程度確認された。袖は黄褐色のロームを固めて構築している。焼土は30×20cmで、その前庭部にも焼土混じりの褐色土が確認されている。

[その他の施設] 床面の下から大型のピット (ピット17) が検出された。堆積土の第6層が本住居跡の埋め土と考えると、17は本住居跡の付属施設の可能性がある。また第90号住居跡の埋め土とすれば、該住居跡の付属施設、または両住居跡の存在時の中間に構築された土壌の可能性も考えられる。

[出土遺物] 少量の土師器・須恵器片が出土している。

(白鳥 文雄)

第90号竪穴住居跡 (第64図)

[位置] J・K-19・20グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複のため、床面の一部及び周溝を確認しただけである。

[重複] 第89号竪穴住居跡と重複し、本住居跡が古い。

[平面形・規模] 平面形は方形を呈する。東壁 (410cm)、南壁 (420cm)、西壁 (415cm)、北壁 (405cm) である。面積は (15.5m²) で、主軸方位は概ねN-55°-Wである。

[堆積土] 5層に分層できた。第1・2・5層が堆積土と考えられる。3・4層は掘り方の埋め土と考えられる。堆積土は暗褐色土を基調としており、ローム粒が混入している。第89号

住居跡の第6層も本住居跡の埋め土の可能性がある。

[壁] 第IV層を壁としているが、南・西壁の一部で確認できただけである。立ち上がりはほぼ垂直である。

[床面] 第IV層を掘り込み、西壁では約20cm埋め土をしており、第3層を床面としている。ローム粒を多く混入した貼り床の一部が南西隅にごく一部残存している。

[周溝] ほぼ全周する。北壁の中央で一部検出できなかった。また、東壁の南寄りに一部掘り込まれていない部分が認められる。

[柱穴・ピット] 本住居跡内で9個のピットを確認した。このうち2・3・6～8の5個が柱穴の可能性が考えられる。

[カマド] 削平のため、検出できなかった。東壁南寄りに周溝を掘り込んでいない部分が認められることから、この部分にカマドが構築されていたものと考えられる。

[出土遺物] 土師器片が数片出土した。

(白鳥 文雄)

第92号竪穴住居跡 (第65図)

[位置] L・M-23・24グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複のため、掘り方の一部だけを確認した。

[重複] 第82・85・93・94号竪穴住居跡、第1・60号溝、第80・94号土壇より古い。

[平面形・規模] 削平及び重複のため、判断できない。

[堆積土] 確認できなかった。

[壁] 確認できなかった。

[床面] 確認できなかった。

[周溝] 確認できなかった。

[柱穴・ピット] 6個のピットを確認したが、本住居跡に伴うか不明である。

[カマド] 確認できなかった。

[出土遺物] 出土しなかった。

(三浦 孝仁)

第93号竪穴住居跡 (第65図)

[位置] L・M-23グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複のため、掘り方の一部と周溝だけを確認した。

[重複] 第82・85・94号竪穴住居跡、第60号溝より古い。第92号竪穴住居跡より新しい。

[平面形・規模] 削平及び重複のため、明確ではないが、残存部から判断すると方形であろう。

[堆積土] 確認できなかった。

[壁] 確認できなかった。

[床面] 確認できなかった。

[周溝] 北壁と南壁の一部に確認した。幅10～15cmである。

[柱穴・ピット] 確認できなかった。

[カマド] 確認できなかった。

[出土遺物] 出土しなかった。

(三浦 孝仁)

第94号竪穴住居跡 (第66図)

[位置] M・N-23・24グリッドに位置する。

[確認状況] 第84号竪穴住居跡を精査中に貼り床と周溝の一部を確認した。

[重複] 第85号竪穴住居跡、第91号溝より新しく、第84号竪穴住居跡、第94号土壇、第1号溝より古い。

[平面形・規模] 削平及び重複のため明確でないが、方形と思われる。規模は南壁で(320cm)である。

[堆積土] 暗褐色土を基調としており、炭化物粒・焼土粒を含む。

[壁] 削平及び重複のため、ほとんど確認できない。

[床面] ローム及び暗褐色土の混合土を貼り床としている。貼り床は数箇所を確認した。

[周溝] 南壁と東壁で確認した。幅15～30cmである。深さ5～15cmである。

[柱穴・ピット] 周溝内から、4個のピットを確認した。

[カマド] 確認できなかった。

[出土遺物] 出土しなかった。

(三浦 孝仁)

第95号竪穴住居跡 (第67図)

[位置] K・L-22・23に位置する。

[確認状況] 重複のため周溝のみを確認した。

[重複] 第2・79・84号溝跡と重複し、本住居跡が最も古い。

[平面形・規模] 平面形はほぼ方形である。東壁(330cm)、南壁(280cm)、西壁(250cm)、

北壁（320cm）である。

[堆積土] 残存しない。

[壁] 残存しない。

[床面] 残存しない。

[周溝] 南西隅と東壁の一部が重複のため残存しない。幅は10～25cm、深さは5～15cmである。

[柱穴・ピット] 残存しない。

[カマド] 残存しない。

[出土遺物] 出土しなかった。

（岡田 康博）

第97号竪穴住居跡 （第68図）

[位置] L・M-20に位置する。

[確認状況] 削平のため東側が失われているが、その他は良好な状態で検出された。

[重複] なし

[平面形・規模] 西壁（398cm）、南壁の残存部（225cm）、北壁の残存部（150cm）で、平面形は方形を呈すると思われる。

[堆積土] 1層。火山灰の混入はみられない。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

[壁] 壁高は西壁で6cm、南壁6～0cm、北壁は残存していない。

[床面] 厚さ2～14cmで貼り床が施されている。

[周溝] なし。

[柱穴・ピット] 床面から検出したピットは6個であるが、柱穴と判定できるものはない。

[カマド] 残存していない。

[その他の施設] なし。

[出土遺物] 土師器片が出土している。

（羽柴 直人）

第98号竪穴住居跡 （第69図）

[位置] N-24グリッドに位置する。

[確認状況] 第1号溝を精査中に、壁と掘り方の一部を確認した。

[重複] 第1号溝と重複しており、本住居跡が古い。

[平面形・規模] 確認できた西壁は280cmである。

[堆積土] 確認できなかった。

[壁] 確認した西壁は緩やかに立ち上がる。壁高は、10～12cm程である。

[床面] 確認できなかった。

[周溝] 全体は認められない。

[柱穴・ピット] 一部検出した床面上で5個のピットを確認した。

[カマド] 残存しない。

[出土遺物] 出土しなかった。

(三浦 孝仁)

第99号竪穴住居跡 (第70図)

[位置] I・J-11・12グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複のため、東側の一部を確認しただけである。

[重複] 第26・28号溝と重複しており、本住居跡が古い。

[平面形・規模] 重複のため全体形は不明である。残存部は、東壁(420cm)、北壁(140cm)、南壁(140cm)である。

[堆積土] 5層に分層できた。第1層は表土、第2層も耕作土の可能性が高い。第3層は後世の柱穴である。本住居跡に確実に伴うものは第4・5層で、ローム主体の層である。炭化物の混入が認められる。

[壁] 東壁と南及び北壁の一部を確認した。第Ⅲ・Ⅳ層を壁としており、垂直に立ち上がる。

[床面] ローム主体の混合土を貼り床としている。厚さは5～10cmである。焼土付近は堅くしまっている。

[周溝] 確認できた壁の下部で、一部を除いて確認できた。幅は10～20cm程で、深さは4～23cmである。

[柱穴・ピット] 5個のピットを確認した。ピット1・2・4は、後世のものと考えられる。ピット5は、本住居跡の柱穴の可能性が高いが、断定できない。ピット3は、周囲から土師器片等が出土しているが、本住居跡に伴うかどうかは不明である。

[カマド] 東壁南寄りに周溝の途切れる部分があり、この周囲に焼土の広がりが見られた。上部施設は削平されたものと考えられるが、この位置にカマドが設置されていたものと考えられる。焼土は厚さ5cm程である。全体に床面上より若干浮いている。

[出土遺物] 土師器片及び小礫が出土している。

(白鳥 文雄)

第100号竪穴住居跡 (第71図)

- [位置] 1-7・8グリッドに位置する。
- [確認状況] 削平及び重複のため、全体形は不明である。
- [重複] 第67・126号竪穴住居跡及び第26号溝と重複している。本住居跡は第67号住居跡よりも新しく、第26号溝よりも古い。第126号住居跡とは削平により新旧関係は不明である。
- [平面形・規模] 削平及び重複により全体形は不明である。残存部分は南壁及び西壁の一部である。規模は南壁(480cm)、西壁(245cm)である。
- [堆積土] 6層に分層できた。褐色土を基調としており、ローム粒・炭化物を混入する。
- [壁] 南壁及び西壁の一部を確認した。第IV層を掘り込んでおり、ほぼ垂直に立ち上がる。
- [床面] ロームを主体とした混合土を貼って、床としている。貼り床は5~10cmの厚さで、堅くしまっており、残存部分のほぼ全面で確認できた。
- [周溝] 残存する壁の直下で確認した。幅は10~18cm程と狭く、深さは約2~10cmである。
- [柱穴・ピット] 11個のピットを確認した。ピット2・4・6が本住居跡の柱穴の可能性が高い。ピット9~11の3個は、本住居に伴う貯蔵穴の可能性が高いが、床面からの深さが浅く、掘り方の一部かもしれない。
- [カマド] 東壁寄りに焼土範囲が確認された。火床部及び天井部の崩落による焼土で、天井部及び煙道部は削平のため存在しない。火床部の焼土は厚さ5cm程である。
- [出土遺物] 土師器片・須恵器片・鉄製品等が出土している。
- [その他] 南壁東寄りに100×90cm程の範囲で焼土が確認された。床面より浮いており、本住居に伴う可能性は少なく、後世の廃棄によるものと考えられる。

(白鳥 文雄)

第100号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	25×21	11	円形	7	12×12	11	円形
2	20×20	14	〃	8	26×20	13	不整形
3	14×12	14	〃	9	150×94	13	〃
4	15×12	12	〃	10	132×105	16	〃
5	25×22	13	楕円形	11	128×70	20	〃
6	24×18	18					

第101号竪穴住居跡 (第72図)

- [位置] G-32に位置する。
- [確認状況] 重複のため東側部分が失われていた。
- [重複] 第102号住居跡、第103・104号溝と重複している。本住居は第102号住居跡より新し

く、第103・104号溝より古い。

[平面形・規模] 西壁(198cm)、南壁の残存部(160cm)、北壁の残存部(205cm)で、平面形は方形を呈すると思われる。

[堆積土] 3層に分けられた。自然堆積したものと考えられる。

[壁] 壁高は西壁約28cm、南壁28～18cm、北壁26～14cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

[床面] 貼り床は施されていない。

[周溝] なし。

[柱穴・ピット] 検出されなかった。

[カマド] なし

[その他の施設] なし。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

(羽柴 直人)

第102号竪穴住居跡 (第72図)

[位置] G・H-32・33に位置する。

[確認状況] 削平と重複のため、西側部分の周溝から確認した。

[重複] 第101号住居跡、第103・105号溝と重複している。これらの遺構より古い。

[平面形・規模] 西壁の残存部(556cm)、南壁の残存部(180cm)、北壁の残存部(415cm)で、平面形は方形を呈すると思われる。

[堆積土] 周溝中の堆積土が確認されたのみである。

[壁] 周溝のみの検出で壁面は検出されなかった

[床面] 床面は検出されなかったが、厚さ2～15cm(残存部の厚さ)で貼り床が施されていることが確認された。

[周溝] 西壁、南壁、北壁に周溝がみられる。周溝の幅は15～18cmで、深さは2～12cmである。

[柱穴・ピット] 床面及び周溝中から7個ピットが検出されているが、柱穴と判断できるものはない。

[カマド] 残存していない。

[その他の施設] なし。

[出土遺物] 土師器片が出土している。

(羽柴 直人)

第103号竪穴住居跡 (第73図)

[位置] G-19・20グリッドに位置する。

[確認状況] 削平と重複のため、残存状態は不良であるが、壁溝などから確認した。

[重複] 第105・118号住居跡、第113号溝と重複している。第113号溝との新旧関係は不明であるが、その他の住居跡より新しい。

[平面形・規模] 東壁386cm、南壁387cm、西壁432cm、北壁378cmで方形を呈する。主軸方位はN-15°-Wである。本住居跡は第105号と第118号住居跡を2度拡張して構築されている。第118号住居跡が最も古く、第118号住居跡の西壁と南壁を拡張して第105号住居跡を構築し、さらに第105号住居跡の西壁と南壁を拡張して、本住居跡を構築している。面積は(約13.8㎡)である。

[堆積土] 4層に分層できた。暗褐色土を基調としており、ローム・炭化物粒が混入する。自然堆積と考えられる。

[壁] 東壁の一部が削平されているため確認できなかったが、その他は残存する。壁高は西壁14cm、南壁7cm、北壁11cmである。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。

[床面] 床面は黒褐色土の混合土を貼り、床としている。貼り床は、ほぼ全面に施され、全体にしまりが弱い。

[周溝] カマドが存在していたと思われる部分を除いて一周する。周溝の幅は、8～15cmで、深さは概ね5～8cmである。

[柱穴・ピット] 床面及び周溝中から検出した小ピットは10個で、支柱穴はNo. 1・2・4であると考えられる。

[カマド] 東壁南寄りに構築されていたと思われるが確認できなかった。

[その他の施設] 貼り床面の下から円形のピットが2個検出された。本住居跡の拡張前に伴うものと考えられる。また、本住居跡の西側には、4個の不正楕円形をしたピットがあり、本住居跡には伴わないと思われる。

本住居跡の外側にU字形の溝(第112号溝)が、検出されており、本住居跡に伴う外周溝と考えられる。

[出土遺物] 土師器片が出土している。

(成田 悟)

第103号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	27×22	25	楕円形	6	20×20	19	円形
2	24×19	31	楕円形	7	27×25	17	円形
3	24×21	21	不整楕円形	8	19×17	37	円形
4	15×12	24	円形	9	27×24	36	円形
5	40×35	18	円形	10	24×22	25	円形

第105号竪穴住居跡 (第74図)

[位置] G-19・20グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複のため、残存状態は不良であるが、壁溝や柱穴などから確認した。

[重複] 第103・118号住居跡、第113・116号溝と重複している。第113号溝との新旧関係は不明であるが、第118号住居跡より新しく、第103号住居跡よりも古い。

[平面形・規模] 東壁392cm、南壁366cm、西壁402cm、北壁367cmで方形を呈する。主軸方位はN-15°-Wである。本住居跡は第118号住居跡を拡張して構築されている。第118号住居跡の西壁と南壁を拡幅している。床面積は(約13.3m²)である。

[堆積土] 黒褐色土の1層のみである。ローム・炭化物粒・焼土粒が混入する。人為堆積と考えられる。

[壁] 東壁が削平されているため確認できなかったが、その他は残存している。壁高は西壁18cm、南壁5cm、北壁18cmである。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。

[床面] 床面は黒褐色土の混合土を貼り、床としている。貼り床は、ほぼ全面に施され、全体にしまりが弱い。

[周溝] 東壁の南側を除いて一周する。周溝の幅は、7~12cmで、深さは概ね3~5cmである。

[柱穴・ピット] 床面及び周溝中から検出した小ピットは5個で、主柱穴はNo. 1~4と考えられる。

[カマド] 東壁北寄りに構築されており、煙道部だけ確認され、燃焼部火床面は確認できず、煙出し孔は第116号溝により削平している。堆積土は5層に分層でき、1~3層に焼土粒を含む。

[その他の施設] 本住居跡の外側にU字形の溝(第112号溝)が、検出されており、本住居跡または、第103・118号住居跡に伴う外周溝と考えられる。

[出土遺物] 土師器片が出土している。

(成田 悟)

第105号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	26×24	25	円形	3	20×16	29	楕円形
2	25×22	29	円形	4	34×30	53	不整楕円形

第106号竪穴住居跡 (第75図)

[位置] K・L-37グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複のため、周溝のみから確認した。

[重複] 北側は削平され、東側は大きな攪乱を受けているため、検出できたのは南西側の周溝の一部だけである。

[平面形・規模] 一部のみの確認で、平面形・規模とも不明である。

[堆積土] 残存しない。

[壁] 残存しない。

[床面] 残存しない。

[周溝] 南側と西側の一部は確認できた。幅は、10～15cmで、深さは約5cmである。

[柱穴・ピット]

[カマド] 残存しない。

[出土遺物] 出土しなかった。

(下山 信昭)

第106号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	32×22	26	楕円形				

第108号竪穴住居跡 (第76図)

[位置] I・J・K-25・26グリッドに位置する。

[確認状況] 削平のため残存状態は不良であったが、第1号溝の東側にある暗褐色土の落ち込みから確認した。

[重複] 第1号溝及び第78号溝と重複している。本住居跡が第1号溝・第78号溝より古い。

[平面形・規模] 西壁は396cm、北壁・南壁の残存部の長さはそれぞれ300cm、238cmである。

[堆積土] 8層に分層できた。暗褐色土を基調とし、全体的にローム粒が混入する。人為堆積と思われる。

[壁] 西壁及び北壁・南壁の一部が残存する。壁高は西壁で24cm、南壁で10cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

[床面] 第Ⅳ層を掘り込んで床としている。住居の南西部分で4箇所貼り床の範囲が確認された。貼り床は堅くしまっている。

[周溝] 残存部分にはすべて周溝が巡る。周溝の幅は8～24cmである。深さは浅いところで3cm程であるが、概ね11～14cmである。

[柱穴・ピット] 確認面で1個、周溝部分から3個、床下から2個、合計6個検出された。No. 1～2は支柱穴の可能性もある。

[カマド] 残存しない。

[その他の施設] 西側に本住居を囲むU字形の溝が検出された。本住居に伴う外周溝と思われる。幅18～24cm、深さ19～36cmである。東側部分は第1号溝及び第78号溝に切られ残存していない。

[出土遺物] 土師器片が出土している。

[その他] 構築の時代は平安時代と思われる。

(長瀬 昇)

第108号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	30×21	15	楕円形	4	32×30	41	楕円形
2	39×36	40	楕円形	5	39×27	28	隅丸方形
3	20×18	18	不整楕円形	6	29×29	6	隅丸方形

第109・124号竪穴住居跡 (第77図)

[位置] I-30～32、J-30～32に位置する。

[確認状況] 第109号竪穴住居跡は第Ⅳ層上面において確認し第124号竪穴住居跡は第109号竪穴住居跡の貼床の下面に確認した。

[重複] 第30号住居跡と、第38号住居跡および外周溝と重複している。両住居跡は第30号住居跡、第38号住居跡および外周溝より古い。第109号竪穴住居跡は第124号竪穴住居跡を拡張したものである。

[平面形・規模] 第109号竪穴住居跡は、東壁665cm、南壁640cm、西壁660cm、北壁600cmのはほぼ方形を呈し、第124号竪穴住居跡は東壁586cm、南壁538cm、西壁592cm、北壁547cm、のはほぼ方形を呈し、面積は第109号竪穴住居跡が約38.8㎡、第124号竪穴住居跡が約31.3㎡である。主軸方位は両住居跡ともにN-78°-Wである。

[堆積土] 第109号竪穴住居跡は13層に分層できた。暗褐色土を基調としており、ロームブロック、炭化物粒が混入する。自然堆積と考えられる。第124号竪穴住居跡は5層に分層できた。人為堆積と考えられる。

[壁] 両住居跡ともに北壁と西壁の一部は削平および重複により一部しか残存しておらず、さらにすべての壁も残存不良である。壁高は第109号竪穴住居跡が東壁で0 cm～2 cm、西壁で9.2 cm～22.5 cm、南壁で3.5 cm～11.5 cm、北壁は確認不可能である。第124号竪穴住居跡は東壁で0 cm～1.3 cm、西壁で1 cm～3.2 cm、南壁で5 cm～6.2 cm、北壁は確認不可能である。

[床面] 第109号竪穴住居跡は第124号竪穴住居跡床面を削平し、貼床を施しているが、東壁付近は削平のために貼床は確認されなかった。第124号竪穴住居跡は第Ⅳ層を掘り込み、貼床は確認されなかった。

[周溝] カマド部分を除いて全周していたと思われるが、北側の周溝は削平されており、確認できなかった。第109号竪穴住居跡の周溝の幅は5 cm～15 cmであり、深さは6.7 cm～18.9 cmである。第124号竪穴住居跡の周溝の幅は5 cm～22 cmであり、深さは4 cm～16.9 cmである。

[柱穴・ピット] 第109号竪穴住居跡の床面および周溝中から検出した小ピットは12個で、No. 5、6、7、8は主柱穴であると考えられる。第124号竪穴住居跡の床面および周溝中から検出した小ピットは20個でNo. 1、2、3、4は主柱穴であると考えられる。

[カマド] 第109号竪穴住居跡の東壁南寄りに構築されていたと思われるが、第30号住居跡に切られているため残存状態は不良である。東壁南寄りに焼土と黄白色粘土(カマドの袖部)が散乱して検出されたのみで、第30号住居跡に切られた部分の底面には燃焼部火床面が検出された。煙道部も検出されなかった。なお、第124号竪穴住居跡に伴うカマドは全く検出されなかった。

[その他の施設] 本住居跡の外側には平面観がU字形を呈する溝(第63号溝、第101号溝)が検出されており、これらは本住居に伴う外周溝と考えられる。第63号溝、第101号溝とも東側を開口し、幅は第63号溝が48 cm～97 cm、第101号溝が47 cm～128 cmである。第63号溝の深さは、34 cmであり、第101号溝が27 cmである。両溝とも東側の一部を第32号溝に切られ、更に途中でプランが確認できなかった。第63号溝の覆土中からは苫小牧火山灰が検出された。なお、第63号溝は第101号溝よりも新しく、それらの規模、形状、新旧関係から推察して第124号竪穴住居跡には第101号溝が、第109号竪穴住居跡には第63号溝が伴うものと考えられる。

[出土遺物] 第109号住居跡から、土師器・須恵器・鉄製品・鉄滓が出土している。

(木村 高)

第110号竪穴住居跡 (第78・79図)

[位置] J・K・L-21・22・23グリッドに位置する。

[確認状況] 精査中に方形の黒褐色土の落ち込みを確認した。

[重複] 第115号・第120号・第132号住居跡、第81号溝跡と重複し、本住居跡が最も新しい。

〔平面形・規模〕 平面形はほぼ方形である。東壁（940cm）、西壁（920cm）、南壁（860cm）、北壁（870cm）である。総床面積は約78.3m²である。主軸方位はN-46°-Wである。

〔堆積土〕 6層に分層した。層全体に小さなローム・ブロックや焼土ブロックを含む。第1層・第2層は自然堆積で、それ以下は人為堆積と考えられる。

〔壁〕 第IV層を掘り込んで構築され、床面から直線的に外傾しながら立ち上がる。壁高は東壁45cm、西壁45cm、南壁45cm、北壁30cmである。

〔床面〕 住居の東側、カマドの周囲に顕著に貼り床が施されている。範囲は230cm×430cmで、厚さは2～5cmである。

〔周溝〕 拡張後には検出されなかった。

〔柱穴・ピット〕 住居跡の対角線上に4個検出された。規模は約80cm～100cmで、深さは40～60cmである。これら中で礎板の痕跡が認められたものが3個ある。

〔カマド〕 東壁の南壁寄りに構築されている。遺存状態は良好である。規模は110cm×170cmで、火焼面の範囲は40cm×50cmである。袖部は粘土を盛り上げて構築したものである。壁際に比べて、火焼部に近づくにつれて袖部の膨らみが大きくなる。少なくとも2回の作り替えが認められる。煙道部は半地下式である。火焼面には支脚と考えられる土師器の甕の破片が集中して出土した。

〔出入口〕 南壁の東寄りに粘土を突き固めたスロープと、外側に舌状の貼り出しを検出した。出入口の施設と考えられる。

〔改築〕 少なくとも本住居は2時期の変遷が認められる。当初の規模は東壁（800cm）、西壁（810cm）、南壁（790cm）、北壁（780cm）である。これに伴う周溝は幅が20～35cm、深さ10～25cmである。東壁の一部が途切れており、改築以前の出入口の可能性が高い。さらにY字状に溝が北側方向の住居外に延び、外周溝の第79号溝跡に接続する。

〔付属施設〕 住居の東側以外を弧状に外周溝（第79号溝）が取り巻いている。

〔出土遺物〕 覆土・床面より土師器・須恵器・鉄製品・鉄滓等が出土した。

（岡田 康博）

第111号竪穴住居跡 （第80図）

〔位置〕 I・J-22・23グリッドに位置する。

〔確認状況〕 遺構確認中に方形の暗褐色の落ち込みを確認した。

〔重複〕 第112号・第129号住居跡、第82号・第123溝跡と重複し、本住居跡が最も新しい。

〔平面形・規模〕 平面形はほぼ方形である。東壁（370cm）、西壁（380cm）、南壁（380cm）、北壁（360cm）である。壁は底面から直線的に立ち上がる。面積は11.8m²である。

[堆積土] 11層に分層した。層全体にローム・ブロックを含む。人為堆積と考えられる。

[壁] 削平されているが、現存している部分の壁高は5～10cmである。

[床面] 北・西側を除いて貼床が施されている。貼床の厚さは5cm前後である。

[周溝] カマド部分を除いて全周巡る。幅は20cm前後で、深さ8～20cmである。

[柱穴・ピット] 四隅に主柱が配置される。径20～30cmで、深さは15～20cmである。

[カマド] 東壁の南寄りに構築されている。煙道部は残存しない。火烧面は30～40cmである。芯材は用いず、粘土を盛ったものである。支脚には土師器の甕の底部を倒立して使用している。

[出土遺物] 土師器・須恵器・鉄滓が出土している。

(岡田 康博)

第112号竪穴住居跡 (第81図)

[位置] H・I-23グリッドに位置する。

[確認状況] 削平と重複のため、床面と周溝を確認した。

[重複] 第111号・第129号住居跡、第123号・第127号土壌、第2号溝跡と重複し、第129号住居跡より新しく、第111号住居跡、第123号・第127号土壌、第2号溝跡より古い。

[平面形・規模] 平面形はほぼ方形である。東壁(400cm)、西壁(390cm)、南壁(390cm)、北壁(410cm)である。床面積は(14.2㎡)である。

[堆積土] 残存しない。

[壁] 残存しない。

[床面] ほぼ全面に、厚さ5～20cmの貼床が施される。

[周溝] 遺構の重複部分を除いて、ほぼ全周に巡ると考えられるが、南壁西側部分は設けられていない可能性もある。幅は5～20cm、深さ5～15cmである。

[柱穴・ピット] 南東隅を除く、各隅に主柱穴がある。規模は径15～20cmで、深さ11～22cmである。

[カマド] 残存しない。

[出土遺物] 土師器片が少量出土している。

(岡田 康博)

第115号竪穴住居跡 (第82図)

[位置] J-22グリッドに位置する。

[確認状況] 削平と重複のため、周溝と床面の一部を確認した。

[重複] 第110号・第132号住居跡と重複し、本住居跡が最も古い。

[平面形・規模] 不明。

[堆積土] 残存しない。

[壁] 残存しない。

[床面] 北側部分に、320cm×70cmの範囲で、薄い貼り床が検出された。

[周溝] 西壁側のみ残存していた。幅は約10cm、深さ約5cmである。

[柱穴・ピット] 3個検出したが、明らかに主柱穴と判断できるものはない。

[カマド] 残存しない。

[出土遺物] 土師器片が少量出土している。

(岡田 康博)

第116号竪穴住居跡

[位置] G・H-30・31グリッドに位置する。

[確認状況] 削平と重複のため、貼り床の一部確認した。

[重複] 第102号溝と重複している。本住居跡は102溝より古い。

[平面形・規模] 東壁(295cm)、南壁の残存部(205cm)、北壁の残存部(55cm)で、方形を呈すると思われる。

[堆積土] 堆積土は残存していない。

[壁] 残存していない。

[床面] 床面は残存していないが、厚さ5～15cm(残存部の厚さ)で貼り床が施されていることが確認された。

[周溝] 検出されなかった。

[柱穴・ピット] 検出されなかった。

[カマド] 残存していない。

[その他の施設] 本住居の西、南側に溝(第104号溝)が検出されており、本住居に伴う外周溝の可能性がある。溝の幅は58～85cm、深さ18cmほどである。覆土は2層に分けられる。第103、105号溝と重複しており、これらの溝より古い。

[出土遺物] 出土しなかった。

(羽柴 直人)

第116号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	67×48	33	楕円形				

第118号竪穴住居跡 (第83図)

[位置] G-19・20グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及びと重複のため、残存状態は不良であるが、壁溝などから確認した。

[重複] 第103・105号住居跡、第116溝と重複している。本住居跡は、いずれの遺構よりも古い。

[平面形・規模] 平面形は、東壁が確認できなかったが方形を呈する。東壁(328cm)、南壁320cm、西壁375cm、北壁(355cm)である。主軸方位はN-15°-Wである。本住居跡は、第103・105号住居跡が拡張される以前に構築されたものである。

[堆積土] 2層に分層できた。黒褐色土を基調としており、ローム・炭化物粒が混入する。人為堆積と考えられる。

[壁] 東壁の一部は削平のため確認できなかったが、その他は残存する。壁高は西壁17cm、南壁13cm、北壁20cmである。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。

[床面] 床面は柔らかく全体的にしまりが弱い。また、南側の周溝から北側に約100cmほどのびる溝が存在しており、本住居跡よりも古い住居跡が存在した可能性も考えられる。

[周溝] カマドが存在している部分と東壁際を除いて一周している。周溝の幅は、12~21cmで、深さは概ね5~8cmである。

[柱穴・ピット] カマド燃焼部の西側から66×46cmの楕円形のピットを検出した。

[カマド] 東壁寄りに構築されている。焼土範囲は直径約45cmで、厚さは中央部で10cmである。袖は、床面上に粘土をつき固めて構築しており、芯材は使用していない。煙道部及び煙出し孔は削平されて検出できなかった。

[その他の施設] 床面の南側から北側に約100cm延びる溝を検出した。本住居跡よりも、さらに古い住居跡が存在した可能性も考えられる。

本住居跡の外側にU字形の溝(第112号溝)が、検出されており、本住居跡または、第103・105号住居跡に伴う外周溝と考えられる。

[出土遺物] 土師器片が出土した。

(成田 悟)

第119号竪穴住居跡 (第84図)

[位置] J・K-23・24グリッドに位置する。

[確認状況] 重複のため、東壁の一部が残存しない。

[重複] 第2号・第79号・第81号・第84号溝跡、第130号住居跡、第114号土壌と重複し、第2号・第79号・第114号土壌より古く、第81号・第84号溝跡、第130号住居跡より新しい。

[平面形・規模] 東壁(380cm)、西壁(360cm)、北壁(350cm)、南壁(360cm)で、平面形はほぼ方形である。

[堆積土] 2層に分層した。第1層にはローム・ブロックと焼土を含む。第2層は黒褐色土である。人為堆積と考えられる。

[壁] 壁は床面から外側に直線的に立ち上がる。壁高は西壁で20～25cm、北壁で10～15cm、南壁で10～15cmである。東壁は残存しない。

[床面] 貼床は2～5mで、全面に施されるが全体にしまりが弱い。

[周溝] 検出されなかった。

[柱穴・ピット] 西側の溝跡と重複した箇所を除いて壁柱穴が巡る。径10～15cmで、深さ2～15cmである。

[カマド] 残存しない。

[出土遺物] 土師器・須恵器片が出土した。

(岡田 康博)

第120号竪穴住居跡 (第85図)

[位置] J-13グリッドに位置する。

[確認状況] 削平のため、カマドと床面の一部が残存していた。

[重複] なし。

[平面形・規模] 確認できた床面の範囲は170～200cmである。

[堆積土] なし。

[壁] 残存しない。

[床面] 厚さ5cm程の貼床が施されている。

[周溝] 残存しない。

[柱穴・ピット] 残存しない。

[カマド] 火焼面の一部(50×40cm)残存していた。

[出土遺物] 土師器片が出土した。

(岡田 康博)

第121号住居跡 (第86図)

[位置] I～K-13～15グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複のため、周溝の一部と柱穴のみから確認した。柱穴の配置から住居跡とした。

[重複] 第58・122・123・125号住居跡と重複している。本住居跡は第58・125号住居跡より新しく、第122・123号住居跡よりは古い。第125号住居跡を南、西、北へ拡張した可能性もある。

[平面形・規模] 東壁（710cm）、南壁（710cm）、西壁（710cm）、北壁（730cm）の方形を呈する。面積は（約50.0m²）である。主軸方向はN-17°-Wである。

[堆積土] 4層に分層できた。褐色土を基調としており、ローム・炭化物粒が混入する。

[壁] 削平及び重複のため、西壁と南壁の一部だけが残存している。壁高は西壁で、15～20cmである。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。

[床面] 床面は、南西の一部だけが残存している。約5cmの厚さに、ローム及び褐色土の混合土を貼り、床としている。

[周溝] 南西の一部にだけ残存している。周溝の幅は15～20cmで、深さは概ね10cmである。

[柱穴・ピット] 床面及び周溝中から検出した小ピットは、33個である。東側は、第125号住居跡に伴うピットとの判別ができなかった。

[カマド] 第123号住居跡のカマド2が本住居跡に伴う可能性がある。

[出土遺物] 土師器・須恵器片が出土した。

（下山 信昭）

第121・125号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	25×34	41	楕円形	30	25×22	12	円形
2	20×19	17	隅丸方形	31	27×32	18	楕円形
3	20×19	20	隅丸方形	32	31×34	24	円形
4	19×21	10	円形	33	20×18	12	隅丸方形
5	25×26	15	円形	34	32×30	46	円形
6	23×22	14	円形	35	30×29	35	円形
7	28×30	20	隅丸方形	36	20×18	14	不整円形
8	24×20	21	隅丸方形	37	38×22	17	楕円形
9	43×24	25	楕円形	38	36×24	38	楕円形
10	20×30	35	楕円形	39	36×30	28	楕円形
11	19×20	10	円形	40	28×28	34	隅丸方形
12	30×44	14	楕円形	41	46×44	24	円形
13	18×18		円形	42	54×38	30	楕円形
14	15×20	8	隅丸方形	43	28×28	27	隅丸方形
15	30×30	10	円形	44	28×28	33	円形
16	24×26	16	円形	45	18×15	12	円形
17	18×20	6	隅丸方形	46	30×32	30	円形
18	14×16	10	円形	47	30×22	16	楕円形
19	20×20	20	円形	48	32×36	30	隅丸方形
20	24×18	8	楕円形	49	32×44	28	楕円形
21	20×20	28	円形	50	20×20	21	円形
22	16×13	34	円形	51	20×26	21	楕円形
23	30×27	10	円形	52	38×35	44	円形
24	20×20	10	円形	53	32×24	39	楕円形
25	32×34	4	隅丸方形	54	32×24	7	楕円形
26	16×19	17	円形	55	21×22	25	円形
27	16×21	17	円形	56	28×24	14	隅丸方形
28	19×22	21	円形	57	44×26	15	楕円形
29	18×16	27	円形	58	38×36	38	円形

第122号竪穴住居跡 (第87図)

[位置] J・K-13グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複のため、周溝の一部と柱穴から確認した。

[重複] 第121・123・125号住居跡と重複している。本住居跡は第121・125号住居跡より新しく、第123号住居跡よりは古い。

[平面形・規模] 東壁(350cm)、南壁(340cm)、西壁(350cm)、北壁(340cm)の方形を呈する。面積は(約10.0m²)である。主軸方位はN-21°-Wである。

[堆積土] 残存しない。

[壁] 残存しない。

[床面] 削平されてほとんど残存していない。

[周溝] 南側の一部だけが残存している。周溝の幅は15~20cmで、深さは概ね10cmである。

[柱穴・ピット] 本住居跡に伴う小ピットは、周溝といっしょに検出された5個である。主柱穴は、隅にあるピット23、24、26と思われる。

[カマド] 残存していない。

[出土遺物] 出土しなかった。

(下山 信昭)

第122・123号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	40×44	11	円形	15	28×22	13	楕円形
2	48×45	14	円形	16	22×22	20	円形
3	42×38	46	円形	17	50×44	42	円形
4	28×28	34	隅丸方形	18	24×28	30	隅丸方形
5	44×40	27	円形	19	18×18	4	円形
6	66×56	68	楕円形	20	24×22	34	円形
7	56×74	58	楕円形	21	22×23	36	円形
8	64×44	29	隅丸方形	22	26×27	23	円形
9	64×65	68	円形	23	22×22	19	円形
10	26×26	7	円形	24	27×24	14	円形
11	28×30	18	円形	25	26×32	18	楕円形
12	70×70	6	円形	26	24×30	30	円形
13	56×60	11	円形	27	25×30	16	円形
14	66×54	9	楕円形				

第123号住居跡 (第87・88図)

[位置] I～K-13・14グリッドに位置する。

[確認状況] 削平と重複が認められたが、北東側以外は確認できた。

[重複] 第121・122・125号住居跡と重複している。本住居跡はそれらの住居跡よりも新しい。

[平面形・規模] 東壁(780cm)、南壁(790cm)、西壁(790cm)、北壁(760cm)の方形を呈する。面積は(約56.0m²)である。主軸方向はN-14°-Wである。

[堆積土] 11層に分層できた。褐色土を基調としており、ローム・炭化物粒が混入している。

[壁] 削平及び重複のため、西壁と南壁の一部だけが残存している。壁高は西壁で、15～20cmである。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。

[床面] 南西部分だけが残存しているが、約5cmの厚さのローム及び褐色土の混合土を貼り、床としている。

[周溝] 北東の一部を除いて残存している。周溝の幅は15～20cmで、深さは概ね10cmである。

[柱穴・ピット] 床面及び周溝中から検出したピットは、22個である。主柱穴はピットNo. 6～9と思われる。

[カマド] カマドの残骸と思われる焼土を2箇所検出した。どちらも遺存状態は不良で、袖

や煙道は削平されて残存していない。カマド1は、東壁南寄りに位置する。本住居跡に伴う可能性が高いが、支柱穴と思われるピットに近いことから重複している住居跡に伴うことも考えられる。燃烧部火床面の焼土範囲は、100×70cmの楕円形で、焼土の厚さは中央部で約5cmである。袖部や煙道部は確認できなかった。カマド2はカマド1の1m西側に位置する。焼土の範囲は100×60cmの楕円形である。袖部と思われる粘土の固まりがわずかに確認された。煙道部は確認できなかった。本住居跡に伴わず件の住居跡に伴う可能性もあるが、特定できなかったので本住居跡にのせた。

[出土遺物] 土師器・須恵器片が出土した。

(下山 信昭)

第125号住居跡 (第86図)

[位置] I-13・14、J-13~15グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複のため、柱穴範囲から確認した。

[重複] 第121~123号住居跡と重複している。本住居跡はそれらの住居跡よりも古い。

[平面形・規模] 東壁(510cm)、南壁(560cm)、西壁(520cm)、北壁(550cm)の方形を呈する。東側は第121号住居跡と重複していると思われるが、明確に区分できない。面積は(約32.0m²)である。主軸方向はN-17°-Wである。

[堆積土] 残存していない。

[壁] 残存していない。

[床面] 残存していない。

[周溝] 残存していない。

[柱穴・ピット] 検出した小ピットは、25個である。支柱穴は不明である。

[カマド] 確認できなかった。

[出土遺物] 出土しなかった。

(下山 信昭)

第126号住居跡 (第89図)

[位置] J・K-8・9グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び風倒木のため、周溝から確認したが、北側はできなかった。

[重複] 第100号住居跡と重複している。本住居跡はそれよりも古い。

[平面形・規模] 東壁(570cm)、南壁(550cm)、西壁(560cm)、北壁(550cm)の方形を呈する。面積は(約27.0m²)である。主軸方向はN-28°-Wである。

[堆積土] 残存していない。

[壁] 残存していない。

[床面] 残存していない。

[周溝] 北側は確認できなかったが、一周すると思われる。周溝の幅は20～30cmとほぼ一様である。深さは10～20cmである。

[柱穴・ピット] 検出したピットは、22個である。主柱穴は不明である。

[カマド] 東壁南寄りに構築されている。遺存状態は不良で、火床面だけが残存していた。火床面は、直径約60cmで、焼土の厚さは15cmほどである。

[出土遺物] 土師器片が出土している。

(下山 信昭)

第126号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	40×20	17	楕円形	14	26×20	12	楕円形
2	35×24	33	楕円形	15	36×35	18	円形
3	30×27	36	円形	16	24×23	31	円形
4	38×36	32	円形	17	24×20	24	円形
5	47×45	50	円形	18	33×25	20	楕円形
6	32×27	12	楕円形	19	18×18	24	円形
7	34×32	8	円形	20	35×27	5	楕円形
8	44×30	40	楕円形	21	23×20	44	方形
9	32×30	44	円形	22	23×20	17	円形
10	44×43	36	円形	23	42×26	34	楕円形
11	54×51	27	円形	24	45×30	42	楕円形
12	42×37	19	楕円形	25	35×27	34	楕円形
13	24×19	14	楕円形				

第127号住居跡 (第90・91図)

[位置] J・K-8～10グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複のため、残存状態は不良で、周溝から確認した。

[重複] 第128号住居跡と第85号土壌に重複している。本住居跡は第85号土壌より古く、第128号住居跡よりも新しい。第128号住居跡を東と南へ拡張した可能性がある。

[平面形・規模] 東壁(550cm)、南壁(480cm)、西壁(490cm)、北壁(490cm)で南東隅に張り出し部をもった形を呈する。面積は(約21.0m²)である。主軸方向はN-6°-Wである。

[堆積土] 10層に分層された。暗褐色土を基調として、ローム・炭化物・焼土粒が混入する。

[壁] 南側と西側だけ残存していた。壁高は15～20cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

[床面] 第5cmの厚さの、ロームと褐色土の混合土を貼り、床としている。

[周溝] ほぼ一周している。周溝の幅は、20～30cmとほぼ一様で、深さは20～35cmである。

[柱穴・ピット] 検出した小ピットは、9個である。主柱穴は、No. 6～8、10である。

[カマド] 東壁南寄りに構築されている。削平され遺存状態は不良で、燃烧部と袖部の一部だけが残存している。燃烧部火床面は、30×45cmの楕円形で、両袖中央に位置する。袖は床面上に粘土をつき固めて構築しており、芯材は使用されていない。煙道部は検出できなかった。

[その他の施設] 南東隅の南側の壁約半分が、70cmほぼ南側へ張り出している。

[出土遺物] 土師器片及び鉄器が出土した。

(下山 信昭)

第127号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	20×19	30	円形	6	33×25	48	楕円形
2	25×20	41	楕円形	7	30×30	12	円形
3	20×20	37	円形	8	31×30	33	円形
4	20×18	35	円形	9	27×27	47	円形
5	27×25	20	円形	10	36×27	43	楕円形

第128号住居跡 (第92図)

[位置] J・K-8～10グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複のため、残存状態は不良で、周溝から確認された。

[重複] 第127号住居跡と第85号土壇に重複している。本住居跡はそれらよりも古く、東と南へ拡張して第128号住居跡になった可能性がある。

[平面形・規模] 東壁(400cm)、南壁(350cm)、西壁(380cm)、北壁(330cm)の方形を呈する。面積は(約9.3㎡)である。主軸方向はN-21°-Wである。

[堆積土] 残存していない。

[壁] 残存していない。

[床面] 第5cmの厚さの、ロームと褐色土の混合土を貼り、床としている。

[周溝] 一周している。周溝の幅は、20～30cmとほぼ一様である。深さは20～30cmである。

[柱穴・ピット] 検出した小ピットは、1個である。支柱穴不明である。

[カマド] 東壁南寄りに構築されている。遺存状態は不良で、燃烧部火床面と袖の一部しか残存していない。燃烧部火床面は両袖中央からやや北側に偏った位置にあり、60×50cmの不整な楕円形を呈する。袖部はほとんど残っていないが、床面上に粘土をつき固めて構築しており、芯材は使用されていない。煙道部は検出できなかった。

[出土遺物] 土師器片が出土している。

(下山 信昭)

第128号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	33×30	22	楕円形				

第129号竪穴住居跡 (第93図)

[位置] H・I-22・23グリッドに位置する。

[確認状況] 重複のため、柱穴のみ残存している。

[重複] 第111号・第112号住居跡と重複し、本住居跡が最も古い。

[平面形・規模] 平面形は南北に長い長方形である。規模は東壁(480cm)、西壁(480cm)、南壁(450cm)、北壁(470cm)である。

[堆積土] 残存しない。

[壁] 残存しない。

[床面] 残存しない。

[周溝] 残存しない。

[柱穴・ピット] 壁柱穴と考えられる柱穴が検出された。方形のものが多く、深さは10~25cmである。

[カマド] 残存しない。

[出土遺物] 出土しなかった。

(岡田 康博)

第130号竪穴住居跡 (第84図)

[位置] J K-23グリッドに位置する。

[確認状況] 重複のため柱穴と周溝の一部を確認した。

[重複] 第2号溝跡、第79号溝跡、第119号住居跡、第114土壙と重複し、本住居跡が最も古い。

[平面形・規模] 西壁(370cm)、南壁(300cm)、北壁(260cm)で、長方形と考えられる。

[堆積土] 残存しない。

[壁] 残存しない。

[床面] 残存しない。

[周溝] 北・南側の一部が残存しない。幅は8~25cm、深さ4~10cmである。

[柱穴・ピット] 5個の柱穴を検出したが、伴うかどうか不明である。

[カマド] 残存しない。

[出土遺物] 出土しなかった。

(岡田 康博)

第131号住居跡 (第94図)

[位置] L-15グリッドに位置する。

[確認状況] 削平のため、残存状態は不良で、周溝のみから確認した。北側半分は残存していない。

[重複] なし。

[平面形・規模] 南壁だけが残存しているが、残存壁長(320cm)の方形を呈する。

[堆積土] 1層だけ確認できた。暗褐色土を基調にしており、炭化物粒が混入している。

[壁] 残存していない。

[床面] ロームと暗褐色土の混合土を貼り、床としている。

[周溝] 南側と東西の一部が残存している。周溝の幅は10~20cmで、深さは10~15cmである。

[柱穴・ピット] 検出した小ピットは、5個である。支柱穴は不明である。

[カマド] 依存状態が不良で、火床面だけが残存している。火床面は直径約40cmで、焼土の厚さは10cm程である。

[出土遺物] 土師器片が出土している。

(下山 信昭)

第131号 ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	24×15	18	楕円形	3	22×22	9	円形
2	20×20	30	円形	4	28×24	5	円形

第132号竪穴住居跡 (第78図)

[位置] J・K-22・23グリッドに位置する。

[確認状況] 重複のため、周溝のみを確認した。

[重複] 第110号・第115住居跡と重複し、第115号住居跡より新しく、第110号住居跡より古い。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ方形である。西壁(240cm)、南壁(240cm)である。

[堆積土] 残存しない。

[壁] 残存しない。

[床面] 残存しない。

[周溝] 西側と南側から検出した。幅は15~20cm、深さ5~10cmである。西壁中央からは検出されなかった。

[柱穴・ピット] 南西隅から柱穴が1個検出された。

[カマド] 残存しない。

[出土遺物] 土師器片が少量出土している。

(岡田 康博)

第136号竪穴住居跡 (第95図)

[位置] K-37グリッドに位置する。

[確認状況] 削平のため東側と北側が失われていた。

[重複] 第137号住居跡と重複している。本住居跡は第137号住居跡より新しい。

[平面形・規模] 西壁の残存部(135cm)、南壁の残存部(320cm)で、平面形は方形を呈すると思われる。

[堆積土] 手違いから堆積土は観察することができなかった。

[壁] 壁高は西壁の32cm、南壁は32～0cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

[床面] 貼床は施されていない。

[周溝] 西壁と南壁に周溝がみられる。周溝の幅は14～35cmで、深さは2～12cmである。

[柱穴・ピット] 床面及び周溝中から2個のピットを検出した。南西隅のピットが柱穴と考えられる。

[カマド] 残存していない。

[その他の施設] なし。

[出土遺物] 土師器片が出土している。

(羽柴 直人)

第136号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	27×26	22	円形	2	42×41	10	楕円形

第137号竪穴住居跡 (第95図)

[位置] K・L-37グリッドに位置する。

[確認状況] 削平のため東側と北側が失われていた。

[重複] 第136号住居跡と重複している。本住居跡は第136号住居跡より古い。

[平面形・規模] 西壁の残存部(95cm)、南壁の残存部(110cm)で、平面形は方形を呈すると思われる。

[堆積土] 手違いから堆積土は観察することができなかった。

[壁] 壁高は西壁の60cm、南壁26～60cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

[床面] 厚さ5～12cmで貼り床を施している。

[周溝] 西壁と南壁に周溝がみられる。周溝の幅は5～15cmで、深さは2～8cmである。

[柱穴・ピット] 検出されなかった。

[カマド] 残存していない。

[その他の施設] なし。

[出土遺物] 出土しなかった。

(羽柴 直人)

第138号住居跡 (第96図)

[位置] H-45、46グリッドに位置する。

[確認状況] 北側と東側が第147号住居跡と重複し削平されているが、残存状態は割合良好である。

[重複] 第147号住居跡と重複している。本住居跡は第147号住居跡より古い。

[平面形・規模] 南壁と西壁の一部だけが残存しているが、壁長(340cm)の方形を呈すると思われる。

[堆積土] 10層に分層できた。暗褐色土を基調にしており、炭化物粒が混入している。

[壁] 南壁と西壁の一部だけ残存している。壁高は南壁で25～35cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

[床面] ロームと暗褐色土の混合土を貼り、床としている。

[周溝] 西側に一部が確認された。周溝の幅は15～20cmで、深さは5cmである。

[柱穴・ピット] 検出した小ピットは、5個である。主柱穴は不明である。

[カマド] 南壁西寄りに構築されている。燃焼部火床面は、両袖の中央部に位置している。焼土範囲は、直径約60cmである。袖は床面土に粘土をつき固めて構築しており、芯材は使用されていない。煙道下部は、地山を掘り込んで構築されている。煙出孔は検出できなかった。

[出土遺物] 土師器・須恵器片が出土している。

(下山 信昭)

第138号 ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	20×18	10	円形	4	60×35	8	不整形
2	23×18	16	楕円形	5	35×28	44	楕円形
3	60×55	30	円形				

第140号竪穴住居跡 (第97図)

[位置] H・I-37・38グリッドに位置する。

[確認状況] 削平と重複のため東側が失われていたが、西側は良好な状況で確認できた。

[重複] 第146号溝と重複している。本住居跡は第146号溝より古い。

[平面形・規模] 西壁(462cm)、南壁の残存部(246cm)、北壁の残存部(178cm)で、平面形は方形を呈すると思われる。

[堆積土] 3層に分層できた。自然堆積と考えられる。第2層中に十和田a火山灰?が混入している。

[壁] 壁高は西壁約35cm、南壁は35～0cm、北壁も35～0cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

[床面] 5～20cmの厚さで部分的に貼床を施している。

[周溝] 西壁、南壁、及び北壁に周溝がみられる。周溝の幅は8～22cmで、深さは6～12cmである。

[柱穴・ピット] 床面から検出したピットは3個であるが、柱穴と考えられるものはない。

[カマド] 残存していない。

[その他の施設] なし。

[出土遺物] 土師器・須恵器・鉄器が出土している。

(羽柴 直人)

第141号竪穴住居跡 (第98図)

[位置] E～G-36・37グリッドに位置する。

[確認状況] 削平と重複のため南西部分のみ検出された。

[重複] 第143・144・146号住居跡と重複している。本住居跡は第144、146号住居跡より新しく、第146号住居跡より古い。

[平面形・規模] 西壁の残存部(215cm)、南壁の残存部(165cm)で、平面形は方形を呈すると思われる。

[堆積土] 3層に分層できた。火山灰の混入はみられない。自然堆積と考えられる。

[壁] 壁高は西壁約35cm、南壁35～0cmである。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。

[床面] 貼床は施されていない。

[周溝] 西壁と南壁に周溝がみられる。周溝の幅は6～12cmで、深さは4～10cmである。西壁の周溝の手前に断続的に周溝状のものがみられる。

[柱穴・ピット] 検出されなかった。

[カマド] 残存していない。

[その他の施設] 床面の南西側に直径約1mの皿状のピットが検出された。本住居に伴う何

らかの施設かと思われる。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

(羽柴 直人)

第142号竪穴住居跡 (第98図)

[位置] J-37グリッドに位置する。

[確認状況] 重複のため東側が失われていたが、他の部分は良好な状況で検出された。

[重複] 第143号住居跡と重複している。本住居跡は第143号住居跡より古い。

[平面形・規模] 西壁の残存部(125cm)、南壁の残存部(35cm)、北壁の残存部(45cm)で、方形を呈すると思われる。

[堆積土] 4層に分層できた。火山灰の混入はみられない。自然堆積と考えられる。

[壁] 壁高は西壁約98cm、南壁98～0cm、北壁98～0cmである。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。

[床面] 貼床は施されていない。

[周溝] 南壁と西壁の約2分の1に周溝がみられる。周溝の幅は5～10cmで、深さは、2～10cmである。

[柱穴・ピット] 床面から2個のピットを検出した。これが柱穴と考えられる。

[カマド] なし。

[その他の施設] なし。

[出土遺物] 出土しなかった。

(羽柴 直人)

第142号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	18×18	7	円形	2	35×24	7	楕円形

第143号竪穴住居跡 (第99・100図)

[位置] K・L-36・37グリッドに位置する。

[確認状況] 削平のため東側部分が失われた状況で検出された。

[重複] 141・142・144・146号住居跡と重複している。本住居跡はこれらの住居跡より新しい。

[平面形・規模] 西壁(645cm)、南壁の残存部(272cm)北壁の残存部(230cm)で、方形を呈すると思われる。

[堆積土] 5層に分層できた。火山灰の混入はみられない。自然堆積と考えられる。

[壁] 壁高は西壁82cm、南壁82～0cm、北壁79～0cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

[床面] 厚さ5～25cmで貼床が施されている。

[周溝] 西壁と南壁の一部に周溝がみられる。周溝の幅は20～35cmで、深さは10～18cmである。

[柱穴・ピット] 床面からピット13個を検出したが、柱穴と考えられるものはない。

[カマド] なし

[その他の施設] 本住居に西側に溝（第154号溝）が検出されており、本住居に伴う外周溝の可能性はある。溝は東側に伸びていくと考えられるが、削平のために失われている。溝の幅は31～35cm、深さ12cmほどである。覆土は1層に分けられる。第146号溝と重複しており、第154号溝の方が古い。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

(羽柴 直人)

第144号竪穴住居跡 (第98図)

[位置] J-37グリッドに位置する。

[確認状況] 重複のため南西側の一部分が検出されすぎない。

[重複] 第141・143・144号住居跡と重複している。本住居跡はこれらの住居跡より古い。

[平面形・規模] 西壁の残存部（80cm）、南壁の残存部（18cm）である。平面形は方形を呈すると思われる。

[堆積土] 堆積土は観察することができなかった。

[壁] 壁高は西壁24cm、南壁10～24cmで、壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

[床面] 検出された床面がわずかで、貼床の有無を確認することもできなかった。

[周溝] なし。

[柱穴・ピット] 検出されなかった。

[カマド] 残存していない。

[その他の施設] なし

[出土遺物] 須恵器片が出土した。

(羽柴 直人)

第144号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	18×9	14	楕円形				

第145号竪穴住居跡 (第101図)

[位置] J・K-44・45グリッドに位置する。

[確認状況] 褐色土の広がりとして確認した。

[重複] 第146号土壌と重複しており、本住居跡が新しい。

[平面形・規模] 東西に若干長い方形を呈する。東壁約330cm、西壁約330cm、北壁約360cm、南壁約365cmである。カマド焼土範囲を除いた面積は約7.8m²である。主軸方位はN-34°-Eである。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調としており、炭化物粒及びローム粒を混入する。

[壁] 第IV層を壁としており、やや上方に開き気味に立ち上がる。上部は崩落が認められる。

[床面] 第IV層を掘り込み、上部にロームと褐色土との混合土を貼ったものと推定されるが、貼り床は非常に薄い。

[周溝] カマド部分を除いて、確認できた。西壁下以外は、床面が軟質のため、上端が不明である。西壁下の溝は副10cm~20cmで、深さは6~8cmである。

[柱穴・ピット] 住居跡の四隅の周溝中に4個の柱穴を確認した。主柱穴と考えられる。柱穴は、周溝よりもやや深く穿たれている。

[カマド] 南壁西寄りに構築されている。上部の施設は削平により残存しない。袖の一部と燃焼部の焼土を確認しただけである。また、確認時には、長径170cm、短径110cm程の焼土混じりの範囲を確認した。火床部の焼土は約65×40cm程の範囲で、厚さは約10cmである。袖は左側が残存しており、右側は、粘土のブロックを2個確認できただけである。

[出土遺物] 土師器甕・坏、須恵器片が出土している。

(白鳥 文雄)

第145号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	25×20	8	楕円形	3	30×20	8	楕円形
2	35×20	16	〃	4	35×20	6	〃

第146号竪穴住居跡 (第98図)

[位置] J-36グリッドに位置する。

[確認状況] 重複のため南西側の一部分が検出されたにすぎない。

[重複] 第141・143・144号住居跡と重複している。本住居跡は第141・143号住居跡より古く、第144号住居より新しい。

[平面形・規模] 西壁の残存部(94cm)、南壁の残存部(32cm)である。平面形は方形を呈すると思われる。

- [堆積土] 3層に分けられた。自然堆積か人為堆積かの別は判断できなかった。
- [壁] 壁高は西壁10cm、南壁2～10cmで、壁の立ち上がりはほぼ垂直である。
- [床面] 検出された床面がわずかで、貼床の有無を確認することもできなかった。
- [周溝] 南壁と西壁に周溝がみられる。溝の幅は5～10cm、深さは2～8cmである。
- [柱穴・ピット] 西壁の周溝中にピットが検出された。柱穴と思われる。
- [カマド] 残存していない。
- [その他の施設] なし
- [出土遺物] 須恵器片が出土している。

(羽柴 直人)

第147号竪穴住居跡 (第102図)

- [位置] H～J-44～46グリッドに位置する。
- [確認状況] 試掘調査時に、北壁の一部が確認された。残存状態は良好である。
- [重複] 第138・163号住居跡と重複し、本住居跡が最も新しい。
- [平面形・規模] 住居本体は一辺約660cmの方形を呈し、カマドの南側に張り出し部をもつ。東壁は805cm、南壁640cm、西壁630cm、北壁655cmで、張り出し部は235cm×150cmである。主軸方位はN-56°-Wである。
- [堆積土] 19層に分層できた。暗褐色土を基調としており、ローム粒を混入している。また全体に炭化物粒を含んでいる。壁の直下及び張り出し部分にはローム主体の堆積土が多い。
- [壁] 全面残存状態は良好で、第IV層としており、壁高は80cm～50cmである。ほぼ垂直に立ち上がるが、上方がやや開く傾向がみられ、特に北壁の北寄り部分は大きく開いている。
- [床面] 周溝寄りで不明瞭な部分が多い。地山上にロームと暗褐色土との混合土を薄く貼って床面としている。緩い起伏が認められるが、概ね平坦である。張り出し部は若干の傾斜が認められ、境界部分は地山をベルト状に掘り残こしている。
- [周溝] 張り出し部を含め、全壁下に存在する。また、カマド下にも検出された。幅は15～25cmで、深さは10～20cmである。
- [柱穴・ピット] 10個の柱穴を確認した。No. 7・8を除いて主柱穴と考えられるが、No. 2と3、4と5が同時存在していたかは不明である。またNo. 4はカマドに近接しており、他の用途のピットとも考えられる。
- [カマド] 東壁の南寄りに位置し、両袖の中央部が確認できなかった。また、燃烧部の東側は後世の柱穴により攪乱を受けていた。火床部は45cm×40cmで、焼土の厚さは8cm程である。カマド煙道部は粘土により構築されており、上部は明瞭に確認できなかった。また煙出し部も

不明である。

[出土遺物] 覆土中及び床面・カマド内から土師器甕・坏・須恵器片等が出土した。

(白鳥 文雄)

第147号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	52×44	38	楕円形	6	50×46	40	楕円形
2	48×39	14	〃	7	28×22	10	〃
3	58×40	50	〃	8	40×38	11	〃
4	58×54	33	円形	9	32×32	35	円形
5	62×54	56	〃	10	34×22	34	楕円形

第148号竪穴住居跡 (第105図)

[位置] F・G-37グリッドに位置する。

[確認状況] 削平と重複のため東壁、南壁、及び北壁の大部分が失われていたが、西壁は良好な状況で検出された。

[重複] 第142号土壇、146・152・153号溝と重複している。本住居跡は第146・152・153号溝、第42号土壇より古い。

[平面形・規模] 西壁(518cm)、南壁の残存部(76cm)、北壁の残存部(65cm)で、平面形は方形を呈すると思われる。

[堆積土] 3層に分層された。火山灰の混入はみられない。自然堆積と考えられる。

[壁] 壁高は西壁28cm、南壁28～0cm、北壁28～0cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

[床面] 2～5cmの厚さで貼床を施している。

[周溝] 西壁と南壁、北壁に周溝がみられる。周溝の幅は8～15cmで、深さは6～12cmである。

[柱穴・ピット] 床面及び周溝中からピットを3個検出した。周溝中のNo. 1、2が主柱穴と考えられる。

[カマド] 残存していない。

[その他の施設] 本住居の西側に溝(第151号溝)が検出されており、本住居に伴う外周溝の可能性はある。溝は東側に伸びていくと考えられるが、削平のために失われている。溝の幅は25～30cm、深さ10cmほどである。覆土は1層に分けられる。

[出土遺物] 須恵器片が出土している。

(羽柴 直人)

第148号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	21×20	24	円形	3	73×66	15	不整形
2	26×17	27	楕円形				

第149号竪穴住居跡 (第106・107図)

[位置] E～G-36・37グリッドに位置する。

[確認状況] 削平のため南壁の半分と北壁の大部分、東壁の全部が失われており、また南西コーナー部分も重複のため失われている。

[重複] 第152・153号住居跡、第146号溝と重複している。本住居跡は152、153号住居跡より新しく、第146号溝より古い。

[平面形・規模] 西壁の残存部(270cm)、南壁の残存部(245cm)、北壁の残存部(72cm)で、平面形は方形を呈すると思われる。

[堆積土] 4層に分層された。火山灰の混入はみられない。自然堆積と考えられる。

[壁] 壁高は西壁約35cm、南壁35～0cm、北壁35～0である。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。

[床面] 貼り床は施されていない。

[周溝] 西壁と南壁、北壁のカマド部分を除き周溝がみられる。周溝の幅は15～31cmで、深さは10～18cmである。

[柱穴・ピット] 床面から6個のピットを検出したが、柱穴と考えられるものはない。

[カマド] 南壁中央?に構築されている。削平のため煙道部分が失われているが他の部分の残存状態は良好である。燃焼部火床面は両袖の中央からやや東寄りにあり、焼土範囲は直径約35cmである。袖は粘土をつき固めて構築している。

[その他の施設] 床面の南西側に馬蹄形の溝がみられるが、本住居に伴うかどうかは不明である。

[出土遺物] 土師器・須恵器片が出土している。

(羽柴 直人)

第150号竪穴住居跡 (第108・109図)

[位置] E～G-39～41グリッドに位置する。

[確認状況] 削平のため東壁が失われていたが、他の部分は良好な状況で確認された。

[重複] 第151・154・158～160号住居跡、第149号土壇と重複している。本住居跡は第154、158、159号住居跡、第149号土壇より新しく第151、160号住居跡より古い。

[平面形・規模] 東壁（約530cm）、西壁（525cm）、南壁（562cm）、北壁（543cm）の方形を呈する。

[堆積土] 8層に分層された。火山灰の混入はみられない。自然堆積と考えられる。

[壁] 削平のため東壁が、重複のため西壁の一部が失われている。壁高は西壁約90cm、南壁90～0cm、北壁90～0cmである。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。

[床面] 2～5cmの厚さで貼床を施している。カマドの前面に浅い溝がみられ、間仕切りの施設かとも考えられる。

[周溝] 東壁と南壁、北壁の東端は削平のためはっきりしないが、カマド部分を除き周溝がみられる。周溝の幅は15～48cmで、深さは10～18cmである。

[柱穴・ピット] 床面及び周溝中から12個のピットを検出した。周溝中のNo. 1～6が支柱穴と考えられる。

[カマド] 南壁西寄りに構築されている。残存状態は良好である。燃焼部火床面は両袖の中央部分にあり、焼土範囲は直径約30cmである。袖は粘土をつき固めて構築しており、芯材は使用していない。煙道は長さ約50cmで、かなりの角度で立ち上がっている。半地下式のものである。

[その他の施設] 本住居の西側に溝（第157号溝）が検出されており、本住居に伴う外周溝の可能性もある。溝は東側に伸びていくと考えられるが、削平のために失われている。溝の幅は25～79cm、深さ10cmほどである。

[出土遺物] 覆土・床面から土師器・須恵器・鉄器・鉄滓等が出土している。

（羽柴 直人）

第150号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	40×29	20	長方形	4	51×25	8	不整形
2	32×20	12	〃	5	28×27	34	円形
3	45×26	24	不整形	6	34×33	13	楕円形

第151号竪穴住居跡 （第110図）

[位置] G-41グリッドに位置する。

[確認状況] 他の遺構と重複しているが、本住居跡が一番新しい良好な状況で確認された。

[重複] 第150・154・158号住居跡と重複している。本住居跡は第150、154、158号住居跡より新しい。

[平面形・規模] 東壁（210cm）、西壁（195cm）、南壁（272cm）、北壁（256cm）の方形を呈する。

[堆積土] 4層に分層された。火山灰の混入はみられない。自然堆積と考えられる。

[壁] 壁高は東壁36cm、西壁79cm、南壁79～36cm、北壁79～36cmである。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。

[床面] 貼床は施されていない。

[周溝] 南壁、西壁、北壁に周溝がみられる。東壁には周溝は確認できなかった。周溝の幅は3～25cmで、深さは10～18cmである。

[柱穴・ピット] 床面及び周溝中から検出したピットはないが、周溝の四隅がやや深くなっており主柱穴と考えられる。

[カマド] なし。

[その他の施設] なし。

[出土遺物] 土師器・須恵器・鉄器・鉄滓が出土している。

(羽柴 直人)

第152号竪穴住居跡 (第111図)

[位置] E～G-36グリッドに位置する。

[確認状況] 削平と重複のため南西側の一部分が検出されたにすぎない。

[重複] 第149・153号住居跡と重複している。本住居跡は第153号住居跡より新しく、第149号住居跡より古い。第148号住居跡とは直接重複していないが、本住居に伴うと考えられる第152号溝より第148号住居が古く、本住居か第148号住居跡より新しいと思われる。

[平面形・規模] 西壁の残存部(495cm)、南壁の残存部(155cm)である。平面形は方形を呈すると思われる。

[堆積土] 1層である。火山灰の混入はみられない。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

[壁] 壁高は西壁12cm、南壁0～12cm、壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。

[床面] 厚さ3～10cmで貼り床が施されている。

[周溝] 南壁、西壁に周溝がみられる。周溝の幅は8～18cmで、深さは5～14cmである。

[柱穴・ピット] 床面及び周溝中から2個のピットを検出した。No. 1が主柱穴と考えられる。

[カマド] 残存していない。

[その他の施設] 本住居の北西側に溝(第152号溝)が検出されており、本住居に伴う外周溝の可能性がある。溝は東側に伸びていくと考えられるが、削平のために失われている。溝の幅は31～72cm、深さ35cmほどである。覆土は5層に分けられた。第146号溝と重複しており、第152号溝の方が古い。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土した。

(羽柴 直人)

第152号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	38×22	10	不整形	2	37×34	31	楕円形

第153号竪穴住居跡 (第112図)

[位置] E～G-36グリッドに位置する。

[確認状況] 削平と重複のため南西側の周溝部分を確認した。

[重複] 第149・153号住居跡と重複している。本住居跡は第153号、第149号住居跡より古い。

[平面形・規模] 西壁の残存部(248cm)、南壁の残存部(155cm)である。平面形は方形を呈すると思われる。

[堆積土] 1層である。苫小牧火山灰の混入がみられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

[壁] 周溝のみの検出で壁の立ち上がりは検出できなかった。

[床面] 厚さ3～8cmで貼床が施されている。

[周溝] 南壁、西壁に周溝がみられる。周溝の幅は13～18cmで、深さは5～9cmである。

[柱穴・ピット] 床面から検出したピットは1個であるが、柱穴とは考えられない。

[カマド] 残存していない。

[その他の施設] 本住居の北西側に溝(第153号溝)が検出されており、本住居に伴う外周溝の可能性がある。溝は東側に伸びていくと考えられるが、削平のために失われている。溝の幅は20～91cm、深さ35cmほどである。覆土は3層に分けられた。第146号溝と重複しており、第153号溝の方が古い。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土した。

(羽柴 直人)

第153号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	109×53	20	楕円形				

第154号竪穴住居跡 (第113図)

[位置] F・G-39～41グリッドに位置する。

[確認状況] 削平のため東壁が、重複のため南壁全部と西壁の半分が失われていたが、他の

部分は良好な状況で検出された。

[重複] 第151・150・158号住居跡と重複している。本住居跡は第158号住居跡より新しく、第151、150より古い。

[平面形・規模] 東壁（約495cm）、西壁（473cm）、南壁（473cm）、北壁（468cm）の方形を呈する。面積は（約21.8㎡）である。

[堆積土] 4層に分層された。火山灰の混入はみられない。自然堆積と考えられる。

[壁] 削平のため東壁が、重複のため南壁全部と西壁の半分が失われている。壁高は西壁約55cm、北壁55～0cmである。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。

[床面] 5～7cmの厚さで貼床を施している。

[周溝] 南壁と西壁に周溝がみられる。北壁には周溝はみられない。東壁は削平のため有無は不明である。周溝の幅は8～21cmで、深さは10～18cmである。

[柱穴・ピット] 床面及び周溝中から20個のピットを検出した。周溝中と壁際のNo. 1～8が主柱穴と考えられる。

[カマド] カマドは検出されなかったが南壁中央に皿状のピットがみられ、その埋土中に焼土やカマドの構築材と思われる粘土が多量に認められた。これはこの住居のカマドを壊した痕跡と思われる。

[その他の施設] 床面の西側にみられる溝は、間仕切りの可能性がある。

[出土遺物] 覆土・床面から土師器・須恵器・鉄器等が出土した。

（羽柴 直人）

第154号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	31×20	29	楕円形	5	24×25	14	楕円形
2	26×18	10	円形	6	24×22	14	円形
3	30×28	22	楕円形	7	31×28	22	不整形
4	31×24	37	〃	8	33×26	14	長方形

第158号竪穴住居跡 （第158図）

[位置] G-39～41グリッドに位置する。

[確認状況] 重複のため北壁と西壁の半分を確認したにすぎない。

[重複] 第151・150・154号住居跡と重複している。本住居跡は第151・150・154号住居跡より古い。

[平面形・規模] 西壁の残存部（247cm）、北壁（約470cm）で方形を呈すると思われる。

[堆積土] 4層に分層された。火山灰の混入はみられない。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

[壁] 壁高は西壁約41cm、北壁は41～0 cmである。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。

[床面] 残存する部分が少ないため床面の状態はよく観察できなかった。

[周溝] 西壁に周溝がみられる。北壁には周溝はみられない。周溝の幅は8～18cmで、深さは10～18cmである。

[柱穴・ピット] 床面及び周溝中から3個のピットを検出した。周溝中と壁際のNo. 1～3が支柱穴と考えられる。

[カマド] 残存していない。

[その他の施設] なし。

[出土遺物] 出土しなかった。

(羽柴 直人)

第158号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	27×26	8	円形	3	27×24	13	円形
2	22×18	6	々				

第159号竪穴住居跡 (第114図)

[位置] F-41グリッドに位置する。

[確認状況] 重複のため北西側約4分の1が検出されたにすぎない。

[重複] 第150・160号住居跡、第157号溝と重複している。本住居跡は第150・160号住居跡、第157号溝より古い。

[平面形・規模] 西壁の残存部(358cm)、北壁の残存部(約148cm)で方形を呈すると思われる。

[堆積土] 5層に分層された。第1層に少量の苫小牧火山灰が混入していた。自然堆積したものと思われる。

[壁] 壁高は西壁約35cm、北壁35～0 cmである。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。

[床面] 厚さ5～23cmで貼床が施されている。

[周溝] 西壁と北壁に周溝がみられる。周溝の幅は8～23cmで、深さは10～16cmである。

[柱穴・ピット] 床面及び周溝中から4個のピットが検出された。周溝中のNo. 1～2が支柱穴と考えられる。

[カマド] 残存していない。

[その他の施設] なし。

[出土遺物] 出土しなかった。

(羽柴 直人)

第159号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	23×15	13	楕円形	3	29×17	12	楕円形
2	22×22	9	円形	4	27×21	24	〃

第160号竪穴住居跡 (第115図)

[位置] D～F-40・41グリッドに位置する。

[確認状況] 削平のため東壁が失われていたが、他の部分は良好な状況で検出された。

[重複] 第159・150号住居跡、第35、37号掘立柱建物跡と重複している。本住居跡は第150、159号住居跡より新しい。第35、37号掘立柱建物との前後関係は不明である。

[平面形・規模] 東壁(約481cm)、西壁(475cm)、南壁(476cm)、北壁(475cm)の方形を呈し、面積は約(21.9㎡)である。

[堆積土] 5層に分層された。第1層上部に苦小牧火山灰の混入が少量みられた。自然堆積と考えられる。

[壁] 削平のため東壁が失われている。壁高は西壁約53cm、南壁53～0cm、北壁53～0cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

[床面] ローム面をそのまま床面にしており、貼り床は施されていない。カマドの前面に浅い溝がみられ、間仕切りの施設である可能性も考えられる。

[周溝] なし。

[柱穴・ピット] 床面から21個のピットを検出した。壁際のNo. 1～15が支柱穴と考えられる。

[カマド] 東壁南寄りに構築されている。削平のため焼燃部火床面のみ検出された。焼土範囲は直径約50cmである。

[その他の施設] なし。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

(羽柴 直人)

第160号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	29×23	23	円形	9	23×23	34	円形
2	31×18	30	楕円形	10	23×22	30	不整形
3	16×11	36	円形	11	20×15	29	楕円形
4	25×17	31	〃	12	26×15	33	不整形
5	32×32	30	〃	13	38×35	32	楕円形
6	25×17	23	楕円形	14	24×24	36	円形
7	18×13	28	〃	15	21×20	11	〃
8	15×13	21	円形				

第161号竪穴住居跡 (第116・117図)

[位置] L・M-38・39グリッドに位置する。

[確認状況] 削平のため東側が失われていたが、他の部分は良好な状況で検出された。

[重複] 第162号住居跡、第159号土壙と重複している。本住居跡は第162号住居跡、第159号土壙より新しい。

[平面形・規模] 西壁(485cm)、南壁の残存部(395cm)、北壁の残存部(220cm)で平面形は方形を呈する。

[堆積土] 6層に分層された。自然堆積と考えられる。

[壁] 削平のため東壁が失われている。壁高は西壁約63cm、南壁63-0cm、北壁63-0cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

[床面] 5-15cmの厚さで貼り床が施されている。

[周溝] 西壁と北壁、南壁のカマドより西側に周溝がみられる。幅は10-25cm、深さは10-14cmである。

[柱穴・ピット] 2個のピットを床面から検出したが柱穴と考えられるものはない。カマドの東側の方形のピットは貯蔵穴の類と思われる。

[カマド] 南壁西寄りに構築されている。焼土範囲は直径約30cmである。支脚は土師器の甕の下半部を倒立させたものである。袖は西側の一部が欠如しているが、粘土をつき固めて構築したものである。煙道部は半地下式で、長さは約80cmで、緩やかに立ち上がっている。カマド全体が南壁に対してやや右側に曲っている。

[その他の施設] なし。

[出土遺物] 土師器・須恵器片が出土した。

(羽柴 直人)

第162号竪穴住居跡 (第116図)

[位置] L・M-39・40グリッドに位置する。

[確認状況] 重複のため東側の大部分が失われていたが、西壁は良好な状況で確認された。

[重複] 第161号住居跡、第159号土壙と重複している。本住居跡は第161号住居跡より古く、第159号土壙より新しい。

[平面形・規模] 西壁(503cm)、南壁の残存部(150cm)、北壁の残存部(105cm)で平面形は方形を呈する。

[堆積土] 3層に分層された。自然堆積と考えられる。

[壁] 削平のため東壁は失われている。壁高は西壁約45cm、南壁45-13cm、北壁45-13cmで

ある。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

[床面] 5～10cmの厚さで貼り床が施されている。

[周溝] 西壁と北壁、南壁に周溝がみられる。幅は10～23cm、深さは7～14cmである。

[柱穴・ピット] 検出されなかった。

[カマド] 残存していない。

[その他の施設] なし。

[出土遺物] 出土しなかった。

(羽柴 直人)

第163号竪穴住居跡 (第118図)

[位置] H・I-44グリッドに位置する。

[確認状況] 重複のため西側は失われていたが、その他は良好な状況で確認された。

[重複] 第147号住居跡と重複している。本住居跡は第147号住居跡より古い。

[平面形・規模] 東壁(265cm)、南壁(290cm)、北壁(220cm)で、平面形は方形を呈すると思われる。

[堆積土] 7層に分層された。火山灰の混入はみられない。自然堆積と考えられる。

[壁] 壁高は東壁約8cm、南壁8～10cm、北壁6～12cmで、壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。

[床面] 2～12cmの厚さで貼床を施している。

[周溝] なし。

[柱穴・ピット] 床面から4個のピットを検出した。北壁際No. 1が柱穴の可能性がある。

[カマド] 南壁中央に構築されている。燃焼部火床面は両袖中央からやや東寄りにある。袖は粘土をつき固めて構築しており、芯材は使用されていない。煙道は15cmと短く急激に立ち上がっている。

[その他の施設] なし。

[出土遺物] 土師器片が出土している。

(羽柴 直人)

第163号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	34×34	62	楕円形	3	27×22	12	楕円形
2	31×31	13	不整形	4	50×46	23	不整形

第164号竪穴住居跡 (第119・120・121図)

[位置] J-42、K・L-41・42グリッドに位置する。

[確認状況] 削平のため東側が失われている。その他は良好な状態で確認された。

[重複] 第165号住居跡、第175、179、182～184号土壇と重複している。本住居跡は、第165号住居跡、第175、182、183、184号土壇より新しく第179号土壇より古い。

[平面形・規模] 西壁(683cm)、南壁の残存部(538cm)、北壁の残存部(359cm)で、平面形は方形を呈する。

[堆積土] 13層に分層された。火山灰の混入はみられない。自然堆積と考えられる。

[壁] 壁高は西壁約102cm、南壁102～0cm、北壁102～0cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

[床面] 厚さ2～14cmで貼床は施されている。

[周溝] 西壁と南壁、北壁に周溝がみられる。周溝の幅は21～43cmで、深さは10～17cmである。

[柱穴・ピット] 床面から14個のピットを検出した。No. 1～4が支柱穴と考えられる。

[カマド] 南壁西寄りに構築されている。燃焼部火床面は浅く掘り込まれており、焼土範囲は直径約45cmである。羽口が2本みられ、支脚として使用されたものと考えられる。袖は、羽口を芯材にして粘土をつき固めて構築している。煙道の長さは、約95cmで緩やかに立ち立ち上がっている。

[その他の施設] なし。

[出土遺物] 土師器・須恵器・鉄器等が出土している。

(羽柴 直人)

第164号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	50×44	39	楕円形	3	36×29	57	楕円形
2	42×30	70	〃	4	69×59	20	〃

第165号竪穴住居跡 (第122図)

[位置] J・K-41・42グリッドに位置する。

[確認状況] 削平と重複のため南西部分が検出されたとすぎない。

[重複] 第164号住居跡と重複している。本住居跡は第165号住居跡より古い。

[平面形・規模] 西壁の残存部(330cm)、南壁の残存部(200cm)で、平面形は方形を呈すると思われる。

[堆積土] 堆積土は存在せず、第164号住居の貼り床を剥がしたら検出されたものである。

[壁] 壁高は南壁約2 m、西壁は周溝のみの検出で、壁面は検出されなかった。

[床面] 貼床は施されていない。

[周溝] 西壁に周溝がみられる。周溝の幅は15～30cmで、深さは5～12cmである。

[柱穴・ピット] 南西隅からピットが1個検出され、柱穴と考えられる。

[カマド] 南壁西寄りに構築されている。第165号住居との重複のため、煙道の一部と火床面のみが検出された。火床面の焼土範囲は直径約50cmである。煙道は半地下式で残存部の長さは約56cmで、本来は1 mほどあったと思われる。

[その他の施設] なし。

[出土遺物] 出土しなかった。

(羽柴 直人)

第167号竪穴住居跡 (第123図)

[位置] G・H-45・46グリッドに位置する。

[確認状況] 削平のため東壁と北壁の半分以上が失われているが、その他の部分は良好な状況で確認された。

[重複] 第38号掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係を判断することができなかった。

[平面形・規模] 平面形は、方形を呈し、東壁の残存部分(160cm)、西壁(555cm)、南壁(579cm)、北壁の残存部分(162cm)である。

[堆積土] 4層に分層できた。火山灰の混入はみられない。自然堆積と考えられる。

[壁] 壁高は東壁10～0 cm、西壁35～65cm、南壁65～10cm、北壁35～0 cmである。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。

[床面] 厚さ8～13cmで貼床が施されている。

[周溝] 周溝は東壁、西壁、北壁にみられるが、南壁にはみられない。また西壁の中央部分も周溝が途切れている。周溝の幅は10～18cmで、深さは10～18cmである。

[柱穴・ピット] 床面及び周溝中から検出したピットは9個である。No. 1～7が柱穴と思われる。

[カマド] 東壁南寄りに構築されている。削平のため火床面のみが残存していた。火床面の範囲は約35cmであり、その周りが若干皿状に窪んでいる。

[その他の施設] なし。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

(羽柴 直人)

第167号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	26×26	49	楕円形	5	65×47	48	不整形
2	35×28	39	〃	6	23×21	48	楕円形
3	23×22	6	〃	7	21×18	38	〃
4	41×26	42	長方形				

第168号竪穴住居跡 (第124図)

[位置] D・E-37・38グリッドに位置する。

[確認状況] 削平と重複のため、東壁と北壁の大部分が失われている。床面は西側の壁際のみが残存している状態である。

[重複] 第170・171号住居、第219号土壙、第165・173号溝と重複している。本住居跡は第165号溝より新しいが、この他の遺構よりは古い。

[平面形・規模] 西壁(520cm)、南壁の残存部(460cm)、北壁の残存部(85cm)である。平面形は方形を呈すると思われる。

[堆積土] 2層に分層された。自然堆積と考えられる。1層の上部に苫小牧火山灰の混入がみられる。

[壁] 壁高は西壁約42cm、南壁0～42cm、北壁約26cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

[床面] 貼床は施されていない。

[周溝] 南壁、北壁、西壁に周溝がみられる。周溝の幅は15～18cmで、深さは5～14cmである。

[柱穴・ピット] 床面及び周溝中から検出されたピットは5個で、壁際のNo. 1～5が柱穴と考えられる。

[カマド] 残存していない。

[その他の施設] 本住居の西側に溝(第165号溝)が検出されており、本住居に伴う外周溝の可能性はある。溝は東側に伸びていくと考えられるが、削平のために失われている。溝の幅は31～52cm、深さ13cmほどである。覆土は2層に分けられた。第169号溝と重複しており、第165号溝の方が新しい。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

(羽柴 直人)

第168号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	16×16	13	円形	4	25×24	22	円形
2	14×11	11	楕円形	5	28×26	14	楕円形
3	22×21	19	円形				

第170号竪穴住居跡 (第125図)

[位置] D・E-37に位置する。

[確認状況] 削平と重複のため西側約半分が検出されたにすぎない。

[重複] 第168・171号住居跡、第217土壙、第173・146号溝と重複している。本住居跡は第168・171号住居跡、第217号土壙、第173号溝より新しく、第146号溝より古い。

[平面形・規模] 西壁(495cm)、南壁の残存部(248cm)、北壁の残存部(271cm)である。平面形は方形を呈すると思われる。

[堆積土] 火山灰の混入はみられない。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

[壁] 壁高は西壁約62cm、南壁0～62cm、北壁0～62cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

[床面] 厚さ8～10cmで貼床が施されている。

[周溝] 南壁、北壁、西壁に周溝がみられる。周溝の幅は15～25cm、深さは5～18cmである。

[柱穴・ピット] 検出されなかった。

[カマド] 残存していない。

[その他の施設] なし。

[出土遺物] 土師器・須恵器・鉄器等が出土している。

(羽柴 直人)

第171号竪穴住居跡 (第126図)

[位置] D・E-37グリッドに位置する。

[確認状況] 削平と重複のため西側約半分のみを検出である。

[重複] 第168・170号住居跡、第146号溝と重複している。本住居跡は第168号住居跡より新しく、第170号住居跡、第146号溝より古い。

[平面形・規模] 西壁(415cm)、南壁の残存部(205cm)、北壁の残存部(210cm)で、平面形は方形を呈すると思われる。

[堆積土] 第170号住居跡の貼り床を剥がしてから検出されたもので、堆積土はみられなかった。

[壁] 壁高は西壁約10cm、北壁10～0cm、南壁10～0cmである。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。

[床面] 5cmほどの厚さで部分的に貼り床を施している。

[周溝] 南壁、北壁、西壁に周溝がみられる。周溝の幅は8～31cmで、深さは1～18cmである。

[柱穴・ピット] 8個のピットを床面及び周溝から検出した。周溝中と壁際のNo. 1～5が柱穴と考えられる。

[カマド] 残存していない。

[その他の施設] 本住居の西側に溝（第173号溝）が検出されており、本住居に伴う外周溝の可能性はある。溝は東側に伸びていくと考えられるが、削平のために失われている。溝の幅は31～92cm、深さ45cmほどである。覆土は1層に分けられた。また、床面西側に周溝状の溝がみられるが、間仕切りの施設である可能性もある。

[出土遺物] 出土しなかった。

(羽柴 直人)

第171号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	11×9	16	楕円形	4	15×13	22	楕円形
2	16×15	8	ク	5	55×33	29	不整形
3	41×37	22	不整形				

第173号竪穴住居跡 (第127・128図)

[位置] C-33グリッドに位置する。

[確認状況] 削平のため東側が失われた状態で検出された。

[重複] 第174・175号住居跡、第169号溝と重複している。本住居跡は第174・175号住居、169号溝より新しい。

[平面形・規模] 西壁(262cm)、北壁の残存部(130cm)、南壁の残存部(228cm)で方形を呈すると思われる。

[堆積土] 3層に分層された。火山灰の混入はみられない。自然堆積したものと思われる。

[壁] 壁高は西壁約38cm、北壁38～0cm、南壁38～0cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

[床面] 厚さ5～15cmの貼り床を施している。

[周溝] 西壁と北壁、南壁の東側に周溝がみられる。周溝の幅は18～30cmで、深さは10～18cmである。

[柱穴・ピット] ピットは3個で床面から検出した。南東隅のNo. 1が柱穴の可能性はある。

[位置] 南壁のやや東寄りに構築されている。火床面の径は約40cm、袖は扁平な礫を芯材にして粘土をつき固めて構築したものである。煙道は長さは55cmで半地下式のものである。

[その他の施設] 本住居の西側に溝(第167溝)が検出されており、本住居に伴う外周溝の可能性はある。溝は東側に伸びていくと考えられるが、削平のために失われている。溝の幅は18~26cm、深さ10cmほどである。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

(羽柴 直人)

第174号竪穴住居跡 (第129図)

[位置] C・D-37・38に位置する。

[確認状況] 削平のため北東側と坏側の大部分が失われた状態で検出された。

[重複] 第173・175号住居跡、第165号溝、第222号土壌と重複している。本住居跡は、第173号住居跡、第157号溝、第222号土壌より古く、第175号住居跡より新しい。

[平面形・規模] 西壁(399cm)、南壁の残存部(310cm)、北壁の残存部(100cm)で方形を呈すると思われる。

[堆積土] 2層に分層された。自然堆積したものと思われる。

[壁] 壁高は西壁約20cm、南壁20~0cm、北壁20~0cmである。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。

[床面] 厚さ8~20cmで部分的に貼床が施されている。

[周溝] 西壁、南壁、北壁に周溝がみられる。周溝の幅は10~20cmで、深さは10~1cmである。

[柱穴・ピット] ピットは3個で、周溝中から検出した。柱穴と考えられる。

[カマド] 残存していない。

[その他の施設] 本住居の西側に溝(第169号溝)が検出されており、本住居に伴う外周溝の可能性はある。溝は東側に伸びていくと考えられるが、削平のために失われている。溝の幅は42~75cm、深さ28cmほどである。覆土は4層に分けられた。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

(羽柴 直人)

第175号竪穴住居跡 (第129図)

[位置] C・D-37・38グリッドに位置する。

[確認状況] 削平と重複のため北東側が失われていたが、その他の部分は概ね良好な状況で検出された。

[重複] 第173・174号住居跡、第165号溝、第222号土壙と重複している。本住居跡は第173・174号住居跡、第165号溝、第222号土壙より古い。

[平面形・規模] 西壁(345cm)、南壁の残存部(260cm)、北壁の残存部(68cm)で、平面形は方形を呈すると思われる。

[堆積土] 1層である。堆積は非常に薄く、その上に174号住居の貼り床がみられる。

[壁] 壁高は西壁約12cm、南壁12～0cm、北壁12～0cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

[床面] 厚さ3～5cmの部分的な貼り床を施している。

[周溝] 西壁、南壁、北壁に周溝がみられる。幅は10～22cm、深さは1～12cmである。

[柱穴・ピット] ピットは9個で床面と周溝中から検出した。周溝中のNo. 1～3が柱穴と考えられる。

[カマド] 南壁寄りに構築されている。削平のため燃焼部火床面のみが検出された。焼土範囲は直径約50cmである。

[その他の施設] カマドの前面に浅い溝がみられ、間仕切り施設の可能性が考えられる。また床面の南西隅に直径110cmの皿状のピットが検出されており何らかの施設と思われる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(羽柴 直人)

第176号竪穴住居跡 (第130図)

[位置] A・B-41グリッドに位置する。

[確認状況] 削平のため東側が失われている。他は良好な状態で検出された。

[重複] 第177号住居跡、第236号土壙と重複するが本住居が新しい。

[平面形・規模] 西壁(562cm)、南壁の残存部(262cm)、北壁の残存部(335cm)で、平面形は方形を呈するものと思われる。

[堆積土] 4層に分層できた。火山灰の混入はみられない。自然堆積と考えられる。

[壁] 壁高は西壁62cm、南壁62～0cm、北壁62～0cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

[床面] 厚さ2～18cmで貼床が施されている。

[周溝] 西壁、南壁、北壁に周溝がみられる。幅は12～22cmで深さは4～18cmである。

[柱穴・ピット] 床面から検出したピットは2個であるが、柱穴と判定できるものはない。

[カマド] 残存していない。

[その他の施設] 北西隅に炭化物、西壁際中央に二次的に堆積した焼土がみられた。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

(羽柴 直人)

第177号竪穴住居跡 (第131図)

[位置] A・B-41グリッドに位置する。

[確認状況] 削平のため東側が失われている。他は良好な状態で確認された。

[重複] 第176号住居跡と重複するが本住居が古い。

[平面形・規模] 西壁(522cm)、南壁の残存部(272cm)、北壁の残存部(232cm)で、平面形は方形を呈すると思われる。

[堆積土] 第176号住居跡の貼り床を剥がした結果検出されたもので、堆積土はほとんど無かった。

[壁] 壁高は西壁12cm、南壁12～0cm、北壁12～0cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

[床面] 厚さ2～12cmで貼り床が施されている。

[周溝] 西壁、南壁、北壁に周溝がみられる。幅は18～26cmで深さは2～22cmである。南壁では、周溝が2条になっている。

[柱穴・ピット] 周溝内から検出されたピットが柱穴と考えられる。床面の中央部には大きめのピットが3個検出されている。

[カマド] 残存していない。

[その他の施設] なし。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

(羽柴 直人)

第178号竪穴住居跡 (第132図)

[位置] I Z・A-39グリッドに位置する。

[確認状況] 削平と重複のため東壁側が失われていたが、他の部分は概ね良好な状態で検出された。

[重複] 第174号溝と重複している。本住居跡が第174号溝より新しい。

[平面形・規模] 西壁(215cm)、南壁の残存部(200cm)、北壁の残存部(195cm)で、平面形は方形を呈すると思われる。

[堆積土] 2層に分層された。火山灰の混入はみられない。

[壁] 壁高は西壁約22cm、南壁22～0cm、北壁22～0cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

[床面] 厚さ5～10cmで部分的に貼り床を施している。

[周溝] なし。

[柱穴・ピット] 検出されなかった。

[カマド] なし。

[その他の施設] なし。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

(羽柴 直人)

第179号竪穴住居跡 (第133図)

[位置] I Y-37・38グリッドに位置する。

[確認状況] 削平のため床面が検出されたのは西側のわずかな部分だけで、周溝のみから確認された。

[重複] なし。

[平面形・規模] 東壁(356cm)、西壁(358cm)、南壁(358cm)、北壁(355cm)で方形を呈する。

[堆積土] 2層に分層された。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

[壁] 壁高は西壁の約4cmのみで、他は周溝のみの検出で壁高を計ることはできない。

[床面] 床面の残存状態が非常に悪く、床面の状態は観察することができなかった。

[周溝] 4壁側に周溝がみられる。幅は22～30cm、深さは10～18cmである。

[柱穴・ピット] 北西隅と南西隅の周溝中にピットがみられ、柱穴と考えられる。

[カマド] 残存していないが、東壁の南寄りの周溝が途切れている部分に構築されていたと考えられる。

[その他の施設] 本住居の北側と西側に溝(第175号溝)が検出されており、本住居に伴う外周溝の可能性がある。溝は本住居の南側にも伸びていくと考えられるが、削平のために失われている。溝の幅は45～65cm、深さ45cmほどである。覆土は1層に分けられた。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

(羽柴 直人)

第179号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	10×8	22	楕円形	3	50×38	12	楕円形
2	12×11	27	々				

第180号竪穴住居跡 (第134図)

[位置] I Y・I Z-36・37グリッドに位置する。

[確認状況] 削平と重複のため東側が失われた状態で確認された。

[重複] 第146・166溝と重複している。本住居はこれらの溝より古い。

[平面形・規模] 西壁(305cm)、南壁の残存部(145cm)、北壁の残存部(235cm)で、平面形は方形を呈すると考えられる。

[堆積土] 3層に分層された。自然堆積したものと思われる。

[壁] 壁高は西壁約32cm、南壁は0～32cm、北壁も0～32cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

[床面] 厚さ5～8cmの貼り床を施している。

[周溝] 西壁、南壁、北壁に周溝がみられる。幅は15～20cm、深さは1～18cmである。

[柱穴・ピット] 検出されなかった。

[カマド] 残存していない。

[その他の施設] 貼り床を剥がしたところ105cm×130cmのピットが検出された。

[出土遺物] 出土しなかった。

(羽柴 直人)

第181号竪穴住居跡 (第135図)

[位置] I Y-39グリッドに位置する。

[確認状況] 削平のため確認されたのは南西側のわずかな部分だけである。

[重複] なし

[平面形・規模] 西壁の残存部(55cm)、南壁の残存部(135cm)で、方形を呈すると思われる。

[堆積土] 1層である。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[壁] 西壁の壁高は約4cm、南壁は約2cmで、他は削平のため壁高は不明である。

[床面] 厚さ5～10cmの貼り床が施されている。

[周溝] 西壁に周溝がみられる。幅は3～5cm、深さは2～5cmである。

[柱穴・ピット] 南西隅と北西隅部分にピットと思われるくぼみが認められ、柱穴と考えら

れる。

[カマド] 残存していない。

[その他の施設] 本住居の南側と西側に溝（第176号溝）が検出されており、本住居に伴う外周溝の可能性がある。溝は馬蹄形ではなく、北側には延びていない。溝の幅は45～65cm、深さ30cmほどである。覆土は2層に分けられた。

[出土遺物] 土師器片が出土している。

(羽柴 直人)

第181号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	23×21	20	楕円形	2	29×27	17楕円形	

第182号竪穴住居跡 (第136図)

[位置] I X・I Y-41・42グリッドに位置する。

[確認状況] 削平のため東側が失われている。

[重複] 第183号住居跡、第240号土壇と重複している。本住居はこれらの遺構より新しい。

[平面形・規模] 西壁（685cm）、南壁の残存部（572cm）、北壁の残存部（475cm）で、方形を呈すると思われる。

[堆積土] 5層に分層された。自然堆積したものと思われる。

[壁] 壁高は西壁約4cm、南壁は約2cmで、他は削平のため壁高は不明である。

[床面] 厚さ3～10cmの貼り床が施されている。

[周溝] 西壁、南壁、北壁に周溝がみられる。幅は32～45cm、深さは5～10cmである。

[柱穴・ピット] 床面と周溝内から9個のピットが検出された。No. 1～4が柱穴と考えられる。

[カマド] 残存していない。

[その他の施設] 床面の北寄りに長さ3mほどの溝が検出されたが、本住居に伴うものかどうかは不明である。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

(羽柴 直人)

第182号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	30×24	30	不整形	3	37×33	41	楕円形
2	42×40	32	楕円形	4	36×26	28	不整形

第183号竪穴住居跡 (第137図)

[位置] I X・I Y-41・42グリッドに位置する。

[確認状況] 重複と削平のため北西部分が検出されたとすぎない。

[重複] 第183号住居跡、第44号掘立柱建物跡と重複している。本住居は第183号住居跡より古く、第44号掘立柱建物より新しい。

[平面形・規模] 西壁の残存部(560cm)、北壁の残存部(165cm)で、方形を呈すると思われる。

[堆積土] 2層に分層された。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[壁] 壁高は西壁約8cm、北壁は0～8cmで、他は削平のため壁高は不明である。

[床面] 厚さ2～10cmの貼り床が施されている。貼り床中に苦小牧火山灰が混入している。

[周溝] 西壁、北壁に周溝がみられる。幅は10～30cm、深さは5～10cmである。

[柱穴・ピット] ピットが3個床面と周溝内から検出された。西壁の周溝中央のピットが柱穴と考えられる。

[カマド] 残存していない。

[その他の施設] なし。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

(羽柴 直人)

第183号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	30×29	12	不整形				

第301号竪穴住居跡 (第160図)

[位置] O・P-52・53グリッドに位置する。

[確認状況] 削平のため、貼り床の一部だけを確認した。

[重複] 認められなかった。

[平面形] 削平のため、不明である。

[堆積土] 削平のため、確認できなかった。

[壁] 削平のため、確認できなかった。

[床面] 黄褐色土とロームを混ぜ合わせた貼り床が、幾分残存している。

[壁溝] 確認できなかった。

[柱穴・ピット] 大小15個のピットを検出したが、配列については、不明である。

[炉] 石囲炉及び土器片敷炉の2基を確認した。石囲炉は、北側が開放されたコの字状をしており、礫が10点検出された。土器片敷炉は、1個体分の土器が出土した。西側と北側及び南

側の一部に土器を囲っており、東側が開放されたコの字状をしている。

〔出土遺物〕 第2号炉から土器が1個体分及び、確認面からも土器が出土した。

〔その他〕 西側部分に、ほぼ平行に並ぶ立石を2点確認したが、用途については不明である。

本住居跡の時期は、第2号炉の土器から榎林式期と思われる。

(小館 孝浩)

第301号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	28×25	14.4	不整形	9	22×20	12.8	円形
2	25×25	19.7	長方形	10	43×30	16.5	楕円形
3	23×22	11.8	円形	11	43×44	26.7	円形
4	26×30	37.1	〃	12	43×34	21.8	楕円形
5	26×29	31.6	〃	13	21×24	25.9	円形
6	15×14	39.4	〃	14	30×30	13.5	〃
7	29×28	22.4	〃	15	26×28	16.7	〃
8	16×17	6.8	〃				

第302号竪穴住居跡 (第138～140図)

〔位置〕 D・E-46グリッドに位置する。

〔確認状況〕 削平及び重複しているが、概ね残存状態は良好である。

〔重複〕 第303号住居跡、第351～353号土壇と重複している。本住居跡はいずれの遺構より新しい。また、本住居跡の確認面に3個のピットを検出したが、これは本住居跡よりも新しく本住居跡には伴わないと考えられる。

〔平面形・規模〕 東壁573cm、南壁553cm、西壁523cm、北壁530cmで方形を呈する。主軸方位はN-179°-Eである。面積は(約23.2㎡)である。

〔堆積土〕 26層に分層できた。黄褐色土を基調としており、ローム・炭化物粒が混入する。自然堆積と考えられる。

〔壁〕 東壁は傾斜地下側の為に、ほとんど周溝だけの確認である。第IV層を壁面としており、壁高は東壁5cm、西壁60cm、南壁60cm、北壁47cmである。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直で堅緻である。

〔床面〕 床面は第IV層を掘り混み、貼り床は東側に若干認められた。カマド付近を除いて全体に堅緻である。

〔周溝〕 カマドの部分を除いてすべての壁際に残存する。周溝の幅は、11～24cmで、深さは17～25cmである。

〔柱穴・ピット〕 本住居跡の確認面から3個のピットを検出したが、本住居跡には伴わない。床面及び周溝中から検出した小ピットは13個で、ピット3～9は周溝の中に位置する。また、

ピット14～16は床面の下から検出された。どれが主柱穴を構成していたかは不明である。

[カマド] 南壁西寄りに構築されており、残存状態は不良で、特に煙道部は第Ⅲ層を掘り込んで構築されていたために、煙道部壁面の確認は不明瞭であった。燃烧部火床面の焼土範囲は直径約45cmで深さは7cmである。袖部も残存状態は不良であるが、床面上に粘土をつき固めて構築しており、芯材は使用していない。煙道部は上部が削平されているため、構築方法が確認できなかった。

[その他の施設] 本住居跡の西側に位置する、第303号住居跡の北側は、本住居跡の拡張部分、または本住居跡以前に構築された部分とも考えられる。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

(成田 悟)

第302号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	50×39	17	不整楕円	9	19×15	69	円形
2	23×22	35	円形	10	45×30	55	楕円形
3	25×13	44	楕円形	11	46×38	69	〃
4	21×10	38	〃	12	34×31	35	円形
5	16×14	59	円形	13	40×31	35	楕円形
6	27×14	23	楕円形	14	45×42	33	不整形
7	21×15	25	不整楕円	15	30×27	20	円形
8	19×17	66	円形				

第303号竪穴住居跡 (第138・139図)

[位置] D・E-47・48グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複しているため、残存状態は不良である。

[重複] 第303号住居跡と重複している。本住居跡が古い。また、本住居跡の北側には、第303号住居跡の拡張部分か、それ以前の住居跡の一部分とも重複している。

[平面形・規模] 東側は重複のために壁が検出できなかった。南壁・北壁も重複のために、約半分以上削平されている。西壁256cmで方形を呈すると考えられる。主軸方位は不明である。

[堆積土] 6層に分層できた。堆積土は第302号住居跡の第4・5・8・10～12層に該当する。黄褐色土を基調としており、ローム・炭化物粒が混入する。自然堆積と考えられる。

[壁] 第Ⅳ層を壁面としており、壁高は、西壁85cm、南壁83cm、北壁71cmである。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直で堅緻である。

[床面] 床面は第Ⅳ層を掘り混み、貼り床は認められず、全体に堅緻である。

[周溝] 残存するすべての壁際から検出された。周溝の幅は、15～32cmで、深さは概ね15cmである。

[柱穴・ピット] 周溝中だけから3個のピットを検出した。ピット1・3は周溝中の壁際に位置しており、支柱穴をなすと考えられる。また、本住居跡の西側には3個のピットが位置しているが、本住居跡には伴わないと考えられる。

[カマド] 検出されなかった。

[その他の施設] 認められなかった。

[出土遺物] 土師器片が出土している。

(成田 悟)

第303号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	20×16	26	楕円形	3	40×27	19	不整楕円
2	25×14	19	〃				

第305号竪穴住居跡 (第141・142図)

[位置] D・E-44グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複のため、残存状態は不良であるが、西壁・壁溝などを確認した。

[重複] 第341号土壇と重複している。本住居跡の方が新しい。

[平面形・規模] 東壁は削平されているために残存していない。南壁も削平及び土壇と重複しているために残存していない。西壁355cm、北(280)cmで方形を呈すると思われる。主軸方位はN-5°-Eである。

[堆積土] 10層に分層できた。暗褐色土を基調としており、炭化物粒が混入する。自然堆積と考えられる。

[壁] 第Ⅲ・Ⅳ層を壁面としており、壁面は西壁60cm、北壁64cmである。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直で堅緻である。

[床面] 床面は第Ⅳ層を掘り混み貼り床は認められず、カマド付近を除いて全体に堅緻である。また、床面からは多量の炭化物が検出された。炭化物は材木とゆうよりも薄く敷いていた物の用に考えられる。

[周溝] カマドの部分を除いた、西壁と北壁、それに南壁の一部分に残存する。周溝の幅は、7~10cmで、深さは概ね4cmである。

[柱穴・ピット] 床面及び周溝中から検出した小ピットは4個で、支柱穴はNo.1・2であると考えられる。また、本住居跡の南側には5個のピットが位置しており、住居跡には伴わないと考えられる。

[カマド] 南壁西寄りに構築されており、残存状態不良で、燃焼部の焼土範囲は住居床面よりも一段高くなっており、袖部及び煙道部よ不明瞭であった。燃焼部火床面の焼土範囲は55×

50cmで西側に支脚として使用した土師器が存在する。煙道部の煙出し孔は検出できなかった。

[その他の施設] 認められなかった。

(成田 悟)

第305号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	31×26	13	不整楕円	3	44×41	3	不整円
2	25×24	20	不整円	4	35×33	10	〃

第306号竪穴住居跡 (第143図)

[位置] C・D-45・46グリッドに位置する。

[確認状況] 上部が削平及び重複のため、残存状態は不良であるが、ほぼ全体の形状を確認した。

[重複] 第307号住居跡と重複しており、本住居跡が新しい。

[平面形・規模] 東壁325cm、南壁270cm、西壁300cm、北壁240cmで方形を呈する。主軸方位はN-95°-Eである。面積は約7.4㎡である。

[堆積土] 10層に分層できた。黄褐色土を基調としており、炭化物粒が混入する。自然堆積と考えられる。

[壁] 壁は総て検出できた。第Ⅲ・Ⅳ層を壁面としており、壁高は東壁9cm、西壁60cm、南壁37cm、北壁42cmである。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直で、東壁は柔らかく軟弱であるが、その他の壁は堅緻である。

[床面] 床面は第Ⅳ層を掘り混み貼り床は認められず、全体に堅緻である。また、床面の西側は約7cm程高くなっている。

[周溝] 検出されなかった。

[柱穴・ピット] 床面から検出したピットは4個で、いずれも支柱穴と考えられる。また、本住居跡東側には、4個のピットが位置しており、ピット5・8は位置的に本住居跡に伴っていた可能性も考えられる。

[カマド] 検出されなかった。

[その他の施設] 認められなかった。

[出土遺物] 土師器・須恵器片が出土している。

(成田 悟)

第307号竪穴住居跡 (第143図)

[位置] C・D-45・46グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複のため、残存状態は不良であるが、西壁と南壁・北壁の一部を確認した。

[重複] 第306号住居跡と重複しており、本住居跡が古い。

[平面形・規模] 東壁は削平されているため確認できず、南壁・北壁は一部分検出である。西壁285cmで方形を呈すると考えられる。

[堆積土] 4層に分層できた。黄褐色土を基調としており、炭化物粒が混入する。自然堆積と考えられる。

[壁] 壁は第Ⅲ層を壁面としており、壁高は西壁13cm、南壁16cm、北壁18cmである。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直で、南壁及び北壁は柔らかく軟弱であるが、西壁は堅緻である。

[床面] 床面は第Ⅲ層を掘り混み貼り床は認められず、全体に柔らかい構築である。

[周溝] 検出されなかった。

[柱穴・ピット] 床面から検出したピットは2個で、主柱穴かどうかは不明である。

[カマド] 本住居跡北側に壁面の突出部が検出され、カマドの可能性を有するが、燃烧部火床面及び焼土は確認できなかった。

[その他の施設] 認められなかった。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第306・307号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	16×15	19	楕円形	5	25×24	31	円形
2	19×16	14	〃	6	18×17	22	〃
3	17×15	26	円形	7	27×25	24	楕円形
4	28×24	31	〃	8	30×29	18	円形

第308号竪穴住居跡 (第144・145図)

[位置] Z Z・A-45・46グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複のため、残存状態は不良であるが、西壁・壁溝などを確認した。

[重複] 第309・318号住居跡と重複している。第309号住居跡との新旧関係は不明であるが、第318号住居跡より新しい。

[平面形・規模] 東壁(269)cm、南壁255cm、西壁253cm、北壁255cmで方形を呈する。

[堆積土] 14層に分層できた。暗褐色土を基調としており、ローム・炭化物粒が混入する。自然堆積と考えられる。

[壁] 東壁と北壁の一部が削平されているため確認できなかったが、その他は残存する。第

Ⅲ・Ⅳ層を壁面としており、壁面は西壁123cm、南壁65cm、北壁30cmである。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直で堅緻である。

[床面] 床面は第Ⅳ層を掘り混み貼り床は認められず、カマド付近を除いて全体に堅緻である。

[周溝] 西壁と南壁に残存する。周溝の幅は、6～18cmで、深さは概ね5cmである。

[柱穴・ピット] 床面及び周溝中から検出した小ピットは6個で、支柱穴はNo.1～4であると考えられる。

[カマド] 東壁南寄りに構築されており、残存状態は不良で、煙道部より上部は削平のため残存していない。燃烧部火床面の焼土範囲は53×38cmの楕円形で、深さは中央部が約5cmである。火床面西側には、灰を廃棄したと思われる深さ3cm程のピットが位置する。このピット北側にロームをつき固めている袖部の一部と考えられるものが存在する。また、火床面中央部には、欠損した土師器を支脚として使用している。煙道部は上部が削平されているため煙出し孔は検出できなかった。

[その他の施設] 認められなかった。

[出土遺物] 土師器が出土している。

(成田 悟)

第308号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	18×14	25	楕円形	4	21×17	41	楕円形
2	20×16	12	〃	5	49×40	22	不整楕円
3	17×15	17	〃	6	62×47	20	楕円形

第309号竪穴住居跡 (第146図)

[位置] A・B-44・45グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複のため、残存状態は不良であるが、西壁・北壁・壁溝などを確認した。

[重複] 第308号住居跡と重複している。新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 東壁は削平されており、南壁は重複しているため残存しない。西壁(345)cm、北壁(420)cmで方形を呈すると思われる。

[堆積土] 9層に分層できた。暗褐色土を基調としており、ローム・炭化物粒が混入する。自然堆積と考えられる。

[壁] 東壁と南壁のが削平及び重複しているため確認できなかったが、その他は残存する。第Ⅲ・Ⅳ層を壁面としており、壁高は西壁72cm、北壁53cmである。壁の立ち上がりは、ほぼ垂

直で堅緻である。

[床面] 床面は第Ⅳ層を掘り混み、住居跡の東側に褐色土を基調とした貼り床が認められる。貼り床は全体的に柔らかい。

[周溝] 西壁と北壁に残存する。周溝の幅は、15～36cmで、深さは概ね7～10cmである。

[柱穴・ピット] 床面及び周溝中から検出した小ピットは4個で、周溝中に位置するピット1・2が主柱穴であると考えられる。

[カマド] 残存しない。

[その他の施設] 本住居跡の北側から楕円形のピットが検出されたが、本住居跡には伴わないものと考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第309号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	29×23	25	楕円形	3	46×44	42	円形
2	29×24	40	〃	4	62×43	37	楕円形

第310号竪穴住居跡 (第147・148図)

[位置] Z Y・Z Z-50・51グリッドに位置する。

[確認状況] 精査中に暗褐色土の落ち込みを確認した。

[重複] 5基の土壇と重複している。本住居跡は、第339号土壇より新しく、第324号・第337号・第338号土壇より古い。床面の下から第356号土壇を検出した。

[平面形・規模] 東壁(360cm)、南壁(400cm)、西壁(386cm)、北壁(390cm)の方形である。面積は11.3㎡である。主軸方位はN-13°-Eである。

[堆積土] 8層に分層できた。褐色土を基調としており、ローム粒・炭化物粒・細砂塊を含んでいる。第5層中に苦小牧火山灰がブロック状に混入している。自然堆積と思われる。

[壁] 斜面であるため東壁が削平されているが、その他の壁は、残存している。壁高は15～44cmである。第Ⅳ層を壁面としており、立ち上がりはほぼ垂直である。

[床面] 第Ⅳ層を掘り込み、5～10cmの厚さに、ローム及び褐色土の混合土を貼り床としている。貼り床は、削平されている東側を除いてほぼ全面に施され、全体にしまりが強い。

[周溝] カマド部分を除いて一周する。周溝の幅は、北側と西側が15～20cmとやや広く、カマドのある南側が狭い。東側は、斜面で削平されているため狭くなっている。深さは、10～24cmである。

[柱穴・ピット] 床面及び周溝中から検出したピットは、11個で、周溝中のNo. 10～12が柱

穴と考えられる。

[カマド] 南壁西寄りに構築され、残存状態は良好である。カマド本体の構造は、自然礫を芯材とし、その周囲に粘土を貼り固めたものである。煙道部の構造は、半地下式である。支脚は出土しなかった。

[その他の施設] 検出しなかった。

[出土遺物] 土師器・鉄器が出土している。

(中嶋 友文)

第310号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	50×42	17	円形	7	23×23	10	円形
2	35×30	14	不整形	8	45×35	20	〃
3	25×20	24	〃	9	26×20	30	〃
4	33×28	17	円形	10	22×11	39	楕円形
5	23×(15)	18	〃	11	40×23	40	不整形
6	32×28	22	〃	12	21×14	46	円形

第311号竪穴住居跡 (第149・150図)

[位置] Z U～Z W-53～55グリッドに位置する。

[確認状況] 精査中に褐色土の落ち込みを確認した。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 斜面に位置するため東壁が削平され、南北の壁も一部削平されている。西壁は、(440cm)であり、残存部分からほぼ方形を呈すると思われる。

[堆積土] 12層に分層された。褐色土を基調としており、ローム粒・炭化物粒・細かい砂が含まれている。第5層中に苦小牧火山灰が混入している。自然堆積と考えられる。

[壁] 削平及び重複のため、西壁と南壁・北壁の一部だけが残存している。壁高は西壁で、53～85cmである。第IV層を壁面としており、壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。

[床面] 第IV層を掘り込み、5～10cmの厚さに、ローム及び暗褐色土の混合土を貼り、床としている。貼り床は、一部だけで、ほとんどが第IV層を床面としている。全体にしまりが強い。

[周溝] カマド部分を除いてほぼ全周する。周溝の幅は16～30cm、深さは10～20cmである。

[柱穴・ピット] 床面及び周溝中から検出した小ピットは、8個であるが確実な柱穴は、不明である。

[カマド] 北壁に構築されている。残存状態は不良で、煙道部から上部は削平されている。袖は、床面上に粘土を固めて構築しており、芯材は使用していない。煙道下部は、地山を掘り下げて構築している。

[その他の施設] 認められない。

[出土遺物] 土師器・鉄器が出土している。

(中嶋 友文)

第311号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	50×40	33	円形	5	17×16	35	円形
2	90×55	10	不整形	6	55×20	28	楕円形
3	20×17	30	円形	7	25×22	15	円形
4	23×22	9	ク	8	35×30	33	ク

第312号竪穴住居跡 (第151・152図)

[位置] ZV・ZW-54・55グリッドに位置する。

[確認状況] 精査中に暗褐色土の落ち込みを確認した。

[重複] 5基の土壌と重複している。本住居跡は、第336号土壌より新しく、第327号土壌より古い。床面の下から第480～482号土壌を検出した。

[平面形・規模] 土壌と重複しているため一部削平されているが、東壁360cm、南壁400cm、西壁(370cm)、北壁(390cm)の方形を呈する。主軸方位はN-10°-Eである。

[堆積土] 5層に分層できた。褐色土を基調としており、ローム粒・炭化物粒・細かい砂が含まれている。第2層中に苦小牧火山灰が混入している。自然堆積と考えられる。

[壁] 第IV層を壁面としており、壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。壁高は15～20cmである。

[床面] 第IV層を掘り込み、5～10cmの厚さに、ローム及び暗褐色土の混合土を貼り、床としている。貼り床は、ほぼ全面に施され、全体にしまりが強い。

[周溝] 西壁では全体的に存在するが、その他の壁では途中で途切れている部分もみられる。周溝の幅は10～15cmで、深さは15～20cmである。

[柱穴・ピット] 床面及び周溝中からで検出した小ピットは、11個で、周溝中のNo. 5・8・10が柱穴の可能性がある。

[カマド] 南壁西寄りに構築されている。残存状態は不良で、煙道部より上部は削平のため残存していない。燃焼部火床面は、両袖中央からやや東側に偏った位置にあり、地山を掘りくぼめ、黄褐色ロームを埋めて構築している。焼土範囲は、直径約40cmで、厚さは、中央部が約10cmである。全体にしまりはなく、軟質である。袖は、床面上に粘土を固めて構築しており、芯材は使用していない。煙道下部は、地山を掘り残して構築している。

[その他の施設] 貼り床面の下から80cm×60cm、深さ15cmの不整形のピットが検出された。本住居跡に伴うものかと用途などは不明である。

[出土遺物] 土師器が出土している。

(中嶋 友文)

第312号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	82×60	26	不整形	7	30×25	19	円形
2	98×74	52	楕円形	8	35×25	22	〃
3	70×(30) 21	不整形		9	16×14	13	〃
4	37×15	20	楕円形	10	25×19	31	〃
5	30×28	25	円形	11	43×24	37	不整形
6	22×13	17	楕円形				

第316号竪穴住居跡 (第154・155図)

[位置] Z Y・Z Z-45・46グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複のため、残存状態は不良であるが、西壁・壁溝などを確認した。

[重複] 第308・318号住居跡と重複している。本住居跡はいずれの住居跡よりも古い。また、昭和の頃に構築されたと考えられる溝により、床面の一部が削平されている。

[平面形・規模] 西壁と南壁及び西側床面の一部しか残存していない。西壁(620)cmで方形を呈すると思われる。

[堆積土] 11層に分層できた。褐色土を基調としており、ローム・炭化物粒が混入する。自然堆積と考えられる。

[壁] 東壁と北壁が重複により削平されているため残存していない。その他は、第Ⅲ・Ⅳ層を壁面としており、壁高は西壁81cm、南壁5cmである。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直で堅緻である。

[床面] 床面は第Ⅳ層を掘り込み、残存している床面の中央部に貼り床が認められた。全体的に堅緻である。

[周溝] 西壁と南壁の一部が残存する。周溝の幅は、15～30cmで、深さは概ね9cmである。

[柱穴・ピット] 床面及び周溝中から検出したピットは3個で、支柱穴はNo.1～3であると考えられる。また、本住居跡北側で重複する第308号住居跡の床面下から検出されたピットも、本住居跡の支柱穴と考えられ、合計4個の柱穴を検出した。

[カマド] 確認できなかった。

[その他の施設] 認められなかった。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第316号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	55×40	61	楕円形	3	42×39	51	不整円
2	60×50	83	〃	4	48×34	43	楕円形

第318号竪穴住居跡 (第156図)

[位置] Z Y・Z Z-45グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複のため、残存状態は不良であるが、壁溝などを確認した。

[重複] 第316号住居跡、第302号溝と重複している。本住居跡はいずれの遺構よりも新しい。また、昭和の頃に構築されたと考えられる溝により、床面の一部が削平されている。

[平面形・規模] 西側の周溝と南側の周溝の一部分しか残存していない。西壁(580)cmで方形を呈すると思われる。

[堆積土] 床面まで削平されていたために、堆積土は不明である。

[壁] 周溝と床面の一部だけの検出であるため壁高は不明である。

[床面] 床面は第IV層を掘り込み、西側の一部分だけの確認である。残存している床面は全体的に柔かく軟弱である。

[周溝] 西壁と南壁の一部が残存する。周溝の幅は、25~35cmで、深さは概ね20cmである。

[柱穴・ピット] 床面及び周溝中から検出したピットは10個で、ピット1~6は周溝の中に位置している。また、本住居跡の範囲内と考えられる床面下から8個のピットを検出したが、本住居跡に伴うかどうかは不明である。

[カマド] 確認できなかった。

[その他の施設] 認められなかった。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第318号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	28×25	円形		6	73×37	56	不整楕円
2	27×25	32	〃	7	55×52	30	〃
3	24×23	44	〃	8	43×36	12	楕円形
4	28×25	36	〃	9	23×16	17	〃
5	28×26	28	〃	10	25×23	13	円形

第319号竪穴住居跡 (第153図)

[位置] Z Z・A・B-44・45グリッドに位置する。

[確認状況] 削平及び重複のため、残存状態は不良であるが、壁溝などを確認した。

[重複] 第308・309号住居跡と重複している。本住居跡はいずれの遺構よりも古い。

[平面形・規模] 周溝と柱穴のみの確認である。西側の周溝から推定すると西壁（600）cmで方形を呈すると思われる。

[堆積土] 第308・309号住居跡の床面下から検出されているために、堆積土は不明である。

[壁] 周溝と床面の一部だけの検出であるため壁高は不明である。

[床面] 床面は第Ⅳ層を掘り込み、東側は確認できなかった。残存している床面の西側は堅緻であるが、東側は全体的に柔らかく軟弱である。

[周溝] 周溝の幅は、12～19cmで深さは2～10cmである。北側に位置する周溝は第309号住居跡と共用していた可能性も考えられる。また、住居跡の中央部から南寄りでは、周溝が西側から東側に伸びており、本住居跡よりもさらに古い住居跡が存在した可能性も考えられる。

[柱穴・ピット] 床面及び周溝中から検出したピットは9個で、ピット1～4は住居跡の床面に位置しており、支柱穴と考えられ、周溝に位置している3個のピットは、支柱穴と考えられる。

[カマド] 確認できなかった。

[その他の施設] 認められなかった。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第319号住居跡ピット計測表

No	規模(cm)	深さ	形状	No	規模(cm)	深さ	形状
1	53×45	35	楕円形	3	38×35	16	円形
2	48×40	11	々	4	60×40	37	楕円形

第341号竪穴住居跡 (第157図)

[位置] Y Z・Z A-58・59グリッドに位置する。

[確認状況] 削平のため、残存状態は不良で、西壁と北壁、南壁の一部及び床面だけの確認である。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 東壁（250cm）、南壁（280cm）、西壁（224cm）、北壁（290cm）の方形をする。面積は（約6.4m²）である。主軸方位はN-63°-Wである。

[堆積土] 8層に分層できた。褐色土を基調としており、炭化物粒が混入する。自然堆積と考えられる。

[壁] 削平のため、西壁と南壁、北壁の一部だけが残存している壁高は西壁で49～60cmである。第Ⅳ層を壁面としており、壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

[床面] 第Ⅳ層を掘込み、3～5cmの厚さに、ローム及び明黄褐色土の混合土を貼り床としている。貼り床は、カマド付近に鉄鐸が広がっている他は、ほぼ全面に施され、全体にしまりが強い。

[周溝] 認められなかった。

[柱穴・ピット] 東壁南寄りに構築されている。依存状態は不良で、煙道部より上部は、削平のため残存していない。燃烧部火床面は、確認されていない。焼土範囲は、直径約90cmで、深さは、中央部が約3cmである。全体に締まりはなく、軟質である。袖は、地山の上に粘土をつき固めて構築しており、その粘土部分が一部のみ残存しており、芯材は使用していない。煙道部及び煙出し孔は削平により残存していない。

[カマド] 東壁南側に位置する。

[その他の施設] 認められなかった。

[出土遺物] カマドから坏が1点出土した。

(小館 孝浩)

第342号竪穴住居跡 (第158・159図)

[位置] Z D・Z E-59・60グリッドに位置する。

[確認状況] 遺跡範囲確認調査時に、丘陵頂上部において埋没しきらない黒褐色土の落ち込みとして確認した。

[重複] 回555・596・597号土壌と重複しており、本住居跡が最も新しい。

[平面形・規模] 方形を呈するが、東壁北側部分が重複により一部不明瞭である。東壁218cm、南壁206cm、西壁217cm、北壁221cmで、面積は14.6㎡である。主軸方位はN-6°-Eである。

[堆積土] 25層に分層できた。黒色土及び黒褐色土を基調とするが、壁及び床面近くは黄褐色ロームを多く混入する。覆土中位までは腐植土が主体で、草木根が多く、多くの部分で攪乱を受けている。全体にローム粒・炭化物粒を混入し、第3層中に、不連続ではあるが苫小牧火山灰が堆積していた。

[壁] 地山を掘り込んでおり、ほぼ垂直に立ち上がる。重複する土壌部分には、ローム主体の土を充填している部分も認められるが、概ねその土壌の覆土のままで検出された。

[床面] 地山上に暗褐色土とロームとの混合土を貼って床面としており、ほぼ平坦である。南東及び北西の隅に、一部分掘り残しか、または、盛り土によるものかは不明であるが、高さ10cm程の円形の黄褐色粘土(ローム)の高まりがある。この上面に各々土器が完形で出土している。

[カマド] 南壁西寄りに位置し、半地下式の構造である。残存状態は良好である。焼土面か

らは2度程の改築が考えられる。燃烧部は地山を掘り窪めて構築しており、煙道部の直下に大型の羽口を支脚として設置している。また、左袖の短部寄りにも支脚を設置している。煙道部は緩やかに立ち上がり、煙出し孔に向かっている。カマド本体は、黄褐色粘土及び白色の粘性の強い粘土を使用しており、袖部に芯材は使用していない。

[出土遺物] 土師器の甕・坏・皿・鉢・須恵器の耳皿・坏・長頸壺、刀子、砥石破片が出土した。前述の床面上にある高まりの上から、南東部からは長頸壺が、北西部からは5個の小孔のある土師器皿・須恵器耳皿・土師器皿の3点が重なって出土している。また、カマド上及び周辺から多くの土器が出土している。

[その他の施設] 遺物の出土状態は、この時期の他の住居跡のように、什器の多くを持ち出すことなく、生活してあ状態のそのままを示しているようである。焼失家屋とも異なり、特殊な環境の基で、突如、移動したことが考えられる。また、丘陵地の頂上部にはほぼ単独で構築されていることも特別な意味あいがあったものと考えられる。

(白鳥 文雄)

第301号竪穴住居跡 (第160図)

[位置] O・P-52・53グリッドに位置する。

[確認状況] 削平のため、貼り床の一部だけを確認した。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 削平のため、不明である。

[堆積土] 削平のため、確認できなかった。

[壁] 削平のため確認できなかった。

[床面] 黄褐色土とロームを混ぜ合わせた貼り床が、幾分残存している。

[周溝] 確認できなかった。

[柱穴・ピット] 大小15個のピットを検出したが、配列については、不明である。

[カマド] 石囲炉及び土器片敷炉の2基を確認した。石囲炉は、北側が開放されたコの字状をしており、礫が10点検出された。土器片敷炉は、1個体分の土器が出土した。西側と北側及び南側の一部に土器を囲っており、東側が開放されたコの字状をしている。

[出土遺物] 第2号炉から土器が1個体分及び、確認面からも土器が出土した。

[その他] 西側部分に、ほぼ平行に並ぶ立石を2点確認したが、用途については不明である。本住居跡の時期は、第2号炉の土器から榎林式期と思われる。

(小館 孝浩)

第2節 掘立柱建物跡

43棟の掘立柱建物跡を検出した。この内、第1号掘立柱建物跡は、室町時代の建物跡と推定され、調査員の八戸工業大学教授高島成侑氏に分析及び原稿執筆を依頼した。また、第30号掘立柱建物跡は、鍛冶場跡として、別項で記載している。

図版における数値は、上段にメートルによる記載を行い、下段には尺による記載を（ ）書きで行った。1尺は30.3cmとして計算した。

文章は、各担当者のもを白鳥がまとめて記載した。このため不明瞭な部分の記載は省いているものがある。また、実測図の不備なものについては、模式図を使用し、計測値の不備なものは、一部を省略している。

第1号掘立柱建物跡 (第161図)

朝日山遺跡の中世掘立柱建物跡

八戸工業大学教授 高島成侑

1 はじめに

調査の現場には何度か訪れる機会が与えられ、古代から中世にわたる大規模な複合遺跡を観察することができた。広大な朝日山遺跡のなかに、古代の竪穴住居跡や総柱の掘立柱建物跡とともに中世の掘立柱建物跡が検出された。ここでは、建物跡の全容がでていないわけではないが、この掘立柱建物跡の平面の特徴と構造について考えてみたい。

調査を担当された青森県埋蔵文化財調査センターの諸氏は、広大な面積と膨大な数の遺構と遺物とに取り組みまれ、その資料の整理などで精力的にご協力して下さったことに感謝申し上げます。また、調査指導員として参加された弘前大学教授・村越 潔先生には、いつもながらの暖かいお励ましとご教示を頂いたことに、深い謝意を表明するものである。

2 その検出について

この掘立柱建物跡は、広大な朝日山遺跡の東側の辺りに近いところで検出された。身舎部分の柱穴跡はしっかりとしたもので、その並びも明瞭であり、掘立柱建物跡としての検出は容易になされた。これに伴う底部分の柱穴跡は、身舎のそれに比べるとかなり小さいものであり、その並びについても、抜けている箇所があったり、身舎の柱筋と揃わない箇所もあって、一つの建物跡とするにはやや難があった。しかし調査区域の制限もあり、前述のように、建物跡全体が見えているのではないという見解のもとに、その平面を決定した。

現場で建物跡の検出と平面の決定を終えた後に、図の〔X₄、Y₀〕の柱穴跡が見つかった。この柱穴跡は、東庇がこれに折れ曲がって南庇となることを示唆するものとみられた。

そのように考えると4面に庇が廻るものとなる。身舎部分の北西隅に2間四方の部屋が2室取られ、その東側には幅1間の細長い室が来ることになる。この細長い部分を東庇と見ることができのかもしれない。そのように見ると、この掘立柱建物跡は梁間4間の建物跡となり、X₃通りは建物から離れた、一種の塀とし見ることもできる。しかし、X₃通りの柱穴跡はそれぞれ身舎の柱筋に合致しており、一つの建物跡に伴うものと判断され、桁行7間に梁間5間の建物跡として扱うこととしたものである。これによって身舎の梁間が3間となり、後述するように、身舎梁間の柱間寸法も揃うこととなった。

3 その平面形について

第1号掘立柱建物跡とされたこの建物跡は、桁行7間に梁間5間のものであるが、その柱間寸法は均一ではない。身舎の梁間を3間としたものであるが、この3間を通して20.0尺をとり、それを3等分して1間を6.60尺としており、北庇もこれに対応している。この6.60尺を基準柱間寸法とする手法は、16世紀に入ると、北東北部から道南にかけて広く用いられている。この寸法は、上述のように、20.0尺を3等分したことに由来するものと見られる。

これに対して桁行寸法においては7.00尺の当間となり、庇部分にも共通している。また、庇の出は北と西とが5.50尺で、東では6.00尺である。先に推定した南庇が廻るとするとこれも6.00尺である。

この建物跡の年代は、出土した遺物の調査からは、15世紀後半から16世紀前半のものと思われる。上の柱間寸法の検討では、16世紀代の6.60尺という寸法が基準柱間として取られていることがみられたが、その外に、7.00尺や6.00尺、5.50尺という数値もあり、遺物からの考察とはほぼ合致する年代のものと思われることができるようである。

その間取りを見ると、身舎の北西隅に2間に2間の部屋を取り、それに続けて南側に同様の部屋があるが、その南側は不明である。これら2室の東側は、梁間2間の総柱の部屋が続いている。このように幅2間で長さが数間に及ぶ総柱部分を内部にもつ平面の掘立柱建物跡の類例としては、八戸市根城東構跡に数棟の遺構があり、やや時期は遅くなって16世紀後半になるが、根城本丸跡で歴代の主殿とされる建物跡に数棟を数えることができる。また、ほぼ同時期の浪岡城内館跡においても検出されている。この総柱部分は物置部分と見られ、根城本丸跡の主殿とされた建物では「重宝の間」などと呼ばれている。

これら総柱の部分は、上に見たこれまでの類例では、主室の西側か北側に取られている。これが物置部分とすると、間取りの取り方からしても当然であろうが、ここでは2室続きの主室の東側にとられている。朝日山遺跡における中世聚落の広がりや範囲などは明らかではなく、この建物跡に関する通路や出入口の向きなども知り得ないのであるが、この総柱部分は物置などではなくて、出入口などの施設と関わるものかもしれない。

4 その構造について

第1号掘立柱建物跡の構造形式について考察する際の手掛かりは、平面に見られた柱間寸法の相違であろう。上述のように、身舎部分では梁間で6.60尺と桁行で7.00尺という数値であり、庇部分もこれに対応した箇所には柱穴跡が検出されているが、庇の出の寸法については、東側が6.00尺で北側と西側では5.50尺となり、身舎部分に比べて小さなものとなっている。

この寸法構成からは、後世のものに見られるような均整のとれた入母屋造屋根を架けることができず、寄棟造屋根にそれぞれの方向で寸法の異なる庇屋根が廻るという形式が想定される。このような形式の屋根は、例えば弘前市の旧岩田家住宅（県重宝－江戸時代後期）など近世以降の民家でも見ることができるものである。屋根葺材は、植物性の葺材のなかで考えると、身舎部分が茅葺で庇部分は桎葺となろうか。

5 む す び

第1号掘立柱建物跡について、これまでに中世の遺跡で検出されたものと比較しながら、平面形式の特徴を延べ、構造形式の推定を試みた。ご検討いただければ幸いである。朝日山遺跡で営まれた中世聚落がいかなるものであったか、どこの中世城館と関わるものかなどは明らかではないが、今後の調査の進捗を期待したい。

参 考 文 献

- 浪岡町教育委員会 「浪岡城跡発掘調査報告書」Ⅰ～Ⅹ、1978～1989、
八戸市教育委員会 「史跡根城跡発掘調査報告書」Ⅰ～ⅩⅠ、1979～1989、
弘前市教育委員会 「旧岩田家住宅保存修理工事報告書」1984、
注. 身舎北東隅の柱穴〔X₄・Y₅〕底面から「永楽通宝」1点、不明1点の古銭が出土しており、地鎮具と推定される。(注. 白鳥)

第2号掘立柱建物跡 (第162図)

[位置] J～L-27～29グリッドに位置する。

[重複] 第62号住居跡、第49・50・77・100号土壇、第73号溝と重複している。新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 桁行2間、梁行2間の東西に長い東西棟建物跡である。桁行は南北の両列とも総長496cmで、梁行方行では東列476cm、西列444cmで、西列では中間の柱穴を確認できなかった。

[柱穴] 掘り方は径30～60cmで、概ね30～40cmである。深さは一定していない。

[柱間寸法] 各柱間寸法は東列の2間が約240cmであるのを除いて一定していない。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第3号掘立柱建物跡 (第162図)

[位置] L・M-27・28グリッドに位置する。

[重複] 第4号掘立柱建物跡、第31・48・62号土壇、第36号溝他与重複している。新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 桁行2間、梁行2間で、東西方向に長い東西棟建物跡である。桁行方向では南列495cm、北列516cmで、梁行方向では東列440cm、西列462cmである。

[柱穴] 掘り方は径40～50cmであり、深さは一様ではないが、四隅の柱穴がやや深い傾向が認められる。

[柱間寸法] 桁行方向の平均柱間は253cmで、梁行方向の平均柱間は225cmである。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第4号掘立柱建物跡 (第163図)

[位置] L・M-26～28グリッドに位置する。

[重複] 第3号掘立柱建物跡、第62号土壇、第10号溝と重複しており、新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 桁行2間、梁行1間の東西棟建物跡である。桁行方向では南列506cm、北列502cmで、梁行方向では東列260cm、西列270cmである。

[柱穴] 掘り方は一辺30～40cmの方形及び長方形を呈する。深さは一定していない。

[柱間寸法] 桁行方向の平均柱間は252cmで、梁行方向の平均柱間は265cmである。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第5号掘立柱建物跡 (第163図)

[位置] K-26・27、L-25・26グリッドに位置する。

[重複] 第108号住居跡、第6号掘立柱建物跡、第77号溝と重複している。新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 桁行2間、梁行2間の東西棟建物跡である。桁行方向では南列464cm、北列では500cmで、梁行方向では東列470cm、西列450cmである。

[柱穴] 掘り方は径30～40cm程で、やや隅丸の方形である。深さは一定していない。

[柱間寸法] 桁行方向での柱間は南列の1間が212cmと狭いが、他の3間は約250cmである。梁行方向での柱間は西列ではほぼ同間隔(平均225cm)であるが、東列では一定していない。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 第62号竪穴住居跡と近接しており、梁行の寸法及び桁行の軸線もほぼ同じことから、本建物跡は第62号住居跡に付随する可能性が考えられる。

(白鳥 文雄)

第6号掘立柱建物跡 (第164図)

[位置] L-25・26グリッドに位置する。

[重複] 第63号竪穴住居跡と重複する。新旧関係は、不明瞭であるが、本建物跡が新しい可能性が高い。

[平面形・規模] 桁行2間、梁行2間ではほぼ方形の総柱建物跡である。東列320cm、西列310cm、北列308cm、南列310cmで、南北に若干長い。南列中央の柱穴は、西側にやや寄って穿たれている。

[柱穴] 掘り方は、径40cm程で、円形及びやや長い楕円形を呈している。深さは24cm～38cmで一定していないが、柱穴底面は標高はほぼ一様である。

[柱間寸法] 各柱間寸法は142～168cmでほぼ一定しており、平均柱間寸法は157cmである。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 隣接する第7号・第12号掘立柱建物跡と同時存在の可能性が高い。

(白鳥 文雄)

第7号掘立柱建物跡 (第164図)

[位置] M・N-25グリッドに位置する。

[重複] 第64号竪穴住居跡、第59号溝と重複している。新旧関係は不明瞭であるが、本建物跡が新しい可能性が高い。

[平面形・規模] 桁行2間、梁行2間ではほぼ方形の総柱建物跡である。東列324cm、西列328cm、北列332cm、南列330cmで、東西に若干長い。南列中央の柱穴はやや西側に片寄って穿たれている。

[柱穴] 掘り方は径36～46cm程で、やや長い楕円形を呈するものが多い。中央の南北方向に並ぶ3個の柱穴は、それぞれ重複する柱穴状のピットが確認された。各柱穴の深さは18～47cmと一定していないが、柱穴底面の標高はほぼ一様である。

[柱間寸法] 各柱穴間の寸法は144～186cmである。平均柱間寸法は164cmである。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 第6号及び第12号掘立柱建物跡と同時存在の可能性が高い。

(白鳥 文雄)

第8号掘立柱建物跡 (第165図)

[位置] M～O-29・30グリッドに位置する。

[重複] 第47号竪穴住居跡、第44・91号土壙、第37・62号溝と重複している。新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 桁行2間、梁行1間の東西棟建物跡である。各柱列の総長は、北列632cm、南列628cm、東列470cm、西列520cmである。北面端の柱穴は、若干偏っていることから本建物跡に伴わない可能性も考えられ、北列の他の3個の柱穴の中軸線を用いると、西列の推定柱間は470cmである。

[柱穴] 掘り方は径40～52cmであり、深さは一定していない。

[柱間寸法] 桁行方向の平均柱間寸法は210cmである。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第9号掘立柱建物跡 (第165図)

[位置] L・M-29・30グリッドに位置する。

[重複] 第36・37・87号竪穴住居跡、第47・92号土壙と重複している。新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 桁行2間、梁行1間の東西棟建物跡である。各柱列の総長は北列272cm、南列288cm、東列200cm、西列192cmである。

[柱穴] 掘り方は径40～50cm程で、深さは15cm～38cmで一定ではない。

[柱間寸法] 桁行方向の平均柱間は、190cmで、梁行方向では280cmである。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第10号掘立柱建物跡 (第165図)

[位置] K～M-30・31グリッドに位置する。

[重複] 第36号竪穴住居跡他と重複しており、新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 桁行2間、梁行1間の南北棟建物跡である。各柱列の総長は、桁行方向では東列が538cm、西列が525cmで、梁行方向では、北列264cm、南列252cmである。

[柱穴] 掘り方は径40cm程で、やや長い楕円形を呈する。深さは12～32cmと一定していない。

[柱間寸法] 桁行方向の平均柱間は266cmで、梁行方向では258cmである。梁行方向の柱間が若干狭い。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第11号掘立柱建物跡 (第165図)

[位置] K・L-27～29グリッドに位置する。

[重複] 第2号竪穴住居跡、第2号掘立柱建物跡、第73号溝と重複している。新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 桁行2間、梁行1間の東西棟建物跡である。柱列の総長は、東列500cm、西列520cm、南列260cm、北列190cmである。

[柱穴] 掘り方は、径35cm～50cmで、概ね40cmである。全体に楕円形である。

[柱間寸法] 各柱穴間の平均柱間は、桁行方向では255cmで、梁行方向では225cmである。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第13号掘立柱建物跡 (第165図)

[位置] L・M-22・23グリッドに位置する。

[重複] 第84・85・93号竪穴住居跡、第79号溝と重複している。新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 桁行2間、梁行2間で総柱建物跡である。一部の柱穴は確認できなかった。各柱列の総長は、東列510cm、中央東西列500cmである。

[柱穴] 掘り方は径約40cmである。

[柱間寸法] 各柱穴間の平均柱間は、250cmである。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第14号掘立柱建物跡 (第165図)

[位置] K・L-23・24グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 柱穴4本だけを確認した。西列の総長は380cm、北列の総長240cmである。

[柱穴] 掘り方は、径約40cmである。

[柱間寸法] 西列での柱間は190cmで一定している。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第15号掘立柱建物跡 (第165図)

[位置] K～M-17・18グリッドに位置する。

[重複] 第28・29・51号堅穴住居跡、第25号土塋と重複している。新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 桁行2間、梁行2間の東西棟建物跡である。一部柱穴に確認できないものもあるが、総柱建物跡の可能性もある。各柱列の総長は、桁行方向では、南列680cm、北列680cmで、梁行方向では、東列430cm、西列410cmである。

[柱穴] 掘り方は、径20cm～50cmである。

[柱間寸法] 各柱穴間の平均柱間は、桁行方向で340cm、梁行方向で210cmである。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第17号掘立柱建物跡 (第166図)

[位置] K・L-33・34グリッドに位置する。

[重複] 第30号溝と重複している。新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 東西2間、南北2間で総柱建物跡である。各柱列の総長は、東列308cm、西列318cm、北列308cmである。

[柱穴] 掘り方は、径30cmではほぼ均一である。深さは、全体に浅めである。

[柱間寸法] 各柱穴間の平均柱間は、東西方向では、156cm、南北方向でも156cmと同一である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第18号掘立柱建物跡 (第166図)

[位置] K-25グリッドに位置する。

[重複] 第108号堅穴住居跡と重複している。新旧関係は不明瞭であるが、本建物跡が新しい。

[平面形・規模] 柱穴配置を確認した部分では、東西方向2間、南北方向1間の建物跡である。南北のいずれかに延びる可能性が高いが、他の柱穴は確認できなかった。確認できた柱列の総長は、南列362cm、北列364cm、東列186cm、西列186cmである。

[柱穴] 掘り方は、径30cm～40cmのものがほとんどである。深さは一定しないが、深く掘り

込まれている。

[柱間寸法] 各柱穴間の平均柱間は183cmである。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第19号掘立柱建物跡 (第166図)

[位置] F-25~27グリッドに位置する。

[重複] 第135号溝と重複している。新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 南側部分が調査区外にあたるため、全体形は不明である。確認できた柱列の総長は、北列6間520cm、西列6間467cm、東列2間250cmで、東西方向の中央列が520cmである。

[柱穴] 掘り方は、径20cm~30cm程で、隅の柱穴及び各列中央の柱穴がやや大きく掘られている。深さは一定していないが、全体に細く深く掘り込まれている。

[柱間寸法] 各柱穴間の平均柱間寸法は、北列で86cm、西列78cm、東列125cmである。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 本建物跡は、他の建物跡の柱穴配置とまったく異なっている。調査時は、建物跡中央に位置する柱穴により、掘立柱建物跡として調査したが、第54号竪穴住居跡他のように、壁際に多数の柱穴を有する住居跡も存在することから、床面下まで削平された竪穴住居跡であった可能性も高い。

(白鳥 文雄)

第20号掘立柱建物跡 (第167図)

[位置] F・G-19・20グリッドに位置する。

[重複] 第103・105・118号竪穴住居跡、第112・116・141号溝他と重複している。本建物跡は第118号住居跡より新しいが、他の遺構との新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 桁行3間、梁行2間で、1個不明瞭な柱穴があるが、総柱の東西棟建物跡である。各柱列の総長は、桁行方向では、南列672cm、北列660cmで、梁行方向では、東列535cm、西列540cmである。全体に大型の建物跡である。

[柱穴] 掘り方は、桁行中央列の柱穴が、径30cmで小型であり、南北両列の柱穴が55cm以上で大型である。深さは、4隅の柱穴がやや深く掘り込まれているが、他の柱穴は一定しない。

[柱間寸法] 各柱穴間の平均柱間は、桁行方向では222cmで、梁行方向では269cmである。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 柱穴の配置及び軸線が類似することから、第21号掘立柱建物跡と同時存在の可能性が高い。また、径20cm程の柱根が3個柱穴で確認できた。

(白鳥 文雄)

第21号掘立柱建物跡 (第167図)

[位置] F・G-21・22グリッドに位置する。

[重複] 第125・129号土壌、第134・138・141号溝と重複している。新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 桁行3間、梁行2間で、1個確認できなかった柱穴があるが、総柱の東西棟建物跡である。各柱列の総長は、桁行方向では南列580cm、中央列581cmで、梁行方向では西列498cm、中央東寄りの柱列で498cmである。

[柱穴] 掘り方は、径30cm～40cm程で、平面形は全体に角張っている。深さは一定していないが、斜面の下位の柱穴底面の標高が低くなっている傾向がある。

[柱間寸法] 各柱穴間の平均柱間は、桁行方向で192cm、梁行方向で248cmである。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 柱穴の配置及び軸線の類似点から、第20号掘立柱建物跡と同時存在の可能性が高い。また、4個の柱穴から、径15～20cm程の柱痕が確認できた。

(白鳥 文雄)

第22号掘立柱建物跡 (第168図)

[位置] F～H-31～33グリッドに位置する。

[重複] 第101・102号竪穴住居跡、第23号掘立柱建物跡、第31・103～105号溝と重複している。新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 桁行2間、梁行2間で、中央及び東列中央の2個の柱穴が不明瞭であるが、総柱建物跡と考えられる。各柱列の総長は、東列412cm、西列414cm、南列422cm、北列426cmである。

[柱穴] 掘り方は、各柱列中央部が径20cm程で、北列両端の柱穴が径30cm程、南列両端のものが径50cmを超える大型のものである。平面形は全体に角張っている。

[柱間寸法] 各柱穴間の平均柱間は、210cmである。桁行方向では、中央から東側が長く設定されている。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 柱穴の掘り方・配置及び軸線が類似していることから、第24号掘立柱建物跡と同時存在の可能性が高い。

(白鳥 文雄)

第24号掘立柱建物跡 (第168図)

[位置] G・H-30グリッドに位置する。

[重複] 重複なし。

[平面形・規模] 桁行2間、梁行1間の東西方向に若干長い東西棟建物跡である。各柱列の総長は、桁行方向では、南列320cm、北列314cmで、梁行方向では、東列300cm、西列312cmである。

[柱穴] 掘り方は、四隅が径40cm以上の大型で、桁行方向中央の柱穴は、径20cm程である。深さは小型のものが浅く、大型のものは深く掘り込まれている。

[柱間寸法] 各柱穴間の平均柱間は、桁行方向で158cm、梁行方向で306cmである。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 柱穴の掘り方及び軸線が類似していることから、第22号掘立柱建物跡と同時存在の可能性が高い。

(白鳥 文雄)

第25号掘立柱建物跡 (第168図)

[位置] H・I-20・21グリッドに位置する。

[重複] 第41・68号溝と重複している。新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 桁行2間、梁行1間の東西棟建物跡である。南東隅の柱穴が1個確認できなかった。各柱列の総長は、桁行方向では北列510cm、梁行方向では西列410cmである。

[柱穴] 掘り方は、径20cm～30cm程である。

[柱間寸法] 桁行方向の平均柱間は254cmである。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第26号掘立柱建物跡 (第169図)

[位置] H・I-23～25グリッドに位置する。

[重複] 第112号竪穴住居跡及びその外周溝である第124・125号溝、第1号溝と重複している。新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 桁行2間、梁行2間で、総柱の東西棟建物跡である。各柱列の総長は、桁行方向では、南列580cm、北列564cmで、梁行方向では東列で530cm、西列で520cmである。

[柱穴] 掘り方は、一部確認できなかったもの、また底面のごく一部分を確認しただけのものもあるが、概ね径20cm～30cm程である。深さは一定ではない。

[柱間寸法] 各柱穴間の平均柱間は、桁行方向では190cmで、梁行方向では263cmである。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第27号掘立柱建物跡 (第169図)

[位置] I・J-28～30グリッドに位置する。

[重複] 第34号竪穴住居跡、第38号土壇、第128号溝と重複している。新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 桁行2間、梁行2間の総柱の東西棟建物跡である。各柱列の総長は、桁行方向では、南列592cm、北列576cm、梁行方向では、東列494cm、西列498cmである。

[柱穴] 掘り方は、底面のごく一部分だけを確認したものもあるが、概ね、径40cm程である。深さは一定していない。

[柱間寸法] 各柱穴間の平均柱間は、桁行方向で295cm、梁行方向で247cmである。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第28号掘立柱建物跡 (第169図)

[位置] F・G-16・17グリッドに位置する。

[重複] 第69号土壇・第66号溝と重複している。新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 桁行2間、梁行2間の総柱の東西棟建物跡である。各柱列の総長は、桁行方向では、南列602cm、北列630cmで、梁行方向では東列538cm、西列546cmである。

[柱穴] 重複により不明瞭なものもあるが、掘り方は概ね、径30cm～40cm程である。深さは一定していない。

[柱間寸法] 各柱穴間の平均柱間は、桁行方向では310cm、梁行方向では276cmである。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第29号掘立柱建物跡 (第170図)

[位置] I・J-38・39グリッドに位置する。東側に傾斜する斜面上に立地している。

[重複] 第33号掘立柱建物跡、第144号土壇と重複している。新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 桁行2間、梁行1間の南北棟建物跡である。各柱列の総長は、桁行方向で

は、東列384cm、西列382cmで、梁行方向では、南列318cm、北列316cmである。

[柱穴] 掘り方は、概ね径40cm～50cmである。柱穴は全搬に深く穿たれており、柱穴底面の標高は斜面下のものが低く穿たれている。

[柱間寸法] 各柱穴間の平均柱間は、桁行方向で191cm、梁行方向で317cmである。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第31号掘立柱建物跡 (第170図)

[位置] F～G-43・44グリッドに位置する。東側に傾斜する斜面上に立地している。

[重複] 第45号掘立柱建物跡と重複している。新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 桁行2間及び1間、梁行2間及び1間の柱穴配置による南北棟建物跡である。斜面上に立地していることから、本来、東側へ延びていた可能性が高い。各柱列の総長は、桁行方向では、東列472cm、西列509cmで、梁行方向では、南列304cm、北列288cmである。

[柱穴] 掘り方は、概ね径30cm程である。深さは一定していない。柱穴底面の標高では、斜面下位の方が低い傾向がある。

[柱間寸法] 各柱穴間の柱間は、柱穴配置が変則的であるため一定していない。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第32号掘立柱建物跡 (第171図)

[位置] H・I-39・40グリッドに位置する。東側に傾斜する斜面上に立地している。

[重複] 第33号掘立柱建物跡と重複している。新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 桁行3間及び1間、梁行2間及び1間の柱穴配置による南北棟建物跡である。斜面上に立地していることから東側に延びている可能性が高い。各柱列の総長は、桁行方向では、東列490cm、西列492cm、梁行方向では、南列296cm、北列284cmである。

[柱穴] 掘り方は、径20cm～52cmで一定していない。深さは一定ではないが、柱穴底面の標高は、ほぼ一様である。

[柱間寸法] 各柱穴間の柱間は、柱穴配置が変則的であるため一定していない。桁行方向の西列では、中間の柱間が長く設定されている。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第33号掘立柱建物跡 (第171図)

[位置] I・J-39グリッドに位置する。東側に傾斜する斜面上に立地している。

[重複] 第29・32号掘立柱建物跡、第144号土壌と重複している。新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 桁行2間及び1間、梁行1間の南北棟建物跡である。桁行方向の東列中央に柱穴が確認できなかった。本来は東側にもう1間延びる2間×2間の建物であった可能性が高い。各柱列の総長は、桁行方向では、東列468cm、西列442cmで、梁行方向では、南列190cm、北列200cmである。

[柱穴] 掘り方は、径20cm～50cmで、楕円形のものが多い。深さは一定ではないが、柱穴底面の標高はほぼ一様である。

[柱間寸法] 各柱穴間の平均柱間は、桁行方向西列では222cmで、梁行方向では195cmである。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第34号掘立柱建物跡 (第172図)

[位置] D・E-39・40グリッドに位置する。東側に傾斜する斜面上に立地している。

[重複] 第35～37・43号掘立柱建物跡と重複している。新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 桁行2間、梁行2間で、北西隅の柱穴がやや突出している。南北にやや長い総柱の南北棟建物跡である。各柱列の総長は、桁行方向では西列472cm、中央列476cmで、梁行方向では、南列417cm、北列452cmである。桁行方向東列中央の柱穴は確認できなかった。

[柱穴] 掘り方は、概ね径40cmである。深さは一定しないが、柱穴底面の標高は斜面下位のものが低い傾向がある。

[柱間寸法] 各柱穴間の平均柱間は、桁行方向では237cmで、梁行方向では186cmである。桁行方向の中央から北側が長く設定されている。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第35号掘立柱建物跡 (第172図)

[位置] D・E-40・41グリッドに位置する。東側に傾斜する斜面上に立地している。

[重複] 第160号竪穴住居跡、第34・36・37・43号掘立柱建物跡と重複している。新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 桁行2間、梁行2間で、南北にやや長い総柱の南北棟建物跡である。北西隅の柱穴は確認できなかった。各柱列の総長は、桁行方向では、東列470cm、中央列468cmで、

梁行方向では、南列440cm、中央列414cmである。

[柱穴] 掘り方は、径20cm～34cm程のものが多く、平面形状は方形に近いものが多い。深さは一定していないが、柱穴の底面の標高は斜面下位のもの低い傾向がある。

[柱間寸法] 各柱穴間の平均柱間は、桁行方向では210cmで、梁行方向では233cmである。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第36号掘立柱建物跡 (第173図)

[位置] C・D-40・41グリッドに位置する。東側に傾斜する斜面上に立地している。

[重複] 第34・35・37・43号掘立柱建物跡と重複している。新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 桁行2間、梁行2間で、総柱の東西棟建物跡である。各柱列の総長は、桁行方向では、南列524cm、北列500cmで、梁行方向では、東列436cm、西列452cmである。

[柱穴] 掘り方は、径20cm～60cmで、径30cm～40cmのものがもっとも多い。深さは全搬に浅いが、柱穴の底面の標高は斜面下位に向って低くなっている。

[柱間寸法] 各柱穴間の平均柱間は、桁行方向では253cm、梁行方向では221cmである。桁行方向の柱間は中央から東側がやや長く設定されている。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第37号掘立柱建物跡 (第173図)

[位置] D・E-40・41グリッドに位置する。東側に傾斜する斜面上に立地する。

[重複] 第150・160号竪穴住居跡、第34～36号掘立柱建物跡、第149・208号土壇と重複している。新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 桁行2間、梁行2間で、総柱のやや南北に長い南北棟建物跡である。南東隅の柱穴は確認できなかった。各柱列の総長は、桁行方向では、東列(460cm)、西列444cmで、梁行方向では、北列424cm、中央列400cmである。

[柱穴] 掘り方は、径20cm～44cmであり、概ね径30cm程である。深さは一定していないが、柱穴底面の標高では、斜面下位へ向かって低くなる傾向が認められる。

[柱間寸法] 桁行方向での平均柱間は228cmで、梁行方向では201cmである。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第38号掘立柱建物跡 (第174図)

[位置] A～C-38・39グリッドに位置する。東側に傾斜する斜面上に立地する。

[重複] 第39号掘立柱建物跡、第235号土壇、第168号溝と重複している。本建物跡は土壇よりは新しいが、他の遺構との新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 桁行2間、梁行2間で、総柱の南北棟建物跡である。梁行方向の北列で大きく広がり、台形状を呈する。各柱列の総長は、桁行方向では東列780cm、西列778cmで、梁行方向では南列380cm、北列476cmである。

[柱穴] 掘り方は、径30～40cm程である。深さは一定しないが、斜面下位の柱穴底面の標高はより低くなる傾向が認められる。

[柱間寸法] 桁行方向での平均柱間は391cmで、梁行方向では215cmである。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第39号掘立柱建物跡 (第174図)

[位置] B～D-38・39グリッドに位置する。東側に傾斜する斜面上に立地する。

[重複] 第38号掘立柱建物跡他と重複する。新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 東側の柱列が不明瞭であるが全体形は断定し得ないが、桁行2間、梁行2間で、総柱の南北棟建物と考えられる。確認できた各柱列の総長は、桁行方向では、西列604cm、中央列590cm、梁行方向では、南列522cmである。

[柱穴] 掘り方は、径24～68cmとバラ付きが認められる。深さは一定ではないが、底面の標高では南北方向では、ほぼ一様であり、東西方向では、斜面下の柱穴底面の標高が低い。

[柱間寸法] 桁行方向では中央の柱穴より北側の柱間が約4対6の割合で、長く設けられている。梁行方向の平均柱間は260cmである。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第40号掘立柱建物跡 (第175図)

[位置] C・D-42・43グリッドに位置する。東側に向い傾斜する斜面上に立地する。

[重複] 第212号土壇及び大型の風倒木痕と重複している。本建物跡が最も新しい。

[平面形・規模] 南東隅及び北東隅の柱穴を検出できなかったが、桁行2間、梁行2間のほぼ方形の総柱建物跡と考えられる。確認できた各柱列の総長は、西列532cm、南北中央列548cm、東西中央列530cmである。

[柱穴] 掘り方は、径25cm程の小型のものと、径40cm程のものと2種類が認められる。深さは一定ではないが、底面の標高は南北方向ではほぼ一様であり、東西方向では、斜面下のものの標高が最も低い。

[柱間寸法] 各柱穴間の平均柱間は264cmである。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第41号掘立柱建物跡 (第175図)

[位置] A・B-36・37グリッドに位置する。東側に傾斜する斜面上に立地する。

[重複] 第42号掘立柱建物跡、第171・173号溝と重複している。新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 南東及び北東の両端部の柱穴が未検出のため全体形は断定できないが、桁行2間、梁行2間で、総柱の南北棟建物跡と考えられる。検出できた各柱列の総長は、桁行方向では、西列638cm、中央列642cmで、梁行方向では中央列430cmである。

[柱穴] 掘り方は、径30cm未満であるが、南列中央の柱穴は、数個の柱穴が重複している。深さは、南北方向では底面の標高がほぼ一様であるが、東西方向では、斜面下の柱穴の標高が低い。

[柱間寸法] 各柱穴間の平均柱間は、桁行方向では320cm、梁行方向では215cmである。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 本建物跡と重複する第42号建物跡とは新旧が不明であるが、一部の柱穴を共用する改築の可能性も考えられる。

(白鳥 文雄)

第42号掘立柱建物跡 (第176図)

[位置] A・B-37グリッドに位置する。東側に向って傾斜する斜面上に立地する。

[重複] 第41号掘立柱建物跡、第171・173号溝と重複している。新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 確認できた建物跡は、桁行2間、梁行1間の台形を呈する南北棟建物跡である。各柱列の総長は東列630cm、西列626cmで、南列332cm、北列222cmである。

[柱穴] 掘り方は、中間の柱穴が径30cm程で、他は径40～48cmである。深さは一定ではなく、底面の標高は斜面下の柱穴が低く掘り込まれている。

[柱間寸法] 各柱穴間の柱間には類似性は認められない。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 本建物跡は、形状及び柱間寸法においても特殊である。調査時の担当者による実

測図を用いたが、本建物跡の本来の形状は、軸線がほぼ一様であることなどから、重複する第41号建物跡と柱穴を共用した可能性もあり、改築の可能性も考えられる。

(白鳥 文雄)

第43号掘立柱建物跡 (第176図)

[位置] C・D-40～42グリッドに位置する。東側に向い傾斜する斜面上に立地する。

[重複] 第36号掘立柱建物跡と重複している。新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 桁行2間、梁行2間の総柱建物跡である。各柱列の総長は東列480cm、西列512cm、北列504cm、南列500cmである。全体では北西隅がやや突出する形状である。

[柱穴] 掘り方は、中央の柱穴が径約20cmで最も小さく、他は径30～40cm程である。深さは確認面からはほぼ一定しているが、底面の標高では傾斜に沿っている傾向が認められ、東側に向い低く掘り込まれている。

[柱間寸法] 各柱穴間の柱間寸法は247cmである。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第44号掘立柱建物跡 (第177図)

[位置] Z X・Z Y-41・42グリッドに位置する。東方向に向い急傾斜地に立地している。

[重複] 第182・183号竪穴住居跡と重複している。新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 建物跡が急勾配の東側に延びるため全体の形状は不明であるが、桁行2間、梁行2間の総柱建物跡と推定される。確認できた各柱列の総長は南列366cm、西列322cmである。

[柱穴] 掘り方は、径30cm以内の小型のもので、深さは一定ではない。底面の標高は、南北方向ではほぼ一様であるが、東西方向では斜面の下のものが低く穿たれている。

[柱間寸法] 残存する各柱穴の平均柱間は174cmである。東西方向では、中列より西側(斜面の上部)の柱間が長く設定されている。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第45号掘立柱建物跡 (第177図)

[位置] F・G-44・45グリッドに位置する。

[重複] 第162号溝と一部重複している。

[平面形・規模] 桁行1間、梁行1間のやや南北に長い建物跡である。東西約230cm、南北

約240cmである。

〔柱穴〕 掘り方は、径20～40cm程で、一様ではない。深さは10cm～70cmであり、北東隅の柱穴が極端に浅い。

〔柱間寸法〕 南北方向の柱間は約240cmで一定しているが、東西方向では220cmと230cmで一定していない。

〔出土遺物〕 出土しなかった。

〔その他〕 西列の柱穴間を結ぶ溝があることから、竪穴住居跡の柱穴であった可能性もあるが、調査担当者が、竪穴住居跡と断定し得ないとしたことから、掘立柱建物跡として取り扱った。

(白鳥 文雄)

第3節 土 壙

第4号土壙 (第178図)

[位置] I-10グリッドに位置する。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部は90×76cm、底面で87×74cmで、深さは51cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は筒状である。底面は平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。暗褐色土及び黒褐色土を基調としており、全体に炭化物粒を混入する。特に2・4・5層中には多量に混入している。下層にはロームの混入が認められるが、混入量は全体に少なく、上部はほとんど含まれていない。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 確認面から土師器片数片が出土した。

[その他] 堆積状況等から平安時代のものと考えられる。

(白鳥 文雄)

第5号土壙 (第178図)

[位置] F-8グリッドに位置する。

[重複] 第19号住居跡と重複し、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 南側の一部が調査区外にあるため、全体は把握できないが楕円形を呈するものと考えられる。南北の確認できた長さは110cm、短軸は120cmで、深さは25cmである。底面、壁はナベ底状を呈し、緩やかに立ち上がる。

[堆積土] 3層に分層できた。第1層は耕作土である。覆土は底面上がローム主体の黄褐色土で、基調となるものはしまりのない暗褐色土である。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第6号土壙 (第178図)

[位置] G-8・9グリッドに位置する。

[重複] 第20号住居跡と重複している。同住居跡の覆土を掘り込んで構築しており、本土壙が新しい。また、第1号掘立柱建物跡の柱穴と近接しているが、新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 平面形は、攪乱により、北側部分が不明であるが、不整な方形、または隅丸の方形を呈すると考えられる。南壁部分で一辺が約80cm程である。深さは約25cmである。壁面はナベ底状に緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。黒褐色土を基調としており、ローム粒をごく少量含む。底面直上の第3層には炭化物が少量混入する。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器が出土している。

[その他] 構築時期は、第20号住居跡より新しいが、室町時代の第1号掘立柱建物跡との新旧が不明であることから、断定できない。

(白鳥 文雄)

第7号土壙 (第178図)

[位置] G-9グリッドに位置する。

[重複] 第20号住居跡と重複する。また、調査時に第1号焼土とした焼土ブロックと重複する。第20号住居跡→焼土→本土壙の順に構築されており、本土壙が最も新しい。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。北西側が一段低く構築されており、開口部で、60×44cmである。深さは50cmで、断面形は円筒形に近い。

[堆積土] 8層に分層できた。黒褐色土及び暗褐色土を基調としており、ローム粒を少量混入している。上部は炭化物粒が混入しており、底面直上はローム主体の層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙として取り扱ったが、形状・堆積土の状況から、柱穴の可能性が高い。時期は不明である。

(白鳥 文雄)

第8号土壙 (第179図)

[位置] I-10・11グリッドに位置する。

[重複] 第17号溝と重複しており、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸105cm、短軸60cmで、深さは13cmである。

[堆積土] 2層に分層できた。黒褐色土及び暗褐色土が堆積しており、ローム粒の混入が認められる。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第9号土壙 (第179図)

[位置] F-12グリッドに位置する。

[重複] 第10・13号土壙・第17号溝と重複しており、本土壙が、最も新しい。第13号土壙と

の重複は、平面上では、明確に確認できなかった。

[平面形・規模] 楕円形を呈し、長軸234cm、短軸(140cm)で、深さは20～54cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は部分的に異なるが、全体に平坦である。

[堆積土] 12層に分層できた。黒褐色土を基調とし、全体に軟質である。炭化物粒を少量含んでいる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第10号土壙 (第179図)

[位置] F-12グリッドに位置する。

[重複] 第9・13号土壙・第17号溝と重複し、本土壙は9号土壙より古く、他の遺構より新しい。

[平面形・規模] 楕円形を呈し、長軸220cm、短軸138cmで、深さは46～56cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は部分的に異なるが、全体に平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。暗褐色土とロームを基調とし、全体に軟質である。炭化物粒を全体に多量に含んでいる。

[出土遺物] 土師器および須恵器が出土している。

(白鳥 文雄)

第11号土壙 (第181・182図)

[位置] H・I-11に位置する。

[重複] 第56・83号土壙、第17号溝と重複している。前2基の土壙との新旧関係は不明であるが、第17号溝より本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は不整な楕円形を呈する。長軸170cm、短軸110cmで、深さは28～34cmである。壁は緩やかに立ち上がり、南北両端に深さ5cm程のくぼみが認められる。

[堆積土] 2層に分層できた。上部は褐色土で、下部は黄褐色土である。全体に炭化物粒を混入し、全体に軟質である。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 平安時代の溝を切っているが、用途・時期は不明である。

(白鳥 文雄)

第12号土壙 (第181・182図)

[位置] H・I-11に位置する。

[重複] 第17号溝と重複しており、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は不整な円形を呈する。長軸140cm、短軸110cmで、深さは33～38cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦で、北側に向かって傾斜している。

[堆積土] 3層に分層できた。暗褐色土及び褐色土を基調としており、全体に炭化物粒を混入し、全体に軟質である。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 平安時代の溝を切っているが、用途・時期は不明である。

(白鳥 文雄)

第13号土壙 (第179図)

[位置] F-12グリッドに位置する。

[重複] 第9・10号土壙・第17号溝と重複し、本土壙は9・10号土壙より古く、17号溝より新しい。

[平面形・規模] 楕円形を呈し、長軸は約180cm、短軸は112cmで、深さは27～36cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は部分的に異なるが、全体に平坦である。

[堆積土] 6層に分層できた。暗褐色土とロームを基調とし、全体に軟質である。炭化物粒を全体に多量に含んでいる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第14号土壙 (第181・182図)

[位置] H-11グリッドに位置する。

[重複] 第17・53号溝と重複しており、本土壙が、最も新しい。

[平面形・規模] 楕円形を呈し、長軸60cmで、深さは20cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は凹凸が認められる。

[堆積土] 1層で、暗褐色土にローム及び炭化物粒が混入している。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第15号土壌 (第181・182図)

[位置] H-11に位置する。

[重複] 第16・53・55号土壌、第17号溝と重複している。第16号土壌及び第17号溝より新しいが、第53・55号土壌との新旧は不明である。

[平面形・規模] 土層観察用のベルトでは、径115cm程であるが、重複が著しいため平面形は不明瞭である。深さは約30cmである。

[堆積土] 8層に分層できた。上部は褐色土を、下部は黒褐色土を基調としている。全体に炭化物粒を混入しており、軟質である。人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 平安時代の溝を切っているが、用途・時期は不明である。

(白鳥 文雄)

第16号土壌 (第181・182図)

[位置] H-11に位置する。

[重複] 第15・53・54号土壌と重複している。本土壌は、第15号土壌より古い、第53・54号土壌との新旧は不明である。

[平面形・規模] 平面形は、不整な楕円形を呈し、長軸150cm、短軸130cmで、深さは約45cmである。

[堆積土] 6層に分層できた。上部は暗褐色土を、下部は褐色土を基調としている。全体に炭化物粒を混入しており、軟質である。人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 用途・時期は不明である。

(白鳥 文雄)

第17号土壌 (第183・184図)

[位置] I-10グリッドに位置する。

[重複] なし。

[平面形・規模] 南北に長い楕円形を呈し、中央部がややくびれる。開口部で100×62cm、底面で70×40cmで、深さは30cmである。壁はやや外反するが、ほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 6層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒を混入している。全体に炭化物を混入しており、底面直上の第3・5・6層は多量の炭化物を含む層である。炭化物は、2

～3cm程の木片であり、木材の形状は把握できなかった。また粉炭状に潰れたものも多量に混入している。

[出土遺物] 確認面で土師器片が少量出土した。

(白鳥 文雄)

第18号 a 土壙 (第183図)

[位置] I-13グリッドに位置する。

[重複] 第57号住居跡と重複し、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 不整形円形を呈し、中位に段を持つ。開口部は長軸120cm、短軸106cm、底面は長軸80cm、短軸64cmである。深さは44cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は全体に平坦である。

[堆積土] 9層に分層できた。暗褐色土を基調とし、焼土粒及び炭化物粒を全体に混入している。

[出土遺物] 確認面上から土器片が出土しているが、本土壙に伴うかどうかは不明である。

[その他] 中位の段の部分から、堆積土の状態が若干異なることから、2基の重複の可能性も考えられる。

(白鳥 文雄)

第18号 b 土壙 (第183図)

[位置] I-14グリッドに位置する。

[重複] 第57号住居跡と重複し、本土壙が新しい。柱穴により攪乱を受けている。

[平面形・規模] 楕円形を呈し、開口部で長軸100cm、短軸74cm、底面で長軸94cm、短軸70cmで、深さは10cmである。

[堆積土] 1層で、暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒及び焼土粒が全体に混入している。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第19号土壙 (第183図)

[位置] I-13グリッドに位置する。

[重複] 第57号住居跡・第20号溝と重複している。本土壙は、第57号住居跡より新しく、第20号溝より古い。

[平面形・規模] 不整形を呈する。開口部で長軸 110cm、短軸80cm、底面で長軸60cm、短軸50cmである。深さは、60cmである。

[堆積土] 11層に分層できた。黒褐色土を基調としており、ローム粒・炭化物粒を混入している。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 堆積土の状態から、大型の柱穴と考えられる。

(白鳥 文雄)

第20号土壌 (第184図)

[位置] G-12グリッドに位置する。

[重複] 第25号溝と重複し、本土壌が新しい。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部で136×130cm、底面で108×100cmで、深さは50cmである。壁はやや外反するが、ほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、かたくしまっている。

[堆積土] 7層に分層できた。黒褐色土を基調とし、全体にローム粒を混入している。全体にしまりがあり、炭化物粒が微量混入している。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器片及び鉄滓・小礫が出土している。

(白鳥 文雄)

第21号土壌 (第185図)

[位置] I-16グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] ほぼ南北に長い楕円形を呈する。開口部で132×81cm、底面で116×73cmで、深さは25cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は起伏が認められる。

[堆積土] 3層に分層できた。黒褐色土を基調とし、ローム粒を混入する。全体に軟質であり、第1層中には焼土が少量混入する。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第22号土壌 (第185図)

[位置] H-13グリッドに位置する。

[重複] 第25・26号住居跡・第26号溝と重複しており、本土壌が、最も新しい。

[平面形・規模] 確認時では長軸約 200cmの楕円形を呈していたが第26号溝と重複部分が不明瞭である。残存部は、(58)×(74)cmで、深さは最大で20cmである。

[堆積土] 黒褐色土を基調とし、ローム粒が混入しているが、明瞭に確認することができなかった。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第23号土壙 (第186図)

[位置] H-13・14グリッドに位置する。

[重複] 第27・52・57・58号竪穴住居跡・第23号溝と重複し、本土壙が最も新しいと考えられる。

[平面形・規模] 楕円形を呈する。開口部は長軸270cm、短軸130cm、底面は長軸216cm、短軸96cmである。深さは20～30cmである。壁は長軸の両端が緩やかに立ち上がる舟底型を呈している。底面は全体に平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒及び炭化物粒を全体に混入している。底面直上に焼土のブロックが数箇所確認できた。

[出土遺物] 土師器片・須恵器・鉄滓などが出土している。

[その他] 形状・底面の焼土及び鉄滓の出土から鉄関連の遺構の可能性も考えられる。

(白鳥 文雄)

第24号土壙 (第185図)

[位置] H・I-15・16グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 東西に長い不整な楕円形を呈する。開口部で129×90cm、底面で120×70cmで、深さは20cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は湾曲している。

[堆積土] 5層に分層できた。黒褐色土を基調とし、ローム粒を混入する。一部に焼土粒を少量混入し、全体にしまりがなく、軟質である。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第26号土壙 (第186図)

[位置] J・K-15グリッドに位置する。

[重複] なし。

[平面形・規模] 楕円形を呈し、開口部で長軸217cm、短軸135cm、底面で長軸188cm、短軸116cmで、深さは13cmである。

[堆積土] 3層に分層できた。黒褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒及び焼土粒が全体に混入している。

[出土遺物] 土師器片が出土している。

(白鳥 文雄)

第27号土壙 (第187図)

[位置] F-8グリッドに位置する。

[重複] 第24号住居跡と重複し、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 不整な円形を呈する。開口部で185×140cm、底面で142×107cmで、深さは38cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面もやや湾曲している。底面の北端部下には、第24号住居跡の周溝が確認された。

[堆積土] 5層に分層できた。黄褐色土を基調としており、全体にロームブロック・炭化物粒を混入する。また、第3層上部に十和田a降下火山灰と考えられる火山灰が混入している。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第28号土壙 (第187図)

[位置] I-12グリッドに位置する。

[重複] 第26・28号溝と重複しており、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、上部が攪乱を受けているため、不明瞭であるが、長方形を呈するものと考えられる。開口部で193×178cm、底面で127×100cmで、深さは53cmである。壁は西壁を除いてほぼ垂直に立ち上がるが、上部は攪乱のため不明瞭である。四壁も下部の立ち上がりはほぼ垂直である。底面は平坦であり、中央部西側から一段高いテラス状の段が構築されている。

[堆積土] 3層に分層できた。暗褐色土を基調としており、ローム粒・焼土及び炭化物粒を混入させる。全体にしまりが強い。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器片が数片出土している。

[その他] 堆積等から平安時代、またはそれ以降の所産と考えられる。

(白鳥 文雄)

第29号土壙 (第181図)

[位置] H-11グリッドに位置する。

[重複] 第17号溝と重複しており、新旧関係は不明瞭である。

[平面形・規模] 不整楕円形を呈する。長軸85cm、短軸40cmで、深さは約20cmである。

[堆積土] 黒褐色土を基調とし、ローム粒が混入しているが、明瞭に確認することができなかった。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第30号土壙 (第188図)

[位置] L・M-28グリッドに位置する。

[重複] 認められない。

[平面形・規模] 平面形は、円形を呈する。長軸100cm、短軸90cmで、深さは16~20cmである。壁はやや急に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。黒褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第31号土壙 (第188図)

[位置] M・N-28グリッドに位置する。

[重複] 認められない。

[平面形・規模] 平面形は、円形を呈する。長軸130cm、短軸122cmで、深さは16~20cmである。壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。黒褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第32号土壙 (第188図)

[位置] K・L-35グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸1.24m、短軸1.06mで、深さ28cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は起伏がみられる。

[堆積土] 3層に分層できた。黒褐色土を基調としており、ロームブロックが混入している。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 滋彦)

第33号土壙 (第189図)

[位置] J-34・35グリッドに位置する。

[重複] 第34号土壙・第32号住居跡と重複している。本土壙は第34号土壙より古く、第32号住居跡より新しい。

[平面形・規模] 平面形は残存部から推定すると長方形を呈すると思われる。長軸(3.04m)、短軸1.42mで、深さは21cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。第1層中に焼土が混入している。

[出土遺物] 土師器が出土している。

(成田 滋彦)

第34号土壙 (第189図)

[位置] J-34・35グリッドに位置する。

[重複] 第32号住居跡・第33号土壙と重複している。本土壙は重複しているすべての遺構より新しい。

[平面形・規模] 平面形は長方形を呈する。長軸2.62m、短軸1.71mで、深さ16cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。黒褐色土を基調としており、ロームブロックを含む。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

(成田 滋彦)

第35号土壙 (第189図)

[位置] K-33・34グリッドに位置する。

[重複] 第30号溝と重複しており、第35号土壙は第30号溝より古い。

[平面形・規模] 平面形は全体的に丸みを有する長楕円形を呈する。長軸(1.74m)、短軸0.51mで、深さ14cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は起伏がみられる。

[堆積土] 3層に分層できた。ロームブロックを混入しており、人為堆積と思われる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 滋彦)

第37号土壙 (第190図)

[位置] M-35・36グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は不整楕円形を呈する。長軸2.72m、短軸1.84mで、深さは54cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面はナベ底状を呈する。

[堆積土] 2層に分層できた。黒褐色土を基調としている。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 滋彦)

第38号土壙 (第190・207図)

[位置] J-29グリッドに位置する。

[重複] 認められない。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。長軸135cm、短軸110cmで、深さは12～15cmである。壁は緩やかに立ち上がり、上部が広がる。底面はナベ底状である。

[堆積土] 4層に分層できた。黒褐色土を基調とし、炭化物粒・焼土粒を含む。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器が出土している。

[その他] 底面から焼土が検出されている。

(中嶋 友文)

第39号土壙 (第191図)

[位置] I・J-35グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸0.86m、短軸0.69mで、深さは11cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は起伏がみられる。

[堆積土] 2層に分層できた。黒褐色土を基調としており、焼土が混入している。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 滋彦)

第40号土壙 (第191図)

[位置] N-31・32グリッドに位置する。

[重複] 認められない。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。長軸153cm、短軸152cmで、深さは50～60cmである。壁は緩やかに立ち上がり、上部が広がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 7層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器が出土した。

(中嶋 友文)

第41号土壙 (第191図)

[位置] G-29グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、円形を呈する。長軸78cm、短軸75cmで、深さは20～36cmである。壁はやや緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦でナベ底状を呈する。

[堆積土] 4層に分層できた。黒褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器が出土した。

(中嶋 友文)

第42号土壙 (第192図)

[位置] M-35グリッドに位置する。

[重複] 第35・78号住居跡の外周溝と重複している。本土壙は、第35号住居跡の外周溝より新しく、第78号住居跡の外周溝より古い。

[平面形・規模] 平面形は長方形を呈する。長軸1.92m、短軸1.34mで、深さは23cmである。壁は、緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。ローム及び黄褐色土が混入している。

[出土遺物] 土師器が出土した。

(成田 滋彦)

第43号土壙 (第192図)

[位置] M-32グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、北側が張り出す楕円形を呈している。長軸240cm、短軸192cmで、深さは20～30cmである。壁はやや急に立ち上がる。底面は起伏が多く、北側の隅に溝状のピットがみられる。

[堆積土] 5層に分層できた。黒褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・焼土粒を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第45号土壙 (第192図)

[位置] J-36グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は長方形を呈する。長軸1.16m、短軸0.87mで、深さは34cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた、第1・2層中に焼土を含み人為堆積と思われる。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土した。

(成田 滋彦)

第47号土壙 (第193図)

[位置] L-29・30グリッドに位置する。

[重複] 第36号住居跡・第37号住居跡・第87号住居跡と重複し、本土壙が一番新しい。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ方形を呈する。長軸100cm、短軸95cmで、深さは15～25cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒と小礫を含んでいる。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土した。

[その他] 底面からピットが3個検出された。遺構に伴うものかは、不明である。

(中嶋 友文)

第48号土壙 (第194図)

[位置] M-27グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ方形を呈する。長軸98cm、短軸84cmで、深さは12～20cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はやや起伏が認められる。

[堆積土] 4層に分層できた。黒褐色土を基調とし、炭化物を含んでいる。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面及び遺構の外側からピットが3個検出された。遺構に伴うものかは、不明である。

(中嶋 友文)

第49号土壙 (第194図)

[位置] K-28グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ方形を呈する。長軸110cm、短軸102cmで、深さは12～14cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。暗褐色土を基調とし、炭化物を含んでいる。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 遺構の外側からピットが検出された。遺構に伴うものかは、不明である。

(中嶋 友文)

第50号土壙 (第194図)

[位置] L-28グリッドに位置する。

[重複] 第73号溝と重複し、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈すると思われる。規模は、不明である。深さは22～26cmである。残存している壁は緩やかに立ち上がり、上部が広がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 重複するピットは、本土壙より新しく、伴わないものと考えられる。

(中嶋 友文)

第51号土壙 (第195図)

[位置] J-16に位置する。

[重複] 第55号住居跡、第54号溝と重複し、本土壙は第54号溝より新しいが、第55号住居跡よりも古い。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。長軸112cm、短軸83cmで、深さは24cmである。壁は、底面から緩やかに立ち上がるが堅緻である。

[堆積土] 3層に分層できた。黒褐色土を基調とし、炭化物・ロームを混入する。自然堆積したものと考えられる。

[出土遺物] 土師器が出土した。

[その他] 構築時期は、第55号住居跡より以前である。

(成田 悟)

第52号土壙 (第195図)

[位置] I-12グリッドに位置する。

[重複] 第25号溝と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 底面の一部と考えられるやや堅くしまった部分だけの確認である。壁等は確認できなかった。確認範囲は、長軸220cm、短軸140cmである。

[堆積土] 確認できなかった。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 確認範囲の規模から土壙としたが、竪穴住居跡の一部の可能性もある。

(白鳥 文雄)

第53号土壙 (第181図)

[位置] G-11グリッドに位置する。

[重複] 第15・16・59号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 不整楕円形を呈し、長軸125cm、短軸100cmで、深さは30cm程である。全体にナベ底状を呈する。重複が著しいため、本来の形状は不明である。

[堆積土] 堆積状況は確認できなかった。暗褐色土を基調とし、ローム粒及び炭化物粒を混入する。

[出土遺物] 覆土上部より土師器片・須恵器片等が出土しているが、重複が著しいため、本土壙に伴うかどうかは不明である。

[その他] 断定はできないが、重複及び覆土から、ほぼ本遺跡の主体時期である平安期のも

のと考えられる。また、鉄滓等多量の製鉄関連遺物が出土する第17号溝との関係から製鉄関連の遺構の可能性も考えられる。

(白鳥 文雄)

第54号土壙 (第181図)

[位置] H-11グリッドに位置する。

[重複] 第16・55・56号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 長楕円形を呈し、長軸115cm、短軸60cmで、深さは13~22cmである。全体にナベ底状を呈する。重複が著しいため、本来の形状は不明である。

[堆積土] 堆積状況を確認できなかった。暗褐色土を基調とし、ローム粒及び炭化物粒を混入する。

[出土遺物] 覆土上部より土師器片・須恵器片等が出土しているが、重複が著しいため、本土壙に伴うかどうかは不明である。

[その他] 底面の形状から柱穴の可能性も考えられる。

(白鳥 文雄)

第55号土壙 (第181図)

[位置] H-11グリッドに位置する。

[重複] 第15・54・56・82号土壙・第17号溝と重複または接しているが、新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 不整楕円形を呈し、長105cm、短軸75cmで、深さは20cm程である。全体にナベ底状を呈する。重複が著しいため、本来の形状は不明である。

[堆積土] 堆積状況を確認できなかった。暗褐色土を基調とし、ローム粒及び炭化物粒を混入する。

[出土遺物] 覆土上部より土師器片・須恵器片等が出土しているが、重複が著しいため、本土壙に伴うかどうかは不明である。

[その他] 断定はできないが、重複及び覆土から、ほぼ本遺跡の主体時期である平安期のものと考えられる。また、鉄滓等多量の製鉄関連遺物が出土する第17号溝との関係から製鉄関連の遺構の可能性も考えられる。

(白鳥 文雄)

第56号土壙 (第181図)

[位置] H-11グリッドに位置する。

[重複] 第11・54・55号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 不整楕円形を呈し、長軸90cm、短軸60cmで、深さは28cmである。全体にナベ底状を呈する。重複が著しいため、本来の形状は不明である。

[堆積土] 堆積状況を確認できなかった。暗褐色土を基調とし、ローム粒及び炭化物粒を混入する。

[出土遺物] 覆土上部より土師器片・須恵器片等が出土しているが、重複が著しいため、本土壙に伴うかどうかは不明である。

[その他] 第55号土壙ほかと同様に平安期のものと考えられる。

(白鳥 文雄)

第57号土壙 (第196図)

[位置] H-14グリッドに位置する。

[重複] なし。

[平面形・規模] 南北にやや長い円形を呈し、開口部で長軸92cm、短軸82cm、底面で長軸67cm、短軸54cmで、深さは82cmである。底面中央に径20cm程、深さ5cm程の小ピットが確認された。

[堆積土] 8層に分層できた。黒褐色土を基調とし、ローム粒及び炭化物粒が上部に少量に混入している。全体に軟質であり、人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 形状及び覆土から柱穴の可能性も考えられる。

(白鳥 文雄)

第58号土壙 (第196図)

[位置] I-11グリッドに位置する。

[重複] 第26号溝と重複し、本土壙が古い。

[平面形・規模] 一部分を確認しただけで、全体形は不明である。確認範囲は180×68cmである。深さは最大で15cm程である。底面は起伏が多い。

[堆積土] 6層に分層できたが、4～6層は26号溝の覆土である。褐色土を基調とし、1・2層中に十和田a降下火山灰がブロックまたは帯状に堆積しているのが確認された。

[出土遺物] 土師器片が出土している。

(白鳥 文雄)

第59号土壙 (第181図)

[位置] G-11グリッドに位置する。

[重複] 第53号土壙と重複し、また、第17号溝と接しているが、新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 不整形円形を呈し、長軸93cm、短軸85cmで、深さは25cmである。全体にナベ底状を呈する。重複が著しいため、本来の形状は不明である。

[堆積土] 堆積状況を確認できなかった。暗褐色土を基調とし、ローム粒及び炭化物粒を混入する。

[出土遺物] 覆土上部より土師器片・須恵器片等が出土しているが、重複が著しいため、本土壙に伴うかどうかは不明である。

(白鳥 文雄)

第62号土壙 (第196図)

[位置] M-27グリッドに位置する。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は、長楕円形を呈する。長軸2.08m、短軸0.88mである。壁はほぼ緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

[堆積土] 7層に分層できた。黒褐色土を基調としており、焼土や灰白色粘土のブロックを含む。

[出土遺物] 土師器が出土した。

[その他] 堆積土の状態から平安時代の土壙と思われるが、用途は不明である。

(三浦 孝仁)

第63号土壙 (第197図)

[位置] M-25に位置する。

[位置] なし。

[平面形・規模] 平面形は、東西に長い楕円形である。長軸0.8m、短軸0.7mで、深さ0.25mである。壁は底面から緩やかに立ち上がり、上部が広がる。底面は小さな凹凸がある。

[堆積土] 3層に分層した。層全体にローム・ブロックを多く含む。第1層はローム土で、人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 時期不明である。

(岡田 康博)

第64号土壙 (第197図)

[位置] O-27に位置する。

[重複] 第10号溝跡と重複し、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形と考えられる。直径1.5mで、深さ0.2mである。壁は底面から直線的に外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、西端に小ピットがある。小ピットは直径0.6m、深さ0.15mである。

[堆積土] 3層に分層した。層全体に炭化物、ローム・ブロックを含む。人為堆積と考えられる。

[その他] 時期不明である。

(岡田 康博)

第65号土壙 (第197図)

[位置] L-25・26に位置する。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は不整楕円形を呈する。長軸は0.94m、短軸は0.80mで深さは約10cmである。壁はなだらかに立ち上がり、開口部が広がる。底面に23×18cm、深さ10cmのピットを伴う。

[堆積土] 6層に分層できた。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 構築の時期、用途は不明である。

(長瀬 昇)

第66号土壙 (第198図)

[位置] K・L-23・24に位置する。

[重複] 第81号溝・第82号溝・第83号溝と重複する。いずれの溝よりも本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は不整楕円形を呈する。長軸は1.36m、短軸は1.12mで深さは8～14cmである。壁はなだらかに立ち上がり、開口部が広がる。

[堆積土] 4層に分層できた。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器が出土した。

[その他] 構築の時期、用途は不明である。

(長瀬 昇)

第67号土壙 (第198図)

[位置] K-23に位置する。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形である。直径1.5mで、深さ0.15mである。壁は底面から緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。南西端に小ピットがあるが新旧関係は不明である。

[堆積土] 6層に分層した。層全体に炭化物を少量を含む。下層にはローム・ブロックを多く含むことから人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土した。

[その他] 時期不明である。

(岡田 康博)

第69号土壙 (第198図)

[位置] G-17に位置する。

[重複] 柱穴と重複し、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形である。直径1.0mで、深さ0.7mである。壁は底面から直線的に外傾しながら立ち上がる。底面はナベ底状である。

[堆積土] 6層に分層した。層全体に炭化物、焼土を含む。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 時期不明である。

(岡田 康博)

第71号土壙 (第14図)

[位置] K-8グリッドに位置する。

[重複] 第24号竈穴住居跡・第21号溝と重複しており、本土壙が最も新しい。

[平面形・規模] 不整な楕円形を呈し、東側部分は後世の攪乱のため不明瞭である。長軸170cm、短軸110cmで深さは、約30cmである。全体にナベ底状を呈している。

[堆積土] 重複のため明瞭に確認できなかった。黒褐色土を基調とし、炭化物粒及び焼土を混入している。

[出土遺物] 覆土上部より土師器片及び製塩土器の破片が出土した。

[その他] 土壙として扱ったが、焼土等の範囲によって確認したため、全体形は不明瞭であり、意図的に掘り込んでいなかった可能性も考えられる。焼土と製塩土器が出土したが、本土

壙中において製塩したものではないと考えられる。

(白鳥 文雄)

第72号土壙 (第199図)

[位置] G-17に位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、円形を呈する。長軸75cm、短軸68cmで、深さは29cmである。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり堅緻である。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 黒褐色土の1層のみで、ロームブロックを混入する。自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 構築時期については不明である。

(成田 悟)

第73号土壙 (第199図)

[位置] H-17・18グリッドに位置する。

[重複] 第74号土壙、第69号溝と重複しており、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸251cm、短軸190cmで、深さは11～19cmである。壁は、底面から緩やかに立ち上がり、柔らかく軟弱である。底面は中央部が南北方向に不整な楕円形状に落ち込んでおり柔らかく起伏がある。

[堆積土] 2層に分層できた。黒土色を基調とし、全層にロームを混入する。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土した。

[その他] 構築時期については不明である。

(成田 悟)

第74号土壙 (第199図)

[位置] H-17・18グリッドに位置する。

[重複] 第73号土壙、第69号溝と重複しており、第73号土壙より古い、第69号溝より新しい。

[平面形・規模] 平面形は、東西に細長い不整楕円形を呈する。長軸171cm、短軸83cmで、深さは19cmである。壁は、底面からほぼ緩やかに立ち上がり、柔らかく軟弱である。底面は若干起伏がある。

[堆積土] 2層に分層できた。黒色土を基調とし、ロームを混入する。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土した。

(成田 悟)

第75号土壙 (第200図)

[位置] G-16グリッドに位置する。

[重複] 本土壙より古いピットが底面の東側に位置する。

[平面形・規模] 平面形は、不整形円形を呈する。長軸70cm、短軸68cmで、深さは24cmである。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり堅緻である。底面に深さ30cmのピットが位置する。

[堆積土] 2層に分層できた。黒褐色土を基調とし、炭化物・焼土粒を混入する。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 構築時期については不明である。

(成田 悟)

第78号土壙 (第200図)

[位置] M-23に位置する。

[重複] 第2号溝跡と重複し、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は、東西に長軸をとる楕円形である。長軸1.1m、短軸0.9m、深さ0.2mである。壁は底面から緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層した。層全体に炭化物を少量含む。自然堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 時期不明である。

(岡田 康博)

第79号土壙 (第200図)

[位置] N・O-23グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 昭和57年の調査では確認できなかった土壙であり、半分が調査区域外にあるため、明確でないが、平面形は、楕円形を呈すると思われる。長軸1.70mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。黒・暗褐色土を基調としており、ローム粒を含む。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 時期、用途ともに不明である。

(三浦 孝仁)

第80号土壙 (第200図)

[位置] M-24グリッドに位置する。

[重複] 第82、84、92号竪穴住居跡と重複しているが本土壙はこれらの遺構より新しい。

[平面形・規模] 平面形は、長方形を呈する。長軸1.20m、短軸0.55mである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

[堆積土] 黒褐色土を基調としており、ローム粒を含む。

[出土遺物] 土師器が出土した。

[その他] 重複関係から平安時代以降のものであるが、明確な時期、用途は不明である。

(三浦 孝仁)

第81号土壙 (第201図)

[位置] G-8グリッドに位置する。

[重複] 第24号竪穴住居跡と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 不整形を呈する。長軸74cm、短軸70cmで、深さは約28cmである。底面はナベ底状を呈する。

[堆積土] 8層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム主体の堆積土である。全体に締まりが認められる。

[出土遺物] 土師器片が出土している。

(白鳥 文雄)

第82号土壙 (第181図)

[位置] H-11グリッドに位置する。

[重複] 第11・55・56・83号土壙・第17号溝と重複、または接しているが、新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 本来の形状は不明であるが、底面は径約35cm程の円形を呈する。深さは45cm程である。

[堆積土] 堆積状況を確認できなかった。黒褐色土を基調とし、ローム粒及び炭化物粒を混

入する。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 形状から柱穴とも考えられる。

(白鳥 文雄)

第83号土壇 (第181図)

[位置] H-11グリッドに位置する。

[重複] 第11・55・56・82号土壇・第17号溝と重複、または接しているが、新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 長楕円形を呈し、長軸85cm、短軸30cmで、深さは35cm程である。重複が著しいため、本来の形状は不明である。

[堆積土] 堆積状況を確認できなかった。暗褐色土を基調とし、ローム粒及び炭化物粒を混入する。

[出土遺物] 上部で、第17号溝から本土壇にかけて炭化板材が出土したが、伴うものかどうかは不明である。

(白鳥 文雄)

第85号土壇 (第200図)

[位置] K-9グリッドに位置する。

[重複] 第127・128号住居跡と重複しており、本土壇が最も新しい。

[平面形・規模] 平面形は、やや不整な円形を呈する。開口部で88×85cm、底面で72×68cmで、深さは56cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形状は円筒形を呈する。底面は平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。暗褐色土を基調としており、全体にローム粒を混入する。また、炭化物粒を混入し、粘性がややある。上部は焼土まじりの層で、第2層はローム暗褐色土が互層をなしており、第3層はこれらの混合土である。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 第2層の中位から底面直上まで20片程の土師器片及び小礫が1点出土している。

[その他] 堆積状態及び出土遺物から、平安時代に構築されたものと考えられる。

(白鳥 文雄)

第86号土壇 (第201図)

[位置] I-9グリッドに位置する。

[重複] 第67号竪穴住居跡と重複しており、本土壌が古い。

[平面形・規模] 重複のため全体形は不明である。確認部分は130×63cmで、深さは21cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は緩やかなナベ底状を呈している。

[堆積土] 3層に分層できた。黒褐色土を基調とし、ローム粒を混入する。また、全体に炭化物を多く含み、特に第2層中の炭化物は、粉炭状のものとスサ状のものが全体に敷かれたような状態であった。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 上部より土師器片が出土している。

[その他] 炭または、これに類するものの集積場の可能性も考えられる。

(白鳥 文雄)

第87号土壌 (第202図)

[位置] N-22・23グリッドに位置する。

[重複] 第3号竪穴住居跡、第90号溝と重複する。本土壌は、第3号竪穴住居跡及び第90号溝よりも古い。

[平面形・規模] 平面形は不整楕円形を呈する。長軸は1.72m、深さは約44cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、開口部と底面の平面形はほぼ同じである。底面は西側が若干高くなる。

[堆積土] 2層に分層できた。

[出土遺物] なし。

[その他] 構築の時期、用途は不明である。

(長瀬 昇)

第91号土壌 (第202図)

[位置] N-29グリッドに位置する。

[重複] 第47号住居跡と重複し、本土壌が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、不整楕円形を呈する。長軸(188cm)、短軸126cmで、深さは10～20cmである。壁は緩やかに立ち上がる。底面はやや起伏が多い。

[堆積土] 2層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器が出土している。

(中嶋 友文)

第92号土壙 (第202図)

[位置] L-30グリッドに位置する。

[重複] 第37号住居跡と重複し、本土壙は、第37号住居跡より古い。

[平面形・規模] 平面形は、隅の丸い方形を呈する。長軸158cm、短軸148cmで、深さは12～20cmである。壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 黒褐色土の層のみで、ローム粒・炭化物粒・焼土粒を含んでいる。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面からピットが3個検出された。遺構に伴うものかは、不明である。

(中嶋 友文)

第94号土壙 (第203図)

[位置] M-23・24グリッドに位置する。

[重複] 第82、84、85、94号竪穴住居跡、第91号溝と重複し、これらの遺構より新しい。

[平面形・規模] 平面形は、方形を呈する。長軸1.35m、短軸1.20m、深さ20cm程である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。黒褐色土を基調としており、炭化粒・焼土粒を混入している。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

[その他] 重複関係から平安時代以降のものであるが、明確な時期、用途は不明である。

(三浦 孝仁)

第96号土壙 (第203図)

[位置] N・O-19・20グリッドに位置する。

[重複] 第96号溝と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 方形を呈し、長軸104cm、短軸約100cmで、深さは10cm程である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦であるが、掘り方は礫が混入している。

[堆積土] 3層に分層できた。黒褐色土を基調とし、全体に軟質である。炭化物粒を少量混入している。第2層中には灰状の堆積物がみられ、苫小牧火山灰の可能性が考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第97号土壙 (第203図)

[位置] F-9グリッドに位置する。

[位置] 本土壙の東側には、時期不明のピットが位置する。

[平面形・規模] 遺構の南側が調査区域外になっているため、北側部分だけの検出であるが、残存部から推定すると平面形は不整な楕円形を呈すると考えられる。長軸は不明であるが、短軸153cmで、深さは26cmである。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、柔らかく軟弱である。底面は若干起伏があり、北側で一段低くなり、ピットが存在した可能性も考えられる。

[堆積土] 3層に分層できた。暗褐色土を基調とし、全層にロームを混入する。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 構築時期については不明である。

(成田 悟)

第98号土壙 (第203図)

[位置] M-22、23グリッドに位置する。

[重複] 第79号溝と重複するが、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸114cm、短軸75cm、深さは0～10cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦で、貼り土が施されている。

[堆積土] 1層に分層できた。火山灰の混入はみられない。自然堆積、人為堆積かは不明である。第2層は底面に貼っている土で堆積土ではない。

[出土遺物] 土師器が出土している。

[その他] 平面形、堆積土の状態から平安時代のものである可能性が高い。

(羽柴 直人)

第100号土壙 (第204図)

[位置] K-28グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、円形を呈する。長軸120cm、短軸120cmで、深さは12～16cmである。壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第101号土壌 (第204図)

[位置] N・O-28・29グリッドに位置する。

[重複] 第37号溝と重複し、本土壌が古い。

[平面形・規模] 平面形は、不整形を呈する。規模は、不明である。深さは16～26cmである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は起伏が多い。

[堆積土] 3層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 北側が、昭和57年度の調査部分と重なる。

(中嶋 友文)

第103号土壌 (第204図)

[位置] G-19に位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、円形を呈する。長軸65cm、短軸56cmで、深さは58cmである。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、堅緻である。底面は概ね平坦である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 構築時期については不明である。

(成田 悟)

第104号土壌 (第204図)

[位置] G・H-19に位置する。

[重複] 第116号溝と重複し、本土壌が古い。

[平面形・規模] 平面形は東西に長い楕円形を呈する。長軸(128)cm、短軸(120)cmで、深さは20cmである。壁は緩やかに立ち上がり、上部が広がる。底面は若干起伏があり柔らかく軟弱である。

[堆積土] 3層に分層できた。黒色土を基調とし、炭化物粒を混入する。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 第116号溝との新旧関係から、平安時代のものと考えられる。

(成田 悟)

第108号土壙 (第205図)

[位置] J-32グリッドに位置する。

[重複] 第63号溝と重複する。第63号溝より本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈すると思われるが、残存部分が少なく不明である。長軸(1.40)m、短軸1.14m、深さは43cmである。壁は緩やかに立ち上がり、上端が広がる。底面は平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。暗褐色土を基調とする。自然堆積と考えられる。

(木村 高)

第111号土壙 (第205図)

[位置] F-31に位置する。

[重複] 第105号溝と重複し、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸の残存部162cm、短軸118cm、深さは20~26cmである。壁はゆるやかに立ち上がり、そのまま底面に続いている。

[堆積土] 2層に分層できた。火山灰の混入はみられない。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

[出土遺物] なし。

[その他] 堆積土の状態から平安時代のものである可能性が高い。

(羽柴 直人)

第113号土壙 (第205図)

[位置] J-23に位置する。

[重複] 第2号溝跡と重複し、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は、北西~南東に長軸のある楕円形である。長軸1.6m、短軸0.8m、深さ0.2mである。壁は底面から緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層した。層全体にローム・ブロックを少量含む。自然堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 時期不明である。

(岡田 康博)

第114号土壙 (第206図)

[位置] J・K-23グリッドに位置する。

[重複] 第79号溝跡と柱穴重複し、本土壙が柱穴より古く、溝跡より新しい。

[平面形・規模] 平面形は東西に長軸のある楕円形である。長軸1.0m、短軸0.8m、深さ0.25mである。壁は底面から緩やかに湾曲しながら立ち上がるが、西壁は段状になっている。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層した。層全体にローム・ブロック、焼土を含む。人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 時期不明である。

(岡田 康博)

第115号土壙 (第206図)

[位置] K-32、L-32グリッドに位置する。

[重複] 第64号溝と重複する。第63号溝より古い。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈すると思われるが、第63号溝と重複するため不明である。長軸2.26m、短軸(19.3)mで、深さは43cmである。壁は非常に緩やかに立ち上がり、上端が広がる。底面には凹凸が認められる。

[堆積土] 15層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム、炭化物粒を混入する。自然堆積と考えられる。

(木村 高)

第116号土壙 (第207図)

[位置] J-29グリッドに位置する。

[重複] 第46、111、114号溝と重複している。本土壙は第46、114号溝より古く、第111号溝よりは新しい。

[平面形・規模] 北側は削平され半分だけ確認できた。直径約3.5mの円形を呈すると思われる。深さは40~50cmで、壁からはほぼ垂直に立ち上がっている。底面は起伏がなく平坦である。

[堆積土] 10層に分層できた。黒褐色土を基調とし、ローム・炭化物粒を混入している。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器の破片が6点と須恵器が出土した。

(下山 信昭)

第117号土壙 (第206図)

[位置] G・H-28・29グリッドに位置する。

[重複] 第120号溝と重複する。本土壙は第120号溝より新しい。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸202cm、短軸124cm、深さは22～28cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の時期は平安時代のものである可能性が高い。

(羽柴 直人)

第119号土壙 (第207図)

[位置] G-25グリッドに位置する。

[重複] 第10号溝と重複するが、本土壙が古い。

[平面形・規模] 重複により西側が失われているが、平面形は円形を呈すると思われる。直径90cm、深さは16～20cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は凹凸がみられる。

[堆積土] 3層に分層できた。人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 遺構の形状から平安時代のものである可能性が高い。

(羽柴 直人)

第120号土壙 (第207図)

[位置] G-25グリッドに位置する。

[重複] 第1号溝と重複するが、本土壙が古い。

[平面形・規模] 重複により東側が失われているが、平面形は円形を呈すると思われる。直径154cm、深さは14～18cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 土師器が出土している。

[その他] 遺構の形状と堆積土の状況から平安時代のものである可能性が高い。

(羽柴 直人)

第121号土壙 (第207図)

[位置] H-25グリッドに位置する。

[重複] 第10号溝と重複するが、本土壙が古い。

[平面形・規模] 重複により西側が失われているが、平面形は方形ないし長方形を呈すると思われる。南北径は52cmである。深さは8～12cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 遺構の形状と堆積土の状況から平安時代のものである可能性が高い。

(羽柴 直人)

第122号土壙 (第208図)

[位置] H-24グリッドに位置する。

[重複] 第124号溝と重複する。本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は不整な方形を呈する。西壁120cm、東壁122cm、南壁142cm、北壁140cm、深さは8～12cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 平面形と堆積土の状況から、土壙の時期は平安時代のものである可能性が高い。

(羽柴 直人)

第123号土壙 (第208図)

[位置] H-23グリッドに位置する。

[重複] 第118号住居跡と重複する。本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸92cm、短軸53cm、深さは4～10cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

[堆積土] 1層で、火山灰の混入はみられない。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 土師器が出土している。

[その他] 土壙の時期は平安時代のものである可能性が高い。

(羽柴 直人)

第125号土壙 (第209図)

[位置] G-21グリッドに位置する。

[重複] 第126号土壙、第134・141号溝と重複する。本土壙は第126号土壙より新しく、第134、

141号溝より古い。

[平面形・規模] 重複により東側が失われているが、平面形は不整な楕円形を呈すると思われる。南北径は204cm、深さは10～14cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。火山灰の混入はみられない。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壌の時期は平安時代のものである可能性が高い。

(羽柴 直人)

第126号土壌 (第209図)

[位置] G-21グリッドに位置する。

[重複] 第125号土壌と重複しているが、本土壌が古い。

[平面形・規模] 重複により北側が失われているが、平面形は楕円形を呈すると思われる。南北径は148cm、深さは10～12cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は概ね平坦である。

[堆積土] 1層で、火山灰の混入はみられない。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 時代は不明であるが、平安時代の可能性が高い。

(羽柴 直人)

第127号土壌 (第209図)

[位置] I-23グリッドに位置する。

[重複] 第111号住居跡・第129号住居跡と重複し、本土壌が古い。

[平面形・規模] 平面形は、北東～南西に長軸のある楕円形である。長軸1.1m、短軸0.9m、深さ0.1mである。壁は底面から緩やかに湾曲しながら立ち上がる。底面は船底状である。

[堆積土] 1層で、層全体にローム・ブロックを多量に含む。人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 時期不明である。

(岡田 康博)

第128号土壌 (第209図)

[位置] H-20、21グリッドに位置する。

[重複] 第141号溝と重複するが本土壌が古い。

[平面形・規模] 平面形は角張った楕円形を呈する。長軸190cm、短軸132cm、深さは40～44cmである。壁はやや角度をもって立ち上がり、底面は概ね平坦である。

[堆積土] 1層で、自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 平面形から平安時代のものと考えられる。

(羽柴 直人)

第129号土壙 (第210図)

[位置] F-2グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は不整な形を呈する。長軸250cm、短軸52～104cm、深さは6～12cmである。壁はなだらかに立ち上がり、そのまま底面に続いている。

[堆積土] 1層で、自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] なし

[その他] 土壙の時期は不明である。形状から考えて人為的なものではない可能性もある。

(羽柴 直人)

第130号土壙 (第210図)

[位置] I・J-21グリッドに位置する。

[重複] 第131号溝と重複しているが、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸の残存部132cm、短軸112cm、深さは44～48cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は凹凸がある。

[堆積土] 3層に分層できた。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の時期は平安時代の可能性が高い。

(羽柴 直人)

第131号土壙 (第210図)

[位置] I-41・42グリッドに位置する。

[重複] 第79号溝、第130号土壙と重複するが、本土壙が最も新しい。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸244cm、短軸152cm、深さは24～34cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は凹凸がある。

[堆積土] 1層で、自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

[その他] 土壌の時期は平安時代の可能性が高い。

(羽柴 直人)

第133号土壌 (第210図)

[位置] K-31グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は不整な方形を呈する。長軸138cm、短軸84cm、深さは6～10cmである。壁はなだらかに立ち上がり、そのまま底面に続いている。

[堆積土] 1層で、自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壌の時期は不明である。人為的なものではない可能性も高い。

(羽柴 直人)

第135号土壌 (第211図)

[位置] J-36グリッドに位置する。

[重複] 第143号住居跡とプラン的に重複しているが、新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈すると思われる。南北軸82cm、深さは8～12cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 1層に分層できた。火山灰の混入はみられない。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 第143号住居とプラン的に重なることから、この住居に伴う施設の可能性がある。

(羽柴 直人)

第136号土壌 (第211図)

[位置] J-37グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸116cm、短軸80cm、深さは2～22cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。火山灰の混入はみられない。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 鉄滓が出土している。

[その他] 堆積土の状態から平安時代のものである可能性が高い。

(羽柴 直人)

第138号土壙 (第211図)

[位置] J・K-45・46グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸172cm、短軸140cmで、深さは90～95cmである。壁は、やや急に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 8層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋・白鳥)

第139号土壙 (第212図)

[位置] G-37・38グリッドに位置する。

[重複] 第151号溝と重複し、本土壙が古い。

[平面形・規模] 重複により東側が失われているが、平面形は楕円形を呈すると思われる。長軸の残存部78cm、短軸58cm、深さは5～14cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は凹凸がみられる。

[堆積土] 1層で、火山灰の混入はみられない。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 第151号溝より古いことから平安時代のものである可能性が高い。

(羽柴 直人)

第142号土壙 (第105図)

[位置] E-37・F-37グリッドに位置する。

[重複] 第148号住居跡、第146号溝と重複する。本土壙は第148号住居跡より新しく、第146号溝より古い。

[平面形・規模] 重複により東側部分が失われているが平面形は方形を呈すると思われる。西壁145cm、南壁の残存部128cm、北壁の残存部112cm、深さは12～35cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器が出土している。

[その他] 底面に二次的に堆積した焼土がみられた。土壌の時期は平安時代のものである可能性が高い。

(羽柴 直人)

第143号土壙 (第212図)

[位置] 1-39グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は長方形を呈する。西壁115cm、東壁112cm、南壁68cm、北壁70cm、深さは2~22cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 土師器が出土している。また鉄滓が出土している。

[その他] 遺構の形状から平安時代のものである可能性が高い。

(羽柴 直人)

第144号土壙 (第212図)

[位置] J-39グリッドに位置する。

[重複] 第33号掘立柱建物跡と重複するが前後関係を確認できなかった。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。直径102cm、深さは15~28cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。自然堆積、人為堆積かは不明である

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 遺構の形状と堆積土の状況から平安時代のものである可能性が高い。

(羽柴 直人)

第145号土壙 (第213図)

[位置] H-40グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。直径152cm、深さは12~36cmである。壁はやや角度をもって立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器が出土している。

[その他] 遺構の形状と堆積土の状況から平安時代のものである可能性が高い。

(羽柴 直人)

第146号土壙 (第213図)

[位置] J-44・45グリッドに位置する。

[重複] 第146号住居跡と重複する。新旧関係は、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、開口部で直径約115cm、深さは第146号住居跡に削平されているため残存部分で約90cmである。断面形は内部に広がるフラスコ状で、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 残存部分を8層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋・白鳥)

第148号土壙 (第214図)

[位置] J-42・43グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、開口部で直径約95cm、深さは85～100cmである。断面形は内部に広がるフラスコ状で、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 11層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋・白鳥)

第149号土壙 (第214図)

[位置] E-40グリッドに位置する。

[重複] 第150号住居跡と重複する。本土壙は第150号住居跡より古い。

[平面形・規模] 重複により北側部分が失われているが平面形は方形を呈すると思われる。西壁の残存部70cm、東壁の残存部68cm、南壁85cm、深さは25～30cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 平面形と堆積土の状況から、土壌の時期は平安時代のものである可能性が高い。

(羽柴 直人)

第150号土壙 (第215図)

[位置] K-39グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸105cm、短軸75cm、深さは2～14cmである。
壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

[堆積土] 1層で、火山灰の混入はみられない。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 南側にあるピットは本土壙に伴う可能性がある。

(羽柴 直人)

第151号土壙 (第215図)

[位置] L-38グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸122cm、短軸72cm、深さは2～24cmである。
壁はなだらかに立ち上がりそのまま底面に続いている。

[堆積土] 1層で、火山灰の混入はみられない。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 須恵器が出土している。

[その他] 南側にあるピットは本土壙に伴う可能性がある。

(羽柴 直人)

第152号土壙 (第215図)

[位置] K-38グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸92cm、短軸68cm、深さは2～14cmである。
壁はなだらかに立ち上がり、底面は凹凸がみられる。

[堆積土] 1層で、火山灰の混入はみられない。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 土師器が出土している。

[その他] 時代は不明である。

(羽柴 直人)

第153号土壙 (第215図)

[位置] F-42グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸151cm、短軸80cm、深さは15～18cmである。
壁はやや角度をもって立ち上がり、底面は概ね平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 壁際に周溝状に小ピットが巡っている。土壙の時期は不明である。

(羽柴 直人)

第154号土壙 (第216図)

[位置] F-42グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸70cm、短軸45cm、深さは8～12cmである。
壁はやや角度をもって立ち上がり、底面は概ね平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の時期は不明である。

(羽柴 直人)

第155号土壙 (第216図)

[位置] H-41グリッドに位置する。

[重複] 遺構との重複はないが、風倒木との重複により南側が不明瞭になっている。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈すると思われる。長軸の残存部118cm、短軸84cm、深さは8～20cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は凹凸がある。

[堆積土] 1層で、自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の時期は不明である。

(羽柴 直人)

第156号土壙 (第216図)

[位置] I-41、42グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は不整な楕円形を呈する。長軸145cm、短軸70cm、深さは12～16cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は概ね平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の時期は不明である。人為的なものではない可能性もある。

(羽柴 直人)

第157号土壙 (第216図)

[位置] G-42、43グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は不整な楕円形を呈する。長軸464cm、短軸106cm、深さは10～34～cmである。壁はなだらかに立ち上がり、底面は凹凸がある。

[堆積土] 2層に分層できた。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の時期は不明である。人為的なものではない可能性も高い。

(羽柴 直人)

第158号土壙 (第217図)

[位置] I-42グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸82cm、短軸52cm、深さは8～10cmである。壁はなだらかに立ち上がり底面にそのまま続く。

[堆積土] 2層に分層できた。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の時期は不明である。

(羽柴 直人)

第162号土壙 (第217図)

[位置] H-42グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 開口部の平面形は不整な楕円形を呈する。長軸76cm、短軸49cm、深さは35～45cmである。開口部より底面が広いフラスコ状のものである。

[堆積土] 4層に分層できた。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壌の時期は不明であるが、縄文時代のフラスコ状ピットの可能性もある。

(羽柴 直人)

第163号土壙 (第217図)

[位置] L-41グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、開口部で直径約120cm、深さは約60cmである。断面形は内部に広がるフラスコ状で、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 褐色土の層で、炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋・白鳥)

第164号土壙 (第218図)

[位置] K・L-40グリッドに位置する。

[重複] 第171号土壙と重複し、新旧関係は、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、開口部が東側にかたよる楕円形を呈する。規模は、長軸120cm、短軸110cm、深さは70～90cmである。壁は、西壁が内部に広がり、その他は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、やや起状がみられる。

[堆積土] 2層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・焼土を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋・白鳥)

第165号土壙 (第218図)

[位置] J・K-40グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、開口部が西にかたよる円形を呈する。規模は、開口部で直径約

105cm、深さは125～155cmである。断面形は内部に広がるフラスコ状で、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 9層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 覆土から土器片が出土した。

(中嶋・白鳥)

第166号土壌 (第219図)

[位置] I-42グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。直径62cm、深さはなだらかに立ち上がり底面にそのまま続く。

[堆積土] 2層に分層できた。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壌の時期は不明である。

(羽柴 直人)

第167号土壌 (第219図)

[位置] L-41グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、やや東に開口部がかたよる円形を呈する。規模は、開口部の直径約120cm、深さは約90cmである。壁は、西壁が内部に広がり、その他は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 上部が削平されているが、4層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋・白鳥)

第168号土壌 (第219図)

[位置] K-41グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸82cm、短軸62cm、深さは25～30cmである。

壁はやや広角度をもって立ち上がる。底面は平坦である。

[堆積土] 1層に分層できた。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の時期は不明である。

(羽柴 直人)

第169号土壙 (第219図)

[位置] K-42グリッドに位置する。

[重複] 第164号住居跡とプラン的に重複するが、新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。直径82cm、深さは55cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

[堆積土] 6層に分層できた。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器が出土したている。

[その他] 形態と堆積土の状況から平安時代のもと思われる。

(羽柴 直人)

第170号土壙 (第220図)

[位置] G-44グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は方形を呈する。西壁148cm、東壁155cm、南壁155cm、北壁158cmで、深さは15～35cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器が出土している。

[その他] 南西隅、北西隅、北壁中央に柱穴状のピットがみられる。土壙の時期は平面形と堆積土の状況から平安時代のもと考えられる。

(羽柴 直人)

第171号土壙 (第218図)

[位置] K・L-40・41グリッドに位置する。

[重複] 第164号土壙と重複し、新旧関係は、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は、東西にやや長い楕円形を呈する。規模は、長軸(200cm)、短軸160cm、深さは35～40cmである。壁は、緩やかに立ち上がり、底面は、やや起状がみられる。

[堆積土] 2層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋・白鳥)

第172号土壙 (第220図)

[位置] L・M-42グリッドに位置する。

[重複] 第137号土壙と重複し、新旧関係は、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形及び規模は、不明である。残存する西壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 確認できなかった。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋・白鳥)

第173号土壙 (第220図)

[位置] L・M-41・42グリッドに位置する。

[重複] 第172号土壙と重複し、新旧関係は、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、開口部がやや東にかたよる円形を呈する。規模は、開口部の直径約120cm、深さは約95cmである。断面形は東壁を除いて、内部に広がるフラスコ状で、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 8層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋・白鳥)

第174号土壙 (第221図)

[位置] L-42グリッドに位置する。

[重複] 第164号住居跡、第175号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙が、第164号住居跡より古く、第175号土壙より新しい。

[平面形・規模] 平面形は、開口部が楕円形を呈する。規模は、開口部の長軸160cm、短軸130cm、深さは約95cmである。断面形は内部に広がるフラスコ状で、底面は、やや起伏が認められた。

[堆積土] 第164号住居跡に削平されているが、3層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ロー

ム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面の北側に、深さ約30cmの楕円形のピットを検出した。用途については、不明である。

(中嶋・白鳥)

第175号土壙 (第221図)

[位置] L-41・42グリッドに位置する。

[重複] 第174号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙が、古い。

[平面形・規模] 平面形及び規模は不明であるが、残存する壙底部の長軸200cm、短軸140cmで楕円形を呈している。断面形は内部に広がるフラスコ状で、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 第174号土壙に削平されているが、2層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒と炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋・白鳥)

第176号土壙 (第221図)

[位置] L-42・43グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、開口部がほぼ円形を呈する。規模は、開口部の直径約130cm、深さは約105cmである。断面形は内部に広がるフラスコ状で、底面は、やや起伏が認められる。

[堆積土] 10層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒と炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面の北側に、深さ約15cmの楕円形のピットを検出した。用途については、不明である。

(中嶋・白鳥)

第179号土壙 (第222図)

[位置] J・K-41グリッドに位置する。

[重複] 第164号住居跡、第182号、183号土壙と重複する。本土壙はこれらの遺構より新しい。

[平面形・規模] 平面形は方形を呈する。西壁175cm、東壁192cm、南壁182cm、北壁200cmで、

深さは75～105cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。北西隅と北東隅にピットがみられる。

〔堆積土〕 7層に分層できた。自然堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 土師器が出土している。また鉄滓が出土している。

〔その他〕 土壌の時期は平面形と堆積土の状況、出土遺物から平安時代のもと考えられる。

(羽柴 直人)

第180号土壌 (第223図)

〔位置〕 K-43グリッドに位置する。

〔重複〕 認められなかった。

〔平面形・規模〕 平面形及び規模は、斜面によって一部削平されているため不明である。断面形は南壁を除いて、内部に広がるフラスコ状で、底面は、やや起伏が認められる。

〔堆積土〕 残存部分を5層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

〔出土遺物〕 出土しなかった。

(中嶋・白鳥)

第181号土壌 (第223図)

〔位置〕 N-42、43グリッドに位置する。

〔重複〕 第188号土壌と重複するが、本土壌が新しい。

〔平面形・規模〕 平面形は円形を呈する。直径112cm、深さは11～15cmである。壁はなだらかに立ち上がり、底面にそのまま続く。

〔堆積土〕 3層に分層できた。自然堆積、人為堆積かは不明である。

〔出土遺物〕 土師器が出土した。また、底面から鉄滓が出土している。

〔その他〕 鉄滓が出土したことから、平安時代の土壌と思われる。

(羽柴 直人)

第185号土壌 (第223図)

〔位置〕 G-44グリッドに位置する。

〔重複〕 なし

〔平面形・規模〕 平面形は円形を呈する。直径71cm、深さは8～12cmである。壁はなだらかに立ち上がり、底面にそのまま続く。

[堆積土] 2層に分層できた。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壌の時期は不明である。

(羽柴 直人)

第186号土壌 (第223図)

[位置] K・L-44グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形はほぼ円形を呈する。規模は、直径105cmで、深さは65～100cmである。壁は、南壁が内部に広がり、その他は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。黄褐色土を基調とし、炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋・白鳥)

第187号土壌 (第224図)

[位置] L-44グリッドに位置する。

[重複] 第192号土壌と重複する。新旧関係は、本土壌が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、開口部の直径約95cm、深さは約65～90cmである。断面形は内部に広がるフラスコ状で、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋・白鳥)

第188号土壌 (第224図)

[位置] L-42、43グリッドに位置する。

[重複] 第181号、191号土壌と重複する。本土壌は第181号土壌より古く、第191号土壌より新しい。

[平面形・規模] 平面形は方形を呈する。西壁185cm、東壁175cm、南壁175cm、北壁195cmで、深さは26～42cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。各四隅に柱穴状のピットがみられる。

[堆積土] 4層に分層できた。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 鉄滓が出土した。

[その他] 底面に炭化物の広がりが見られる。土壌の時期は平面形と堆積土の状況から平安時代のものと考えられる。

(羽柴 直人)

第189号土壙 (第225図)

[位置] L-44グリッドに位置する。

[重複] 第195号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、東西に長い楕円形を呈する。規模は開口部で、長軸195cm、短軸130cm、深さは90～125cmである。壁は、東壁が、ほぼ垂直に立ち上がるほかは、断面形が内部に広がるフラスコ状で、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋・白鳥)

第190号土壙 (第225図)

[位置] L-43グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、開口部が楕円形を呈する。規模は、開口部で長軸90cm、短軸75cm、深さは120～150cmである。断面形は内部に広がるフラスコ状で、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋・白鳥)

第192号土壙 (第224図)

[位置] K・L-43グリッドに位置する。

[重複] 第187号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は、南北にやや広がるがほぼ円形を呈する。規模は開口部で、長軸125cm、短軸(100cm)、深さは70～95cmである。断面形は内部に広がるフラスコ状で、底面は、

ほぼ平坦である。

〔堆積土〕 5層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

〔出土遺物〕 出土しなかった。

(中嶋・白鳥)

第194号土壌 (第226図)

〔位置〕 M-43グリッドに位置する。

〔重複〕 認められなかった。

〔平面形・規模〕 平面形は、開口部が北側にかたよる楕円形を呈する。規模は開口部で長軸140cm、短軸125cm、深さは85～145cmである。断面形は内部に広がるフラスコ状で、底面は、やや起伏が認められる。

〔堆積土〕 8層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

〔出土遺物〕 出土しなかった。

〔その他〕 底面の西側に、深さ約30cmの円形のピットを検出した。用途については、不明である。

(中嶋・白鳥)

第195号土壌 (第226図)

〔位置〕 L-44グリッドに位置する。

〔重複〕 第189号土壌と重複する。新旧関係は、本土壌が古い。

〔平面形・規模〕 平面形及び規模は、重複しているため不明である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。

〔堆積土〕 残存する層を、4層に分層した。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

〔出土遺物〕 出土しなかった。

(中嶋・白鳥)

第196号土壌 (第227図)

〔位置〕 L-43グリッドに位置する。

〔重複〕 第188号住居跡と重複する。新旧関係は、本土壌が、古い。

[平面形・規模] 平面形及び規模は、第188号住居跡に削平されているため不明である。深さは、約90cmである。断面形は、内部に広がるフラスコ状を呈し、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋・白鳥)

第199号土壙 (第227図)

[位置] J・K-42、43グリッドに位置する。

[重複] 第164号住居跡と重複する。本土壙は第164号住居跡より古い。

[平面形・規模] 重複により東側が失われているが、平面形は楕円形を呈すると思われる。長軸は185cm、短軸の残存部は85cmで、深さは20～25cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 1層で、自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の時期は不明である。

(羽柴 直人)

第200号土壙 (第227図)

[位置] J-46グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 開口部の平面形は楕円形を呈する。長軸98cm、短軸65cm、深さは65～70cmである。開口部より底面が広いフラスコ状のものである。

[堆積土] 3層に分層できた。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の時期は不明であるが、縄文時代のフラスコ状ピットの可能性もある。

(羽柴 直人)

第201号土壙 (第227図)

[位置] I-46グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は開口部で長軸150cm、短軸115cm、深さ

は約70cmである。壁は、西壁が、ほぼ垂直に立ち上がるほかは、断面形が内部に広がるフラスコ状で、底面は、やや起状が認められる。

[堆積土] 4層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・焼土・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋・白鳥)

第202号土壙 (第228図)

[位置] L-42グリッドに位置する。

[重複] 第204号土壙と重複し、新旧関係は、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸180cm、短軸(140cm)で、深さは45～85cmである。壁は、西壁が内部に広がり、その他は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋・白鳥)

第203号土壙 (第228図)

[位置] K・L-43グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、開口部で直径約67cm、深さは約78cmである。断面形は内部に広がるフラスコ状で、底面は、やや起状が認められる。

[堆積土] 2層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋・白鳥)

第204号土壙 (第228図)

[位置] L・M-42グリッドに位置する。

[重複] 第202号土壙と重複し、新旧関係は、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形及び規模は、削平されているため不明である。残存する南壁は、ほ

ほぼ垂直に立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 残存部分を2層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋・白鳥)

第206号土壙 (第228図)

[位置] L-42グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、開口部で直径約140cm、深さは約125cmである。断面形は内部に広がるフラスコ状で、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 13層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。

[出土遺物] 底面から礫が出土している。

(中嶋・白鳥)

第207号土壙 (第229図)

[位置] D-39グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。直径74cm、深さは8～10cmである。壁はなだらかに立ち上がりそのまま底面に続いている。

[堆積土] 1層に分層できた。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の時期は不明である。

(羽柴 直人)

第208号土壙 (第229図)

[位置] E-40グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸は120cm、短軸は105cmで、深さは8～10cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 鉄滓が出土した。

[その他] 土壌の時期は不明である。

(羽柴 直人)

第209号土壌 (第229図)

[位置] F-38グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸は108cm、短軸は98cmで、深さは10～16cmである。壁はやや広角度をもって立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壌の時期は不明である。

(羽柴 直人)

第210号土壌 (第229図)

[位置] D-38グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸は98cm、短軸は84cmで、深さは8～10cmである。壁はなだらかに立ち上がり、底面は湾曲している。

[堆積土] 2層に分層できた。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壌の時期は不明である。

(羽柴 直人)

第211号土壌 (第229図)

[位置] E-38グリッドに位置する。

[重複] 柱穴状のピットと重複するが、本土壌が新しい。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。直径は58cm、深さは20～25cmである。壁はなだらかに立ち上がり、底面は湾曲している。

[堆積土] 4層に分層できた。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

[その他] 土壌の時期は不明である。

(羽柴 直人)

第212号土壙 (第230図)

[位置] B・C-43グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は不整な楕円形を呈する。長軸は168cm、短軸は78cmで、深さは22～30cmである。壁はなだらかに立ち上がり、底面は湾曲している。

[堆積土] 2層に分層できた。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の時期は不明である。形状から考えて人為的なものではない可能性もある。

(羽柴 直人)

第213号土壙 (第230図)

[位置] B・C-43グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は不整な楕円形を呈する。長軸は80cm、短軸は58cmで、深さは10～30cmである。壁はなだらかに立ち上がり、底面は湾曲している。

[堆積土] 2層に分層できた。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の時期は不明である。

(羽柴 直人)

第215号土壙

[位置] D-37グリッドに位置する。

[重複] 第170号住居跡、第173号溝と重複する。本土壙は第170号住居跡より古く、第173号溝より新しい。

[平面形・規模] 重複により東側が失われているが、平面形は方形を呈すると思われる。西壁135cm、南壁の残存部45cm、北壁の残存部50cmで、深さは8～10cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。西壁、南壁、北壁に周溝がみられる。南西隅と北西隅にピットがみられる。堆積土は観察できなかった。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の時期は平面形と堆積土の状況、出土遺物から平安時代のもと考えられる。

(羽柴 直人)

第216号土壙 (第230図)

[位置] C-39、40グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸は101cm、短軸は70cmで、深さは20～22cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器が出土している。

[その他] 土壙の時期は不明である。

(羽柴 直人)

第217号土壙 (第230図)

[位置] C-39グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸は95cm、短軸は68cmで、深さは18～20cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。東端と西端にピットがみられる。

[堆積土] 2層に分層できた。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器が出土している。

[その他] 土壙の時期は不明である。

(羽柴 直人)

第218号土壙 (第230図)

[位置] A・B-41グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸は93cm、短軸は60cmで、深さは15～18cmである。壁はなだらかに立ち上がり、底面は湾曲している。

[堆積土] 1層に分層できた。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の時期は不明である。

(羽柴 直人)

第219号土壙 (第230図)

[位置] B-43グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸は100cm、短軸は62cmで、深さは15～20cmである。壁はなだらかに立ち上がり、そのまま底面に続いている。

[堆積土] 1層で、自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の時期は不明である。

(羽柴 直人)

第220号土壙 (第230図)

[位置] B-43グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸は95cm、短軸は72cmで、深さは22～25cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

[堆積土] 1層で、自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の時期は不明である。

(羽柴 直人)

第221号土壙 (第231図)

[位置] C-42、43グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸は172cm、短軸は75cmで、深さは40～55cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 土師器が出土している。

[その他] 土壙の時期は不明である。

(羽柴 直人)

第222号土壙 (第231図)

[位置] C・D-37グリッドに位置する。

[重複] 第173号溝と重複するが、本土壙が古い。

[平面形・規模] 重複により東側が失われているが、平面形は楕円形を呈すると思われる。長軸は235cm、短軸の残存部は125cmで、深さは15～32cmである。壁はなだらかに立ち上がり、底面は湾曲している。

[堆積土] 1層で、自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 土師器が出土している。

[その他] 土壙の時期は堆積土の状況から平安時代と思われる。

(羽柴 直人)

第223号土壙 (第231図)

[位置] B・C-38、39グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸は228cm、短軸は84cmで、深さは20～25cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

[その他] 土壙の時期は不明である。

(羽柴 直人)

第224号土壙 (第231図)

[位置] A-38グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。直径は75cmで、深さは28～30cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 土師器が出土している。

[その他] 土壙の時期は不明である。

(羽柴 直人)

第225号土壙 (第232図)

[位置] A・B-39グリッドに位置する。

[重複] 第168号溝と重複するが、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸は102cm、短軸は48cmで、深さは38cmである。壁はなだらかに立ち上がり、底面は湾曲している。

[堆積土] 1層で、自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壌の時期は不明である。

(羽柴 直人)

第226号土壌 (第232図)

[位置] A-42、43グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸は142cm、短軸は95cmで、深さは4～36cmである。壁はなだらかに立ち上がり、底面は湾曲している。

[堆積土] 2層に分層できた。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壌の時期は不明である。

(羽柴 直人)

第227号土壌 (第232図)

[位置] A-42グリッドに位置する。

[重複] 第163号溝と重複しているが、本土壌が古い。

[平面形・規模] 重複により東側を失っているが、平面形は楕円形を呈すると思われる。。長軸は138cm、短軸の残存部の長さは48cmで、深さは15～18cmである。壁はやや広角度をもって立ち上がる。底面には凹凸がみられる。

[堆積土] 2層に分層できた。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壌の時期は不明である。

(羽柴 直人)

第228号土壌 (第232図)

[位置] A-42グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸は58cm、短軸は45cmで、深さは4～15cmで

ある。壁はなだらかに立ち上がり、底面は湾曲している。

[堆積土] 2層に分層できた。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の時期は不明である。

(羽柴 直人)

第229号土壙 (第233図)

[位置] B-37グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は不整な方形を呈する。長軸は122cm、短軸は82cmで、深さは12～22cmである。壁はなだらかに立ち上がり、そのまま底面につながっている。

[堆積土] 2層に分層できた。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の時期は不明である。人為的なものではない可能性も考えられる。

(羽柴 直人)

第230号土壙 (第233図)

[位置] Z Z・A-40・41グリッドに位置する。

[重複] 第166号溝と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸は230cm、短軸は178cmで、深さは15～42cmである。壁はなだらかに立ち上がり、底面は湾曲している。

[堆積土] 3層に分層できた。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器が出土している。

[その他] 堆積土の状況から平安時代のものの可能性が高い。

(羽柴 直人)

第232号土壙 (第233図)

[位置] Z Z-40グリッドに位置する。

[重複] 第166号溝と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸は185cm、短軸は144cmで、深さは45～60cmである。壁はやや広角度をもって立ち上がる。底面は平坦である。

[堆積土] 7層に分層できた。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器が出土している。

[その他] 土壙の時期は、堆積土の状況から平安時代のものの可能性が高い。

(羽柴 直人)

第233号土壙 (第234図)

[位置] C-36、37グリッドに位置する。

[重複] 第146号溝と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 重複により東側が失われているが、平面形は楕円形を呈すると思われる。長軸は312cm、短軸の残存部は135cmで、深さは5～26cmである。壁はなだらかに立ち上がり、底面は湾曲している。

[堆積土] 2層に分層できた。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

[その他] 土壙の時期は、堆積土の状況から平安時代のものの可能性が高い。

(羽柴 直人)

第234号土壙 (第233図)

[位置] B-38グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は不整な楕円形を呈する。長軸は120cm、短軸は98cmで、深さは8～15cmである。壁はなだらかに立ち上がり、底面は湾曲している。

[堆積土] 2層に分層できた。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の時期は不明である。人為的なものでない可能性も考えられる。

(羽柴 直人)

第235号土壙 (第234図)

[位置] B-39、40グリッドに位置する。

[重複] 第174号溝と重複しており、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。直径は144cmで、深さは26～32cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器が出土している。

[その他] 堆積土の状況から平安時代のものの可能性が高い。

(羽柴 直人)

第236号土壙 (第234図)

[位置] A-41グリッドに位置する。

[重複] 第176号住居跡と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 重複により北東側が失われているが、平面形は円形を呈すると思われる。直径は102cmで、深さは2～8cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

[堆積土] 1層で、自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 土師器が出土している。

[その他] 土壙の時期は不明である。

(羽柴 直人)

第237号土壙 (第235図)

[位置] B-40グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸は122cm、短軸は102cmで、深さは26～35cmである。壁はやや角度をもって立ち上がる。底面は平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 土師器が出土している。

[その他] 土壙の時期は不明である。

(羽柴 直人)

第238号土壙 (第235図)

[位置] ZZ-40グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸は75cm、短軸は48cmで、深さは2～18cmである。壁はなだらかに立ち上がり、底面は湾曲している。

[堆積土] 2層に分層できた。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の時期は不明である。人為的なものでない可能性もある。

(羽柴 直人)

第239号土壙 (第235図)

[位置] ZZ-40グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は不整な楕円形を呈する。長軸は78cm、短軸は70cmで、深さは8～10cmである。壁はなだらかに立ち上がり、底面は湾曲している。

[堆積土] 2層に分層できた。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の時期は不明である。人為的なものでない可能性もある。

(羽柴 直人)

第240号土壙 (第235図)

[位置] ZZ-42グリッドに位置する。

[重複] 第182号住居跡と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 重複により南側がまた、削平により東側が失われており、平面形は不明である。深さは15～30cmである。壁はなだらかに立ち上がり、底面は湾曲している。

[堆積土] 2層に分層できた。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の時期は不明である。人為的なものでない可能性もある。

(羽柴 直人)

第241号土壙 (第236図)

[位置] A-46グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。長軸は108cm、短軸は12～15cmである。壁はやや広角度をもって立ち上がる。底面は平坦であり、火熱をうけて赤変している。

[堆積土] 2層に分層できた。第2層は炭化物の層である。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の時期は、堆積土の状況から平安時代の土壙の可能性が高い。

(羽柴 直人)

第242号土壙 (第236図)

[位置] B-44グリッドに位置する。

[重複] なし

[平面形・規模] 削平により東側が失われているが、平面形は方形を呈すると思われる。西壁181cm、南壁の残存部145cm、北壁の残存部124cmで、深さは0～52cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。西壁に周溝がみられる。南西隅と底面中央にピットがみられる。底面中央のピットはこの遺構の伴わない可能性が高い。

[堆積土] 4層に分層できた。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の時期は平面形と堆積土の状況、出土遺物から平安時代のものと考えられる。

(羽柴 直人)

第301号土壙 (第237図)

[位置] D・E-48グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整形である。規模は、長軸150cm、短軸130cm、深さは30～40cmである。壁は、やや緩やかに立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 7層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含む。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 覆土から土器が出土している。

(中嶋 友文)

第302号土壙 (第237図)

[位置] N-54グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、北側がやや広がる円形で、規模は、長軸95cm、短軸85cm、深さは13～25cmである。壁は、緩やかに立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含む。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 覆土から土器が出土している。

(中嶋 友文)

第303号土壙 (第237図)

[位置] N-54グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、北側が膨らむ楕円形を呈する。規模は、長軸95cm、短軸83cmで、深さは10~20cmである。壁は、緩やかに立ち上がる。底面は、やや起伏があるがほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 覆土から土器が出土している。

(中嶋 友文)

第304号土壙 (第238図)

[位置] M-54グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、北側が膨らむがほぼ円形を呈する。規模は、長軸140cm、短軸116cmで、深さは10~15cmである。壁は、緩やかに立ち上がる。底面は、やや起伏が見られるがほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 底面から礫が2点出土している。

(中嶋 友文)

第305号土壙 (第238図)

[位置] L・M-55グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、長軸123cm、短軸120cmで、深さは10~40cmである。壁は、やや急に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦であるが、中央の西よりにピットが見られる。

[堆積土] 4層に分層できた。黒褐色土を基調とし、炭化物粒・焼土粒を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 覆土から土器が出土している。

(中嶋 友文)

第306号土壙 (第238図)

[位置] L-55グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ楕円形を呈する。規模は、長軸125cm、短軸103cm、深さは10～23cmである。壁は、やや急に立ち上がる。底面は、やや起伏が見られるがほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 覆土から土器が出土している。

(中嶋 友文)

第307号土壙 (第238図)

[位置] P-51グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、南北に長い楕円形を呈し、規模は、長軸145cm、短軸112cm、深さは12～15cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は、やや起伏が見られる。

[堆積土] 3層に分層できた。暗褐色土を基調とし炭化物粒・焼土粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第308号土壙 (第239図)

[位置] N-52グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整楕円形を呈する。規模は、長軸135cm、短軸105cmで、深さは12～20cmである。壁は、緩やかに立ち上がる。底面は、やや起伏が多い。

[堆積土] 黒褐色土の層のみで、ローム粒・炭化物粒・焼土粒を含んでいる。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 覆土から土器が出土している。

(中嶋 友文)

第309号土壙 (第239図)

[位置] P-51グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸107cm、短軸88cm、深さは10cm前後である。壁は、緩やかに立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調とし、炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第311号土壙 (第239図)

[位置] Q-50・51グリッドに位置する。

[重複] 第312号土壙と重複する。本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、北側が広がる不整楕円形を呈する。規模は、長軸175cm、短軸125cm、深さは12～23cmである。壁は、緩やかに立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。黒褐色土を基調とし、ローム粒を含む。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 覆土から土器片が出土している。

(中嶋 友文)

第312号土壙 (第239図)

[位置] Q-50グリッドに位置する。

[重複] 第311号土壙と重複する。本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形である。規模は、長軸(180)cm、短軸145cm、深さは12～22cmである。壁は、緩やかに立ち上がる。底面は、起伏が多い。

[堆積土] 4層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒を含む。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 覆土から土器片が数点出土している。

[その他] 底面から炭化材が出土している。

(中嶋 友文)

第317号土壙 (第240図)

[位置] P-52グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、長軸125cm、短軸123cmで、深さは23～27cmである。壁は、やや急に立ち上がり、底面は、やや起伏が見られる。

[堆積土] 5層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 底面と覆土から土器が出土している。

(中嶋 友文)

第318号土壙 (第240図)

[位置] Q-50グリッドに位置する。

[重複] 第319号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、長軸118cm、短軸113cmで、深さは15～20cmである。壁は、西側が緩やかに立ち上がるが、その他は、やや急に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第319号土壙 (第240図)

[位置] Q-50グリッドに位置する。

[重複] 第318号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、長軸210cm、短軸205cmで、深さは55～125cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、やや起伏が多い。

[堆積土] 5層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第321号土壙 (第240図)

[位置] O-52グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形である。規模は、長軸75cm、短軸70cmで、深さは20～

30cmである。壁は、南側が内部に広がっているが、やや急に立ち上がる。底面は、やや起伏が見られる。

[堆積土] 3層に分層できた。黒褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・焼土粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 覆土から礫が2点と、土器が出土している。

(中嶋 友文)

第322号土壙 (第241図)

[位置] D-44グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整楕円形を呈する。開口部長軸165cm・短軸115cm、壙底部長軸138cm・短軸75cmで、深さは27cmである。壁は、底面から開口部にかけて緩やかに立ち上がる。底面は、若干起伏が認められるがほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明であるが、自然堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 覆土から土器片が出土した。

[その他] 本土壙の南側に深さ38cmのピットが位置するが、本土壙には伴わないと考えられる。

(成田 悟)

第323号土壙 (第241図)

[位置] B-47グリッドに位置する。

[重複] 本土壙の南東側に小ピットが位置し、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、円形を呈する。開口部長軸(111)・短軸95cm、壙底部長軸88cm・短軸76cmで、深さは33cmである。北壁は、検出できなかった。その他の壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 暗褐色土の1層のみで、炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第324号土壙 (第241図)

[位置] Z Y-50・51グリッドに位置する。

[重複] 第310号住居跡、第356号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、不整形を呈する。規模は、長軸88cm、短軸70cm、深さは10～15cmである。壁は、緩やかに立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調とし、炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 覆土から土器が出土している。

(中嶋 友文)

第325号土壙 (第242図)

[位置] Z X-52グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、東側が膨らむ円形を呈する。規模は、開口部で長軸95cm、短軸85cmで、深さは58～65cmである。断面形は、内部に広がるフラスコ状を呈し、底面は、やや起伏が多い。

[堆積土] 3層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第326号土壙 (第242図)

[位置] Z W-55グリッドに位置する。

[重複] 第327号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、開口部で長軸66cm、短軸60cmで、深さは12cm前後である。壁は、緩やかに立上がり、底面は、ナベ底状を呈する。

[堆積土] 4層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第327号土壙 (第242図)

[位置] ZK-45グリッドに位置する。

[重複] 第312号住居跡・第326号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙が第312号住居跡より新しく、第326号土壙より古い。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、開口部で長軸123cm、短軸120cm、深さは62～67cmである。断面形は、フラスコ状を呈し、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 覆土から土器が出土している。

(中嶋 友文)

第328号土壙 (第242図)

[位置] ZW-53グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、東西に膨らむ円形を呈する。規模は、長軸140cm、短軸123cmで、深さは26～55cmである。壁は、南北がほぼ垂直で、東西がやや急に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第329号土壙 (第243図)

[位置] A・B-46グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整形円形を呈する。開口部長軸136cm・短軸124cm、壙底部長軸84cm・短軸62cmで、深さは47cmである。壁は、底面から開口部にかけて若干緩やかに立ち上がる。底面は、ほぼ平坦であるが東側に緩傾斜する。

[堆積土] 4層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第330号土壙 (第243図)

[位置] Z X-53グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整形を呈する。規模は、長軸140cm、短軸120cm、深さは34～46cmである。壁は、南側が内部に広がるが、その他は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第331号土壙 (第243図)

[位置] Z X-53グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、南北に膨らむ楕円形を呈する。規模は、開口部で長軸130cm、短軸105cm、深さは45～60cmである。断面形は、南側を除いて、ほぼフラスコ状を呈している。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第332号土壙 (第244図)

[位置] Z Y-54・55グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、長軸130cm、短軸120cmで、深さは15～42cmである。壁は、やや急に立ち上がる。底面は、やや起伏が認められる。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 南側でピットと切り合っているが、本土壙に伴うものとは考えられない。

(中嶋 友文)

第333号土壙 (第244図)

[位置] Z V-55グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整形を呈している。規模は、開口部で長軸115cm、短軸100cm、深さは52～60cmである。断面形は、フラスコ状で、内部が広がっている。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第334号土壙 (第244図)

[位置] Z X-54グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、開口部で長軸138cm、短軸130cmで、深さは75～105cmである。断面形は、フラスコ状で、内部が広がっている。底面は、やや起伏が見られるが、ほぼ平坦である。

[堆積土] 6層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第335号土壙 (第245図)

[位置] Z Y-53グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、長軸135cm、短軸115cmで、深さは50～60cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 覆土と底面から土器が出土している。

[その他] 西側でピットと切り合っている。遺構に伴うものとは考えられない。ピットの規模は、長軸(105cm)、短軸(80cm)で、深さは45～60cmである。底面に焼土が多量に分布して

いる。

(中嶋 友文)

第336号土壙 (第245図)

[位置] ZV-54グリッドに位置する。

[重複] 第312号住居跡と重複する。新旧関係は、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸130cm、短軸80cmで、深さは30～35cmである。壁は、やや急に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 形状から土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第337号土壙 (第245図)

[位置] ZY-50グリッドに位置する。

[重複] 第310号住居跡と重複する。本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、長軸80cm、短軸73cmで、深さは30cm前後である。壁は、やや急に立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 6層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 覆土から土器片と礫が出土している。

(中嶋 友文)

第338号土壙 (第246図)

[位置] ZY-51グリッドに位置する。

[重複] 第310号住居跡、第339号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙が一番新しい。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸(118)cm、短軸(85)cm、深さは55cm前後である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 覆土から土器が出土している。

[その他] 底面から赤色顔料を検出しており、土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第339号土壙 (第246図)

[位置] Z Y-51グリッドに位置する。

[重複] 第310号住居跡、第338号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙が一番古い。

[平面形・規模] 平面形及び規模は、一部削平されているため不明であるが、残存部分から、深さは40cm前後で、壁はやや急に立ち上がる。底面は、中央部から壁寄りにかけて低くなっており起伏が少ない。

[堆積土] 3層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含む。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第340号土壙 (第246図)

[位置] B-51グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形で、規模は、開口部で長軸148cm、短軸145cm、深さは85～95cmである。断面形は内部が広がるフラスコ状を呈し、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 10層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含む。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 底面から土器が出土している。

(中嶋 友文)

第341号土壙 (第247図)

[位置] D・E-44グリッドに位置する。

[重複] 第305号住居跡と重複し、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は、不整楕円形を呈する。開口部長軸133cm・短軸(120)、壙底部長軸127cm・短軸(122)で、深さは102cmである。北壁は、重複により確認できなかった。東壁は底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、その他の壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 堆積土は、第305号住居跡のカマド煙道部と重複している。自然堆積か人為堆積

かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 住居跡との新旧関係から、平安時代以前に構築された。

(成田 悟)

第342号土壙 (第247図)

[位置] Z V-54・55グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、長軸63cm、短軸59cmで、深さは15～20cmである。壁は、緩やかに立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 覆土から石器が出土している。

(中嶋 友文)

第343号土壙 (第247図)

[位置] Z V-55グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸(120)cm、短軸75cmで、深さは23～37cmである。壁は、やや急に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第344号土壙 (第247図)

[位置] Z W・Z X-55グリッドに位置する。

[重複] 認められない。

[平面形・規模] 平面形は、一部崩落しているため推定であるが、円形を呈する。規模は、直径110cm前後で、深さは70～75cmである。断面形は内側が広がるフラスコ状を呈し、底面は、やや起伏があり、中央部が低くなっている。

[堆積土] 5層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然

堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第345号土壙 (第248図)

[位置] Z X-55グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、開口部で長軸80cm、短軸75cm、深さは60～65cmである。断面形は、フラスコ状を呈し、底面は、やや起伏が認められる。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第346号土壙 (第249図)

[位置] Z W・Z X-55グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈している。規模は、開口部で長軸125cm、短軸103cm、深さは55～67cmである。断面形は、フラスコ状で、内部が広がっている。底面は、やや起伏が多い。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 覆土から石器が出土している。

(中嶋 友文)

第347号土壙 (第248図)

[位置] Z V-55グリッドに位置する。

[重複] 第801号土壙・第802号土壙と重複するが、木の根による攪乱を受けているため新旧関係は、不明である。

[平面形・規模] 平面形は、不整形を呈する。規模は、長軸(125cm)、短軸110cm、深さは120～145cm前後である。壁は、北側が垂直に立ち上がり、他は、緩やかに立ち上がる。底面は、やや起伏が多く、北側に深さ約10cmの楕円形の落ち込みが見られる。

[堆積土] 3層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第348号土壙 (第249図)

[位置] Z U・Z V-53グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、長軸72cm、短軸68cmで、深さは12～22cmである。壁は、南側が内側に広がるが、他はほぼ垂直に立ち上がる。底面は、やや起伏が見られるがほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第349号土壙 (第249図)

[位置] Z P-55・56グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸125cm、短軸70cmで、深さは36～42cmである。壁は、やや急に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。黒褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 形状から土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第350号土壙 (第250図)

[位置] Z T-55・56グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸130cm、短軸60cm、深さは38～50cmである。壁は、西側が内側に広がるが、他はやや急に立ち上がる。底面は、やや起伏が見ら

れるが、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 形状から土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第351号土壙 (第250図)

[位置] E-46・47グリッドに位置する。

[重複] 第302号住居跡と重複し、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は、不整円形を呈する。開口部長軸93cm・短軸80cm、壙底部長軸78cm・短軸68cmで、深さは40cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。明黄色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 住居跡との重複から平安時代以前に構築されたと考えられる。

(成田 悟)

第352号土壙 (第250図)

[位置] E-47グリッドに位置する。

[重複] 第302号住居跡と重複し、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は、不整円形を呈する。開口部長軸90cm・短軸86cm、壙底部長軸82cm・短軸75cmで、深さは27cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、起伏があり平坦ではない。

[堆積土] 3層に分層できた。暗褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 住居跡との重複から平安時代以前に構築されたと考えられる。

(成田 悟)

第354号土壙 (第251図)

[位置] Z T-56グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、東西に長い楕円形を呈し、規模は、長軸120cm、短軸63cm、深さは65cm前後である。壁はやや急に立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 形状から土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第355号土壙 (第251図)

[位置] Z W-55グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸115cm、短軸55cmで、深さは45～55cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 覆土から土器が出土している。

(中嶋 友文)

第356号土壙 (第251図)

[位置] Z Y-50・51グリッドに位置する。

[重複] 第310号住居跡、第324号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙が一番古い。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸74cm、短軸55cm、深さは15～20cmである。壁は、やや急に立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調とし、炭化物粒・焼土粒を含んでいる。1層上面に焼土が堆積しているが、用途に関しては、不明である。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 覆土から土器が出土している。

(中嶋 友文)

第357号土壙 (第251図)

[位置] ZQ-50・51グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ方形を呈する。規模は、長軸148cm、短軸140cmで、深さは17～32cmである。壁は、緩やかに立ち上がり、底面は、やや起伏が見られる。

[堆積土] 4層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・焼土粒と多量の炭化物粒を含んでいる。底面及び壁面が火熱により焼けている。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 覆土から多量の炭化材が出土しており、炭焼窯と考えられる。

(中嶋 友文)

第358号土壙 (第252図)

[位置] ZS-55グリッドに位置する。

[重複] 風倒木と重複する。新旧関係は、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は、残存部分から楕円形と考えられる。規模は、不明である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、底面は、やや起伏が多い。

[堆積土] 確認できなかった。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面から赤色顔料を検出しており、土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第359号土壙 (第252図)

[位置] ZNグリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、北側がやや膨らむ楕円形を呈し、開口部が北側にかたよっている。規模は、開口部で長軸110cm、短軸96cmで、深さは90～115cmである。断面形は北側を除いて内部に広がるフラスコ状で、底面は、やや起伏が認められるがほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 覆土から土器が出土している。

(中嶋 友文)

第360号土壙 (第253図)

[位置] Z M・Z N-51グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、開口部で長軸(130cm)、短軸115cm、深さは120～145cmである。断面形は、フラスコ状を呈し、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 7層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 覆土から土器が出土している。

(中嶋 友文)

第361号土壙 (第253図)

[位置] Z K-53・54グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸146cm、短軸72cmで、深さは55～60cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、やや起伏が見られるがほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面から赤色顔料を検出しており、土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第362号土壙 (第254図)

[位置] Z L-50・51グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、開口部で長軸90cm、短軸75cmで、深さは95～108cmである。断面形は、内部に広がるフラスコ状を呈し、底面は、やや起伏が多い。

[堆積土] 5層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 覆土から土器が出土している。

(中嶋 友文)

第363号土壌 (第254図)

[位置] Z M-51グリッドに位置する。

[重複] 第381号土壌と重複する。新旧関係は、本土壌が古い。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、開口部で直径110cm前後で、深さは約50cmである。断面形は、内部に広がるフラスコ状を呈し、底面は、やや起伏が多い。

[堆積土] 4層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第364号土壌 (第255図)

[位置] Z M-51グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、開口部が北側にかたよる円形を呈する。規模は、開口部で長軸98cm、短軸92cmで、深さは100～110cmである。断面形は、内部に広がるフラスコ状を呈し、底面は、やや起伏が認められるが、ほぼ平坦である。

[堆積土] 8層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 覆土から土器が出土している。

(中嶋 友文)

第365号土壌 (第255図)

[位置] Z L-54グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、北側が張り出す楕円形を呈する。規模は、長軸135cm、短軸95cm、深さは65～80cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、北側の一部が張り出し、段状になっている。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面から赤色顔料を検出しており、土壌墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第366号土壙 (第256図)

[位置] ZL-53グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸145cm、短軸85cm、深さは35～40cmである。壁は、やや急に立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 形状から土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第368号土壙 (第256図)

[位置] ZM-52グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、開口部が北側にかたよる円形を呈する。規模は、開口部で長軸72cm、短軸68cm、深さは30～55cmである。断面形は、北側の一部を除いてフラスコ状で、内部が広がっている。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第369号土壙 (第257図)

[位置] ZM-51・52グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸150cm、短軸80cmで、深さは75～85cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、底面は、ほぼ平坦で、中央部が壁際よりやや低くなる。

[堆積土] 9層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面から赤色顔料を検出しており、土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第370号土壙 (第257図)

[位置] ZL-53グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸130cm、短軸75cmで、深さは50～70cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面から赤色顔料を検出しており、土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第371号土壙 (第258図)

[位置] D-47グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整楕円形を呈する。開口部長軸(125)cm・短軸(108)cm、壙底部長軸51cm・短軸48cmで、深さは30cmである。壁は、底面から開口部にかけて緩やかに立ち上がる。底面は、起伏が見られる。

[堆積土] 5層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒・焼土粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明であるが、人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 1層から土器片が出土した。

(成田 悟)

第372号土壙 (第258図)

[位置] C-48グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整円形を呈する。開口部長軸135cm・短軸129cm、壙底部長軸164cm・短軸155cmで、深さは125cmである。壁は、底面から中程にかけて内傾して立ち上がり、開口部で広がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 14層に分層できた。暗褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。特に第9層上面には炭化物粒が厚さ2cm程で層をなしている。自然堆積か人為堆積かは不明であるが、人為堆積

の可能性が高い。

[出土遺物] 第14層から土器片が出土した。

(成田 悟)

第373号土壙 (第259図)

[位置] A・B-50グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸122cm・短軸54cm、壙底部長軸106cm・短軸43cmで、深さは38cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 覆土から土器片が出土した。

[その他] 底面の東寄りから25×23cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(成田 悟)

第375号土壙 (第259図)

[位置] C-50グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、円形を呈する。開口部長軸129cm・短軸128cm、壙底部長軸134cm・短軸128cmで、深さは30cmである。西壁・北壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、その他の壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がるフラスコ状を呈する。底面は、若干起伏が認められるが概ね平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第376号土壙 (第259図)

[位置] B-49・50グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整楕円形を呈する。開口部長軸146cm・短軸63cm、壙底部長

軸125cm・短軸54cmで、深さは30cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙形状などから、土壙墓の可能性が高い。

(成田 悟)

第378号土壙 (第260図)

[位置] ZL-52グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸140cm、短軸80cmで、深さは45～55cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面から赤色顔料を検出しており、土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第379号土壙 (第260図)

[位置] ZL-52グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸153cm、短軸85cmで、深さは75～80cmである。壁は、南壁が内側にやや膨らむが、他は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、やや起伏がみられるが、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 形状から土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第380号土壙 (第260図)

[位置] ZL-52グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸148cm、短軸82cmで、深さは35～40cmである。壁は、西壁がやや緩やかで、他は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 形状から土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第381号土壙 (第261図)

[位置] ZM-51グリッドに位置する。

[重複] 第363号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸165cm、短軸95cmで、深さは80～100cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面から赤色顔料を検出しており、土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第382号土壙 (第261図)

[位置] ZN-51グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、東西に長い楕円形を呈する。規模は、長軸140cm、短軸125cm、深さは60～80cmである。壁は、南壁がやや内側に広がるが、その他は、ほぼ垂直に立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第383号土壙 (第262図)

[位置] Z N-50・51グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、開口部で長軸100cm、短軸98cmで、深さは50～75cmである。断面形は、フラスコの形状をとり、底面は、幾らか起伏はあるものの平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第384号土壙 (第262図)

[位置] Z M-50グリッドに位置する。

[重複] 第441号土壙と重複し、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、長軸136cm、短軸130cmで、深さは60～70cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、底面は、北側半分が段状に下がるが、ほぼ平坦である。

[堆積土] 7層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第385号土壙 (第263図)

[位置] Z M-50グリッドに位置する。

[重複] 第450号土壙と重複し、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸155cm、短軸120cmで、深さは55～80cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、西壁から北壁にかけて内側に若干入り込む。底面は、やや起伏が多い。

[堆積土] 8層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第386号土壙 (第263図)

[位置] B C-49グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整楕円形を呈する。開口部長軸122cm・短軸95cm、壙底部長軸154cm・短軸147cmで、深さは77cmである。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第387号土壙 (第264図)

[位置] C D-49グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸113cm・短軸91cm、壙底部長軸91cm・短軸77cmで、深さは41cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 褐色土の1層のみで、炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第388号土壙 (第264図)

[位置] Z K-51・52グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整楕円形を呈する。開口部長軸142cm・短軸88cm、壙底部長軸112cm・短軸60cmで、深さは39cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の形状などから、土壙墓の可能性が高い。

(成田 悟)

第389号土壙 (第264図)

[位置] Z H・Z I-56グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、円形を呈する。開口部長軸95cm・短軸87cm、壙底部長軸67cm・短軸64cmで、深さは49cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 覆土から土器が出土した。

(成田 悟)

第390号土壙 (第265図)

[位置] Z J-53グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸135cm・短軸61cm、壙底部長軸120cm・短軸51cmで、深さは63cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面の東壁際から29×24cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(成田 悟)

第391号土壙 (第265図)

[位置] Z L-50グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整楕円形を呈する。開口部長軸133cm・短軸112cm、壙底部長軸113cm・短軸88cmで、深さは35cmである。東壁・北壁は、底面から開口部にかけて緩やかに

立ち上がり、その他の壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第392号土壙 (第265図)

[位置] Z J-52グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整形円形を呈する。開口部長軸95cm・短軸85cm、壙底部長軸109cm・短軸96cmで、深さは55cmである。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。暗褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第393号土壙 (第266図)

[位置] Z J-54グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整形円形を呈する。開口部長軸122cm・短軸114cm、壙底部長軸162cm・短軸155cmで、深さは119cmである。西壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がり、その他の壁は、底面から中程にかけて内傾し、開口部で広がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。にぶい黄橙色土を基調とし炭化物粒・焼土粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第394号土壙 (第267図)

[位置] Z K-53グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸116cm・短軸63cm、壙底部長軸107cm・短軸44cmで、深さは64cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明であるが、人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壌の形状などから土壌基の可能性が高い。

(成田 悟)

第395号土壙 (第266図)

[位置] Z I・Z J-55グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸114cm・短軸79cm、壙底部長軸158cm・短軸154cmで、深さは123cmである。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 7層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第396号土壙 (第267図)

[位置] Z F・Z G-56グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、方形を呈する。開口部長軸150cm・短軸113cm、壙底部長軸143cm・短軸106cmで、深さは10cmである。壁は底面から開口部にかけて、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒を多量に混入する。自然堆積か人為堆積かは不明であるが、自然堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 比較的に新しい時期に構築された炭窯と考えられる。

(成田 悟)

第397号土壇 (第267図)

[位置] Z K・Z L-50グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、東西に長い楕円形を呈する。開口部長軸227cm・短軸100cm、壇底部長軸187cm・短軸57cmで、深さは50cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は起伏が認められる。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 覆土から土器片が出土した。

(成田 悟)

第398号土壇 (第268図)

[位置] Z I-56グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸163cm・短軸94cm、壇底部長軸130cm・短軸64cmで、深さは110cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 7層に分層できた。にぶい黄褐色土を基調とし炭化物粒・焼土粒を混入する。人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 本土壇の確認面から60×41cmの焼土を検出した。本土壇に伴うかどうかは不明である。また、土壇底面の南東壁寄りから65×45cmの赤色顔料を検出した。土壇墓と考えられる。

(成田 悟)

第399号土壇 (第268図)

[位置] Z J-52・53グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸135cm・短軸63cm、壇底部長軸100cm・短軸40cmで、深さは74cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壌の形状から土壌墓の可能性が高い。

(成田 悟)

第400号土壌 (第269図)

[位置] Y G -60グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸156cm・短軸131cm、壙底部長軸119cm・短軸67cmで、深さは69cmである。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面の壁際には、壁溝が全周する。幅は、15～21cmで、深さは4～24cmである。また、壁溝の中にピットを7個検出した。深さは2～9cmである。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 9層に分層できた。明黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 覆土から礫が1点出土した。

[その他] 底面の西壁際から34×28cmの赤色顔料を検出した。土壌墓と考えられる。

(成田 悟)

第401号土壌 (第269・270図)

[位置] Z F・Z G -60・61グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、円形を呈する。開口部長軸213cm・短軸210cm、壙底部長軸203cm・短軸196cmで、深さは109cmである。壁は、底面から中程まで若干内傾して立ちあがり、開口部で若干広がるフラスコ状を呈する。底面はほぼ平坦であるが、底面の東壁際から深さ22cmのピットを1個検出した。

[堆積土] 9層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒・焼土を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第402号土壌 (第270図)

[位置] Z G -60グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸118cm・短軸85cm、壙底部長軸100cm・短軸65cmで、深さは90cmである。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 10層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面中央部の南側から34×15cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(成田 悟)

第403号土壙 (第271図)

[位置] ZG・ZH-60グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸154cm・短軸114cm、壙底部長軸138cm・短軸104cmで、深さは64cmである。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部で若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 6層に分層できた。明黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器が覆土中から出土した。

[その他] 底面の西側から74×42cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(成田 悟)

第404号土壙 (第271図)

[位置] YZ・YY-57グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸158cm・短軸(103)、壙底部長軸114cm・短軸82cmで、深さは98cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 13層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 形状などから、土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第405号土壙 (第272図)

[位置] Y Z-57・58に位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部長軸124cm・短軸118cm、壙底部長軸110cm・短軸69cmで、深さは77cmである。壁は、南北の壁はやや急に立ち上がり、東西の壁は底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 10層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面の東側から23×10cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第406号土壙 (第272図)

[位置] Y Z-60に位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸142cm・短軸81cm、壙底部長軸114cm・短軸50cmで、深さは55cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、平坦である。

[堆積土] 7層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の形状などから、土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第407号土壙 (第273図)

[位置] Z A-57・58グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸148cm・短軸91cm、壙底部長軸127cm・短軸61cmで、深さは68cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 7層に分層できた。褐色土を基調としローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面の東側から49×31cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第408号土壙 (第273図)

[位置] Y Y-60グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸148cm・短軸94cm、壙底部長軸130cm・短軸73cmで、深さは64cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 底面から硬玉製勾玉、石鏃、ボタン状石製品が1点ずつ出土した。

[その他] 底面の東側から44×16cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第409号土壙 (第274図)

[位置] Z A-59グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸154cm・短軸79cm、壙底部長軸118cm・短軸50cmで、深さは76cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器が覆土中から出土した。

[その他] 底面の北東側から58×45cm、南西側から27×26cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第410号土壙 (第274図)

[位置] Z A-59・60グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸154cm・短軸101cm、壙底部長軸133cm・短軸76cmで、深さは42cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。ただ、西側の壁の一部は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒、ロームブロックを混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壌の形状などから、土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第411号土壙 (第275図)

[位置] Y Z・Z A-60グリッドに位置する。

[重複] 第567号土壙と重複しており、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、不整円形を呈する。開口部長軸167cm・短軸154cm、壙底部長軸150cm・短軸138cmで、深さは106cmである。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干狭まるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 20層に分層できた。褐色及び黄褐色土を基調としローム・炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 底面から縄文のみ施文の粗製土器が出土した。

(成田 悟)

第412号土壙 (第276図)

[位置] Z A・Y Z-55グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部長軸124cm・短軸91cm、壙底部長軸174cm・短軸159cmで、深さは107cmである。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がり、開口部が狭まるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 10層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小館 孝浩)

第413号土壙 (第277図)

[位置] Z A・Y Z-54・55グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部長軸117cm・短軸86cm、壙底部長軸144cm・短軸115cmで、深さは84cmである。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がり、開口部が狭まるフラスコ状を呈する。ただ、東側の壁は掘り過ぎのため開口部の一部が確認できなかった。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 6層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小舘 孝浩)

第414号土壙 (第277図)

[位置] Z A-57グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸125cm・短軸71cm、壙底部長軸101cm・短軸54cmで、深さは57cmである。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部で若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 7層に分層できた。褐色土を基調としており、炭化物粒を混入する。第6層まで黄褐色土と褐色土が交互に堆積されており、人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器が出土した。

[その他] 土壙の形状などから、土壙墓の可能性が高いと考えられる。

(成田 悟)

第415号土壙 (第278図)

[位置] Z K・Z L-53グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸135cm、短軸80cmで、深さは40cm前後である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 底面から玉が出土した。

[その他] 底面から赤色顔料を検出しており、土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第416号土壙 (第278図)

[位置] Z L-51・52グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸137cm、短軸72cmで、深さは157～78cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 覆土から土器が出土している。

[その他] 底面から赤色顔料を検出しており、土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第417号土壙 (第279図)

[位置] Z J・Z K-53グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、東側の一部が張り出す楕円形を呈する。規模は、長軸140cm、短軸105cm、深さは65～75cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、西側に段状の張り出し部分がみられる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 8層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第418号土壙 (第279図)

[位置] Z J-55・56グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸162cm、短軸93cmで、深さは40～65cmである。壁は、やや急に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面から赤色顔料を検出しており、土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第419号土壙 (第280図)

[位置] Z K-56・57グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸(100cm)、短軸(80cm)で、深さは32～44cmである。壁は、急に立ち上がる。底面は、やや起伏がある。

[堆積土] 6層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面から赤色顔料を検出しており、土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第420号土壙 (第280図)

[位置] Z K・Z L-57・58グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ楕円形を呈する。規模は、長軸145cm、短軸95cmで、深さは75～90cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。人為堆積と考えられる。1層は、砂質土で土壙墓のマウンドと考えられる。

[出土遺物] 墓標と考えられる礫(S-1)が出土している。

[その他] 底面から赤色顔料を検出しており、土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第421号土壙 (第281図)

[位置] Z L-55グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、西側が膨らむ楕円形を呈する。規模は、長軸165cm、短軸95cmで、深さは63～85cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。人

為堆積と考えられる。

[出土遺物] 底面から玉が出土している。

[その他] 底面から赤色顔料を検出しており、土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第422号土壙 (第281図)

[位置] Z J-57グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸158cm、短軸90cmで、深さは50～60cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面から赤色顔料を検出しており、土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第423号土壙 (第282図)

[位置] Z J-57グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸130cm、短軸70cmで、深さは62～75cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 底面から玉が出土している。

[その他] 形状から、土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第424号土壙 (第282・283図)

[位置] Z I-58グリッドに位置する。

[重複] 第425号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸172cm、短軸90cmで、深さは38～60cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、底面は、やや起伏が多い。

[堆積土] 5層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面から赤色顔料を検出しており、土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第425号土壙 (第282・283図)

[位置] Z I-58グリッドに位置する。

[重複] 第424号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は、開口部が北に膨らむ円形を呈する。規模は、開口部で長軸120cm、短軸(90cm)で、深さは55～80cmである。断面形は内部に広がるフラスコ状で、底面は、ほぼ平坦で、南側に深さ15cm程の楕円形の落ち込みが見られる。

[堆積土] 3層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第426号土壙 (第283図)

[位置] Z H・Z I-59グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸158cm、短軸95cmで、深さは30～55cmである。壁は、南壁は内側に広がるが、他は、やや急に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 底面から玉が出土している。

[その他] 底面から赤色顔料を検出しており、土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第427号土壙 (第283図)

[位置] Z L-56グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸163cm、短軸102cm、深さは75～90cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、北側に段状の張り出し部分が見られる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 墓標と考えられる礫（S-1）と、底面から玉が出土している。

[その他] 底面から赤色顔料を検出しており、土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第428号土壙 (第284図)

[位置] ZJ-58グリッドに位置する。

[重複] 第800号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈し、規模は、長軸（150cm）、短軸90cm、深さは40cm前後である。壁は、やや急に立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面から赤色顔料を検出しており、土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第429号土壙 (第285図)

[位置] ZP-48グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸155cm、短軸83cm、深さは90～115cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。黄褐色土を基調とし、炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。1層は、全体的に盛り上がっており、土壙墓のマウンドと考えられる。

[出土遺物] 墓標と考えられる礫（S-1）が出土している。

[その他] 底面から赤色顔料を検出しており、土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第430号土壙 (第285図)

[位置] ZH-56・57グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸147cm・短軸86cm、壙底部長軸106cm・短軸59cmで、深さは41cmである。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部で若干広がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面の東側から、63×37cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(成田 悟)

第431号土壙 (第286図)

[位置] ZG-57・58グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整形を呈する。開口部長軸105cm・短軸98cm、壙底部長軸97cm・短軸97cmで、深さは94cmである。東壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、その他の壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第432号土壙 (第286図)

[位置] ZF-54グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、南北に若干長い方形を呈する。開口部長軸149cm・短軸131cm、壙底部長軸120cm・短軸86cmで、深さは30cmである。壁は、底面から緩やかに立ち上がり、開口部で若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。暗褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 第5層には、炭化物を多量に混入しており、形状などから、炭窯に使われたと考えられる。

(成田 悟)

第433号土壙 (第287図)

[位置] Z E・Z F-54グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整楕円形を呈する。開口部長軸109cm・短軸81cm、壙底部長軸96cm・短軸70cmで、深さは25cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がるが柔らかく軟弱である。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。第1層は火山灰層で第2層は炭化物を多量に混入する。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第434号土壙 (第287図)

[位置] Z H-58グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、円形を呈する。開口部長軸136cm・短軸124cm、壙底部長軸114cm・短軸112cmで、深さは52cmである。西壁は、底面から開口部にかけて若干内傾して立ち上がり、その他の壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、開口部で若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明であるが、自然堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第435号土壙 (第287・288図)

[位置] Z H-59グリッドに位置する。

[重複] 第439号土壙と重複しており、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸(140)・短軸(110)、壙底部長軸(130)・短軸80cmで、深さは53cmである。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部

が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。明黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 覆土から土器片が出土した。

(成田 悟)

第436号土壙 (第288図)

[位置] Z I - 55グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸144cm・短軸84cm、壙底部長軸90cm・短軸60cmで、深さは83cmである。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 6層に分層できた。黄褐色土を基調とし、炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 底面からヒスイの勾玉が1点、覆土から土器片が2点出土した。

[その他] 底面の東壁際から48×39cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(成田 悟)

第437号土壙 (第289図)

[位置] Z G - 58グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸141cm・短軸93cm、壙底部長軸119cm・短軸67cmで、深さは51cmである。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部で若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調とし、炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の形状などから、土壙墓の可能性が高いと考えられる。

(成田 悟)

第438号土壙 (第289図)

[位置] Z G - 58グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整形を呈する。開口部長軸142cm・短軸132cm、壙底部長軸104cm・短軸104cmで、深さは69cmである。壁は、底面から若干緩やかに立ち上がり、開口部で広がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。暗褐色土を基調とし、炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第439号土壙 (第287・288図)

[位置] ZH-59グリッドに位置する。

[重複] 第435号土壙と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸141cm・短軸77cm、壙底部長軸128cm・短軸80cmで、深さは77cmである。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。明黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 覆土から土器片が出土した。

[その他] 底面から、30×12cmの赤色顔料を検出した。土壙墓として使用されたと考えられる。

(成田 悟)

第440号土壙 (第290図)

[位置] ZI・ZJ-57グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸150cm、短軸76cm、深さは30～40cmである。壁は、やや急に立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 形状から土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第441号土壙 (第290・291図)

[位置] Z M-50グリッドに位置する。

[重複] 第384号土壙・第385号土壙・第442号土壙・第450号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙より、第384号土壙・第385号土壙・第450号土壙が新しく、第442号土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は、残存部分から円形と考えられる。規模は、開口部で直径120cmで、深さは60cm前後である。断面形は内部に広がるフラスコ状で、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 6層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第442号土壙 (第290・291図)

[位置] Z M・Z N-50グリッドに位置する。

[重複] 第441号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙より新しい。

[平面形・規模] 平面形は、残存部分からほぼ円形と考えられる。規模は、開口部の直径が125cmで、深さは65cm前後である。断面形は内部に広がるフラスコ状で、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第443号土壙 (第291図)

[位置] Z I-60グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸105cm、短軸(80cm)で、深さは周溝を除いて30～40cmである。壁は、南側が内部に広がるが、他は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦で、壁寄りに深さ12～18cmの周溝がみられる。

[堆積土] 3層に分層できた。黄褐色土を基調とし、炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面から赤色顔料を検出しており、土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第444号土壙 (第292図)

[位置] Z I・Z J-56・57グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸135cm、短軸76cm、深さは25～40cmである。壁は、やや急に立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 形状から土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第445号土壙 (第292図)

[位置] Z I-57グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸130cm、短軸78cm、深さは35～60cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。褐色土を基調とし、炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 形状から土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第447号土壙 (第293図)

[位置] Z P-49グリッドに位置する。

[重複] 風倒木と重複する。新旧関係は、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は、風倒木によって削平されているため残存部分から楕円形を呈すると考えられる。規模は不明である。底面は、やや起伏が多い。

[堆積土] 残存部分は、黄褐色の砂質土で、小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面から赤色顔料を検出しており、土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第448号土壙 (第293図)

[位置] Z P・Z Q-49・50グリッドに位置する。

[重複] 風倒木と重複する。新旧関係は、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は、風倒木によって削平されているため残存部分から楕円形を呈すると考えられる。規模は不明である。底面は、やや起伏が多い。

[堆積土] 確認できなかった。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面から赤色顔料を検出しており、土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第449号土壙 (第293図)

[位置] Z N・Z O-49・50グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸120cm、短軸92cmで、深さは75～90cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、やや起伏が多い。

[堆積土] 8層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面から赤色顔料を検出しており、土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第450号土壙 (第290・291図)

[位置] Z M-50グリッドに位置する。

[重複] 第385号土壙と第441号土壙と重複する。本土壙は、いずれの土壙より新しい。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸(130cm)、短軸(75cm)で、深さは65～80cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面から赤色顔料を検出しており、土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第451号土壙 (第294図)

[位置] Z K-58グリッドに位置する。

[重複] 風倒木と重複する。新旧関係は、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は、風倒木と重複しているが、残存部分から楕円形を呈すると考えられる。規模は不明である。壁は、やや急に立ち上がり、底面は、やや起伏が多い。

[堆積土] 7層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 覆土から土器が出土している。

[その他] 底面から赤色顔料を検出しており、土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第452号土壙 (第294・295図)

[位置] Z Q-46・47グリッドに位置する。

[重複] 第453号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、円形を呈する。規模は、直径約130cm、深さは15～30cmである。壁は、やや急に立ち上がる。底面は、やや起伏が多い。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第453号土壙 (第294・295図)

[位置] Z Q-46グリッドに位置する。

[重複] 第452号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸110cm、短軸(90cm)で、深さは15～25cmである。壁は、やや急に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第454号土壙 (第295図)

[位置] Z I-58グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、開口部が西に膨らむが、ほぼ円形を呈する。規模は、開口部で、長軸90cm、短軸80cmで、深さは52～67cmである。断面形は内部に広がるフラスコ状で、底面は、ほぼ平坦で、南側に深さ10cm程の円形の落ち込みが見られる。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第455号土壙 (第295・296図)

[位置] Z Q-47グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、直径約140cm、深さは85～115cmである。断面形は内部に広がるフラスコ状で、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 8層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 完形土器1点と土器片10点、礫が1点出土している。

(中嶋 友文)

第456号土壙 (第296図)

[位置] Z J-61グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸165cm、短軸85cmで、深さは35～40cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。明黄褐色土を基調とし、小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面から赤色顔料を検出しており、土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第457号土壙 (第296図)

[位置] Z M・Z N-46グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整円形を呈する。規模は、長軸106cm、短軸75cmで、深さは35～60cmである。壁は、急に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 底面より玉が2点出土している。

[その他] 底面から赤色顔料を検出しており、土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第458号土壙 (第297図)

[位置] Z O-46グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形で、開口部が東にかたよっている。規模は、開口部で長軸118cm、短軸110cm、深さは90～125cmである。断面形は、フラスコ状を呈しているが、東壁の一部が、上部に広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 覆土から土器が出土している。

(中嶋 友文)

第459号土壙 (第297図)

[位置] Z M-50グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、木の根によって攪乱されているため、残存部分から楕円形を呈すると考えられる。規模は不明である。底面は、やや起伏が認められるが平坦である。

[堆積土] 残存部分は、黄褐色の砂質土で、炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 形状から土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第460号土壙 (第298図)

[位置] YZ-59グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、隅丸方形を呈する。規模は、長軸110cm・短軸105cmで、深さは60~70cmである。壁は、やや急に立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第461号土壙 (第298図)

[位置] YZ-60・61グリッドに位置する。

[重複] 第652号土壙と重複しており、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は不整形を呈する。開口部長軸(92cm)・短軸(69cm)、壙底部長軸(72cm)・短軸(62cm)で、深さは41cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 底面から硬玉製勾玉1点が出土した。

[その他] 出土遺物から土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第462号土壙 (第298図)

[位置] YY・YZ-61グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸124cm・短軸82cm、壙底部長軸134cm・短軸75cmで、深さは75cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。西側の壁が底面から開口部にかけて若干内傾して立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 7層に分層できた。明黄褐色土を基調とし、炭化物粒、ローム粒を混入する。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の形状などから、土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第463号土壙 (第299図)

[位置] Y Y・Y Z-60グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸140cm・短軸(87cm)、壙底部長軸115cm・短軸66cmで、深さは43cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、凹凸が認められる。

[堆積土] 4層に分層できた。褐色土を基調としローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の形状などから、土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第464号土壙 (第299図)

[位置] Y Z-60グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部長軸103cm・短軸89cm、壙底部長軸102cm・短軸80cmで、深さは72cmである。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がり、開口部が若干狭くなるフラスコ状を呈する。底面は、若干起伏があるが、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小館 孝浩)

第465号土壙 (第300図)

[位置] Y Z-60グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は不整形を呈する。開口部長軸158cm・短軸142cm、壙底部長軸134cm・短軸115cmで、深さは76cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。北側の壁の一部が底面から開口部にかけて若干内傾して立ち上がっている。

る。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 6層に分層できた。にぶい黄橙色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器が覆土中から出土した。

(小舘 孝浩)

第466号土壙 (第300図)

[位置] Y X・Y Y-60・61グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸158cm・短軸83cm、壙底部長軸148cm・短軸76cmで、深さは47cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面の西側から42×40cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(小舘 孝浩)

第467号土壙 (第301図)

[位置] Y Y-60グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸136cm・短軸102cm、壙底部長軸123cm・短軸95cmで、深さは70cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小舘 孝浩)

第468号土壙 (第301図)

[位置] Y Y-61グリッドに位置する。

[重複] 第508号土壙と重複しており、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部長軸(140cm)・短軸134cm、壙底部長軸113cm・短軸107cmで、深さは65cmである。北側の壁は、第508号土壙と重複しているため壁は確認できないが、その他の壁は、底面から開口部にかけてやや急に立ち上がり、開口部が広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小館 孝浩)

第469号土壙 (第302図)

[位置] Z A・Y Z-61グリッドに位置する。

[重複] 第507・565号土壙と重複しており、本土壙が最も古い。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸144cm、壙底部長軸121cmで、短軸は第507号土壙と重複しているため確認できなかった。深さは86cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。西側の壁が底面から開口部にかけて内傾して立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 底面の西側から礫が2点、土器が1層から出土した。

[その他] 底面の西側から30×22cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第470号土壙 (第302図)

[位置] Z H-57グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸114cm・短軸60cm、壙底部長軸104cm・短軸55cmで、深さは23cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明であるが人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の形状などから土壙墓の可能性が高い。

(成田 悟)

第471号土壙 (第302図)

[位置] Z I - 57グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸140cm・短軸84cm、壙底部長軸120cm・短軸55cmで、深さは18cmである。壁は、底面から開口部にかけて若干緩やかに立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の形状などから土壙墓の可能性が高い。

(成田 悟)

第472号土壙 (第303図)

[位置] Z G - 60グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸143cm・短軸85cm、壙底部長軸128cm・短軸59cmで、深さは60cmである。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部で若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 6層に分層できた。褐色土を基調とし、炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の形状などから、土壙墓の可能が高いと考えられる。

(成田 悟)

第473号土壙 (第303図)

[位置] Z G - 59・60グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸141cm・短軸106cm、壙底部長軸130cm・短軸90cmで、深さは34cmである。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部で若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。黄褐色土を基調とし、炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の形状などから、土壙墓と考えらる。

(成田 悟)

第474号土壙 (第304図)

[位置] ZH-61グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整形を呈する。開口部長軸195cm・短軸150cm、壙底部長軸168cm・短軸138cmで、深さは188cmである。壁は、底面から中程にかけて緩く内傾し開口部にかけて広がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 16層に分層できた。黄褐色土を基調とし、炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 本土壙の確認面に、掘り方を有する礫が存在する。また、覆土から土器片が出土した。

[その他] 本土壙の北西側は大きく突出しており、他の土壙と重複していた可能性も考えられる。

(成田 悟)

第477号土壙 (第304図)

[位置] ZG-60・61グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸90cm・短軸60cm、壙底部長軸71cm・短軸45cmで、深さは15cmである。壁は、底面から若干緩やかに立ち上がり、開口部が広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面の中央部東寄りから18×13cmの赤色顔料を検出した。小型の土壙墓と考えられる。

(成田 悟)

第478号土壙 (第304図)

[位置] ZG-59グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸87cm・短軸55cm、壙底部長軸67cm・短軸45cmで、深さは40cmである。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部で若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の形状などから土壙墓の可能性が高い。

(成田 悟)

第479号土壙 (第306図)

[位置] ZG-60グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸99cm・短軸65cm、壙底部長軸89cm・短軸58cmで、深さは24cmである。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。明黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面の西側から31×23cmの赤色顔料と、東側から僅かな赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(成田 悟)

第480号土壙 (第306・307図)

[位置] ZV-55グリッドに位置する。

[重複] 第312号住居跡、第482号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙が第312号住居跡より古く、第482号土壙より新しい。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸145cm、短軸68cmで、深さは30cm前後である。壁は、やや急に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] におい黄褐色土の層に、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。人為堆積と考えられ

る。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面から赤色顔料を検出しており、土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第481号土壙 (第306・307図)

[位置] ZW-55グリッドに位置する。

[重複] 第312号住居跡、第482号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙が第312号住居跡より古く、第482号土壙より新しい。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、直径120cmで、深さは40cm前後である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第482号土壙 (第306・307図)

[位置] ZV・ZW-55グリッドに位置する。

[重複] 第312号住居跡、第480号土壙、第481号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙がいずれの遺構より古い。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、直径215cmで、深さは85cm前後である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 13層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第484号土壙 (第307図)

[位置] ZF-60・61グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸180cm・短軸116cm、壙底部長軸130cm・短軸57cmで、深さは89cmである。南壁は底面から若干緩やかに立ち上がり、その他の

壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がる。底面壁際には全周する壁溝が存在する。幅は10～15cmで深さは、5～10cmである。底面は、若干起伏が認められるが、概ね平坦である。

[堆積土] 11層に分層できた。明黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 覆土から礫が2個出土した。

[その他] 底面西側から59×56cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(成田 悟)

第485号土壙 (第308図)

[位置] ZH-58・59グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸227cm・短軸116cm、壙底部長軸119cm・短軸97cmで、深さは66cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 6層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明であるが、人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 覆土から土器片が出土した。

[その他] 土壙の形状などから土壙墓の可能性が高い。

(成田 悟)

第486号土壙 (第308図)

[位置] ZH-59グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸130cm・短軸74cm、壙底部長軸116cm・短軸53cmで、深さは24cmである。壁は底面から若干緩やかに立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の形状から、土壙墓の可能が高い。

(成田 悟)

第488号土壙 (第309図)

[位置] ZH-58グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸150cm・短軸102cm、壙底部長軸130cm・短軸78cmで、深さは78cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。底面は暗褐色土を基調とし、上面は黄褐色土を基調とする。全層に炭化物粒を混入する。人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面の南壁寄りから94×53cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(成田 悟)

第489号土壙 (第309図)

[位置] ZG-59グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸144cm・短軸82cm、壙底部長軸133cm・短軸68cmで、深さは36cmである。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、若干起伏が認められる。

[堆積土] 3層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の形状から、土壙墓の可能性が高い。

(成田 悟)

第490号土壙 (第309図)

[位置] ZG-61グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸107cm・短軸75cm、壙底部長軸93cm・短軸57cmで、深さは27cmである。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、若干起伏が認められる。

[堆積土] 4層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面から40×27cmと26×22cmの赤色顔料を検出した。土壙墓の可能性が高い。

(成田 悟)

第491号土壙 (第310図)

[位置] Z H - 56・57グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸166cm・短軸82cm、壙底部長軸147cm・短軸64cmで、深さは46cmである。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の形状から、土壙墓の可能性が高い。

(成田 悟)

第492号土壙 (第310図)

[位置] Z H・Z I - 57グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸(161)cm・短軸109cm、壙底部長軸144cm・短軸83cmで、深さは42cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第493号土壙 (第311・312図)

[位置] Z I - 61グリッドに位置する。

[重複] 第554号土壙と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 重複により西壁が検出できなかったが、平面形は、楕円形を呈すると考えられる。開口部長軸(154cm)・短軸103cm、壙底部長軸(138cm)・短軸97cmで、深さは82cm

である。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。黄褐色土を基調とする。自然堆積か人為堆積かは不明であるが人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 覆土から土器片が出土した。

[その他] 土壙底面の東寄りから31×20cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(成田 悟)

第494号土壙 (第313図)

[位置] ZH-61グリッドに位置する。

[重複] 第512号土壙と重複しており、新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 平面形は、不整楕円形を呈する。開口部長軸(146cm)・短軸(113cm)、壙底部長軸75cm・短軸50cmで、深さは78cmである。南壁・東壁だけの検出であるが、底面から開口部にかけて若干緩やかに立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。明黄褐色土を基調とする。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第495号土壙 (第313図)

[位置] ZA-49グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整円形を呈する。開口部長軸190cm・短軸151cm、壙底部長軸155cm・短軸154cmで、深さは140cmである。壁は、底面から中程にかけて若干内傾して立ち上がり、開口部が若干広がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 13層に分層できた。黒褐色土と暗褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第496号土壙 (第314図)

[位置] ZA-51グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、南北に長い方形を呈する。開口部長軸155cm・短軸103cm、壙底部長軸124cm・短軸90cmで、深さは24cmである。壁は、底面から緩やかに立ち上がり、開口部が若干広がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。暗褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 第2層には、炭化物を多量に混入しており、形状などから、炭窯に使われたと考えられる。

(成田 悟)

第497号土壙 (第314図)

[位置] Y Z-46グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、円形を呈する。開口部長軸188cm・短軸180cm、壙底部長軸205cm・短軸198cmで、深さは163cmである。壁は、底面から開口部にかけて若干内傾して立ち上がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 13層に分層できた。暗褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積か不明瞭であるが、人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第498号土壙 (第315図)

[位置] Z B-41グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸152cm・短軸128cm、壙底部長軸123cm・短軸118cmで、深さは48cmである。北壁は、底面から開口部にかけて緩く立ち上がるが、その他の壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 7層に分層できた。黒褐色土と褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第499号土壙 (第315図)

[位置] Y Z・Z A-46グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整楕円形を呈する。開口部長軸154cm・短軸138cm、壙底部長軸130cm・短軸100cmで、深さは90cmである。西壁は、底面から中程に若干内傾するが、その他の壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 7層に分層できた。暗褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第503号土壙 (第316図)

[位置] Y X-61グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸183cm・短軸90cm、壙底部長軸179cm・短軸97cmで、深さは54cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が広がる。東側の壁の一部が底面から開口部にかけて内傾して立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 6層に分層できた。明黄褐色土を基調としている。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 覆土から土器が出土した。

(小箆 孝浩)

第505号土壙 (第316図)

[位置] Y X・Y Y-59・60グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は不整形を呈する。開口部長軸100cm・短軸68cm、壙底部長軸86cm・短軸80cmで、深さは60cmである。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がり、開口部が若干狭まるフラスコ状を呈する。北側の壁の一部が底面から開口部にかけてやや急に立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小舘 孝浩)

第506号土壙 (第316図)

[位置] Y X-61・62グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸154cm・短軸89cm、壙底部長軸154cm・短軸81cmで、深さは57cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、凹凸が認められる。

[堆積土] 5層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の形状などから、土壙墓の可能性が高いと考えられる。

(小舘 孝浩)

第507号土壙 (第302図)

[位置] Y Z-60・61グリッドに位置する。

[重複] 第469号土壙と重複しており、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸148cm・短軸90cm、壙底部長軸152cm・短軸88cmで、深さは56cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。西側の壁が底面から開口部にかけて若干内傾して立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 確認できなかった。

[出土遺物] 土器が覆土中から出土した。

[その他] 底面の西側から70×50cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(小舘 孝浩)

第508号土壙 (第317図)

[位置] Y Y-61グリッドに位置する。

[重複] 第468号土壙と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸132cm・短軸(74cm)、壙底部長軸117cm・短軸(57cm)で、深さは57cmである。南側の壁は、第408号土壙と重複しているため確

認できないが、壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。西側の壁が底面から開口部にかけて若干内傾して立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 確認できなかった。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の形状などから、土壙墓の可能性が高いと考えられる。

(小館 孝浩)

第510号土壙 (第317図)

[位置] Z I - 61グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈し、規模は、長軸95cm、短軸90cm、深さは20～40cmである。壁はやや急に立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面から赤色顔料を検出しており、土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第511号土壙 (第317図)

[位置] Z J・Z K - 60・61グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、東西にやや長い楕円形と考えられる。規模は、長軸285cm、短軸(215cm)で、深さは35～65cmである。壁は、緩やかに立ち上がり、底面は、やや起伏が多い。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調とし、小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 覆土から土器と石器が出土している。

(中嶋 友文)

第512号土壙 (第312・313図)

[位置] Z G・Z H - 61グリッドに位置する。

[重複] 第494号土壙と重複しており、新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 平面形は不整形を呈する。開口部長軸205cm・短軸206cm、壙底部長軸188cm・

短軸171cmで、深さは102cmである。壁は、南側の壁が重複で確認できないが、底面から開口部にかけてやや急に立ち上がり、開口部が広がる。若干起伏があるが、ほぼ平坦である。

[堆積土] 8層に分層できた。明黄褐色土を基調としている。堆積状況から人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 土器が覆土中から出土した。

(小舘 孝浩)

第513号土壙 (第318図)

[位置] ZL-44・45グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、開口部で長軸113cm、短軸102cmで、深さは95～115cmである。断面形は、内部に広がるフラスコ状を呈し、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第514号土壙 (第318図)

[位置] ZO・ZP-47グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、短軸がやや広がる楕円形を呈する。規模は、長軸135cm、短軸103cm、深さは75～90cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、やや起伏が認められる。

[堆積土] 5層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 覆土から石器が出土している。

[その他] 底面から赤色顔料を検出しており、土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第515号土壙 (第319図)

[位置] ZL-50・51グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸117cm、短軸66cmで、深さは30

～48cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、やや起伏が多い。

[堆積土] 4層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第516号土壙 (第319図)

[位置] Z L-52グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸130cm、短軸70cm、深さは40～55cmである。壁は、西壁が内部にやや入り込むが、その他は、やや急に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。黄褐色土を基調とし、炭化物粒・小礫含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 形状から土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第517号土壙 (第319図)

[位置] Z L・Z M-47グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、開口部で直径約125cm、深さは55～90cmである。断面形は内部に広がるフラスコ状で、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 6層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第518号土壙 (第320図)

[位置] Z L-46・47グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形で、開口部が東にかたよった楕円形を呈する。規模は、

開口部で長軸（100cm）、短軸75cm、深さは115～135cmである。断面形はフラスコ状を呈し、底面は、ほぼ平坦である。

〔堆積土〕 4層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含む。人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 覆土から土器が出土している。

（中嶋 友文）

第519号土壙（第320図）

〔位置〕 Z L・Z M-44グリッドに位置する。

〔重複〕 認められなかった。

〔平面形・規模〕 平面形は、ほぼ円形で開口部が東側にかたよっている。規模は開口部で長軸116cm、短軸111cmで、深さは90～115cmである。壁は、西側が若干内部が広がっているが、東側は、急に立ち上がる。底面は、やや起伏が見られるが、ほぼ平坦である。

〔堆積土〕 6層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 出土しなかった。

（中嶋 友文）

第520号土壙（第321図）

〔位置〕 Z J・Z K-44グリッドに位置する。

〔重複〕 認められなかった。

〔平面形・規模〕 平面形は、開口部がやや南にかたよる円形を呈する。規模は開口部で直径135cmで、深さは105～135cm前後である。断面形は内部に広がるフラスコ状で、底面は、ほぼ平坦である。

〔堆積土〕 9層に分層できた。黒褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

〔出土遺物〕 覆土から土器が出土している。

（中嶋 友文）

第521号土壙（第321・322図）

〔位置〕 Z K-46・47グリッドに位置する。

〔重複〕 第594号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、長軸210cm、短軸205cmで、深さは55～125cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、やや起伏が多い。

[堆積土] 5層に分層できた。黒褐色土を基調とし、炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第522号土壙 (第322図)

[位置] Z O-47・48グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、開口部で長軸177cm、短軸165cmで、深さは105～130cmである。壁は、北西側がやや内部に広がるが、他は、やや急に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 12層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第523号土壙 (第323図)

[位置] Z L-45・46グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、開口部がやや東にかたよる円形を呈する。規模は、開口部で直径115cmで、深さは120～145cm前後である。断面形は内部に広がるフラスコ状で、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 9層に分層できた。黒褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第524号土壙 (第323図)

[位置] Z N-50グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸137cm、短軸65cmで、深さは65～70cmである。壁は、南側が内部に広がるが、他は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。黄褐色土を基調とし、炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 形状から土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第525号土壙 (第324図)

[位置] Z J-46グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整形を呈する。規模は、長軸120cm、短軸105cm、深さは90～120cmである。断面形は内部に広がるフラスコ状で、底面は、やや起伏が認められる。

[堆積土] 4層に分層できた。黒褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第526号土壙 (第324図)

[位置] Z P-47グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、開口部が、やや東側に広がる円形と呈する。規模は、開口部で、直径120cm、深さは75～105cmである。断面形は内部に広がるフラスコ状で、底面はやや起伏が認められる。

[堆積土] 9層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 覆土から土器が出土している。

(中嶋 友文)

第527号土壙 (第325図)

[位置] Z J-45・46グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、開口部が東にかたよる円形と呈すると考えられる。規模は、開口部で、直径130cm、深さは75～105cmである。断面形は東側がやや垂直に立ち上がるが、内部に広がるフラスコ状を呈すると考えられる。底面は、やや起伏が認められる。

[堆積土] 9層に分層できた。黒褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 覆土から石器が出土している。

(中嶋 友文)

第528号土壙 (第325図)

[位置] Z J-47・48グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、開口部で長軸122cm、短軸115cmで、深さは125～160cmである。断面形は、内部に広がるフラスコ状を呈し、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 7層に分層できた。黒褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第529号土壙 (第326図)

[位置] Z K-45グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、開口部で長軸78cm、短軸73cmで、深さは110～125cmである。断面形は、フラスコ状を呈し、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 6層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第530号土壙 (第326図)

[位置] Z J-45グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、東側がややふくらむ円形を呈する。規模は、長軸160cm、短軸155cmで、深さは55～85cmである。壁は、西側が若干内部に広がるが、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、やや起伏が多い。

[堆積土] 5層に分層できた。黒褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第531号土壙 (第327図)

[位置] ZL-48・49グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸96cm、短軸75cm、深さは75～90cmである。断面形は、フラスコ状を呈し、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 覆土から土器が出土している。

(中嶋 友文)

第532号土壙 (第327図)

[位置] ZL・ZM-46・47グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、南側が膨らむ楕円形を呈する。規模は、開口部で長軸98cm、短軸86cmで、深さは80～110cmである。断面形は、フラスコ状を呈している。底面はやや起伏が認められるが、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。黒褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第533号土壙 (第328図)

[位置] ZL-43・44グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈している。規模は、開口部で長軸148cm、短軸145cmで、深さは120～140cmである。断面形は、フラスコ状で、内部が広がっている。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 13層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第534号土壙 (第329図)

[位置] ZK-44グリッドに位置する。

[重複] 第578号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形と呈する。規模は、開口部で、直径125cm、深さは100～130cmである。断面形は、内部に広がるフラスコ状を呈する。底面は、やや起伏が認められる。

[堆積土] 13層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 覆土から土器が出土している。

(中嶋 友文)

第535号土壙 (第330図)

[位置] ZK-44グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、北側が膨らむ円形を呈する。規模は、開口部で長軸116cm、短軸110cmで、深さは75～110cmである。断面形は、内部に広がるフラスコ状を呈し、底面は、やや起伏が多い。

[堆積土] 7層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第536号土壙 (第330図)

[位置] ZB-51グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部長軸155cm・短軸151cm、壙底部長軸148cm・短軸130cmで、深さは105cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。ただ、西側の壁の一部が底面から開口部にかけて若干内傾して立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 7層に分層できた。暗褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小館 孝浩)

第537号土壙 (第331図)

[位置] Z A・Z B-47・48グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部長軸103cm・短軸100cm、壙底部長軸125cm・短軸125cmで、深さは108cmである。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がり、開口部が挟まるフラスコ状を呈する。南側の壁の一部が底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 7層に分層できた。褐色土を基調としている。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器が1層と6層から出土した。

(小館 孝浩)

第538号土壙 (第331図)

[位置] Z A-52グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整楕円形を呈する。開口部長軸138cm・短軸124cm、壙底部長軸141cm・短軸131cmで、深さは81cmである。北壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がるが、その他の壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 14層に分層できた。黒褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第539号土壙 (第332図)

[位置] Y Y-51グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸143cm・短軸129cm、壙底部長軸133cm・短軸124cmで、深さは71cmである。西壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がり、その他の壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第540号土壙 (第332図)

[位置] Y Y-50・51グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、円形を呈する。開口部長軸144cm・短軸133cm、壙底部長軸144cm・短軸142cmで、深さは156cmである。東壁は、底面からはほぼ垂直に立ち上がるが、その他の壁は、底面から開口部にかけて若干内傾して立ち上がり、フラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 13層に分層できた。黒褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 底面から土器の底部と礫が出土した。

(成田 悟)

第541号土壙 (第333図)

[位置] Y Z-52グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、円形を呈する。開口部長軸132cm・短軸120cm、壙底部長軸122cm・短軸87cmで、深さは62cmである。西壁は、底面から開口部にかけて、若干内傾して立ち上がり、その他の壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 6層に分層できた。暗褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆

積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第542号土壙 (第333図)

[位置] Z B-45グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、円形を呈する。開口部長軸129cm・短軸(125)cm、壙底部長軸(125)cm・短軸120cmで、深さは52cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。暗褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第543号土壙 (第334図)

[位置] Z C-47グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸117cm・短軸91cm、壙底部長軸94cm・短軸82cmで、深さは18cmである。壁は、底面から開口部にかけて、緩やかに立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。暗褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第544号土壙 (第334図)

[位置] Y Z・Z A-51・52グリッドに位置する。

[重複] 第545号土壙と重複しており、新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 平面形は、不整形円形を呈する。開口部長軸(195cm)・短軸182cm、壙底部長軸169cm・短軸(155cm)で、深さは132cmである。壁は、底面から中程にかけて若干内傾して立ち上がり、開口部で広がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 重複している第545号土壙と新旧関係を比較するために、同じ面で堆積土を精査し、17層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 覆土から土器片が出土した。

(成田 悟)

第545号土壙 (第334図)

[位置] Y Z・Z A-51グリッドに位置する。

[重複] 第544号土壙と重複しており、新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 平面形は、円形を呈する。開口部長軸158cm・短軸(145cm)、壙底部長軸148cm・短軸145cmで、深さは120cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 重複している第544号土壙と新旧関係を比較するために、同じ面で堆積土を精査し、17層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第546号土壙 (第335図)

[位置] Y Y-46・47グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整形円形を呈する。開口部長軸120cm・短軸111cm、壙底部長軸145cm・短軸144cmで、深さは156cmである。壁の立ち上がりは、底面から中程にかけて若干内傾し、開口部で広がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 10層に分層できた。黒褐色土と黄褐色土を基調とし、炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第547号土壙 (第336図)

[位置] Y Y・Y Z-45グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整形円形を呈する。開口部長軸153cm・短軸136cm、壙底部長軸177cm・短軸170cmで、深さは187cmである。壁の立ち上がりは、底面から中程にかけて若干内傾し、開口部で広がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 10層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第548号土壙 (第335図)

[位置] Y Y・Y Z-53グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整形円形を呈する。開口部長軸145cm・短軸(110)cm、壙底部長軸154cm・短軸142cmで、深さは75cmである。東壁は、削平されているため検出できなかった。その他の壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒・焼土粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第549号土壙 (第336図)

[位置] Y Z-47グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸(78)cm・短軸(59)cm、壙底部長軸124cm・短軸113cmで、深さは140cmである。壁の立ち上がりは、底面から中程にかけて内傾し、開口部で若干広がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 7層に分層できた。褐色土と暗褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第550号土壙 (第337図)

[位置] Y Y-48グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整形を呈する。開口部長軸136cm・短軸119cm、壙底部長軸141cm・短軸133cmで、深さは129cmである。壁の立ち上がりは、底面から開口部にかけて若干内傾するフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 9層に分層できた。にぶい黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第551号土壙 (第337図)

[位置] Z H-60グリッドに位置する。

[重複] 第476号土壙と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は不整形を呈する。開口部長軸(136cm)・短軸120cm、壙底部長軸(123cm)・短軸98cmで、深さは30cmである。壁は、東壁が第476号土壙と重複しているため確認できないが、その他の壁は底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、凹凸が認められる。

[堆積土] 3層に分層できた。明黄褐色土を基調としローム・ブロックを混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小舘 孝浩)

第553号土壙 (第338図)

[位置] Z I-61グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸112cm、短軸65cmで、深さは20cm前後である。壁は、南側が内部に広がるが、他は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 形状から土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第554号土壙 (第311・312図)

[位置] Z I - 61グリッドに位置する。

[重複] 第493・575号土壙と重複しており、いずれの土壙よりも本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部長軸212cm・短軸209cm、壙底部長軸241cm・短軸223cmで、深さは185cmである。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がり、開口部が挟まるフラスコ状を呈する。北側の壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦であるが、北側の壁際から深さ10cmのピットを1個検出した。

[堆積土] 18層に分層できた。黄褐色土を基調として炭化物粒、ローム粒・焼土粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小館 孝浩)

第555号土壙 (第338図)

[位置] Z D・Z E - 60グリッドに位置する。

[重複] 第342号竪穴住居跡と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部長軸(146cm)・短軸(137cm)、壙底部長軸126cm・短軸120cmで、深さは102cmである。壁は、西側だけが確認できた。西壁は、底面から開口部にかけてやや急に立ち上がり、開口部が若干広がると思われる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 第342号竪穴住居と重複のため、1層しか確認できなかった。黄褐色土で炭化物粒、ローム粒を混入している。人為堆積か自然堆積かは、確認できなかった。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小館 孝浩)

第556号土壙 (第339図)

[位置] Y Z - 62グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整円形を呈する。開口部長軸207cm・短軸205cm、壙底部長軸215cm・短軸192cmで、深さは101cmである。壁の立ち上がりは、底面から開口部にかけて若干

内傾するフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 14層に分層できた。黄褐色土と暗褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 底面から10×10cmでコの字形をした炭化材と土器が覆土中から出土した。

(成田 悟)

第558号土壙 (第340図)

[位置] Z A-59・60グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不正楕円形を呈する。開口部長軸151cm・短軸114cm、壙底部長軸145cm・短軸102cmで、深さは55cmである。西壁は、底面から開口部にかけて若干内傾して立ち上がり、その他の壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面には起伏が認められる。

[堆積土] 5層に分層できた。黄褐色土を基調としており、炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 土器が覆土中から出土した。

(成田 悟)

第559号土壙 (第340図)

[位置] Y Z-57・58グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸127cm・短軸80cm、壙底部長軸71cm・短軸58cmで、深さは68cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。黄褐色土を基調としており、炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 土器が覆土中から出土した。

[その他] 底面の東側から60×37cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(成田 悟)

第560号土壙 (第340図)

[位置] Y B-61グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整楕円形を呈する。開口部長軸131cm・短軸77cm、壙底部長軸120cm・短軸69cmで、深さは38cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。黄褐色土を基調としている。堆積状況から人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物]

[その他] 底面の西側から53×33cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(成田 悟)

第561号土壙 (第341図)

[位置] Y Y-60・61グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整楕円形を呈する。開口部長軸135cm・短軸114cm、壙底部長軸125cm・短軸98cmで、深さは43cmである。南壁は、底面から開口部にかけて若干緩やかに立ち上がり、その他の壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調とし、炭化物粒の混入が認められる。堆積状況から人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面の西側から33×32cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(成田 悟)

第562号土壙 (第341図)

[位置] Y Y-61グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸128cm・短軸79cm、壙底部長軸91cm・短軸62cmで、深さは62cmである。壁は、底面から開口部にかけてやや急に立ち上がり、開口部が広がる。底面は若干の凹凸が認められる。

[堆積土] 4層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 底面から硬玉製勾玉が2点出土した。

[その他] ほぼ底面の全域から66×40cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(小舘 孝浩)

第563号土壙 (第341図)

[位置] YZ-61グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸155cm・短軸84cm、壙底部長軸140cm・短軸78cmで、深さは19cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、若干起伏があるが、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層である。明黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器が覆土中から出土した。

[その他] 底面の西側から35×31cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第564号土壙 (第342図)

[位置] YY-61・62グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸147cm・短軸67cm、壙底部長軸137cm・短軸57cmで、深さは36cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。黄褐色土を基調としている。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面の西側から37×32cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第565号土壙 (第342図)

[位置] ZA-61グリッドに位置する。

[重複] 第469号土壙と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸130cm・短軸71cm、壙底部長軸120cm・短軸62cmで、深さは27cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。黄褐色土を基調としローム粒を混入する。体積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面の北西側から98×34cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(小舘 孝浩)

第566号土壙 (第342図)

[位置] Z B・Z C-61グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整楕円形を呈する。開口部長軸196cm・短軸168cm、壙底部長軸154cm・短軸129cmで、深さは53cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面の壁際には、幅が9～23cmで、深さが10×15cmの壁溝が全周する。底面は、若干起伏が認められるが、概ね平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調とし、炭化物粒の混入が認められる。堆積状況から人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 土器が覆土中から出土した。

[その他] 底面から東西方向に伸びる145×55cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(成田 悟)

第567号土壙 (第276図)

[位置] Z A-60・61グリッドに位置する。

[重複] 第411号と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸は重複のため不明、開口部短軸95cm、壙底部長軸76cm・短軸56cmで、深さは55cmである。壁は、北壁及び西壁は底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。ただ、東壁は重複のため確認できないが、南壁は底面から開口部にかけて内傾して立ち上がっている。東壁際は重複のため確認できないが、底面の壁際には、壁溝が全周すると思われ幅は、3～9cmで、深さは10～18cmである。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 底面直上の覆土中から硬玉製勾玉が13点出土した。

[その他] 出土遺物などから、土壙墓と考えられる。

(小舘 孝浩)

第568号土壙 (第343図)

[位置] Z A - 60グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸135cm・短軸78cm、壙底部長軸119cm・短軸72cmで、深さは55cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広くなる。南側の壁の一部が底面から開口部にかけて若干内傾して立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒、ローム・ブロックを混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器が覆土中から出土した。

[その他] 底面の西側から52×45cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第569号土壙 (第343図)

[位置] Z B - 60・61グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸130cm・短軸88cm、壙底部長軸116cm・短軸60cmで、深さは33cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。ただ、北側及び南側の壁は、底面から開口部にかけて若干内傾して立ち上がっている。底面の壁際には壁溝が全周する。幅は8～12cmで、深さは12～18cmである。また、壁溝の中に深さ3～12cmのピットを6個検出した。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の形状などから、土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第570号土壙 (第343図)

[位置] Z A - 60グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸162cm・短軸100cm、壙底部長軸161cm・短軸92cmで、深さは58cmである。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部で若

干広がる。底面は、若干起伏が認められるが、概ね平坦である。

[堆積土] 7層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器が覆土中から出土した。

[その他] 底面の西壁際から53×44cmの赤色顔料を検出した。土壙墓の可能性が高い。

(成田 悟)

第571号土壙 (第344図)

[位置] Z B-60グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸154cm・短軸103cm、壙底部長軸153cm・短軸96cmで、深さは57cmである。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部で若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 7層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面の西壁寄りから63×43cmの赤色顔料を検出した。土壙墓の可能性が高い。

(成田 悟)

第572号土壙 (第344図)

[位置] Y Y-61グリッドに位置する。

[重複] 第653号土壙と重複しており、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸121cm・短軸81cm、壙底部長軸119cm・短軸70cmで、深さは42cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の形状などから、土壙墓と考えられる。

(小舘 孝浩)

第573号土壙 (第345図)

[位置] Y Y-61・62グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸125cm・短軸74cm、壙底部長軸125cm・短軸65cmで、深さは39cmである。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。にぶい黄橙色土を基調としており、炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の形状などから、土壙墓の可能性が高いと考えられる。

(成田 悟)

第575号土壙 (第311・312図)

[位置] Z I-61・62グリッドに位置する。

[重複] 第554号土壙と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は不整形を呈する。開口部短軸138cm、壙底部短軸120cmで、深さは65cmである。開口部及び壙底部長軸は、第554号土壙と重複しているため確認できなかった。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。北側の一部が底面から開口部にかけて若干内傾して立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小館 孝浩)

第576号土壙 (第345図)

[位置] Z J-48グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、東側が若干膨らむ円形を呈する。規模は、開口部で長軸170cm、短軸155cm、深さは96～138cmである。断面形は、内部に広がるフラスコ状を呈し、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 9層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第577号土壙 (第346図)

[位置] Z J・Z K-46・47グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、開口部が西にかたよる円形を呈する。規模は、開口部で直径約100cm、深さは140～160cmである。断面形は、内部に広がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 8層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 覆土から土器が出土している。

(中嶋 友文)

第578号土壙 (第329図)

[位置] Z K-43・44グリッドに位置する。

[重複] 第534号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、開口部で、長軸80cm、短軸60cm、深さは140cm前後である。断面形は、内部に広がるフラスコ状を呈する。底面は、やや起伏が認められる。

[堆積土] 8層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 覆土から土器が出土している。

(中嶋 友文)

第579号土壙 (第346図)

[位置] Z K・Z L-44・45グリッドに位置する。

[重複] 第580号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸170cm、短軸125cmで、深さは15～25cmである。壁はやや急に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第580号土壙 (第346図)

[位置] Z K-44グリッドに位置する。

[重複] 第579号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、開口部で直径約100cm、深さは15～40cmである。断面形は内部に広がるフラスコ状で、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 褐色土の層で、ローム粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第581号土壙 (第347図)

[位置] Z J-42・43グリッドに位置する。

[重複] 第582号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、直径180cmで、深さは100～130cmである。壁は、西側がやや内側に入り込むが、ほぼ垂直に立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 11層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 覆土から土器と石器が出土している。

(中嶋 友文)

第582号土壙 (第347図)

[位置] Z J-43グリッドに位置する。

[重複] 第581号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸(145cm)、短軸105cmで、深さは50cmである。壁は、やや急に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦で鍋底状を呈する。

[堆積土] 3層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 覆土から土器が出土している。

(中嶋 友文)

第583号土壙 (第348図)

[位置] ZJ-55グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、北側がやや膨らむ不整形を呈する。規模は、長軸(160cm)、短軸140cmで、深さは42~85cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、西側が若干内部に広がる。底面は、ほぼ平である。

[堆積土] 7層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第584号土壙 (第348図)

[位置] ZL-44グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈し、開口部が東側にかたよっている。規模は、開口部で長軸140cm、短軸130cmで、深さは125~160cmである。断面形は、西側が内部に広がるフラスコ状で、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 11層に分層できた。黒褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第585号土壙 (第349図)

[位置] ZL-44グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、開口部で、長軸95cm、短軸75cmで、深さ100~115cmである。断面形は、内部に広がるフラスコ状を呈する。底面は、やや起伏が認められる。

[堆積土] 8層に分層できた。黒褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第586号土壙 (第349図)

[位置] Z J・Z K-43・44グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、開口部が東側にかたよる円形を呈する。規模は、開口部で直径95cmで、深さは105～130cmである。断面形は内部に広がるフラスコ状で、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 7層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第587号土壙 (第350図)

[位置] Z L-42・43グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、直径130cmで、深さは70～115cmである。壁は、やや急に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 7層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第588号土壙 (第350図)

[位置] Z L-42グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、開口部で長軸130cm、短軸113cmで、深さは100～135cmである。断面形は、フラスコ状を呈し、底面は、やや起伏が見られるが、ほぼ平坦である。

[堆積土] 6層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第590号土壙 (第351図)

[位置] Z K・Z L-41グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形及び規模は、削平されているため不明である。断面形は内部に広がるフラスコ状で、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 20層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第591号土壙 (第351・352図)

[位置] Z J・Z K-41・42グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形及び規模は、削平されているため不明である。断面形は内部に広がるフラスコ状で、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 22層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第592号土壙 (第352図)

[位置] Z K-44グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、西側がへこむ円形を呈する。規模は、長軸165cm、短軸135cmで、深さは110～135cmである。壁は、西壁が内部に広がり、その他は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、やや起伏がみられる。

[堆積土] 4層に分層できた。黒褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 覆土から土器と石器が出土している。

(中嶋 友文)

第593号土壙 (第353図)

[位置] ZK-42グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、やや東に開口部がかたよる円形を呈する。規模は、開口部の直径約135cmで、深さは約165cmである。断面形は内部に広がるフラスコ状で、底面は、やや起伏がみられる。

[堆積土] 6層に分層できた。黒褐色土を基調とし、炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 覆土から石器が出土している。

(中嶋 友文)

第594号土壙 (第321・322図)

[位置] ZK-46・47グリッドに位置する。

[重複] 第521号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形及び規模は、第521号土壙と重複しているため、不明である。断面形は、残存部分からフラスコ状を呈すると思われ、深さは約45cmである。底面は、平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第596号土壙 (第354図)

[位置] ZE-59グリッドに位置する。

[重複] 第597号土壙と重複しており、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は不整形を呈する。開口部長軸120cm・短軸110cm、壙底部長軸115cm・短軸113cmで、深さは85cmである。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がり、開口部が狭まるフラスコ状を呈する。西側の壁が底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦であるが、底面のほぼ中心から深さ10cmのピットを1個検出した。

[堆積土] 2層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒、ロームブロックを混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小舘 孝浩)

第597号土壙 (第354図)

[位置] Z E-59グリッドに位置する。

[重複] 第596号土壙と重複しており、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸154cm・短軸81cm、壙底部長軸130cm・短軸69cmで、深さは32cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 1層である。黄褐色土で炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の形状から、土壙墓の可能性が高いと考えられる。

(小舘 孝浩)

第598号土壙 (第353図)

[位置] Z D・Z E-60・61グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。規模は、開口部長軸108cm・短軸95cm、壙底部長軸71cm・短軸56cmで、深さは46cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。明黄褐色土を基調としており、堆積状況から人為堆積の可能性が高いと考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 形状などから、土壙墓の可能性が高いと考えられる。

(成田 悟)

第599号土壙 (第354図)

[位置] Z E-60グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。規模は、開口部長軸138cm・短軸82cm、壙底部長軸132cm・短軸69cmで、深さは58cmである。東壁は、底面から開口部にかけて若干内傾して

立ち上がるが、その他の壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。黄褐色土を基調としており、炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは、不明であるが、人為堆積の可能性が高いと考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 形状などから、土壙墓の可能性が高いと考えられる。

(成田 悟)

第600号土壙 (第355図)

[位置] Z D-60グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸121cm・短軸(57cm)、壙底部長軸99cm・短軸44cmで、深さは35cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙底面の東寄りから70×42cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(成田 悟)

第601号土壙 (第355図)

[位置] Y Y・Y Z-50グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整形を呈する。開口部長軸152cm・短軸135cm、壙底部長軸155cm・短軸135cmで、深さは141cmである。東壁・南壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、その他の壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 9層に分層できた。黒褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第602号土壙 (第356図)

[位置] Y Y・Y Z-50グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整形円形を呈する。開口部長軸110cm・短軸98cm、壙底部長軸114cm・短軸100cmで、深さは120cmである。東壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、その他の壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がるフラスコ状である。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。暗褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第603号土壙 (第356図)

[位置] Z B-46グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、円形を呈する。開口部長軸(100cm)・短軸85cm、壙底部長軸81cm・短軸75cmで、深さは98cmである。壁は、底面から中程にかけて若干内傾して立ち上がり、開口部で広がるフラスコ状である。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 6層に分層できた。黒褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第604号土壙 (第357図)

[位置] Z A-51・52グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸130cm・短軸85cm、壙底部長軸105cm・短軸78cmで、深さは86cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 7層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面の北寄りから73×58cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(成田 悟)

第605号土壙 (第357図)

[位置] Z B-49・50グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整円形を呈する。開口部長軸72cm・短軸66cm、壙底部長軸126cm・短軸124cmで、深さは135cmである。壁は、底面から中程にかけて内傾して立ち上がり、開口部で広がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 7層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第606号土壙 (第358図)

[位置] Y Z・Z A-55グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸154cm・短軸110cm、壙底部長軸112cm・短軸58cmで、深さは85cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 第1層から土器片が出土した。

[その他] 底面の東壁寄りから47×37cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(成田 悟)

第607号土壙 (第358図)

[位置] Z A-52・53グリッドに位置する。

[重複] 第608号土壙と重複しており、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、不整楕円形を呈する。開口部長軸140cm・短軸117cm、壙底部長軸124cm・短軸116cmで、深さは85cmである。西壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がる、フラスコ状を呈し、その他の壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底

面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 8層に分層できた。にぶい黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 覆土から土器片が出土した。

(成田 悟)

第608号土壙 (第359図)

[位置] Z A - 52・53グリッドに位置する。

[重複] 第607号土壙と重複しており、本土壙より新しい。

[平面形・規模] 平面形は、不整楕円形を呈する。開口部長軸(124cm)・短軸52cm、壙底部長軸(107cm)・短軸47cmで、深さは71cmである。北壁は、重複により残存しない。その他の壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面の北寄りから37×30cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(成田 悟)

第609号土壙 (第359図)

[位置] Z B・Z C - 45グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、円形を呈する。開口部長軸194cm・短軸185cm、壙底部長軸189cm・短軸198cmで、深さは134cmである。東壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、その他の壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がるフラスコ状を呈する。底面の西壁寄りに深さ27cmのピットが位置する。その他の底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 10層に分層できた。明黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明であるが、人為堆積の可能性が高いと考えられる。

[出土遺物] 底面から検出されたピットの覆土から土器が倒立の状態出土した。

(成田 悟)

第610号土壙 (第360図)

[位置] Z C - 45グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸218cm・短軸182cm、壙底部長軸205cm・短軸198cmで、深さは111cmである。北壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がるフラスコ状を呈し、その他の壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 9層に分層できた。にぶい黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第611号土壙 (第360・361図)

[位置] Z P-60・61グリッドに位置する。

[重複] 第612号土壙と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は、不整円形を呈する。開口部長軸155cm・短軸(115)cm、壙底部長軸113cm・短軸(100)cmで、深さは90cmである。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面の壁際から周溝を検出した。幅は、約8cmで深さは3cm程である。その他の底面は、概ね平坦である。

[堆積土] 6層に分層できた。暗褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から自然堆積の可能性が高いと考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第612号土壙 (第360・361図)

[位置] Z P-60・61グリッドに位置する。

[重複] 第611号土壙と重複しており、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、不整円形を呈する。開口部長軸125cm・短軸121cm、壙底部長軸145cm・短軸143cmで、深さは135cmである。壁は、底面から中程にかけて内傾し、開口部で広がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 7層に分層できた。黒褐色土を基調とし炭化物粒・焼土粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第613号土壙 (第361・362図)

[位置] Z P・Z Q-61グリッドに位置する。

[重複] 第614号土壙と重複しており、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、不整形円形を呈する。開口部長軸218cm・短軸216cm、壙底部長軸217cm・短軸206cmで、深さは161cmである。北壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、その他の壁は、底面から中程にかけて内傾して立ち上がり、開口部で広がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 16層に分層できた。明黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明であるが、人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第614号土壙 (第361・362図)

[位置] Z Q-61グリッドに位置する。

[重複] 第613号土壙と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は、不整形円形を呈する。開口部長軸204cm・短軸(204)cm、壙底部長軸190cm・短軸(171)cmで、深さは90cmである。北壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面の中央部から北寄りに深さ25cmのピットが存在する。その他の底面は、ほぼ平坦であるが、北側に緩傾斜する。

[堆積土] 9層に分層できた。褐色土と明黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明であるが、人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第615号土壙 (第362図)

[位置] Z R・Z S-61・62グリッドに位置する。

[重複] 第617・620号土壙重複しており、第617号土壙よりは古いが、第620号土壙よりも新しい。

[平面形・規模] 平面形は、不整形円形を呈する。開口部長軸194cm・短軸173cm、壙底部長軸186cm・短軸179cmで、深さは103cmである。西壁・北壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、その他の壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がるフラスコ状を呈する。底面の北壁寄りに深さ8cmのピットが位置する。その他の底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 10層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 遺構の重複関係から晩期中葉以前に構築されたと考えられる。

(成田 悟)

第616号土壙 (第363図)

[位置] Z R-62グリッドに位置する。

[重複] 第620号土壙と重複しており、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、不整円形を呈する。開口部長軸(160)cm・短軸150cm、壙底部長軸(163)cm・短軸161cmで、深さは109cmである。壁は、底面から中程にかけて内傾して立ち上がり、開口部で広がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 8層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第617号土壙 (第363・364図)

[位置] Z S-61・62グリッドに位置する。

[重複] 第615号土壙と重複しており、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、不整円形を呈する。開口部長軸194cm・短軸175cm、壙底部長軸236cm・短軸228cmで、深さは165cmである。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 12層に分層できた。にぶい黄橙色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明であるが人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 覆土から土器が倒立の状態出土した。

(成田 悟)

第618号土壙 (第364・365図)

[位置] Z R-61グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整楕円形を呈する。開口部長軸229cm・短軸178cm、壙底部長

軸225cm・短軸225cmで、深さは137cmである。西壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、その他の壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 12層に分層できた。暗褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 第1層から土器片が出土した。

(成田 悟)

第619号土壙 (第365図)

[位置] Z U-61・62グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整円形を呈する。開口部長軸160cm・短軸143cm、壙底部長軸190cm・短軸189cmで、深さは113cmである。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がりフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 9層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 底面から土器と礫が出土した。

(成田 悟)

第620号土壙 (第366図)

[位置] Z R-61・62グリッドに位置する。

[重複] 第615・616号土壙と重複しており、いずれの土壙よりも古い。

[平面形・規模] 平面形は、不整円形を呈する。開口部長軸235cm・短軸231cm、壙底部長軸234cm・短軸232cmで、深さは173cmである。壁は、底面から中程にかけて内傾して立ち上がり、開口部が若干広がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 6層に分層できた。にぶい黄橙色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明であるが、自然堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第621号土壙 (第366図)

[位置] Y G-55グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部長軸125cm・短軸115cm、壙底部長軸135cm・短軸115cmで、深さは110cmである。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がり、開口部が若干狭くなるフラスコ状を呈する。東側の壁が底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 6層に分層できた。黒褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器が覆土中から出土した。

(小館 孝浩)

第622号土壙 (第367図)

[位置] Y F-54・55グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部長軸160cm・短軸144cm、壙底部長軸123cm・短軸118cmで、深さは102cmである。壁は、底面から開口部にかけて若干内傾して立ち上がり、開口部が挟まるフラスコ状を呈する。底面は、若干起伏があるが、ほぼ平坦であり、深さ6cmのピットを1個検出した。

[堆積土] 12層に分層できた。黒褐色土を基調とし炭化物粒・ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器が覆土中から出土した。

(小館 孝浩)

第623号土壙 (第367図)

[位置] Y F・Y G-62グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕不整形を呈する。開口部長軸185cm・短軸(143cm)、壙底部長軸120cm・短軸84cmで、深さは28cmである。壁は、底面から開口部にかけて緩やかに立ち上がり、開口部が広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 7層に分層できた。黒褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒、焼土粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器が覆土中から出土した。

[その他] 北東側壁から70×24cm、北西壁から16×6の焼土を、底面から直径10cm大の炭化

物を検出した。

(小館 孝浩)

第624号土壙 (第368図)

[位置] Y F・Y G-55グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部長軸110cm・短軸108cm、壙底部長軸110cm・短軸115cmで、深さは70cmである。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がり、開口部が若干挟まるフラスコ状を呈する。東側の壁が底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 7層に分層できた。にぶい黄橙色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小館 孝浩)

第625号土壙 (第368図)

[位置] Y G・Y H-51グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は隅丸長方形を呈する。開口部長軸199cm・短軸(114cm)、壙底部長軸158cm・短軸(86cm)で、深さは36cmである。西壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、その他の壁は、底面から開口部にかけて緩やかに立ち上がり、開口部で若干広がる。底面は、ほぼ平坦であるが、中央部には東西方向へ段差がある。

[堆積土] 3層に分層できた。明黄褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しない。

[その他] 第2層には、炭化物を多量に混入しており、壁の立ち上がりの部分から焼土が検出されている。形状などから、炭窯に使われたと考えられる。

(小館 孝浩)

第626号土壙 (第369図)

[位置] Y H-57グリッドに位置する。

[重複] 第638号土壙と重複しており、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸106cm・短軸90cm、壙底部長軸77cm・短軸46cmで、深さは52cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面の壁際には、壁溝が全周する。壁溝の幅は、8～13cmで、深さは6～7cmである。底面は若干凹凸が認められる。

[堆積土] 5層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器が覆土中から出土した。

[その他] 底面の東側から22×20cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第627号土壙 (第369図)

[位置] YH・YG-57グリッドに位置する。

[重複] 第707号土壙と重複しており、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部長軸153cm・短軸129cm、壙底部長軸133cm・短軸111cmで、深さは42cmである。壁は、底面から開口部にかけて若干内傾して立ち上がり、開口部が挟まるフラスコ状を呈する。東側の壁の一部が底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は凹凸が認められる。

[堆積土] 5層である。黄褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小館 孝浩)

第628号土壙 (第370図)

[位置] YI-58・59グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸150cm・短軸74cm、壙底部長軸134cm・短軸54cmで、深さは36cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の形状などから土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第629号土壙 (第370図)

[位置] Y G・Y H-58に位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部長軸114cm・短軸109cm、壙底部長軸123cm・短軸122cmで、深さは70cmである。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がり、開口部が若干狭くなるフラスコ状を呈する。南側の壁の一部が底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がっている。底面は、凹凸が認められる。

[堆積土] 12層に分層できた。黒褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小館 孝浩)

第630号土壙 (第371図)

[位置] Y G-57グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部長軸112cm・短軸102cm、壙底部長軸98cm・短軸80cmで、深さは28cmである。壁は、底面から開口部にかけてやや急に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、若干の凹凸が認められる。

[堆積土] 4層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小館 孝浩)

第631号土壙 (第371図)

[位置] Y H-56グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸118cm・短軸78cm、壙底部長軸108cm・短軸52cmで、深さは48cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 6層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状

況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 底面から硬玉製勾玉3点ずつ出土した。

[その他] 底面の東側から44×16cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第632号土壙 (第371図)

[位置] YG-56グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸120cm・短軸107cm、壙底部長軸120cm・短軸120cmで、深さは32cmである。壁は、底面から開口部にかけて若干内傾して立ち上がり、開口部が狭まるフラスコ状を呈する。東側の壁の一部が底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の形状などから、土壙墓の可能性が高いと考えられる。

(小館 孝浩)

第633号土壙 (第372図)

[位置] YY-58・59グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は不整形を呈する。開口部長軸120cm・短軸100cm、壙底部長軸100cm・短軸83cmで、深さは25cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、凹凸が認められる。

[堆積土] 7層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器と礫が1点覆土中から出土した。

(小館 孝浩)

第634号土壙 (第372図)

[位置] YF-56グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部長軸92cm・短軸85cm、壙底部長軸110cm・短軸113cmで、深さは66cmである。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がり、開口部が狭まるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 8層に分層できた。暗褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小館 孝浩)

第635号土壙 (第373図)

[位置] Y F・Y G-56グリッドに位置する。

[重複] 第636号土壙と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は、円形を呈する。開口部長軸128cm・短軸121cm、壙底部長軸112cm・短軸112cmで、深さは58cmである。壁は、底面から緩やかに立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 7層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第636号土壙 (第373図)

[位置] Y G-56グリッドに位置する。

[重複] 第635・637号土壙と重複しており、いずれの土壙より本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、隅丸方形を呈する。開口部長軸(107cm)・短軸(87cm)、壙底部長軸(87cm)・短軸(55cm)で、深さは55cmである。壁は、底面から緩やかに立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。にぶい黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第637号土壙 (第373図)

[位置] Y G-56グリッドに位置する。

[重複] 第636号土壙と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸154cm・短軸89cm、壙底部長軸134cm・短軸67cmで、深さは55cmである。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第638号土壙 (第374図)

[位置] YH-57グリッドに位置する。

[重複] 第626号土壙と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸203cm・短軸123cm、壙底部長軸190cm・短軸115cmで、深さは52cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、凹凸が認められる。

[堆積土] 5層に分層できた。明黄褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小館 孝浩)

第639号土壙 (第374図)

[位置] YI-58グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸105cm・短軸81cm、壙底部長軸104cm・短軸70cmで、深さは57cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。西側の壁が底面から開口部にかけて内傾して立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。黄褐色土を基調としている。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器が覆土中から出土した。

[その他] 土壙の形状などから、土壙墓の可能性が高いと考えられる。

(小館 孝浩)

第640号土壙 (第375図)

[位置] Y J - 60・61グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸(148cm)・短軸100cm、壙底部長軸(130cm)・短軸96cmで、深さは30cmである。西壁は、掘り過ぎのため確認できなかったが、その他の壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小館 孝浩)

第651号土壙 (第375図)

[位置] Z A・Y Z - 53・54グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸163cm・短軸86cm、壙底部長軸149cm・短軸72cmで、深さは100cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 8層に分層できた。明黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土壙確認面から石棒が1点出土した。

[その他] 底面の南側から50×46cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第652号土壙 (第376図)

[位置] Y Z - 61グリッドに位置する。

[重複] 第461号土壙と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈すると思われる。壙底部長軸123cmで、深さは54cmである。開口部長軸・短軸及び壙底部短軸は確認できなかった。壁は、南側の壁しか確認できず、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がると思われる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 確認できなかった。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小館 孝浩)

第653号土壙 (第344図)

[位置] Y Y-61グリッドに位置する。

[重複] 第572号土壙と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸(149cm)・短軸74cm、壙底部長軸(144cm)・短軸68cmで、深さは68cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。暗褐色土を基調としローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の形状から、土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第654号土壙 (第376図)

[位置] Z C-60グリッドに位置する。

[重複] 第655号土壙と重複しており、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部長軸137cm・短軸131cm、壙底部長軸118cm・短軸120cmで、深さは44cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、若干凹凸が認められる。

[堆積土] 4層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面の北西側から21×11cmの赤色顔料を検出した。土壙墓の可能性が高いと考えられる。

(小館 孝浩)

第655号土壙 (第376図)

[位置] Z C-60グリッドに位置する。

[重複] 第654号土壙と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸(98cm)・短軸65cm、壙底部長軸

(83cm)・短軸46cmで、深さは34cmである。壁は、南壁のみ確認でき、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、凹凸が認められる。

[堆積土] 1層である。黄褐色土で炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壌の形状などから、土壌墓と考えられる。

(小舘 孝浩)

第656号土壙 (第377・378図)

[位置] Y X・Y Y-62・63グリッドに位置する。

[重複] 第657・658・696号土壙と重複しており、本土壙が一番新しい。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部長軸(237cm)、壙底部長軸(130cm)で、深さは137cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦であるが、北壁際から深さ21.1cmのピットを1個検出した。

[堆積土] 13層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器が覆土中から出土した。

[その他] 南西壁から焼土が検出された。

(小舘 孝浩)

第657号土壙 (第377・378図)

[位置] Y X-62グリッドに位置する。

[重複] 第656号土壙と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部長軸(108cm)、壙底部長軸(144cm)で、深さは104cmである。壁は、西側の壁が第656号土壙と重複しているため確認できないが、東側の壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がり、開口部が狭ばまるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 2層から礫が2点出土した。

[その他] 礫の周辺から焼土が検出された。

(小舘 孝浩)

第658号土壙 (第377・378図)

[位置] Y Y・Y X-63グリッドに位置する。

[重複] 第656・696号土壙と重複しており、本土壙は第656号土壙より古く、第696号土壙より新しい。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部長軸(132cm)、壙底部長軸142cm・短軸139cmで、深さは96cmである。壁は、東側の壁が第656号土壙と重複しているため確認できないが、北側の壁が底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、西側及び南側の壁は底面から開口部にかけて内傾して立ち上がっている。確認できた壁から考えれば、開口部が挟ばまるフラスコ状を呈すると思われる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 7層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器が覆土中から出土した。

(小館 孝浩)

第660号土壙 (第378図)

[位置] Z D-60グリッドに位置する。

[重複] 第663号土壙と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸169cm・短軸73cm、壙底部長軸156cm・短軸66cmで、深さは44cmである。壁は、東側の壁が第663号土壙と重複しているため一部確認できないが、その他の壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器が2層から出土した。

[その他] 土壙の形状などから、土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第661号土壙 (第379図)

[位置] Z D-60グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸123cm・短軸62cm、壙底部長軸112cm・短軸45cmで、深さは48cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口

部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。明黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器が1層から出土した。

[その他] 土壙の形状などから、土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第662号土壙 (第379図)

[位置] Z C-60グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸133cm・短軸69cm、壙底部長軸106cm・短軸55cmで、深さは30cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面の西側から35×18cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第663号土壙 (第378図)

[位置] Z D-60グリッドに位置する。

[重複] 第660号土壙と重複しており、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸(148cm)・短軸58cm、壙底部長軸(109cm)・短軸48cmで、深さは31cmである。壁は、西壁の壁が第660号土壙と重複しているため一部確認できないが、その他の壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 1層である。黄褐色土でローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 確認面から礫が1点出土した。

[その他] 底面のほぼ全域東側のから76×32cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第666号土壙 (第379図)

[位置] Z C - 60グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸(137cm)・短軸(85cm)、壙底部長軸(122cm)・短軸(70cm)で、深さは35cmである。壁は、東側及び西側の一部が残存しているだけで全体は確認できないが、残存部分から考えれば底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 7層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の形状などから、土壙墓と考えられる。

(小舘 孝浩)

第669号土壙 (第380図)

[位置] Z C - 59・60グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸88cm・短軸(63cm)、壙底部長軸88cm・短軸(55cm)で、深さは24cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がっており、開口部が若干広がる。西側の壁が底面から開口部にかけて若干内傾して立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面の西側から13×10cm、東側から12×6cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(小舘 孝浩)

第671号土壙 (第380図)

[位置] Z B・Z C - 44グリッドに位置する。

[重複] 第672号土壙と重複しており、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、不整楕円形を呈する。開口部長軸171cm・短軸154cm、壙底部長軸176cm・短軸167cmで、深さは126cmである。東壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、その

他の壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 6層に分層できた。暗褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第672号土壙 (第380図)

[位置] Z B・Z C-44グリッドに位置する。

[重複] 第671号土壙と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は、不整円形を呈する。開口部長軸171cm・短軸(156)cm、壙底部長軸155cm・短軸(145)cmで、深さは115cmである。西壁は、底面から開口部にかけて若干内傾して立ち上がり、その他の壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。

[堆積土] 6層に分層できた。暗褐色土及び明黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 第2層から土器片が出土した。

(成田 悟)

第673号土壙 (第381図)

[位置] Z E-43グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は不整楕円形を呈する。開口部長軸109cm・短軸88cm、壙底部長軸117cm・短軸96cmで、深さは98cmである。東壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、その他の壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。黒褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第674号土壙 (第381図)

[位置] Z D-44グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸140cm・短軸122cm、壙底部長軸114cm・短軸123cmで、深さは123cmである。西壁・南壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がるフラスコ状を呈し、その他の壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 8層に分層できた。暗褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第675号土壙 (第382図)

[位置] Z D-44グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整形円形を呈する。開口部長軸152cm・短軸152cm、壙底部長軸157cm・短軸139cmで、深さは107cmである。東壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、その他の壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 9層に分層できた。にぶい黄橙色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第676号土壙 (第382図)

[位置] Z E・Z F-43・44グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸174cm・短軸145cm、壙底部長軸150cm・短軸123cmで、深さは121cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 11層に分層できた。暗褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第677号土壙 (第383図)

[位置] Z E・Z F-44グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整形円形を呈する。開口部長軸148cm・短軸141cm、壙底部長軸130cm・短軸138cmで、深さは89cmである。西壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がるフラスコ状を呈し、その他の壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 9層に分層できた。黒褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第678号土壙 (第383～386図)

[位置] Z T-62・63グリッドに位置する。

[重複] 第689・690号土壙と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 重複しているため、平面形は確定できないが、不整形円形を呈すると考えられる。短軸については不明である。開口部長軸162cm、壙底部長軸126cmで、深さは97cmである。残存している壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 11層に分層できた。黄褐色土を基調としており炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第681号土壙 (第387図)

[位置] Z U-62グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 北側だけの検出であるが平面形は、不整形円形を呈すると考えられる。長軸だけの計測であるが、開口部長軸(103)cm、壙底部長軸(117)cmで、深さは97cmである。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積

かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第682号土壙 (第388・389図)

[位置] Z T・Z U-63グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、円形を呈する。開口部長軸318cm・短軸294cm、壙底部長軸308cm・短軸308cmで、深さは255cmである。西壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、その他の壁は、底面から中程にかけて内傾して立ち上がり、開口部で若干広がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 15層に分層できた。にぶい黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 覆土から土器が出土した。

(成田 悟)

第683号土壙 (第383～386図)

[位置] Z T-62グリッドに位置する。

[重複] 第684・685・689号土壙と重複しており、第684号土壙よりは古い、その他の土壙よりは新しい。

[平面形・規模] 北壁の一部だけの検出であるが、平面形は、楕円形を呈すると考えられる。規模は一部分だけの検出であるため、開口部長軸184cm、壙底部長軸153cmで短軸は計測できなかった。深さは65cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、第685号土壙の覆土を壁面としているため、柔らかく軟弱である。底部は、ほぼ平坦であるが柔らかい。

[堆積土] 11層に分層できた。褐色土を基調としており炭化物粒・焼土粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明であるが、自然堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第684号土壙 (第383～386図)

[位置] Z T-61・62グリッドに位置する。

[重複] 第683・685・686号土壙と重複しており、いずれの土壙よりも新しい。

[平面形・規模] 平面形は、不整楕円形を呈する。開口部長軸203cm・短軸191cm、壙底部長軸250cm・短軸230cmで、深さは120cmである。北壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がるが、その他の壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 11層に分層できた。にぶい黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 覆土から土器が出土した。

(成田 悟)

第685号土壙 (第383～386図)

[位置] Z S・Z T-61・62グリッドに位置する。

[重複] 第638・684・689号土壙と重複しており、第689号土壙よりは新しいが、その他の土壙よりは古い。

[平面形・規模] 平面形は、方形を呈する。開口部長軸231cm・短軸227cm、壙底部長軸206cm・短軸201cmで、深さは87cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。北壁寄りに深さ5cmのピットが位置する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 6層に分層できた。鈍い褐色土を基調としており炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 覆土から土器片が出土した。

(成田 悟)

第686号土壙 (第384・385・387図)

[位置] Z T・Z U-61・62グリッドに位置する。

[重複] 第684・690号土壙と重複しており、第684号土壙よりは古い、第690号土壙より新しい。

[平面形・規模] 平面形は確定できないが、不整楕円形を呈する。開口部長軸215cm・短軸166cm、壙底部長軸193cm・短軸190cmで、深さは52cmである。東と西壁は、底部からほぼ垂直に立ち上がり、その他の壁は、底面から開口部にかけて若干内傾して立ち上がる。

[堆積土] 7層に分層できた。黄褐色土を基調としており炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第687号土壙 (第389図)

[位置] ZO-61グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整形円形を呈する。開口部長軸212cm・短軸200cm、壙底部長軸200cm・短軸195cmで、深さは137cmである。東壁・北壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、その他の壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 11層に分層できた。暗褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明であるが自然堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第688号土壙 (第390図)

[位置] ZU-62グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸(129)cm・短軸102cm、壙底部長軸123cm・短軸115cmで、深さは70cmである。北壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、その他の壁は底面から、開口部にかけて内傾して立ち上がるフラスコ状を呈する。底面は、若干起伏が認められるが概ね平坦である。

[堆積土] 6層に分層できた。暗褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第689号土壙 (第383～385・387図)

[位置] ZT-62グリッドに位置する。

[重複] 第678・685・690号土壙と重複しており、第685号土壙よりは古いが、その他の土壙よりは新しい。

[平面形・規模] 平面形は、不整形楕円形を呈する。開口部長軸249cm・短軸(219)cm、壙底部長軸220cm・短軸(210)cmで、深さは130cmである。壁は、底面から中程にかけて内傾して立ち上がり、開口部で若干広がるフラスコ状を呈する。

[堆積土] 14層に分層できた。にぶい黄褐色土を基調としており炭化物粒を混入する。人為

堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 底面などから石器と炭化材が出土した。

(成田 悟)

第690号土壙 (第383～385・387図)

[位置] Z T-62グリッドに位置する。

[重複] 第678・686・689号土壙と重複しており、第678号土壙よりは新しいが、その他の土壙よりは古い。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈すると考えられる。開口部長軸(185)cm・短軸(145)cm、壙底部長軸(155)cm・短軸(120)cmで、深さは35cmである。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部で若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 7層に分層できた。褐色土を基調としており炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 覆土から土器片が出土した。

(成田 悟)

第691号土壙 (第390図)

[位置] Y X-63グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸150cm・短軸96cm、壙底部長軸126cm・短軸73cmで、深さは50cmである。壁は、底面から開口部にかけてやや急に立ち上がり、開口部が広がる。底面は、平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。にぶい黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器が覆土から出土した。

[その他] 底面の東側から、59×54cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第692号土壙 (第391図)

[位置] Y X・Y W-63グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸155cm・短軸108cm、壙底部長軸127cm・

短軸84cmで、深さは33cmである。壁は、底面から開口部にかけてやや急に立ち上がり、開口部が広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 底面の南側から硬玉製勾玉が2点出土した。

[その他] 底面の南西側から76×54cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第694号土壙 (第391図)

[位置] YZ-61グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸80cm・短軸54cm、壙底部長軸69cm・短軸53cmで、深さは27cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、北側に若干起伏があるが、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。黄橙色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面の西側から52×28cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第695号土壙 (第391図)

[位置] YQ・YP-62グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は不整形を呈する。開口部長軸135cm・短軸133cm、壙底部長軸128cm・短軸118cmで、深さは20cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 8層に分層できた。黒色土を基調とし炭化物、ローム粒を混入する。1・2層は火山灰である。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 炭化物は土壙内全域から多量に出土した。

(小館 孝浩)

第696号土壙 (第377・378図)

[位置] Y Y・Y X-62・63グリッドに位置する。

[重複] 第656・658号土壙と重複しており、本土壙がもっとも古い。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。壙底部長軸(195cm)・短軸190cmで、開口部長軸・短軸及び深さは確認できなかった。壁も、北側及び南側の底面から中程までの一部が確認できただけであるが、どちらも底面から上部にかけて内傾して立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 確認できなかった。

[出土遺物] 土器が底面直上から出土した。

(小館 孝浩)

第697号土壙 (第397図)

[位置] Z C-61グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸139cm・短軸88cm、壙底部長軸90cm・短軸70cmで、深さは54cmである。壁は、底面から開口部にかけてやや急に立ち上がり、開口部が広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小館 孝浩)

第698号土壙 (第392図)

[位置] Y N-64グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は不整形を呈する。開口部長軸152cm・短軸111cm、壙底部長軸140cm・短軸93cmで、深さは38cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。明黄褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器が2層から多量に出土した。

(小館 孝浩)

第701号土壙 (第393図)

[位置] Y I・Y J-62・63グリッドに位置する。

[重複] 第702号土壙、第706号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸193cm、短軸(115cm)、深さ45～55cm前後である。壁は、ほぼ垂直に立ちあがる。底面は、ほぼ平坦で、中央部に深さ10cmの円形のピットが検出された。

[堆積土] 6層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第702号土壙 (第393図)

[位置] Y I・Y J-62・63グリッドに位置する。

[重複] 第701号土壙、第706号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形及び規模は、重複しているため不明である。深さは、約55cmである。断面形は、内部に広がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 残存する層は、褐色土と暗褐色土の層で、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第703号土壙 (第394図)

[位置] Y J-62グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部長軸203cm・短軸190cm、壙底部長軸178cm・短軸158cmで、深さは154cmである。壁は、底面から開口部にかけて若干内傾して立ち上がり開口部が狭まるフラスコ状を呈する。南側は底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がっている。底面は、若干起伏があるが、ほぼ平坦である。底面の南側から深さ10cmのピットを1個検出した。

[堆積土] 8層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小舘 孝浩)

第704号土壙 (第394図)

[位置] Y J - 62グリッドに位置する。

[重複] 第716号土壙と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸(125cm)・短軸77cm、壙底部長軸(110cm)・短軸66cmで、深さは27cmである。壁は、南北の壁のみが確認でき、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広くなる。底面は、若干起伏があるが、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。明黄褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の形状などから、土壙墓の可能性が高いと考えられる。

(小舘 孝浩)

第705号土壙 (第395図)

[位置] Y G ・ Y H - 59グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は不整形を呈する。開口部長軸291cm・短軸257cm、壙底部長軸219cm・短軸182cmで、深さは46cmである。壁は、底面から開口部に緩やかに立ち上がり、開口部が広がる。底面は、凹凸が認められる。

[堆積土] 7層に分層できた。黒褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小舘 孝浩)

第706号土壙 (第393図)

[位置] Y I ・ Y J - 62グリッドに位置する。

[重複] 第701号土壙、第702号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙が、第701号土壙より古く、第702号土壙より新しい。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、開口部で直径約70cm、深さは150～170cmである。断面形は、内部に広がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦であるが、

南東の壁際に深さ45cmの楕円形のピットが検出された。遺構に伴うものと考えられるが、用途については、不明である。

[堆積土] 11層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第707号土壙 (第395図)

[位置] YH-57グリッドに位置する。

[重複] 第627号土壙と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸155cm・短軸(80cm)、壙底部長軸127cm・短軸67cmで、深さは40cmである。壁は、南壁が第627号土壙と重複しており確認できなかったが、その他の壁は、底面から開口部にかけてやや急に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の形状などから、土壙墓と考えられる。

(小舘 孝浩)

第708号土壙 (第396図)

[位置] YI・YJ-63・64グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、南側の一部が膨らむ円形を呈する。規模は、長軸275cm、短軸215cmで、深さは125～140cmである。壁は、垂直に立ち上がり、若干フラスコの形状をとる。底面は、幾らか起伏はあるものの平坦である。

[堆積土] 11層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 覆土から土器が出土している。

[その他] 南側の一部が張り出し、段状になっており、出入り口の可能性がある。また、底面のピット(長軸50cm、短軸25cm、深さ10cm)から炭化材が検出され、遺構に伴うものと考えられる。用途に関しては、不明である。

(中嶋 友文)

第709号土壙 (第397図)

[位置] Y J - 59・60グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。規模は、開口部長軸158cm・短軸96cm、壙底部長軸146cm・短軸82cmで、深さは59cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。黄褐色土を基調としており、炭化物粒を混入する。人為堆積の可能性が高いと考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 形状などから、土壙墓の可能性が高いと考えられる。

(成田 悟)

第710号土壙 (第397図)

[位置] Y I・Y J - 61・62グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。規模は、開口長軸147cm・短軸145cm、壙底部長軸160cm・短軸158cmで、深さは97cmである。南壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、その他の壁は、底面から開口部にかけて若干内傾して立ち上がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 10層に分層できた。褐色土を基調としており、炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第711号土壙 (第398図)

[位置] Y J - 60グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。規模は、開口部長軸170cm・短軸131cm、壙底部長軸168cm・短軸116cmで、深さは38cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。黄褐色土を基調としており、炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第712号土壙 (第398図)

[位置] Y I - 62グリッドに位置する。

[重複] 第713号土壙と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部長軸164cm、壙底部長軸183cm・短軸178cmで、深さは116cmである。開口部短軸は第713号土壙と重複しており確認できなかった。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がり、開口部が狭まるフラスコ状を呈する。底面は、若干起伏があるが、ほぼ平坦である。

[堆積土] 9層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小館 孝浩)

第713号土壙 (第398図)

[位置] Y I - 61・62グリッドに位置する。

[重複] 第712号土壙と重複しており、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は確認できなかった。開口部長軸180cm、壙底部長軸は178cmで、深さは41cmである。短軸は確認できなかった。壁は、東側の壁は確認できなかったが、西側の壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が広がる。北側の壁の一部は底面から開口部にかけて内傾して立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 8層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面の北西側から68×53cmの赤色顔料を検出した。赤色顔料の検出などから土壙墓の可能性が高いと考えられる。

(小館 孝浩)

第714号土壙 (第399図)

[位置] Y K-62・63グリッドに位置する。

[重複] 第715・718号土壙と重複しており、いずれの土壙よりも本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は不整形を呈する。開口部長軸236cm・短軸218cm、壙底部長軸232cm・短軸206cmで、深さは96cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。西側の壁は、底面から開口部にかけて若干内傾して立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦であるが、東側から深さ8cmのピットを1個検出した。

[堆積土] 8層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小館 孝浩)

第715号土壙 (第399図)

[位置] Y K-63グリッドに位置する。

[重複] 第714号土壙と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部長軸79cm・短軸(72)cm、壙底部長軸107cm・短軸(103)cmで、深さは25cmである。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がり、開口部が狭まるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 1層である。褐色土で炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小館 孝浩)

第716号土壙 (第400図)

[位置] Y J-61・62グリッドに位置する。

[重複] 第704・717号土壙と重複しており、いずれの土壙よりも本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部長軸175cm・短軸162cm、壙底部長軸234cm・短軸198cmで、深さは180cmである。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がり、開口部が狭まるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦であるが、北東側に深さ6cm、南西側に深さ45cmのピットを2個検出した。

[堆積土] 12層に分層できた。明黄褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小舘 孝浩)

第717号土壙 (第401図)

[位置] Y J -61グリッドに位置する。

[重複] 第716号土壙と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸128cm・短軸(109cm)、壙底部長軸120cm・短軸(96cm)で、深さは34cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。西側の壁は第716号土壙と重複しているため、確認できなかった。底面は、ほぼ平坦である

[堆積土] 2層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小舘 孝浩)

第718号土壙 (第402図)

[位置] Y K -61グリッドに位置する。

[重複] 第714号土壙、第781号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙が、第714号土壙より古く、第781号土壙より新しい。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈すると考えられる。規模は、不明である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 7層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 硬玉製玉が、1点と覆土から土器が出土している。

[その他] 東側の底面から壁にかけて赤色顔料が検出されており、土壙墓と考えられる。

(中嶋 友文)

第719号土壙 (第402図)

[位置] Y I -63・64グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は不整形を呈する。規模は、開口部長軸134cm・短軸127cm、壙底部長軸163cm・短軸146cmで、深さは90cmである。壁は、底面から開口部にかけて若干内傾して立

ち上がり、フラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 9層に分層できた。褐色土を基調としており、炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第720号土壙 (第403図)

[位置] Y K・Y L-60・61グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は不整形を呈する。開口部長軸106cm・短軸94cm、壙底部長軸150cm・短軸142cmで、深さは86cmである。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がり、開口部が狭まるフラスコ状を呈する。底面は、若干の凹凸が認められる。

[堆積土] 5層に分層できた。暗褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小館 孝浩)

第721号土壙 (第403図)

[位置] Y B・Y C-53グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部長軸152cm・短軸145cm、壙底部長軸152cm・短軸147cmで、深さは98cmである。壁は、東側が底面から開口部にかけて若干内傾して立ち上がり、西側は底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 9層に分層できた。暗褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小館 孝浩)

第722号土壙 (第404図)

[位置] Y B・Y C-52・53グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部長軸84cm・短軸78cm、壙底部長軸76cm・短軸76cmで、深さは45cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。西側の壁が底面から開口部にかけて内傾して立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。黄褐色土を基調としている。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小館 孝浩)

第723号土壙 (第404図)

[位置] Y B-52グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部長軸165cm・短軸148cm、壙底部長軸150cm・短軸143cmで、深さは86cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。西側の壁が底面から開口部にかけて内傾して立ち上がっている。底面は、平坦である。

[堆積土] 6層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小館 孝浩)

第724号土壙 (第405図)

[位置] Y A・Y B-52・53グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部長軸146cm・短軸138cm、壙底部長軸130cm・短軸125cmで、深さは63cmである。壁は、底面から開口部にかけてやや急に立ち上がり、開口部が若干広がる。西側の壁が底面から開口部にかけて若干内傾して立ち上がっている。底面は、平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小館 孝浩)

第725号土壙 (第405図)

[位置] Y F・Y G-58グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は不整楕円形を呈する。規模は、開口部長軸90cm・短軸79cm、壙底部長軸71cm・短軸65cmで、深さは39cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部で若干広がる。底面は、若干起状が認められるが概ね平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。明黄褐色土を基調としており、炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第726号土壙 (第405図)

[位置] Y F-56グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部長軸115cm・短軸101cm、壙底部長軸92cm・短軸80cmで、深さは22cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、凹凸が認められる。

[堆積土] 4層に分層できた。暗褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小館 孝浩)

第727号土壙 (第406図)

[位置] Y F-57グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は不整楕円形を呈する。規模は、開口部長軸117cm・短軸56cm、壙底部長軸107cm・短軸44cmで、深さは39cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。黄褐色土を基調としており、炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面の南壁寄りから、45×45cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(成田 悟)

第728号土壙 (第406図)

[位置] Y D・Y E-56・57グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整楕円形を呈する。規模は、開口部長軸146cm・短軸96cm、壙底部長軸114cm・短軸72cmで、深さは36cmである。南壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、その他の壁は、底面から開口部にかけて、若干緩やかに立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 7層に分層できた。褐色土を基調としており、炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面の南壁寄りから、35×20cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(成田 悟)

第729号土壙 (第406図)

[位置] Y G-56・57グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸126cm・短軸85cm、壙底部長軸104cm・短軸75cmで、深さは42cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。暗褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の形状などから、土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第730号土壙 (第407図)

[位置] Y F-56グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は不整形を呈する。開口部長軸168cm・短軸160cm、壙底部長軸148cm・短軸146cmで、深さは76cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、底

面から開口部にかけて若干広がる。ただ、東側の壁は一部底面から開口部にかけて内傾して立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 13層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小舘 孝浩)

第733号土壙 (第407図)

[位置] Y F - 68グリッドに位置する。

[重複] 認められない。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形で、開口部が南にかたよっている。規模は、開口部で長軸150cm・短軸145cm、深さは95～110cmである。断面形は、フラスコ状を呈し、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含む。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第734号土壙 (第408図)

[位置] Y E ・ Y F - 70グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、開口部の直径約150cm、深さは約150cmである。断面形は内部に広がるフラスコ状で、底面は、やや起伏がみられる。

[堆積土] 13層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 多数の土器と石器が出土した。

(中嶋 友文)

第735号土壙 (第409図)

[位置] Y F - 67 ・ 68グリッドに位置する。

[重複] 第736号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、開口部がやや南にかたよる円形を呈する。規模は、開口部の直

径約140cm、深さは約80cmである。断面形は内部に広がるフラスコ状で、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 6層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・焼土粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 覆土から土器が出土している。

(中嶋 友文)

第736号土壙 (第409図)

[位置] Y F -67グリッドに位置する。

[重複] 第735号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、開口部の直径約100cm、深さは約130cmである。断面形は内部に広がるフラスコ状で、底面は、やや起伏が認められる。

[堆積土] 8層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒・焼土粒・小礫を含んでいる。自然堆積か人為堆積かは、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第737号土壙 (第410図)

[位置] Y D・Y E -67・68グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ方形を呈する。規模は、長軸225cm、短軸205cmで、深さは約40cmである。壁は、緩やかに立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。黒褐色土を基調とし、ローム粒と多量の炭化物粒を含んでいる。2層が炭化材の層になっている。底面及び壁面が火熱により焼けている。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 多量の炭化材が出土していることから炭焼窯と考えられる。

(中嶋 友文)

第738号土壙 (第410・411図)

[位置] Y H -68グリッドに位置する。

[重複] 第741・742号土壙と重複しており、いずれの土壙よりも新しい。

[平面形・規模] 平面形は、円形を呈する。開口部長軸206cm・短軸（183）cm、壙底部長軸175cm・短軸170cmで、深さは157cmである。壁は、底面から中程にかけて内傾して立ち上がり開口部で広がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 18層に分層できた。明黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明であるが、自然堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第739号土壙 (第412図)

[位置] Y J - 81・82グリッドに位置する。

[重複] 認められない。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、長軸95cm、短軸82cmで、深さは30～36cmである。壁は、やや急に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 粘性のある黒褐色土の層で、ローム粒を含んでいる。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第740号土壙 (第412図)

[位置] Y M - 78グリッドに位置する。

[重複] 認められない。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、長軸108cm、短軸95cmで、深さは60～70cmである。壁は、やや急に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 6層に分層できた。里褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 底面近くから土器片が出土している。

(中嶋 友文)

第741号土壙 (第410・411図)

[位置] Y I - 68グリッドに位置する。

[重複] 第738号土壙と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は、円形を呈する。開口部長軸180cm・短軸（122）cm、壙底部長軸（140）cm・短軸（97）cmで、深さは56cmである。西側の壁は重複により残存しない。その他

の壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。にぶい黄橙色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第742号土壙 (第410・411図)

[位置] YH-68グリッドに位置する。

[重複] 第738号土壙と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は、不整楕円形を呈する。開口部長軸(165)cm・短軸135cm、壙底部長軸(160)cm・短軸137cmで、深さは72cmである。西壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がるフラスコ状を呈し、その他の壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。自然堆積か人為堆積は不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第743号土壙 (第412図)

[位置] XZ-72グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、円形を呈する。開口部長軸86cm・短軸78cm、壙底部長軸46cm・短軸29cmで、深さは20cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面には、深さ15cmのピットが位置する。

[堆積土] 2層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第745号土壙 (第413図)

[位置] XW-77グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、円形を呈する。開口部長軸138cm・短軸136cm、壙底部長軸160cm・短軸160cmで、深さは111cmである。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 12層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒・焼土粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 土壙の確認面に礫が位置しており、人為的に配置されたものと考えられる。

(成田 悟)

第746号土壙 (第413図)

[位置] Y G・Y D-56・57グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。規模は、開口部長軸95cm・短軸91cm、壙底部長軸73cm・短軸67cmで、深さは50cmである。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調としており、炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第747号土壙 (第414図)

[位置] Y D・Y E-58グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。規模は、開口部長軸74cm・短軸73cm、壙底部長軸61cm・短軸60cmで、深さは32cmである。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。褐色土を基調としており、炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第748号土壙 (第414図)

[位置] Y D-53グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、円形を呈する。開口部長軸147cm・短軸145cm、壙底部長軸156cm・短軸141cmで、深さは73cmである。東壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、その他の壁は底面から、開口部にかけて内傾して立ち上がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 12層に分層できた。里褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第749号土壙 (第414図)

[位置] Y E・Y F-55・56グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整円形を呈する。開口部長軸99cm・短軸85cm、壙底部長軸142cm・短軸140cmで、深さは127cmである。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がりフラスコ状を呈する。底面の中央部に、深さ3cmのピットが位置している。その他の底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 9層に分層できた。明黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第750号土壙 (第415図)

[位置] Y A-53グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整楕円形を呈する。開口部長軸118cm・短軸86cm、壙底部長軸140cm・短軸125cmで、深さは95cmである。壁は底面から開口部にかけて内傾して立ち上がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第751号土壙 (第415図)

[位置] Y H - 57・58グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。規模は、開口部長軸152cm・短軸96cm、壙底部長軸133cm・短軸65cmで、深さは50cmである。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。黄褐色土を基調としており、炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明であるが、人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の形状などから、土壙墓の可能性が高い。

(成田 悟)

第752号土壙 (第416図)

[位置] X X - 75・76グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は不整形円形を呈する。規模は、開口部長軸155cm・短軸140cm、壙底部長軸180cm・短軸175cmで、深さは160cmである。壁は、底面から中程にかけて内傾して立ち上がり、開口部で若干広がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 9層に分層できた。褐色土を基調としており、炭化物粒・焼土を多量に混入する。人為堆積か自然堆積かは不明であるが、人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 覆土から土器が出土した。

(成田 悟)

第753号土壙 (第416図)

[位置] X X・X Y - 75・76グリッドに位置する。

[重複] 第758号土壙と重複しており、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、不整形円形を呈する。開口部長軸113cm・短軸97cm、壙底部長軸153cm・短軸146cmで、深さは128cmである。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 8層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 覆土から土器片が出土した。

(成田 悟)

第754号土壙 (第417図)

[位置] X Y-76グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は不整楕円形を呈する。規模は、開口部長軸130cm・短軸100cm、壙底部長軸166cm・短軸152cmで、深さは164cmである。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がりフラスコ状を呈する。底面のほぼ中央部に深さ10cmのピットが位置し、その他の底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 10層に分層できた。褐色土を基調としており、炭化物粒・焼土粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明であるが、人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 第2層から土器片が出土した。

(成田 悟)

第755号土壙 (第418図)

[位置] X Y・X Z-74・75グリッドに位置する。

[重複] 第610号土壙と重複しており、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は不整楕円形を呈する。開口部長軸185cm・短軸141cm、壙底部長軸201cm・短軸193cmで、深さは96cmである。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がるフラスコ状を呈する。底面のほぼ中央部に深さ10cmのピットが位置する。その他の底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 12層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。また、第3層は焼土であり、廃棄されたと考えられる。人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 覆土から土器片が出土した。

(成田 悟)

第756号土壙 (第419図)

[位置] X Y-74グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整形を呈する。開口部長軸105cm・短軸95cm、壙底部長軸136cm・短軸123cmで、深さは106cmである。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 11層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒・焼土粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 覆土から土器片が出土した。

(成田 悟)

第757号土壙 (第420図)

[位置] X X-73・74グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整円形を呈する。開口部長軸126cm・短軸116cm、壙底部長軸205cm・短軸197cmで、深さは192cmである。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がり、開口部で若干広がるフラスコ状を呈する。底面の西壁よりに深さ43cmのピットが位置する。その他の底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 18層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 覆土から土器片が出土した。

(成田 悟)

第758号土壙 (第416図)

[位置] X X-75グリッドに位置する。

[重複] 第753号土壙と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は、円形を呈する。開口部長軸64cm・短軸(63)cm、壙底部長軸109cm・短軸101cmで、深さは133cmである。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 8層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第759号土壙 (第418図)

[位置] X Y-75グリッドに位置する。

[重複] 第760号土壙と重複しており、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は不整円形を呈する。開口部長軸(185)cm・短軸160cm、壙底部長

軸175cm・短軸174cmで、深さは118cmである。東壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、その他の壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がるフラスコ状を呈する。底面のほぼ中央部に深さ6cmのピットが位置する。その他の底面は、ほぼ平坦である。

〔堆積土〕 13層に分層できた。明黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

〔出土遺物〕 覆土から土器片が出土した。

(成田 悟)

第760号土壙 (第418図)

〔位置〕 X Y-74・75グリッドに位置する。

〔重複〕 第755・759号土壙と重複しており、本土壙が古い。

〔平面形・規模〕 重複が激しく一部分だけの検出であるが、平面形は不整円形を呈すると考えられ、規模は深さが76cmで、その他の規模は不明である。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面も一部分の検出であるが、ほぼ平坦である。

〔堆積土〕 3層に分層できた。明黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

〔出土遺物〕 底面から礫が3点出土した。

(成田 悟)

第761号土壙 (第421図)

〔位置〕 Y L-59・60グリッドに位置する。

〔重複〕 認められなかった。

〔平面形・規模〕 平面形は円形を呈する。開口部長軸223cm・短軸195cm、壙底部長軸253cm・短軸229cmで、深さは196cmである。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がり、開口部が狭まるフラスコ状を呈する。底面は、若干起伏が認められる。底面の西側から深さ13cmのピットを1個検出した。

〔堆積土〕 15層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒、焼土を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 4層と5層の間から石棒が1点出土した。

(小館 孝浩)

第762号土壙 (第422図)

[位置] Y M-64グリッドに位置する。

[重複] 第768・769号土壙と重複しており、第769号土壙より新しいが、第768号土壙との新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 平面形は、円形を呈する。開口部長軸(250)cm・短軸244cm、壙底部長軸219cm・短軸210cmで、深さは111cmである。壁は、底面から垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面はほぼ平坦であるが、底面西壁際に深さ7cmのピットを有する。

[堆積土] 10層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器が覆土中から出土した。

(成田 悟)

第763号土壙 (第423図)

[位置] Y K-66・67グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部長軸238cm・短軸233cm、壙底部長軸231cm・短軸184cmで、深さは129cmである。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がり、開口部が狭まるフラスコ状を呈する。ただ、西側及び南側の壁の一部は、ほぼ垂直に立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 17層に分層できた。明黄褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 礫が1点覆土中から出土した。

(成田 悟)

第764号土壙 (第424図)

[位置] Y I-67グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸208cm・短軸182cm、壙底部長軸265cm・短軸250cmで、深さは168cmである。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がり、開口部が狭まるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 28層に分層できた。にぶい黄褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 底面の北側から礫が1点出土した。

(小館 孝浩)

第765号土壙 (第425図)

[位置] YL-65グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部長軸111cm・短軸90cm、壙底部長軸132cm・短軸123cmで、深さは147cmである。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がり、開口部が狭まるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。にぶい黄橙色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 第5層から炭化物が出土した。

(小館 孝浩)

第766号土壙 (第425図)

[位置] YM-63グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部長軸114cm・短軸103cm、壙底部長軸103cm・短軸98cmで、深さは削平されて確認できなかった。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、凹凸が認められる。

[堆積土] 残存部は1層である。明黄褐色土を基調としている。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 硬玉製勾玉が1点出土した。

[その他] 底面の西側から63×39cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第767号土壙 (第426図)

[位置] YJ-66・67グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部長軸290cm・短軸270cm、壙底部長軸260cm・短軸255cmで、深さは167cmである。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がり、開口部が広がる。底面は、ほぼ平坦であるが、中央部から深さ6cm、東側から深さ8cm、14cmの計

3個のピットを検出した。

[堆積土] 25層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器が覆土から出土した。

(小館 孝浩)

第768号土壙 (第422図)

[位置] YM-64グリッドに位置する。

[重複] 第762号土壙と重複しており、新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 重複により東側の一部分だけの検出であるが、楕円形を呈すると考えられる。重複により長軸は計測できなかったが、その他は、開口部短軸77cm、壙底部短軸61cmで、深さは34cmである。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 重複して検出されたために、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 悟)

第769号土壙 (第427図)

[位置] YM-64グリッドに位置する。

[重複] 第762号土壙と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は、不整楕円形を呈する。開口部長軸(141)cm・短軸121cm、壙底部長軸(135)cm・短軸90cmで、深さは41cmである。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面の南西壁よりから51×32cmの赤色顔料を検出した。土壙基の可能性が考えられる。

(成田 悟)

第770号土壙 (第427図)

[位置] YN・YM-63グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸126cm・短軸76cm、壙底部長軸115cm・短軸66cmで、深さは14cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、若干起伏はあるが、ほぼ平坦である。

[堆積土] 1層である。明黄褐色土で炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面の南側から45×39cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第771号土壙 (第428図)

[位置] YK-66グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部長軸150cm・短軸119cm、壙底部長軸150cm・短軸148cmで、深さは133cmである。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がり、開口部が狭まるフラスコ状を呈する。ただ、東側の壁の一部は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 8層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒、焼土を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器が覆土から出土した。

(小館 孝浩)

第773号土壙 (第428図)

[位置] YL-63・64グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸145cm・短軸95cm、壙底部長軸113cm・短軸74cmで、深さは33cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が広がる。底面は、ほぼ平坦であるが、底面の北側から深さ13cmのピットを1個検出した。

[堆積土] 4層に分層できた。明褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面の西側から56×55cmと29×23cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第774号土壙 (第429図)

[位置] YL-63グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸130cm・短軸88cm、壙底部長軸122cm・短軸82cmで、深さは21cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面の東側と西側から52×38cm、45×38cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第776号土壙 (第429図)

[位置] YK-64・65グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部長軸106cm・短軸100cm、壙底部長軸132cm・短軸123cmで、深さは116cmである。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がり、開口部が狭まるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦であるが、中央部に深さ6cmのピット1個を検出した。

[堆積土] 4層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小館 孝浩)

第777号土壙 (第430図)

[位置] YL-63グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸168cm・短軸91cm、壙底部長軸156cm・短軸79cmで、深さは27cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。明黄褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入している。

堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面の西側から80×58cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第779号土壙 (第430図)

[位置] Y L-62グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸142cm・短軸78cm、壙底部長軸126cm・短軸66cmで、深さは43cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒、ロームブロックを混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 底面から硬玉製勾玉が2点出土した。

[その他] 土壙の形状や出土遺物などから、土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第780号土壙 (第430図)

[位置] Y J-64グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部長軸88cm・短軸75cm、壙底部長軸145cm・短軸126cmで、深さは51cmである。壁は、底面から開口部にかけて内傾して立ち上がり、開口部が狭まるフラスコ状を呈する。底面は、若干起伏はあるが、ほぼ平坦である。

[堆積土] 6層に分層できた。暗褐色土を基調とし炭化物粒、ロームブロック、焼土を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小館 孝浩)

第781号土壙 (第402図)

[位置] Y K-61グリッドに位置する。

[重複] 第718号土壙と重複する。新旧関係は、本土壙が、古い。

[平面形・規模] 平面形及び規模は、不明である。壁は、やや急に立ち上がる。底面は、ほ

ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。黄褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第784号土壙 (第431図)

[位置] Y G-62グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸148cm・短軸91cm、壙底部長軸121cm・短軸68cmで、深さは55cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の形状などから、土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第791号土壙 (第431図)

[位置] Y K-63・64グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸134cm・短軸72cm、壙底部長軸115cm・短軸62cmで、深さは35cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 1層である。黄褐色土で炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壙の形状などから、土壙墓の可能性が高いと考えられる。

(小館 孝浩)

第792号土壙 (第432図)

[位置] Y K-63グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸127cm・短軸85cm、壙底部長軸120cm・短軸79cmで、深さは35cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。ただ、南壁の一部が底面から開口部にかけて内傾して立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面の西側から中央部にかけて72×51cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第793号土壙 (第432図)

[位置] Y L・Y K-64グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸137cm・短軸55cm、壙底部長軸133cm・短軸51cmで、深さは35cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、平坦である。

[堆積土] 1層である。褐色土で炭化物粒を混入している。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面の西側から12×10cmの赤色顔料を検出した。土壙墓と考えられる。

(小館 孝浩)

第794号土壙 (第432図)

[位置] Y K-62グリッドに位置する。

[重複] 第797号土壙と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸127cm・短軸74cm、壙底部長軸118cm・短軸66cmで、深さは59cmである。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 底面の東側から40×32cmの赤色顔料を検出した。土壙墓の可能性が高い。

(成田 悟)

第795号土壙 (第433図)

[位置] Y L-62グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸77cm・短軸47cm、壙底部長軸69cm・短軸42cmで、深さは10cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、若干起伏があるが、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。明褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小館 孝浩)

第796号土壙 (第433図)

[位置] Y K-62・63グリッドに位置する。

[重複] 第797号土壙と重複しており、本土壙が古い。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。規模は、開口部長軸118cm・短軸74cm、壙底部長軸103cm・短軸62cmで、深さは27cmである。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調としており、炭化物粒を混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 土器が覆土及び底面直上から出土した。

(成田 悟)

第797号土壙 (第433図)

[位置] Y K-62・63グリッドに位置する。

[重複] 第794・796号土壙と重複しており、本土壙が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、楕円形を呈する。開口部長軸(118)cm・短軸98cm、壙底部長軸222cm・短軸210cmで、深さは112cmである。壁は、底面から内傾して立ち上がり、開口部が狭く断面はフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 15層に分層できた。黄褐色土を基調とし、炭化物粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 土壌底面から3個のピットが検出された。ピットの深さは概ね6cmである。

(成田 悟)

第799号土壌 (第434図)

[位置] YL-62グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。開口部長軸132cm・短軸80cm、壙底部長軸141cm・短軸83cmで、深さは37cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。黄褐色土を基調とし炭化物粒、ローム粒を混入する。堆積状況から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(小箆 孝浩)

第800号土壌 (第284図)

[位置] ZJ-58・59グリッドに位置する。

[重複] 第428号土壌と重複する。新旧関係は、本土壌が古い。

[平面形・規模] 平面形は、開口部が北側にかたよる円形を呈する。規模は、開口部の直径120cm前後、深さは50～60cmである。断面形は、内部に広がるフラスコ状で、底面は、やや起伏が多い。

[堆積土] 4層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第801号土壌 (第248図)

[位置] ZV-55グリッドに位置する。

[重複] 第347号土壌・第802号土壌と重複するが、木の根による攪乱を受けているため新旧関係は、不明である。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ円形と考えられる。規模は、直径75cmで、深さは30cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 確認できなかった。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第802号土壙 (第248図)

[位置] ZV-55グリッドに位置する。

[重複] 第347号土壙・第801号土壙と重複するが、木の根による攪乱を受けているため新旧関係は、不明である。

[平面形・規模] 平面形は、ほぼ楕円形と考えられる。規模は、長軸95cm、短軸(85cm)、深さは約25cmである。壁はやや緩やかに立ち上がる。底面は、やや起伏が認められ、南側に深さ15cmの円形のピットが見られる。

[堆積土] 褐色の層で、ローム粒・炭化物粒・小礫を含んでいる。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第3節 溝

第1号溝 (遺構配置図)

[位置] F-O-24・25グリッドに位置する。

[重複] 第10号・第78号溝と重複し、第10号溝より古く、第78号溝より新しい。

[平面形・規模] 調査区域を南北に横断しているため、全体の形状は不明である。断面形は箱形に近い。規模は、幅1.5～2m、深さは約0.25mである。傾斜は南→北である。壁は底面から緩やかに立ち上がり、上部が広がる。底面には小さな凹凸がある。

[堆積土] 3層に分層した。層全体にローム・ブロックを多く含む。第1層はローム土で、人為堆積と考えられる。底面所々の直上に砂が堆積している。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土した。

[その他] 時期不明である。

第2号溝 (遺構配置図)

[位置] F-O-23・24グリッドに位置する。

[重複] 多数の遺構と重複するが、本遺構が最も新しい。

[平面形・規模] 調査区域を南北に横断しているため全体の形状は不明であるが、調査区のほぼ中央で大きくL字形に屈曲している。断面形は鍋底状である。規模は、幅約0.5m前後で、深さは約0.2mである。傾斜は南→北である。壁は底面から緩やかに湾曲しながら立ち上がる。

[堆積土] 3層に分層した。層全体にローム・ブロックを多く含む。第1層はローム土で、人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土した。

[その他] 時期不明である。

第4号溝 (遺構配置図)

[位置] J-N-20～23グリッドに位置する。

[重複] 第110号住居跡の床下に構築され、第79号溝と接続する。

[平面形・規模] 第110号住居跡からほぼ南北に延びる。住居内ではY字状に枝分かれをしている。断面状は鍋底状である。規模は、長さ約20.0m、幅約0.6m前後で、深さは約0.5mである。傾斜は南→北である。壁は底面から直線的に外傾しながら立ち上がる。

[堆積土] 2層に分層した。層全体にローム・ブロックを多く含む。人為堆積である。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土した。

[その他] 第110号住居跡の排水用の施設と考えられる。

(岡田 康博)

第10号溝 (遺構配置図)

[位置] F～O-25～27グリッドに位置する。

[重複] 多数の遺構と重複し、本遺構が最も新しい。

[平面形・規模] 調査区域をほぼ南北に横断する。断面状は浅い鍋底状である。規模は、幅約0.5m前後で、深さは約0.3mである。傾斜は南→北である。壁は底面から緩やかに湾曲しながら立ち上がる。

[堆積土] 1層である。層全体に炭化物を多く含む。自然堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 土師器が出土した。

第16号溝 (配置図)

[位置] F～I-7グリッドに位置する。

[重複] 第24号竪穴住居跡と重複し、本溝が新しい。

[平面形・規模] 調査区域を南北に横断しているため、全体形は不明である。幅30～60cmで深さは10cm程である。

[堆積土] 黒褐色土に少量のローム粒が混入し、非常にもろい。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 耕作に伴う排水用の溝と考えられ、ごく最近のもの可能性が高い。

(白鳥 文雄)

第17号溝 (第435図)

[位置] F～K-10～12グリッドに位置する。

[重複] 第70号竪穴住居跡・第8～15・28・55・82・83号土壙・第139号溝と重複している。一部の遺構との新旧関係は不明瞭ではあるが、本溝が最も古いと考えられる。

[平面形・規模] 調査区域を南北に横断していることから全体形は不明であるが、北端部で第139号溝と接している。幅は50～90cm、深さは20～80cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、底面は緩く湾曲している。傾斜は南→北である。

[堆積土] 9層に分層できた。第5層は十和田a降下火山灰の層である。また、底面から20cmの部分にロームの層が認められる。火山灰層の上から鉄滓・製鉄炉体の破片・羽口片などが出土している。火山灰層の下からはこれらの製鉄関連の遺物は出土していない。

[出土遺物] 覆土中より、土師器坏・甕・壺・須恵器甕・鉄滓等が出土している。

(白鳥 文雄)

第18号溝 (配置図)

[位置] L-18、M-17・18、N-17グリッドに位置する。

[重複] 第28・29・51号竪穴住居跡と重複し、本溝が最も新しい。

[平面形・規模] 若干北東へ湾曲する。底面の傾斜は南→北方向で、北側の沢に接し、途切れる。幅は、80～100cmで、深さは、10～30cm程である。底面は概ね平坦であるが、壁の立ち上がりは緩やかで、全体にはナベ底状に近い。

[堆積土] 暗褐色土を基調としており、全体にロームを多く混入する。堆積土は場所によって混入物に違いが認められる。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 覆土中より土師器の破片が少量出土した。

(白鳥 文雄)

第19号溝 (配置図)

[位置] L・M-18・19、N-18グリッドに位置する。

[重複] なし。

[平面形・規模] 長さ550cm、幅70～110cmで、確認部は長楕円形を呈する。深さは15～35cmである。北側に一段の細長い高まりが確認され、溝の北端部が土壙状に区切られている。この北端部の区画部分は他の部分より浅い。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

[堆積土] 黒褐色土を基調としており、ローム粒を微量混入している。第2層中には灰状のものが微量混入しているが、火山灰かどうかは不明である。

[出土遺物] 保時期片が少量出土している。また土製品が1点出土している。

(白鳥 文雄)

第20号溝 (配置図)

[位置] H・I-12・13グリッドに位置する。

[重複] 第19号土壙と重複しており、本溝が古い。北端部で第26号溝に接する。

[平面形・規模] 長さ410cm、幅60～90cmで東西に長い長楕円形を呈する。底面の傾斜方向は、西→東である。

[堆積土] 黒褐色土を基調としており、ローム粒を微量混入している。

[出土遺物] 覆土上面から土師器片が少量出土しているが、本遺構に伴うかは不明である。

(白鳥 文雄)

第21号溝 (第436図)

[位置] G-8、H-7・8、I-7グリッドに位置する。

[重複] 第20・24・100号竪穴住居跡・第71号土壇と重複している。本溝は、第20・24号住居跡よりは新しいが、第71号土壇よりは古い。

[平面形・規模] 重複及び削平により全体形は不明であるが、南西から北東にむけて掘り込まれたものと考えられる。第20号住居跡との重複部分はとくに不明瞭である。幅は30～40cm程で、深さは、20～40cm程である。底面の傾斜は、南→北である。

[堆積土] 5層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ロームの混入がみられる。全体に軟質であるが、第71号土壇との重複部分はやや締まりが認められた。

[出土遺物] 少量の土師器片及び、製塩土器の破片が覆土中から出土している。

(白鳥 文雄)

第22号溝 (第437図)

[位置] G-13～15グリッドに位置する。

[重複] 東端部で第26号溝と接しているが新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 削平のため全体形は不明であるが、ほぼ東西に直線的に延びている。長さ750cm、幅40～60cmで、深さは20～30cmである。底面の傾斜は西→東である。

[堆積土] 3層に分層できた。黒褐色土を基調とし、焼土粒が少量混入している。

[出土遺物] 覆土中より、土師器片が少量出土している。

[その他] 本遺構の北側に数軒の住居跡が位置しており、これらの内の外周溝の可能性も考えられる。

(白鳥 文雄)

第23号溝 (第437図)

[位置] H-14グリッドに位置する。

[重複] 第52・58竪穴住居跡、第23号土壇、第52号溝と重複している。新旧関係は不明瞭であるが、第52号住居跡及び第23号土壇より古いと考えられる。

[平面形・規模] 直径3メートルほどの弧状を呈する。幅30～60cmで、深さは20cmである。壁及び底面は凹凸が多く、不明瞭である。傾斜方向も一定していない。

[堆積土] 暗褐色土を基調としており、全体に軟質である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第24号溝 (第437図)

[位置] G-13~15グリッドに位置する。

[重複] 東端部で第26号溝と接しているが新旧関係は不明である。また、第22号溝と平行して存在している。

[平面形・規模] 削平のため全体形は不明であるが、ほぼ東西に直線的に延びている。長さ800cm、幅40~60cmで、深さは20~30cmである。底面の傾斜は西→東である。

[堆積土] 黒褐色土を基調とし、焼土粒・ローム粒が少量混入している。

[出土遺物] 覆土中より、土師器片が少量出土している。

[その他] 本遺構の北側に数軒の住居跡が位置しており、第22号溝と同様に、これらの内の外周溝の可能性も考えられる。

(白鳥 文雄)

第25号溝 (配置図)

[位置] G~J-12グリッドに位置する。

[重複] 第22号土壌、第26・28号土壌ほかと重複しており、本溝が、最も新しいと考えられる。

[平面形・規模] 削平のため全体形は不明であるが、南北に延びている。幅は30cm程で、深さは10~20cm程である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、傾斜方向は南→北である。

[堆積土] 黒褐色土を基調とし、概ね軟質である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 耕作による、排水用の溝の可能性が高い。

(白鳥 文雄)

第26号溝 (配置図・438図)

[位置] F~H-13・H~L-12・J・K-11グリッドに位置する。

[重複] 第26・66・99号竪穴住居跡、第20・22・28号土壌、第22・24・25・28・53・86号溝と重複または接している。住居跡との新旧関係は、第66号住居跡より古く、他のものよりは新しい。土壌は、概ね本溝より新しく、溝では第25・28号溝が本溝より新しく、他は新旧関係が不明瞭である。

[平面形・規模] 調査区を南北に横断しているため全体形は不明である。北端部で第139号溝と接しているが、この溝と交差していないことから、同時存在していた可能性は高い。幅220~320cmで、深さ70~90cmである。壁はやや上方に開き、底面は部分的に起伏が認められる

ものの、概ね、平坦である。底面の傾斜方向は南→北である。

[堆積土] 13層に分層できたが、第28号溝に中央部を切られているため、全体の堆積状況は不明である。暗褐色土を基調としており、ローム粒・ロームブロック及び炭化物粒が全体に混入している。また、部分的に焼土の混入も認められる。

[出土遺物] 土師器・須恵器片が覆土及び底面から出土した。

[その他] 他の溝に比べ、幅、深さもあり、堅緻な構造であることから、本台地の区画、または大がかりな排水等に関わる溝と考えられる。

(白鳥 文雄)

第27号溝 (第439図)

[位置] G-7・8グリッドに位置する。

[重複] 第24号竪穴住居跡と重複している。住居跡の床面精査時に確認されたが、新旧関係は不明瞭である。本溝が古いと考えられるが、断定はできない。

[平面形・規模] 直径270cm程の弧状を呈し、南東部が開放されている。幅は30～40cm程で、開放部の端部がやや広い。深さは10～20cmで、底面はナベ底状である。

[堆積土] 暗褐色土を基調としており、軟質である。

[出土遺物] 覆土上部より土師器片が出土したが、本遺構に伴うものかは不明である。

[その他] 住居跡に伴う溝とは考えられない。また、用途も不明である。同様の溝が、第20号竪穴住居跡の床面から検出されている。

(白鳥 文雄)

第28号溝 (配置図・438図)

[位置] F・G-13、F～I-12、J～K-11グリッドに位置する。

[重複] 第66・99号竪穴住居跡、第20・28号土壇、第25・26号溝と重複または接している。住居跡との新旧関係は、第66号住居寄より古く、第99号住居跡よりは新しい。土壇では、第20号土壇より本溝が古い、第28号溝とは不明である。溝では第25号溝が本溝より新しく、第26号溝が本溝より古い。

[平面形・規模] 調査区を南北に横断しているため全体形は不明である。北端部で第139号溝と接しており、この部分で本溝は途切れている。幅90～190cmで、深さ70～100cmである。壁はやや上方に開き、底面は部分的に起伏が認められるものの、概ね、平坦である。底面の傾斜方向は南→北である。

[堆積土] 17層に分層できた。暗褐色土を基調としており、ローム粒及び炭化物粒が全体に

混入している。また、部分的に焼土の混入も認められる。

[出土遺物] 覆土及び底面から、土師器及び須恵器片が出土した。

(白鳥 文雄)

第30号溝 (第439図)

[位置] F～M-33グリッドに位置する。

[重複] 第33・42号住居跡と重複し、本溝がもっとも新しい。

[平面形・規模] 平面形は、幅が狭く南北に延びた溝である。幅は25cmで、深さ15cmであり浅い。壁は、緩やかに立ち上がる。底面は若干起伏がみられる。

[堆積土] 分層できず、墨褐色土を基調としている。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 滋彦)

第31号溝 (第439図)

[位置] N・O-32、F～O-33グリッドに位置する。

[重複] 第33・42・48・86号住居跡と重複し、本溝がもっとも新しい。

[平面形・規模] 平面形は、南北に延びた幅広の溝である。幅は186cmで、深さ36cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は若干起伏が認められるが、ほぼ平坦である。

[堆積土] 6層に分層できた。暗褐色土を基調としている。

[出土遺物] 須恵器が出土している。

(成田 滋彦)

第35号溝 (第440図)

[位置] K-29～31・L-29・30グリッドに位置する。

[重複] 第37号溝と重複し、本溝が古い。

[平面形・規模] 平面形は、東側が膨らむ楕円形を呈する。幅は、100～160cmで、深さは、16～26cmである。底面はやや起伏が認められる。

[堆積土] 4層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

(中嶋 友文)

第36号溝 (第440図)

[位置] M-28グリッドに位置する。

[重複] 認められない。

[平面形・規模] 平面形は、東側が膨らむ直線的な楕円形を呈する。幅は、90～120cmで、深さは、10～18cmである。底面は起伏が認められる。

[堆積土] 3層に分層できた。暗褐色土を基調とし、炭化物粒・ロームを混入する。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

[その他] 床面のピットは、本溝に伴わないものと考えられる。

(中嶋 友文)

第37号溝 (第440図)

[位置] M・N-29グリッドに位置する。

[重複] 第47号住居跡と重複し、本溝が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、長楕円形を呈する。幅は、125～150cmで、深さは、24～36cmである。底面は起伏が認められる。

[堆積土] 4層に分層できた。黒褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

[その他] 床面のピットは、本溝に伴わないものと考えられる。

(中嶋 友文)

第38号溝 (配置図)

[位置] J-31グリッドに位置する。

[重複] 第35号住居跡・第28号溝と重複し、本溝がもっとも新しい。

[平面形・規模] 平面形は、南西側が膨らむ形を呈する。幅は、70～120cmで、深さは、14～30cmであるが、末端部は、やや深く50cm前後の深さである。底面はやや起伏が認められる。

[堆積土] 4層に分層できた。黒褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 本溝は、第38号住居跡の外周溝と考えられる。

(中嶋 友文)

第39号溝 (第441図)

[位置] G-34・35グリッドに位置する。

[重複] 第40号溝と重複しており、本溝は第40号溝より古い。

[平面形・規模] 平面形は、南・北側が直線的な長方形を呈する。幅は25cmで中央部が幅広である。深さは12cmである。壁は、ほぼ垂直であり、底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 分層できず、暗褐色土を基調としている。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 滋彦)

第40号溝 (第441図)

[位置] F-34・35、G-35グリッドに位置する。

[重複] 第39・41～43号溝と重複しており、本溝は第39・41・43号溝より新しく、第42号溝との新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 平面形は、西端部がふくらみをもつU字形を呈する。幅は46～112cmで、西側部分が幅広である。深さは、15～24cmである。壁は、南側が緩やかに立ち上がり、北側がほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。ロームを混入する。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 須恵器が出土している。

(成田 滋彦)

第41号溝 (第441図)

[位置] G-34・35グリッドに位置する。

[重複] 第40号溝と重複しており、本溝は第40号溝より古い。

[平面形・規模] 平面形は、全体に丸みをもつ長楕円形である。幅は(54cm)である。深さは22cmである。壁は、ほぼ垂直であり、底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 分層できず、褐色土を基調としている。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 滋彦)

第42号溝 (第441図)

[位置] F-33・34グリッドに位置する。

[重複] 第42号住居跡・第31・40号溝と重複し、本溝は第42号住居跡・第31号溝より新しく、

第40号溝との新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 平面形は、南北に延びた直線的な溝である。幅は22cmである。深さ11cmで浅い。壁はほぼ垂直で、底面には起伏が認められる。

[堆積土] 精査中に雨水のため流失してしまったので、堆積土は不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 滋彦)

第43号溝 (第442図)

[位置] F-33・34グリッドに位置する。

[重複] 第40・44号溝と重複しており、本溝は第40・44号溝より古い。

[平面形・規模] 平面形は、U字形を呈する。幅は、56cmである。深さは11cmと浅い。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 分層できず、暗褐色土を基調としている。

[出土遺物] 土師器が出土している。

(成田 滋彦)

第44号溝 (第442図)

[位置] F-33・34グリッドに位置する。

[確認状況] 東側部分を精査中に削平してしまい、西側部分のみの検出である。

[重複] 第31・40・43号溝と重複しており、本溝は第40号溝より古く、第43号溝より新しい。第31号溝とは不明である。

[平面形・規模] 平面形は、残存部から推定するとU字形を呈すると思われる。幅は35cmである。深さは44cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は起伏が認められる。

[堆積土] 2層に分層できた。暗褐色土を基調にしている。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 滋彦)

第45号溝 (第443図)

[位置] L・M-28グリッドに位置する。

[重複] 第47号住居跡と第50号土塙と重複し、本溝がいずれよりも古い。

[平面形・規模] 平面形は、東西に細長い形をしている。幅は、60～65cmで、深さは、10～15cmである。底面はやや起伏が認められる。

[堆積土] 3層に分層できた。黒褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第46号溝 (第443図)

[位置] J-29・30、K-29~31グリッドに位置する。

[重複] 第38号住居跡と重複し、本溝が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、東西に細長い形をしている。幅は、80~130cmで、深さは、23~35cmである。底面はやや起伏が認められる。

[堆積土] 3層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器が出土している。

(中嶋 友文)

第48号溝 (第49号溝) (配置図)

[位置] K-29~31、L-31、M・N-30・31グリッドに位置する。

[重複] 第35号溝・第63号溝・第64号溝と重複し、本溝が第35号溝より古く、第63号溝・第64号溝より新しい。

[平面形・規模] 平面形は、南西側が膨らむ細長い形を呈する。幅は、50~100cmで、深さは、15~25cmである。底面はかなり起伏が認められる。

[堆積土] 5層に分層できた。黒褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

[その他] 本溝は、第37号住居跡・第87号住居跡のいずれかの外周溝と考えられるが、どちらに伴うかは不明である。

(中嶋 友文)

第50号溝 (配置図)

[位置] M・N-35、O・P-36グリッドに位置する。

[重複] 第42号土壇と重複しており、本溝が新しい。

[その他] 本溝は、第78号住居跡の外周溝である。

(成田 滋彦)

第51号溝 (配置図・第35図)

[位置] H-13・14グリッドに位置する。

[重複] 第25～27・52号竪穴住居跡と重複している。削平のため、新旧関係は不明瞭であるが、本溝が他の遺構より新しいと考えられる。

[平面形・規模] 削平のため全体形は不明であるが、残存部の長さ380cm、幅40～100cm程である。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 暗褐色土を基調としているが、堆積状況は不明瞭である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 竪穴住居跡の外周溝の一部の可能性があるが、特定できない。

(白鳥 文雄)

第52号溝 (配置図・第41・437図)

[位置] H・I-14・15グリッドに位置する。

[重複] 第58号竪穴住居跡、第23号溝と重複している。第58号住居跡より新しいが、第23号溝とは新旧関係が不明瞭である。

[平面形・規模] 削平及び重複のため、全体形は不明である。

[堆積土] 暗褐色土を基調にしているが、堆積状態は不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第53号溝 (配置図・第442図)

[位置] H-11・12グリッドに位置する。

[重複] 第17・26号溝と重複している。新旧関係は不明瞭であるが、両溝よりも古いと考えられる。

[平面形・規模] 重複のため全体形は不明である。残存部の幅は約70cm程である。

[堆積土] 暗褐色土を基調にしているが、堆積状態は、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第54号溝 (配置図)

[位置] I・J-16グリッドに位置する。

[重複] 第55号住居跡・第51号土壌と重複し、本溝がもっとも古い。

[平面形・規模] 一部分だけの検出であるが、平面形は、東側が開口する緩いU字形を呈する。幅は、23～33cmで、深さは、8～10cmである。壁は、ほぼ垂直で、底面は若干起伏が認められるが概ね平坦である。

[堆積土] 暗褐色土の1層のみで、ロームを多量に混入し人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

[その他] 平安時代の頃に構築されたと思われる。

(成田 悟)

第55号溝 (配置図)

[位置] I-14グリッドに位置する。

[重複] 第58号竪穴住居跡及び第57号溝と重複しているが、新旧関係は不明瞭である。

[平面形・規模] 重複により、半円形のごく一部分だけ残存している。

[堆積土] 削平及び重複のため、不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第56号溝 (配置図)

[位置] I-15・16グリッドに位置する。

[重複] 第53・第55号住居跡と重複し、本溝がもっとも古い。

[平面形・規模] 平面形は、東西に細長く直線状である。幅は、18～27cmで、深さは、15～16cmである。壁は、ほぼ垂直で、底面は若干起伏が認められるが概ね平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。暗褐色土を基調とし、炭化物・ロームを混入する。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 平安時代の頃に構築されたと思われる。

(成田 悟)

第57号溝 (配置図・第437図)

[位置] H・I-14グリッドに位置する。

[重複] 第58号竪穴住居跡、第55号溝と重複しているが、新旧関係は不明瞭である。

[平面形・規模] 重複のため、全体形は不明である。残存部の長さは250cm、幅は50～70cmである。

[堆積土] 削平及び重複のため、堆積状態は不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第58号溝 (第444図)

[位置] N-27グリッドに位置する。

[重複] 第10号・第62号溝と重複し、本遺構が最も古い。

[平面形・規模] 平面形は東西に長い楕円形に近い。断面形は鍋底状である。規模は、幅約長軸3.7m、短軸1.5mで、深さは約0.25mである。傾斜は西→東である。壁は底面から緩やかに湾曲しながら立ち上がる。

[堆積土] 4層に分層した。層全体に炭化物を含む。自然堆積の可能性が高い。

[出土遺物]

[その他] 時期不明である。

第59号溝 (配置図)

[位置] M-25、26グリッドに位置する。

[重複] 第64号竪穴住居跡より新しく、第7号竪穴柱建物より古い。

[その他] 本溝は、第63号竪穴住居跡の外周溝である。

[出土遺物] 土師器が出土している。

(三浦 孝仁)

第60号溝 (配置図)

[位置] M-23グリッドに位置する。

[重複] 第92、93号住居跡より新しく、第82、84号竪穴住居跡より古い。

[平面形・規模] 風倒木に一部壊されており、不明である。幅50～60cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面には起伏がみられる。

[その他] 本溝は、第94、85号竪穴住居跡のいずれかの外周溝である可能性が高い。

[出土遺物] 土師器が出土している。

(三浦 孝仁)

第61号溝 (第445図)

[位置] N・O-36グリッドに位置する。

[重複] 第76号住居跡と重複し、本溝が古い。

[平面形・規模] 平面形は、東・西側が直線的な長楕円形を呈する。幅は32～38cmで、深さは19cmである。壁は、ほぼ垂直で、底面は東側から西側にかけて傾斜している。

[堆積土] 2層に分層できた。堆積土中にローム・黄褐色土を含む。

[出土遺物] 出土しなかった。

(成田 滋彦)

第62号溝 (第444図)

[位置] N-27・28グリッドに位置する。

[重複] 第44号土塋・第58号溝と重複し、本遺構が最も新しい。

[平面形・規模] 平面形は東西に延びる溝状で西端が膨らむ。断面形は深い鍋底状である。規模は、長は約5.7m、幅約0.8m、深さは約0.5mである。傾斜は西→東である。壁は底面から外傾しながら直線的に立ち上がる。

[堆積土] 8層に分層した。層全体に炭化物を多く含む。自然堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 土師器が出土した。

[その他] 時期不明である。

第63号溝 (配置図)

[位置] H-30～32、I-32、J-32、K-31～32グリッドに位置する。

[重複] 第32号溝、第101号溝、第108号土塋、第49号溝と重複する。第32号溝よりは古く、108号土塋よりは新しく、また第49号溝との新旧関係は不明である。本溝は第109号住居跡の外周溝であると思われる。

(木村 高)

第64号溝 (配置図)

[位置] M・N-30・31グリッドに位置する。

[重複] 第48号溝と重複し、本溝が古い。

[平面形・規模] 平面形及び規模は、第48号溝に削平されているため不明である。残存する部分の深さは、10～15cmである。底面は起伏が認められる。

[堆積土] 3層に分層できた。褐色土を基調とし、ローム粒を含んでいる。自然堆積と考え

られる。

[その他] 本溝は、第37号住居跡・第87号住居跡のいずれかの外周溝と考えられるが、どちらに伴うかは不明である。

(中嶋 友文)

第65号溝 (第439図)

[位置] K～O-33グリッドに位置する。

[重複] 第30号溝と重複し、本溝が第30号溝より古い。

[平面形・規模] 平面形は、南北に延びた溝であり、幅は65cmで深さ12cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は若干起伏が認められるが、ほぼ平坦である。

[出土遺物] 土師器が出土している。

(成田 滋彦)

第66号溝 (配置図)

[位置] G-16・17グリッドに位置する。

[重複] 第67号溝と重複し、本溝が新しい。また、本溝より古いピットが底面に存在する。

[平面形・規模] 平面形は、東西方向に細長く延びる長楕円形を呈する。幅は、83～123cmで、深さは、10～26cmである。壁は、底面から緩やかに立ち上がり、堅緻である。底面は若干起伏が認められるが、概ね平坦である。

[堆積土] 黒色土の1層のみで、炭化物粒を混入する。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

[その他] 構築時期については、不明である。

(成田 悟)

第67号溝 (配置図)

[位置] H-17・18グリッドに位置する。

[重複] 第66号溝と重複し、本溝が古い。また、本溝の西側には第69号溝が位置しており、西側で重複する可能性も考えられる。

[平面形・規模] 平面形は、東西方向に細長く延びる。幅は、29～47cmで、深さは、15～26cmである。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり堅緻である。底面は若干起伏が認められる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 平安時代の頃に構築されたと思われる。

(成田 悟)

第68号溝 (第445・446図)

[位置] H・I-18・19グリッドに位置する。

[重複] 第69・141号溝と重複し、第69号溝より古い。

[平面形・規模] 平面形は、東西に細長く直線状に延びる。幅は、77～120cmで、深さは、22～34cmである。壁は、ほぼ垂直で堅緻であり、底面は若干起伏が認められるが概ね平坦で西側から東側にかけて緩く傾斜する。

[堆積土] 8層に分層できた。黒色土を基調とし、炭化物・ロームを混入する。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 平安時代の頃に構築されたと思われる。

(成田 悟)

第69号溝 (第446図)

[位置] G～I-18グリッドに位置する。

[重複] 第73・74号土壙、第67・68号溝と重複し、本溝がもっとも新しい。

[平面形・規模] 平面形は南北に細長い形状を呈する。幅は、94～255cmで、北側の端部が狭く、第73号土壙近くの中央部の幅が広い。深さは18～32cmである。壁は、底面から緩やかに立ち上がり、西側・北側は強く締まっているが、その他は柔らかく軟弱である。底面は起伏が認められ、平坦ではない。

[堆積土] 2層に分層できた。黒色土を基調とし、全層にロームを混入する。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 構築時期については不明である。

(成田 悟)

第70号溝 (配置図)

[位置] F-15～19グリッドに位置する。

[重複] 第1号井戸、第97号溝と重複し、第1号井戸よりは古い、第97号溝よりは新しい。

[平面形・規模] 南側が調査区域外になっているので、全体の形状は不明であるが、東西に細長く延びており、東側では第1号井戸と重複し、西側では幅広になる。幅は、(112)～(306)cm

で、深さは、11～25cmである。壁は、緩く立ち上がり軟弱である。底面は西側ほど起伏が激しく、数条の水の流れた痕跡を有する。また、底面や北壁際からは多数のピットが検出され、掘立柱建物跡と重複していた可能性も考えられる。

[堆積土] 3層に分層できた。黒褐色土を基調とし、炭化物・ロームを混入する。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器が出土している。

[その他] 構築時期は不明である。

(成田 悟)

第71号溝 (配置図)

[位置] G-15・16グリッドに位置する。

[重複] 時期不明のピットが西側壁際に位置する。

[平面形・規模] 平面形は、基本的には東西に細長く延びているが、西側では一部南側にも延びている。幅は、48～54cmで、深さは、8～13cmである。壁は、底面から緩やかに立ち上がり柔らかく軟弱である。底面は若干起伏が認められる。

[堆積土] 2層に分層できた。ロームを微量に混入する。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 構築時期については不明である。

(成田 悟)

第72号溝 (第447図)

[位置] L-30・31グリッドに位置する。

[重複] 第35号溝と重複し、本溝が古い。

[平面形・規模] 平面形は、東西に細長い形を呈する。幅は、70～80cmで、深さは、10～25cmである。底面はやや起伏が認められる。

[堆積土] 2層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・小礫を含んでいる。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

(中嶋 友文)

第73号溝 (第447図)

[位置] L-28・29グリッドに位置する。

[重複] 第50号土壙と重複し、本溝が古い。

[平面形・規模] 平面形は、南側が膨らむC字形を呈する。幅は、80～130cmで、両端部が、やや幅広になっている。深さは、15～27cmである。底面はやや起伏が認められる。

[堆積土] 4層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒を含んでいる。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(中嶋 友文)

第74号溝 (第447図)

[位置] L-30・31、M-29・30グリッドに位置する。

[重複] 第47号住居跡と重複し、本溝が古い。

[平面形・規模] 平面形は、南北に細長い形をしている。幅は、40～60cmで、深さは、8～16cmである。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。暗褐色土を基調とし、ローム粒・炭化物粒を含んでいる。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

(中嶋 友文)

第76号溝 (第448図)

[位置] L・M・N-31グリッドに位置する。

[重複] 小ピットと重複しているが、新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 平面形は、全体に丸みを有した長楕円形を呈する。長軸750cm、短軸101cm、深さ29cmである。壁は、緩やかに立ち上がり、底面は鍋底状である。

[堆積土] 4層に分層できた。自然堆積と思われる。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

(成田 滋彦)

第78号溝 (遺構配置図)

[位置] K-25グリッドに位置する。

[重複] 第108号位居跡・第1号溝・第77号溝と重複し、第108号位居跡・第77号溝より新しく、第1号溝より古い。

[平面形・規模] 重複のため平面形は不明である。断面形は鍋底状である。規模は、長さ約

12m、幅約0.15m、深さは約0.2mである。傾斜は南→北である。壁は底面から直線的に立ち上がる。

[堆積土] 1層である。層全体に炭化物を多く含む。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 時期不明である。

第80号溝 (遺構配置図)

[位置] N-25・26グリッドに位置する。

[重複] 第75号土塋・第10号溝と重複し、第75住居跡より新しく、第10号溝より古い。

[平面形・規模] 平面形は東西に延びる溝状である。断面形は鍋底状である。規模は、長さ約4.2m、幅約0.2m、深さは約0.1mである。傾斜は西→東である。壁は底面から緩やかに外傾しながら立ち上がる。

[堆積土] 1層である。層全体に炭化物を多く含む。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 時期不明である。

第81号溝 (遺構配置図)

[位置] J・K-22・23グリッドに位置する。

[重複] 多数の遺構と重複しており、第2号溝跡より古く、第95号・第110号住居跡・第82号溝より新しい。

[平面形・規模] 平面形は東側が開く大きなU字型である。断面形は鍋底状である。規模は東西約9.0m、南北約8.0m、深さは約0.1mである。傾斜は西→東である。壁は底面から緩やかに立ち上がる。

[堆積土] 2層に分層した。層全体にローム・ブロック、炭化物を多く含む。人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 第130号住居跡の外周溝の可能性あり。

第82号溝 (遺構配置図)

[位置] K・L-23・24グリッドに位置する。

[重複] 第81号溝と重複し、本遺構が古い。

[平面形・規模] 平面形は東西に延びる弧状である。断面形は浅い船底状である。規模は、

長さ約6.0m、幅約0.3m、深さは約0.1mである。傾斜は西→東である。壁は底面から緩やかに立ち上がる。

[堆積土] 1層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 第130号住居跡野外周溝の可能性あり。

第84号溝 (遺構配置図)

[位置] J・K-23グリッドに位置する。

[重複] 多数の遺構と重複し、本遺構が最も古い。

[平面形・規模] 平面形は東西が開くU字型である。断面形は浅い鍋底状である。規模は、東西約4.0m、南北約6.0m、深さは約0.05mである。傾斜は西→東である。壁は底面から緩やかに立ち上がる。

[堆積土] 1層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 第132号住居跡の可能性が高い。

第86号溝 (配置図・第448図)

[位置] F-13・14グリッドに位置する。

[重複] 第26号溝、第1号井戸と重複しており、第1号井戸よりは古い。他の遺構との新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 重複及び削平のため、全体形は不明である。残存部の長さ480cm、幅60～90cm、深さ30cmである。

[堆積土] 4層に分層した。黒褐色土を基調とし、上部に焼土の混入が認められる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第87号溝 (配置図・第449図)

[位置] F・G-13・14グリッドに位置する。

[重複] 第24号溝と重複しているが、新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 削平のため、全体形は不明である。残存部の長さ520cm、幅50～70cm、深さ35cmである。

[堆積土] 4層に分層した。黒色土を基調とし、ロームがブロック状に混入する。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第88号溝 (遺構配置図)

[位置] K-26グリッドに位置する。

[重複] 第10号溝と重複し、本遺構が古い。

[平面形・規模] 重複のため平面形は不明である。断面形は浅い鍋底状である。規模は、長さ約2.0m、幅約0.2m、深さは約0.2mである。傾斜は南→北である。壁は底面から緩やかに立ち上がる。

[堆積土] 1層である。

[出土遺物] 土師器が出土した。

[その他] 時期不明である。

第89号溝 (遺構配置図)

[位置] M・N-21グリッドに位置する。

[重複] 第89号住居跡・第79号溝と重複し、第89号住居跡より新しく、第79号溝跡より古い。

[平面形・規模] 平面形は東西に延びる溝状である。断面形は鍋底状である。規模は、長さ約6.5m、幅約0.5m、深さは約0.5mである。傾斜は西→東である。壁は底面から外傾しながら直線的に立ち上がる。

[堆積土] 3層に分層した。層全体にローム・ブロックを多く含む。人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 時期不明である。

第96号溝 (配置図・第449図)

[位置] N・O-19・20グリッドに位置する。

[重複] 第96号土壌と重複し、本溝が新しい。また、第61号竪穴住居跡と接しているが、新旧関係は不明瞭である。このほかに、抜根跡が本溝横で確認されている。

[平面形・規模] 調査区の東端部にあり、全体形は不明である。北西から南東方向にむかって延びている。残存部の長さは約600cm、幅は40～50cm、深さ35cm程である。

[堆積土] 4層に分層した。暗褐色土を基調にしており、覆土上部に焼土の堆積が認められた。焼土は本溝に伴うものではなく、第61号竪穴住居跡横の抜根跡に伴うものと考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(白鳥 文雄)

第97号溝 (配置図)

[位置] F-18グリッドに位置する。

[重複] 第70号溝と重複し、本溝が古い。

[平面形・規模] 平面形は、南側で第70号溝と重複しているが、南北方向に長い楕円形を呈すると思われる。幅は、約100～160cmで、深さは、18～30cmである。壁は、底面から緩やかに立ち上がり軟弱な構築である。底面は溝の中央部で若干深くなるが、概ね平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。黒褐色土が基調でロームを混入する。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器が出土している。

[その他] 平安時代の頃に構築されたと思われる。

(成田 悟)

第101号溝 (配置図)

[位置] H-31～32、I-32、J-32、K-32グリッドに位置する。

[重複] 第32号溝と重複する。第32号溝よりは古い。本溝は第124号住居跡の外周溝であると思われる。

(木村 高)

第102号溝 (第450図)

[位置] G・H-31グリッドに位置する。

[重複] 第116号住居跡と重複しているが、本溝が新しい。

[平面形・規模] 削平により北側が失われているが、平面形は北東側にカーブしていくものと思われる。検出した長さは210cm、幅は38～80cmで、深さは15～20cmである。底面は概ね平坦である。

[堆積土] 1層で、火山灰の混入はみられない。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 須恵器が出土している。

(羽柴 直人)

第103号溝 (第450図)

[位置] F-30・31、G-31・32グリッドに位置する。

[重複] 第101号位居跡、第104・105号溝と重複しているが、本溝は第104号溝より新しく、第101号住居跡、第105号溝より古い。

[平面形・規模] 平面形はL字形を呈する。幅は18～38cmで、深さは15～20cmである。底面は概ね平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。火山灰の混入はみられない。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(羽柴 直人)

第104号溝 (第450図)

[位置] G-30～32、H-32グリッドに位置する。

[重複] 第103、第105号溝と重複している。本溝はこれらの溝より古い。本溝は、第116号住居跡の外周溝である。

(羽柴 直人)

第105号溝 (配置図)

[位置] F-30、31、G-31、32グリッドに位置する。

[重複] 111号土壙、103、104号溝と重複するが、本溝は103、104号溝より新しく、111号土壙より古い。

[平面形・規模] 平面形はL字形を呈する。幅は35～138cmで、深さは15～20cmである。底面は概ね平坦である。

[堆積土] 堆積土は観察しなかった。

[出土遺物] 土師器、須恵器が出土している。

[その他] なし

(羽柴 直人)

第107号溝 (第451図)

[位置] H・I-27・28グリッドに位置する。

[重複] 第128号溝・第131号溝と重複し、本遺構が最も新しい。

[平面形・規模] 平面形は南北に長い隅丸長方形である。断面形は鍋底状である。規模は、東西約7.0m、南北約0.3m、深さは約0.3mである。傾斜は西→東である。壁は底面から外傾しながら直線的に立ち上がる。

[堆積土] 5層に分層した。層全体にローム・ブロックを多く含む。

[出土遺物]

[その他] 時期不明である。

第111号溝 (第452図)

[位置] J-27・28グリッドに位置する。

[重複] 第116号土塋と重複し、本溝の方が古い。

[平面形・規模] 東西に真っすぐに延びた直線的な溝である。幅は、40～50cmで東側が細くなっている。深さは、10～30cmで東側の方が浅い。壁は、ほぼ垂直で、底面は若干起伏がみられるが概ね平坦である。ピットが9個検出された。

[堆積土] 6層に分層できた。黒褐色土を基調としている。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 本溝は、第116号土塋に付属する溝の可能性もある。

(下山 信昭)

第112号溝 (第452図)

[位置] F-19・20、G-21、H-19・20グリッドに位置する。

[重複] 第141号溝と重複している。本溝は第141号溝より古い。

[その他] 本溝は、第118号住居跡の外周溝である。

(羽柴 直人)

第113号溝 (配置図)

[位置] F-19グリッドに位置する。

[重複] 第105号住居跡、第116号溝と重複しており、第116号溝より新しい。第105号住居跡との新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 平面形は、南北よりも東西方向に細長く延びる。幅は、19～35cmで、深さは、概ね21cmである。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり堅緻である。底面は概ね平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。黒褐色土を基調としており、炭化物粒・焼土粒の混入が認められる。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器が出土している。

[その他] 構築時期については不明である。

(成田 悟)

第114号溝 (配置図)

[位置] J-30グリッドに位置する。

[重複] 第116号土壙と重複し、本溝のほうが新しい。

[平面形・規模] 第116号土壙を精査中に確認したため、一部しか確認できなかった。平面形・規模とも不明である。

[堆積土] 1層確認した。黒褐色土で、ローム・炭化物粒を混入している。

[出土遺物] 出土しなかった。

(下山 信昭)

第115号溝 (第453図)

[位置] I・J-28・29グリッドに位置する。

[重複] 第121号溝と重複し、本溝の方が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、東西に長い弧状を呈する。幅は、1～1.4mで、東側が幅広になっている。深さは、20～30cmである。壁は、ほぼ垂直で、底面は概ね平坦である。5個のピットが検出された。

[堆積土] 3層に分層された。暗褐色土を基調として、ローム・炭化物粒が混入している。自然堆積と思われる。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

(下山 信昭)

第116号溝 (配置図)

[位置] F～H-19グリッドに位置する。

[重複] 第104号土壙、第112・113号溝と重複し、第104号土壙よりは新しいが、その他の溝よりは古い。

[平面形・規模] 平面形は、南北方向に細長く伸び、南側で若干幅広になる。幅は、44～81cmで、深さは7～30cmである。壁は、底面から緩やかに立ち上がり、底面は若干起伏が認められるが概ね平坦である。

[堆積土] 5層に分層できた。黒褐色土を基調とし、炭化物粒を混入する。

[出土遺物] 覆土から土師器が出土している。

[その他] 平安時代の頃に構築されたと考えられる。

(成田 悟)

第117号溝 (第453図)

[位置] J-29・30グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 東西に真っすぐ延びて直線状を呈している。幅は、50～60cmで、深さは、10～15cmである。壁は、ほぼ垂直で、底面は概ね平坦である。西側の隅からピットが2個検出された。

[堆積土] 3層に分層された。黒褐色土を基調として、ローム・炭化物粒が混入している。自然堆積と思われる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(下山 信昭)

第119号溝 (第454図)

[位置] H-29・30グリッドに位置する。

[重複] 第43号住居跡、第120、第126号溝と重複するが、本溝が新しい。

[平面形・規模] 平面形はほぼ真っすぐで、検出した長さは約388cmである。幅は64～86cmで、深さは35～26cmである。底面は平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。火山灰の混入はみられない。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

(羽柴 直人)

第120号溝 (第454図)

[位置] H-29グリッドに位置する。

[重複] 第119号溝、第126号溝、第117号土壌と重複している。本溝は第119号溝より古く、第126号溝、第117号土壌より新しい。

[平面形・規模] 平面形はほぼ直線的である。検出した長さは約430cmである。幅は40～62cmで、深さは25～38cmである。底面は平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。火山灰の混入はみられない。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 土師器が出土している。

(羽柴 直人)

第121号溝 (第455図)

[位置] I-28・29グリッドに位置する。

[重複] 第115号溝と重複し、本溝の方が古い。

[平面形・規模] 第115号溝の南側に平行するように弧を描く形を呈する。北側が第115号溝に削平されているが、幅は30～80cmと思われる。深さは、10～30cmである。壁は、ほぼ垂直で、底面は概ね平坦である。ピットが2個検出された。

[堆積土] 3層に分層された。黒褐色土を基調として、ローム・炭化物粒が混入している。人為堆積と思われる。

[出土遺物] 土師器が出土している。

(下山 信昭)

第123号溝 (第455図)

[位置] I・J-20・21グリッドに位置する。

[重複] 第131号土壇・第68号・第141号溝と重複し、本遺構が最も古い。

[平面形・規模] 平面形は東西が開くU字型である。断面形は鍋底状である。規模は、東西約5.2m、南北約7.2m、深さは約0.3mである。傾斜は西→東である。壁は底面から緩やかに湾曲しながら立ち上がる。

[堆積土] 1層である。層全体に炭化物を多く含む。自然堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 須恵器が出土した。

[その他] 時期不明である。

第124号溝 (第456図)

[位置] H-22・24、I-24グリッドに位置する。

[重複] 多数の遺構と重複し、本遺構が最も古い。

[平面形・規模] 平面形は東側が開くU字型である。断面形は鍋底状である。規模は、東西約5.1m、南北約9.5m、深さは約0.2mである。傾斜は西→東である。壁は底面から緩やかに立ち上がる。

[堆積土] 3層に分層した。層全体にローム・ブロックを多く含む。人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土した。

[その他] 第122号住居跡の外周溝の可能性が高い。

第125号溝 (第456図)

[位置] H・I-24グリッドに位置する。

[重複] 第81号・第124号・第135号溝と重複し、本遺構が最も古い。

[平面形・規模] 平面形は南北に延びる溝状である。断面形は鍋底状である。規模は、長さ約8.3m、幅約0.4m、深さは約0.2mである。傾斜は南→北である。壁は底面から直線的に外傾しながら立ち上がる。

[堆積土] 2層に分層した。層全体にローム粒子を多く含む。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 時期不明である。

第126号溝 (第454図)

[位置] G-28・29、H-29・30グリッドに位置する。

[重複] 第119、120、127号溝と重複している。本溝は第119、120号溝より古く第127号溝より新しい。

[平面形・規模] 削平のため北側が失われており、本来の平面形はU字形であった可能性がある。検出した範囲の平面形は弧状である。幅は53～82cmで、深さは0～18cmである。底面は平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。火山灰の混入はみられない。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

(羽柴 直人)

第127号溝 (第454図)

[位置] G-28グリッドに位置する。

[重複] 第126号溝と重複しているが、本溝が古い。

[平面形・規模] 平面形はほぼ直線状である。検出した長さは約235cmである。幅は18～20cmで、深さは8～10cmである。底面は平坦である。

[堆積土] 1層で、火山灰の混入はみられない。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(羽柴 直人)

第128号溝 (配置図)

[位置] H-26～28、I-28・29に位置する。

[重複] 第131号溝と重複しているが、本溝が古い。

[平面形・規模] 平面形はほぼ直線状である。検出した長さは約11m80cmである。幅は48～105cmで、深さは18～44cmである。底面は平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。火山灰の混入はみられない。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 須恵器が出土している。

(羽柴 直人)

第129号溝 (第457図)

[位置] I-29グリッドに位置する。

[重複] 第43号住居跡とプラン的に重なるが、新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 平面形はほぼ直線状である。検出した長さは約218cmである。幅は30～45cmで、深さは8～10cmである。底面は平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。第1層に苫小牧火山灰の混入がみられる。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(羽柴 直人)

第130号溝 (第457図)

[位置] H-21・22グリッドに位置する。

[重複] 第125号土壙、第124、137号溝と重複している。本溝はこれらの遺構より古い。

[平面形・規模] 両端が重複により失われているが、検出した部分の平面形は弧状である。幅は52～80cmで、深さは8～24cmである。底面は平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。火山灰の混入はみられない。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(羽柴 直人)

第131号溝 (配置図)

[位置] G-27グリッドに位置する。

[重複] 第128号溝と重複している。本溝が新しい。

[平面形・規模] 平面形は不整な方形を呈する。形状からこれを溝に分類したのは適当でないかもしれない。検出した長さは約250cmである。幅は102～135cmで、深さは10～18cmである。底面は平坦である。

[堆積土] 3層に分層できた。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 形状から考えて人為的なものでない可能性が高い。

(羽柴 直人)

第132号溝 (第457図)

[位置] F～J-25グリッドに位置する。

[重複] 第10号溝と重複している。本溝が古い。

[平面形・規模] 平面形はほぼ直線状である。北側でプランが不明瞭になっている。検出した長さは9 m80cmである。幅は16～20cmで、深さは10～18cmである。底面には柱穴状のピットが連続的にみられる。

[堆積土] 1層で、自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] ピットが連続的にみられることから、塀、柵といったような性格のものと思われる。

(羽柴 直人)

第133号溝 (第457図)

[位置] F-25に位置する。

[重複] 第10号溝と重複しているが、本溝が古い。

[平面形・規模] 平面形はほぼ直線状である。検出した長さは268cmで調査区域外になお続いている。幅は44～82cmで、深さは12～32cmである。

[堆積土] 2層に分層できた。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(羽柴 直人)

第134号溝 (第458図)

[位置] F-24、G・H-22～24グリッドに位置する。

[重複] 第124号溝、第124、125号土塹と重複している。本溝はこれらの遺構より新しい。

[平面形・規模] 調査区域外になおプランが延びているが、検出した部分の平面形はL字形を呈する。幅は79～140cmで、深さは8～16cmである。底面は平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

(羽柴 直人)

第135号溝 (遺構配置図)

[位置] J-23・24グリッドに位置する。

[重複] 多数の遺構と重複し、第2号溝より古く、その他の遺構より新しい。

[平面形・規模] 平面形は東に延びる溝状である。断面形は船底状である。規模は、長さ約9.6m、幅約0.4m、深さは約0.3mである。傾斜は西→東である。壁は底面から緩やかに湾曲しながら立ち上がる。

[堆積土] 3層に分層した。層全体に炭化物を少量含む。自然堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 土師器が出土した。

[その他] 時期不明である。

第137号溝 (第459図)

[位置] H-22グリッドに位置する。

[重複] 第124号、第130号溝と重複している。本溝は第124号溝より古く、第130号溝より新しい。

[平面形・規模] 重複により南側が失われているが、検出した部分の平面形は「く」の字形を呈する。幅は72～85cmで、深さは18～22cmである。底面は平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(羽柴 直人)

第138号溝 (第460図)

[位置] F-22～23、G-22～23グリッドに位置し、調査区外に伸びるため、全体の形状は不明である。

[重複] 第140号溝と重複する。第140号溝よりは古い。

[平面形・規模] 平面形は調査区外に伸びるため、全体の形状は不明である。幅は、115cm～206cmで、末端部の先端は方形状を呈する。深さは、6cm～35cmである。壁は非常に緩やか

に立ち上がり、明確な意味での壁は存在しないと言える。底面にはピットが1基検出された。

[堆積土] 6層に分層できた。黒褐色土を基調としている。自然堆積と考えられる。

(木村 高)

第139号溝 (配置図)

[位置] L-7・8・K～L-9～11グリッドに位置する。

[重複] 第17・26・28号溝と接しているが、同時存在していたものか、また、新旧関係が存在するのかは不明である。ただ、26・28号溝は、本溝と交差していないことから、同時存在の可能性は高い。

[平面形・規模] 東西方向に延びており、西端部で南北に大きく開く。幅約130cm、深さは60～80cmである。壁は上部がやや広がり、底面は平坦である。底面の傾斜は、西→東である。

[堆積土] 暗褐色土を基調としており、ローム・炭化物・砂粒が混入している。堆積土は部分的に異なり、一部では、ローム主体の層も確認されている。

[出土遺物] 覆土中から、土師器片・鉄滓・礫が出土している。

[その他] 溝の断面形状等からは、第26・28号溝と類似点が認められる。同時に存在しているとすれば集落(台地)の区画、または、大規模な排水施設等の用途が考えられる。

(白鳥 文雄)

第140号溝 (第460図)

[位置] F-22～24グリッドに位置する。

[重複] 第138号溝と重複する。第138号溝よりは新しい。

[平面形・規模] 幅は、57cm～191cmで、ほぼ直角に屈曲するが、調査区外に伸びるため、全体の形状は不明である。深さは13cm～38cmである。壁は緩やかに立ち上がり、断面形は上端の広がるU字形を呈する。底面および傾斜する壁面にはピットが、3基検出された。

[堆積土] 8層に分層できた。黒褐色土を基調としている。自然堆積と考えられる。

(木村 高)

第141号溝 (第461図)

[位置] F-19、F～L-20・21グリッドに位置する。

[重複] 第69号、第112号溝、第128号土壇と重複している。本溝はこれらの遺構より新しい。

[平面形・規模] 平面形はL字形を呈する。幅は79～260cmで、深さは8～16cmである。

[堆積土] 2層に分層できた。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

(羽柴 直人)

第143号溝 (配置図・第48図)

[位置] I-10グリッドに位置する。

[重複] 第67号竪穴住居跡と重複し、本溝が古い。

[平面形・規模] 重複及び削平のため、全体形は不明である。

[堆積土] 暗褐色土を基調としており、ローム及び炭化物が混入する。

[出土遺物] 土師器片が少量出土している。

[その他] 溝として取り扱ったが、住居などの掘り方の可能性も考えられる。

(白鳥 文雄)

第144号溝 (第462図)

[位置] F・G-20・21グリッドに位置する。

[重複] 第129号土壌と重複している。本溝は第129号土壌より古い。

[平面形・規模] 平面形は蛇行した形を呈する。幅は16~28cmで、深さは2~6cmである

[堆積土] 1層に分層で、自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 人為的なものではなく、自然に発生した水の流れの痕跡である可能性もある。

(羽柴 直人)

第145号溝 (配置図)

[位置] J-9グリッドに位置する。

[重複] 第126・127号住居跡と重複し、本溝の方が新しい。

[平面形・規模] 南北に真っ直ぐ延びて直線状を呈しているが、途中で消滅する。幅は、50~60cmで、深さは、15cmである。壁は、ほぼ垂直で、底面は概ね平坦である。

[堆積土] 2層に分層された。黒褐色土を基調として、ローム・炭化物粒が混入している。自然堆積と思われる。

[出土遺物] 土師器が出土している。

(下山 信昭)

第146号溝 (配置図)

[位置] Z Y、Z Z、A～F-36、D～L-37、K・L-38グリッドに位置する。

[重複] 第140・148・149・168・171・172・180号住居跡、第151～154号溝、第142・233号土壙と重複しているが、本溝が最も新しい。

[平面形・規模] 平面形はほぼ直線状である。幅は90～132cmで、深さは15～76cmである。底面は概ね平坦である。断面形はU字形を呈する。傾斜は南から北である。

[堆積土] 6層に分層できた。火山灰の混入はみられない。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

(羽柴 直人)

第151号溝 (配置図)

[位置] F・G-37グリッドに位置する。

[重複] 第146号溝と重複している。

[その他] 本溝は第146号溝より古い。本溝は、第148号住居跡の外周溝である。

(羽柴 直人)

第152号溝 (配置図)

[位置] F-37、G-36・37グリッドに位置する。

[重複] 第148号住居跡、第146号溝と重複している。本溝は第148号住居跡より新しく、第146号溝より古い。

[出土遺物] 須恵器が出土している。

[その他] 本溝は、第152号住居跡の外周溝である。

(羽柴 直人)

第153号溝 (配置図)

[位置] F-36、G-37グリッドに位置する。

[重複] 第149号住居跡、第146号溝と重複している。本溝は第147号住居跡、第146号溝より古い。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

[その他] 本溝は、第153号住居跡の外周溝である。

(羽柴 直人)

第154号溝 (配置図)

[位置] L・M-37グリッドに位置する。

[重複] 第146号溝と重複している。本溝は第146号溝より古い。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

[その他] 本溝は、第153号住居跡の外周溝である。

(羽柴 直人)

第155号溝 (第462図)

[位置] I・J-37グリッドに位置する。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形はほぼ直線状で、検出した長さは約200cmである。幅は38～42cmで、深さは2～20cmである。底面は概ね平坦である。

[堆積土] 1層で、火山灰の混入はみられない。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(羽柴 直人)

第157号溝 (配置図)

[位置] F-41、G-41・42グリッドに位置する。

[重複] なし。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

[その他] 本溝は、第153号住居跡の外周溝である。

(羽柴 直人)

第158号溝 (第462図)

[位置] K-39グリッドに位置する。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形はほぼ直線状で、検出した長さは約440cmである。幅は30～42cmで、深さは2～20cmである。底面に3個のピットがみられるが、本溝に伴うものかどうかは不明である。

[堆積土] 1層で、火山灰の混入はみられない。自然堆積か人為的堆積かは不明である

[出土遺物] 出土しなかった。

(羽柴 直人)

第159号溝 (第462図)

[位置] M-38グリッドに位置する。

[重複] 第161号住居跡と重複している。本溝は第161号住居跡より新しい。

[平面形・規模] 平面形は弧状を呈し、検出した長さは約660cmである。幅は56～90cmで、深さは22～40cmである。底面は平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。火山灰の混入はみられない。自然堆積か人為的堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(羽柴 直人)

第161号溝 (第463図)

[位置] I-40グリッドに位置する。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は南側でやや湾曲しているが、他は直線状である。検出した長さは約402cmである。幅は18～20cmで、深さは約8cmである。底面は平坦である。

[堆積土] 1層で、火山灰の混入はみられない。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(羽柴 直人)

第162号溝 (第463図)

[位置] F・G-45グリッドに位置する。

[重複] なし。

[平面形・規模] ほぼ直線状である。検出した長さは485cm、幅は14～24cmで、深さは10～16cmである。底面は概ね平坦である。

[堆積土] 1層で、火山灰混入はみられない。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 形状と位置から考えて第38号掘立柱建物跡に伴う施設である可能性が高い。

(羽柴 直人)

第163号溝 (第463図)

[位置] A～E-42グリッドに位置する。

[重複] 第160号住居跡、第227号土塙と重複しているが、本溝がこれらの遺構より新しい。

[平面形・規模] 平面形はほぼ直線状であるが、北側で東にやや湾曲している。検出した長さは約18m90cmである。幅は40～65cmで、深さは8～10cmである。底面は平坦である。

[堆積土] 2層に分層できた。火山灰の混入はみられない。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

(羽柴 直人)

第164号溝 (第463図)

[位置] C・D-37グリッドに位置する。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形はほぼ直線状である。検出した長さは約240cmである。幅は16～20cmで、深さは8～10cmである。底面は平坦である。

[堆積土] 1層で、火山灰の混入はみられない。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(羽柴 直人)

第165号溝 (配置図)

[位置] D・E-38グリッドに位置する。

[重複] 第169号溝と重複している。本溝は第169号溝より新しい。

[その他] 本溝は、第168号住居跡の外周溝である。

(羽柴 直人)

第166号溝 (第464図)

[位置] ZY-36・37、ZZ-37～41、A-41グリッドに位置する。

[重複] 第180号住居跡、第230・233号土壇、第175号溝と重複するが、本溝がこれらの遺構より新しい。

[平面形・規模] 平面形はほぼ直線状である。検出した長さは約22m60cmである。幅は38～65cmで、深さは8～24cmである。底面は平坦である。

[堆積土] 1層で、火山灰の混入はみられない。自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 土師器・須恵器が出土している。

(羽柴 直人)

第167号溝 (配置図)

[位置] C・D-38グリッドに位置する。

[重複] 第169号溝と重複している。本溝は第169号溝より新しい。

[出土遺物] 須恵器が出土している。

[その他] 本溝は、第173号住居跡の外周溝である。

(羽柴 直人)

第168号溝 (配置図)

[位置] A・B-39グリッドに位置する。

[重複] 第225号土塼と重複している。本溝が古い。

[平面形・規模] 平面形はほぼ直線状である。検出した長さは約510cmである。幅は68～95cmで、深さは10～18cmである。底面は平坦である。

[堆積土] 1層で、自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(羽柴 直人)

第169号溝 (配置図)

[位置] B-37・38、C・D-38グリッドに位置する。

[重複] 第165・167号溝と重複している。本溝は第165・167号溝より新しい。

[出土遺物] 土師器が出土している。

[その他] 本溝は、第174号住居跡の外周溝である。

(羽柴 直人)

第171号溝 (第464図)

[位置] Z Z・A-38グリッドに位置する。

[重複] 第172号溝と重複しているが前後関係は不明である。

[平面形・規模] 平面形はコの字形を呈する。幅は16～24cmで、深さは10～18cmである。底面は平坦である。

[堆積土] 1層で、自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(羽柴 直人)

第173号溝 (配置図)

[位置] C・D・E-38グリッドに位置する。

[重複] 第168・170号住居跡と重複している。本溝は第168号住居跡より新しく、第170号住居跡より古い。

[出土遺物] 土師器が出土している。

[その他] 本溝は、第171号住居跡の外周溝である。

(羽柴 直人)

第174号溝 (第464図)

[位置] Z Z・A-39グリッドに位置する。

[重複] 第178号住居跡、第235号土壙と重複しているが、本溝はこれらの遺構より古い。

[平面形・規模] 平面形はL字形を呈する。幅は32～40cmで、深さは8～16cmである。底面は平坦である。

[堆積土] 1層で、自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(羽柴 直人)

第175号溝 (配置図)

[位置] Z X～Z Z-38グリッドに位置する。

[重複] 第166号溝と重複している。本溝は第166号溝より古い。

[出土遺物] 土師器が出土している。

[その他] 本溝は、第179号住居跡の外周溝である。

(羽柴 直人)

第176号溝 (配置図)

[位置] Z X-39、Z X～Z Z-40グリッドに位置する。

[重複] 第166号溝と重複している。本溝は第166号溝より古い。

[その他] 本溝は、第181号住居跡の外周溝である。

(羽柴 直人)

第177号溝 (第464図)

[位置] A・B-37・38グリッドに位置する。

[重複] 第171号溝と重複しているが新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 平面形はL字形を呈する。幅は10～28cmで、深さは8～16cmである。底面は平坦である。

[堆積土] 1層で、自然堆積、人為堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

(羽柴 直人)

第302号溝 (配置図)

[位置] Z Y-45グリッドに位置する。

[重複] 第318号住居跡と重複し、本溝が古い。また、昭和の年代に構築されたと思われる溝が、北西側に位置している。

[平面形・規模] 平面形は、南北よりも東西方向に細長く延びる。幅は、29～44cmで、深さは、9～18cmである。壁は、底面から緩やかに立ち上がるが堅緻である。底面は東側から西側にかけて緩やかに傾斜するが、概ね平坦である。

[堆積土] 褐色土の1層のみで炭化物・ロームを混入する。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 構築時期については、住居跡との新旧関係から平安時代または、それ以前に構築されたと考えられる。

(成田 悟)

第5節 鍛冶遺構

鍛冶遺構（第30号掘立柱建物跡） （第465・466図）

〔位置〕 H～J－42・43グリッドに位置する。

〔重複〕 第161号溝と重複し、本遺構が新しい。

〔平面形・規模〕 桁行3間、梁行1間の南北に長い南北棟建物跡である。桁行は西列815cm、東列844cmで、梁行は南列267cm、北列270cmである。この区画内に径40～60cmの焼土が4箇所において確認された。

〔柱穴〕 すべての柱穴が平面形及び掘り込みの規模が異なり、深さも14～100cmと一定していない。概ね、西列北側の3本が深く穿たれている。

〔構造〕 建物跡は、斜面上に構築され斜面の下部に黄褐色ロームを盛り、平場を構築している。焼土はこの面上において確認された。また、焼土内及び周辺からは、鍛造剥片が出土しており、一部ではこれらが固結して板状になっていた。焼土－2は、作業時における還元面が確認されている。

〔堆積土〕 15層に分層できた。概ね黄褐色ロームを基調としている。第1・2層は斜面上部にある竪穴住居跡の廃土の可能性も考えられる。第6層までが本遺構の覆土であり、7層以下は平場構築における埋め土である。第6層中に苦小牧火山灰が堆積していた。

〔その他〕 斜面上に構築されていることから、斜面下側の状況が不明瞭であり、梁行方向にあと1間延びていた可能性も考えられる。また、斜面上部の第160号溝との関係は不明であるが、本遺構の防水施設の可能性も考えられる。

（白鳥 文雄）

第6節 製鉄炉

第1号製鉄炉 (第467・468図)

[位置] Z I - 35グリッドに位置する。西側は崖になっており、東側は湿地である。調査による土砂の流出防止のため、側溝を設置中に、鉄滓・羽口等の散布が認められた。このため表土を除去し、廃滓範囲と製鉄炉を確認した。

[重複] 他の遺構との重複は認められないが、本遺構は風倒木痕上に構築されている。

[平面形・規模] 確認時の平面形状は、平安時代の住居跡のカマドに近似していた。炉体の規模は155cm×85cmである。

[構造] 風倒木痕の黒褐色土を掘り込んで、構築しており、上部は削平のため残存していない。黒褐色土上に、黄褐色及び粘性の強い白色粘土を使用し、炉体を構築している。黄褐色粘土（ローム?）を掘り込み面に敷き、白色粘土で炉壁を盛り上げているが、炉底部には粘土を貼った痕跡は認められない。また、下焼きを行なった痕跡も認められない。

炉内部は、白色粘土にさらに黄褐色粘土を貼りつけており、その接合を強固にするためか、両者の間に径1cm程の棒を差し込んでいる。（図中にドットで示した。）この連結棒は左側に8本、右側に10本が確認された。この他、右側の炉体外にも2本確認されている。

炉底は緩やかに傾斜しており、スラグ及び地山の黒土が焼化され、固結している。炉壁の下部及び炉底の一部に還元面が認められた。また、炉底上に砂鉄が少量堆積していた。

頂上部の左側に炉壁の途切れる部分があり、この外部に破損した羽口片が出土している。おそらくこの部分に羽口を装着していたものと考えられる。前庭部には、流動滓・羽口・炉壁片・腕型鉄滓等が堆積していた。

また、炉の左側（北側）に6m×4m程の廃滓範囲が確認された。この部分からは大型の羽口が20本以上出土しており、相当回数の操業が示唆される。

[出土遺物] 羽口・鉄滓・土師器・甕等が出土したが、土器はいずれも破片での出土である。

[その他] 羽口の数量や鉄滓の量等から、調査区内の周囲をボーリング探査したが、本遺構以外には、製鉄炉及び廃滓による鉄滓などは確認できなかった。

（白鳥 文雄）

第7節 井戸跡

第1号井戸 (第469図)

〔位置〕 E・F-14グリッドに位置する。

〔確認状況〕 第Ⅳ層上面で、黒色土の広がりとして確認した。遺構の南側部分は、調査区外である。ほぼ半截の状態では精査を行なったが、調査区外部分の覆土が、湧水のため膨張して、崩落がみられたため、表土下約2mで、調査を断念した。

〔重複〕 なし

〔形状・規模〕 上部は、確認部分で、径約140cmの半円形を呈し、全体形は、概ね円形と考えられる。表土下2mの部分で、径は約80cmで、断面形はラッパ状を呈している。ボーリング・ステッキによる探査では、調査を断念した位置から、さらに110cmまでは暗褐色土の堆積が確認されたことから、本遺構の深さは、掘り込み面と考えられる第Ⅱ層上部から270cm以上、表土からは310cm以上である。

〔堆積土〕 上部は、黒色土及び黒褐色土が堆積しており、1層から5層までは、概ね本遺構の周囲における標準的な堆積によるものと考えられる。6層以下は、直接遺構中に堆積しており、ローム粒の混入がみられる。11層は暗褐色土を基調とするが、湧水のため、以下の分層はできなかったが、ローム粒及び粘土の混入が下位に向い多くなる傾向が認められた。また、壁面で、4～5cmの厚さで崩落（剝落）する部分が多くみられたが、これらの部分は、ローム及び粘性の強い土で、単に湧水による地山の剝離か、または、井戸内部に貼り付けたものかは不明である。

〔出土遺物〕 上部から土師器片が数片出土したが、いずれも破片である。中位以下からは、径10cmほどの礫が数点出土した。

〔時期〕 底面まで調査ができなかったため、本遺構の使用及び廃絶期を決定する遺物は出土しなかった。このため、帰属時期は不明であるが、覆土2～5層の流入状況から、標準土層の第Ⅱ層（縄文時代末から弥生時代・平安時代初期？までに形成）よりも上層から掘り込んでいることが確定的と思われる。また、各遺構の時期などから、本遺構は、平安時代またはそれ以降に構築されたものと考えられる。

（白鳥 文雄）

第2号井戸跡 (第469図)

〔位置〕 G-24グリッドに位置する。

〔確認状況〕 第Ⅳ層上面で、黒色土の広がりとして確認した。

[重複] 第134号溝と重複しており、本遺構が古い。

[形状・規模] 上部は、東西にやや長い方形を呈する。北壁160cm、西壁144cm、南壁150cm、東壁130cmで、東南隅が一部不明瞭である。深さは130cmである。開口部下30cmである。一段のテラスを設けている。全体にはほぼ角柱状で、本体部分の一辺は約1mである。底面下に60×24cmの長方形のピットが構築されている。

[堆積土] 全体に黒色土及び黒褐色土が堆積しており、上部には焼土の混入した層も確認される。炭化物粒及びローム粒が混入しており、7層は苫小牧火山灰と考えられる降下火山灰の層である。

[出土遺物] 上部から土師器片が数片出土したが、いずれも破片である。底面上10cmの部分から約20×10cmの木片が出土した。

[時期] 本遺構の使用及び廃絶期を決定する遺物は出土しなかったが、苫小牧降下火山灰が中位から検出されていることから、平安時代の降下時期以前の所産と考えられる。

[その他] 井戸跡として調査したが、当該遺構は、時期の不明な第1号井戸のほかは確認されていない。本遺構も深さが130cm程で、井戸としての決定的な要素に欠けるが、形状から井戸跡とした。

(白鳥 文雄)

青森県埋蔵文化財調査報告書 第152集

朝日山遺跡発掘調査報告書Ⅱ

—東北電力株式会社新青森変電所新設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—

発行年月日 平成5年3月31日

発行 青森県教育委員会
〒030 青森市新町二丁目3-1

編集 青森県埋蔵文化財調査センター
〒030-02 青森市新城字天田内152-15
☎ 0177(88)5701、5702

印刷 長尾印刷株式会社
青森市平新田字森越17-1
☎ 0177(26)7121
